

令和元年度版

過疎対策の現況

令和 3 年 3 月

総 務 省

地域力創造グループ過疎対策室

目 次

第1章 過疎対策のあゆみ	1
第1節 これまでの過疎対策	1
1 過疎問題の発生	1
2 過疎地域対策緊急措置法	2
(1) 過疎地域対策緊急措置法の制定	2
(2) 過疎地域対策緊急措置法の概要	2
1) 法の目的	2
2) 過疎地域の要件	2
3) 過疎地域市町村数の動向	2
4) 事業の概要	3
5) 緊急措置法の10年間の成果	3
6) 法の失効	3
3 過疎地域振興特別措置法	4
(1) 過疎地域振興特別措置法の制定	4
(2) 過疎地域振興特別措置法の概要	4
1) 法の目的	4
2) 過疎地域の要件	4
3) 過疎地域市町村数の動向	5
4) 事業の概要	5
5) 振興法までの20年間の成果と法の失効	5
4 過疎地域活性化特別措置法	6
(1) 過疎地域活性化特別措置法の制定	6
(2) 過疎地域活性化特別措置法の概要	6
1) 法の目的	6
2) 過疎地域の要件	7
3) 過疎地域市町村数の動向	7
4) 事業の概要	7
5) 活性化法までの30年間の成果と法の失効	8
第2節 過疎地域自立促進特別措置法	11
1 過疎地域自立促進特別措置法の制定・改正	11
(1) 過疎地域自立促進特別措置法の制定	11
(2) 平成22年における過疎地域自立促進特別措置法の改正	11
(3) 平成24年における自立促進法の改正	12
(4) 平成26年における自立促進法の改正	12
(5) 平成29年における自立促進法の改正	13
2 過疎地域自立促進特別措置法の概要	14
(1) 法の目的	14
(2) 過疎地域の要件	14
1) 原則	14

2) 市町村の廃置分合等があった場合の特例	16
(3) 過疎地域市町村数の動向	17
(4) 過疎地域自立促進計画	17
(5) 過疎対策事業債	18
1) 対象の拡充	18
2) 過疎債ソフト分	18
第2章 過疎地域の現況	23
第1節 概況	23
1 過疎関係市町村数、人口、面積等	23
(1) 概要	23
(2) 市町村合併の進捗状況と過疎関係市町村数の推移	25
(3) 都道府県別、ブロック別の特徴	26
2 他の地域振興関係法に基づく指定地域等との関係	28
第2節 人口・世帯	29
1 過疎地域の人口動態	29
(1) 過疎地域の人口の推移	29
1) 過疎地域の人口の推移	29
2) 人口増減率の推移	31
3) ブロック別にみた過疎地域の人口動向	32
4) 過疎関係市町村の人口増減の動向	33
5) 近年の人口増加市町村の人口増加要因	35
(2) 社会増減と自然増減	36
1) 人口増減の要因：社会増減と自然増減	36
2) 社会増減：転入と転出	38
3) 自然増減：出生と死亡	39
2 過疎地域の人口構成	40
(1) 男女別人口	40
(2) 未婚者数	41
(3) 年齢階層別人口	42
1) 過疎地域と全国の比較	42
2) 年齢階層別人口の推移	43
3) コーホート人口の増減	45
4) 人口構造の変化	47
5) 高齢者比率・若年者比率の推移	48
6) 高齢者・若年者比率の段階別市町村数	49
3 過疎地域の世帯の動向	50
(1) 世帯数及び世帯人員数	50
(2) 高齢者世帯	51
1) 概況	51
2) ブロック別の状況	52
第3節 財政状況	53
1 決算の状況	53

(1) 概況	53
(2) 歳入	53
(3) 歳出	55
2 財政力指数等の状況	58
(1) 財政力指数	58
(2) 公債費負担比率等	59
第4節 産業・雇用	61
1 労働力人口及び雇用の状況	61
(1) 労働力人口の状況	61
1) 労働力人口割合	61
2) ブロック別労働力人口の年齢構成割合	62
3) 完全失業者割合	63
(2) 雇用の状況	64
1) 雇用機会	64
2) 賃金	66
3) 所得	66
(3) 産業別就業人口	67
1) 産業別就業人口の推移	67
2) 産業別就業人口割合	68
2 産業分野別の状況	72
(1) 第1次産業の状況	72
1) 農林漁家数の推移	72
2) 専兼業別農家数	73
3) 農業経営規模	74
4) 1経営体当たりの農業所得	75
(2) 第2次産業・第3次産業の状況	76
1) 製造業の状況	76
2) 商業の状況	77
(3) 観光の状況	78
1) 入込観光客数	78
2) 三大都市圏及び地方部における外国人延べ宿泊者数比較	79
3 過疎地域における企業立地	80
1) 企業立地の状況	80
2) ブロック別工場立地動向	81
3) 業種別・規模別立地動向	82
第5節 交通・通信	85
1 交通	85
(1) 道路の整備状況	85
1) 国道・都道府県道の整備状況	85
2) 市町村道の整備状況	86
(2) 乗合バスと鉄軌道路線の廃止状況	87
2 高度情報化への対応	88
(1) 地方公共団体におけるクラウドの導入状況	88

(2) 携帯電話サービスエリアの状況	89
(3) ブロードバンドの整備状況	89
第6節 生活環境	90
1 上水道	90
2 生活排水関連施設	91
1) 水洗化人口の推移	91
2) 水洗化人口の内訳	91
第7節 高齢化・福祉・医療	92
1 高齢化への対応	92
(1) 過疎地域の高齢化	92
(2) 高齢者福祉施設及び児童福祉施設の整備・サービスの状況	93
1) 高齢者福祉施設の整備状況	93
2) 居宅介護サービスの利用状況	94
2 医療	95
(1) 診療施設の整備状況	95
(2) 無医地区の状況	96
第8節 教育・文化の振興	97
1 教育	97
(1) 義務教育	97
(2) 幼児教育	99
1) 保育所の状況	99
2) 待機児童数の状況	99
3) 幼稚園就園率	100
(3) 高等学校・大学等	101
1) 高等学校等	101
2) 大学等	102
第9節 集落の整備等	103
1 集落の現状	103
(1) 集落の現状	104
(2) 集落対策について	113
2 市町村による住宅整備の状況	121
(1) 空き家の状況について	121
(2) 定住促進のための住宅整備の状況	122
第3章 過疎対策の現況	123
第1節 近年の過疎対策	123
1 新たな過疎対策に向けて～過疎地域の持続的な発展の実現～	123
2 集落対策	127
(1) 過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業	127
(2) 集落支援員	127
(3) まち・ひと・しごと創生基本方針2020（令和2年7月17日閣議決定）	128
3 移住・定住に向けた取組	129
(1) 田園回帰に関する調査研究	129

(2) 地域おこし協力隊	130
(3) 移住・交流情報ガーデン	130
4 地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律	130
第2節 地方公共団体の過疎対策	132
1 過疎地域自立促進計画等の体系	132
2 自立促進方針	133
3 自立促進計画の事業費	136
第3節 国の過疎対策	145
概要	145
1 産業の振興	150
〔過疎法による施策〕	150
〔過疎地域を対象とする施策〕	158
〔過疎地域に関連する施策〕	161
2 交通通信体系の整備・情報化及び地域間交流の促進	167
(1) 交通	167
〔過疎法による施策〕	167
〔過疎地域を対象とする施策〕	169
〔過疎地域に関連する施策〕	172
(2) 通信・情報化の推進	179
〔過疎法による施策〕	179
〔過疎地域を対象とする施策〕	179
3 生活環境の整備	182
〔過疎法による施策〕	182
〔過疎地域を対象とする施策〕	186
〔過疎地域に関連する施策〕	187
4 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	192
(1) 高齢者の保健及び福祉に関する施策	192
〔過疎法による施策〕	192
〔過疎地域を対象とする施策〕	192
(2) 保育所	193
〔過疎法による施策〕	193
〔過疎地域に関連する施策〕	194
(3) その他	194
〔過疎地域に関連する施策〕	194
5 医療の確保	195
〔過疎法による施策〕	195
〔過疎地域を対象とする施策〕	195
〔過疎地域に関連する施策〕	195
6 教育・文化の振興	197
〔過疎法による施策〕	197
〔過疎地域を対象とする施策〕	200
〔過疎地域に関連する施策〕	201
7 集落の整備等	202
(1) 集落の整備	202

	[過疎法による施策]	202
	[過疎地域を対象とする施策]	203
(2)	都市部等との交流促進	205
	[過疎地域を対象とする施策]	205
	[過疎地域に関連する施策]	206
8	その他	208
	[過疎地域を対象とする施策]	208
	[過疎地域に関連する施策]	209
9	財政上の主要な施策	210
(1)	地方債	210
	[過疎法による施策]	210
	[過疎地域に関連する施策]	217
(2)	国庫補助金等	218
	[過疎法による施策]	218
	[過疎地域を対象とする施策]	220
(3)	地方交付税	222
	[過疎地域に関連する施策]	222
10	その他の行政措置	222
	[過疎法による施策]	222

資 料

	過疎対策の概要	223
	過疎対策事業債について	226
	過疎地域等自立活性化推進交付金	227
	地域おこし協力隊	228
	集落支援員	233
	移住・交流情報ガーデン	237
	特定地域づくり事業協同組合制度の概要	238
	新たな過疎対策に向けて～過疎地域の持続的な発展の実現～（要旨）	239
	過疎関係市町村分布図	242
	過疎地域自立促進特別措置法	254
	過疎地域自立促進特別措置法施行令	268
	過疎地域自立促進特別措置法施行規則	277

本書について

1. 本書は、過疎対策の現況に関する参考資料集として、過疎地域に関する基礎的な統計資料、過疎対策の概要等を取りまとめたものである。
2. 過疎地域とは、
 - ①過疎地域自立促進特別措置法（以下「自立促進法」という。）第2条第1項に規定する市町村（以下「過疎市町村」という。）の区域
 - ②自立促進法第33条第1項の規定により過疎地域とみなされる市町村（以下「みなし過疎市町村」という。）の区域
 - ③自立促進法第33条第2項の規定により過疎地域とみなされる区域（以下「一部過疎地域」という。）をいう。また、一部過疎地域を有する市町村を、以下「一部過疎市町村」という。
（P14の2（2）「過疎地域の要件」参照）
3. 過疎関係市町村とは、前記2の①、②又は③の区域を有する市町村をいう。
4. 統計資料中、過疎地域に係る数値は、前記2の①～③の区域に係る数値を使用している。
また、これらの数値は、原則として各調査時点の過疎地域に係るものであり、これらの例によらない場合は、その旨を示している。
5. 統計資料の数値は、所管省庁等の調査結果の基礎データを総務省において集計したものである。
6. 四捨五入のため、表中の数値の計算が合わないことがある。
7. 地域ブロックの区分は、次のとおりである。
北海道……北海道
東北……青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県
関東……茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、長野県
東海……岐阜県、静岡県、愛知県、三重県
北陸……富山県、石川県、福井県
近畿……滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
中国……鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県
四国……徳島県、香川県、愛媛県、高知県
九州……福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県
沖縄……沖縄県

第1章

過疎対策のあゆみ

第1章 過疎対策のあゆみ

第1節 これまでの過疎対策

1 過疎問題の発生

昭和30年代以降の日本経済の高度成長は、農山漁村を中心とする地方の人口を急激に都市、特に大都市に吸引する結果をもたらした。すなわち、農山漁村地域においては主に第1次産業に従事しつつ雇用の機会を求めていた人々が、新規学卒者を中心に、場合によっては家族ぐるみで、第2次・第3次産業を主産業とする都市に急速に吸収されていった。

こうした農山漁村地域における急激な人口減少は昭和35年前後から始まっていたが、昭和40年国勢調査結果が公表されるに及んで、大きな社会問題としてクローズアップされることになった。昭和35年と昭和40年の国勢調査人口（以下「国調人口」という。）を比較してみると、沖縄県を除く46都道府県中25県で人口が減少し、3,375市町村（特別区は除く。）のうち2,574市町村で人口が減少した。特に10%以上減少が897市町村、20%以上減少が117市町村、30%以上減少が36村であった。この急激な人口減少問題に関して、政府の公式文書で初めて「過疎」の言葉を用いたのは「経済社会発展計画（昭和42年3月閣議決定）」であり、次いで「経済審議会地域部会報告（昭和42年11月）」であった。

「経済社会発展計画（昭和42年3月13日閣議決定）」抄

「…40年代においては、生活水準、教育水準の向上や産業構造の高度化に伴って、人口の都市集中はいっそうの進展をみせるとともに、他方、農山漁村においては、人口流出が進行し、地域によっては地域社会の基礎的生活条件の確保にも支障をきたすような、いわゆる過疎現象が問題となろう。…」

「経済審議会地域部会報告（昭和42年10月30日）」抄

「…都市への激しい人口移動は人口の減少地域にも種々の問題を提起している。人口減少地域における問題を「過密問題」に対する意味で「過疎問題」と呼び、「過疎」を人口減少のために一定の生活水準を維持することが困難になった状態、たとえば防災、教育、保健などの地域社会の基礎的条件の維持が困難になり、それとともに、資源の合理的利用が困難となって地域の生産機能が著しく低下することと理解すれば、人口減少の結果、人口密度が低下し、年齢構成の老齢化がすすみ、従来の生活パターンの維持が困難となりつつある地域では、過疎問題が生じ、または生じつつあると思われる。昭和40年には、人口の自然増加率がマイナス、すなわち死亡数が出生数を上回っている町村が約200町村、全国市町村の約6%にも及んでいることは注目すべきことである。…」

2 過疎地域対策緊急措置法

(1) 過疎地域対策緊急措置法の制定

過疎問題がこうして深刻な問題となってきたことに伴って、昭和 43 年頃から関係都道府県を中心に、地方公共団体から国に対して過疎対策の早期確立について強力な要望、陳情活動が行われ、これを踏まえ、政府部内をはじめ国会での検討等各方面において過疎対策の立法化が検討された。

この結果、昭和 44 年 6 月に議員提案により過疎地域対策特別措置法案が国会に提出されたが、同年 8 月審議未了で廃案となり、同年 11 月に再度提出されたものの解散により廃案となった。

昭和 45 年になると過疎地域対策緊急措置法案がまとめられ、衆議院地方行政委員長提案により国会に提出され、全会一致で成立した。この法律は同年 4 月 24 日に法律第 31 号として公布され、自治省の所管とされたが、後に昭和 49 年国土庁が設置されたことに伴って同庁の所管となった。

(2) 過疎地域対策緊急措置法の概要

1) 法の目的

過疎地域対策緊急措置法（以下「緊急措置法」という。）の目的は、現に人口の減少が進行中の地域に対し、緊急の対策として、生活環境におけるナショナル・ミニマムを確保しつつ、開発可能な地域には産業基盤等を整備することにより、人口の過度の減少を防ぐとともに、地域社会の崩壊及び市町村財政の破綻を防止することにあつた。このため、各般の財政、行政、金融、税制上の特別措置を講じることとされ、目的達成のための緊急措置として 10 年間の時限立法とされた。

2) 過疎地域の要件

過疎地域の要件としては、人口要件及び財政力要件の両方を満たす市町村の区域とされた。人口要件については、昭和 35 年と昭和 40 年の国調人口を比較して 10%以上減少していることとされ、また、財政力要件については、緊急措置法の趣旨が過疎地域市町村に行財政上の特別措置を講じることにある以上、財政力に余裕のある団体は含めないことが適当であるとして、昭和 41 年度から昭和 43 年度までの 3 年平均の財政力指数が全市町村単純平均 0.4 未満であることとされた。さらに、国調人口が発表されるたびに指数を要件に当てはめ、該当する場合には追加公示することとされた。

3) 過疎地域市町村数の動向

この要件に基づく過疎地域市町村は昭和 45 年 5 月 1 日の当初公示時点では 776 市町村（当時）であったが、その後国調人口の公表のたびに追加公示され、法失効時には、要件を満

たす市町村の存在しない神奈川県及び大阪府、沖縄振興開発特別措置法の規定により緊急措置法の適用除外とされていた沖縄県を除く 44 都道府県に 1,093 市町村（当時）となった。

4) 事業の概要

緊急措置法の制定により、過疎地域市町村及び過疎地域を有する都道府県は過疎地域振興計画（前期・後期5か年ずつ）を策定することとなり、これに基づいて生活環境、産業基盤等の整備を図る各種の過疎対策事業が実施され、必要な財政、行政、金融、税制上の特別措置が講じられた。昭和45年度から昭和54年度までの10年間で、計画に基づく過疎対策事業費の総額は合計7兆9千億円にのぼり、主に交通通信体系の整備を中心に事業が進められた（図表1-1-1）。

5) 緊急措置法の10年間の成果

緊急措置法に基づく各種過疎対策事業により、過疎地域における公共施設の整備水準は相当の向上をみた。特に市町村道については、改良率が昭和45年度の9.0%から昭和55年度には22.7%に、舗装率は昭和45年度の2.7%から昭和55年度には30.6%に上昇するなど大幅に改善が見られ、過疎地域の地理的、自然的に不利な条件を克服することに貢献した（図表2-5-2）。また、地域住民のコミュニティ活動の拠点となる集会施設についても、市町村単位、集落単位等のそれぞれで施設整備が進んだ。この時期までに約80%の過疎地域市町村において、市町村全域を対象とする中央集会施設が整備されたが、このうち約60%は緊急措置法の制定された昭和45年度以降に設置されたものであった。

6) 法の失効

昭和48年の石油危機を経て日本経済が安定成長へとその基調を変えたこと、過疎地域の居住条件の改善が見られたこと等により、昭和50年代の過疎地域における人口減少は鈍化の傾向を示した。すなわち、昭和35年から40年、昭和40年から45年の各5年間には10%台を示していた緊急措置法下の過疎地域の人口減少率（国調人口）は、昭和45年から50年の5年間をとると8%台に低下し、その後の動きをみても年率1%足らずの割合で推移した。こうして「最近における人口の急激な減少」に対処して「人口の過度の減少を防止」することを目的とした緊急措置法は、その目的をほぼ達し得たものとして10年間の期限を迎え、昭和55年3月31日限りで失効した。

3 過疎地域振興特別措置法

(1) 過疎地域振興特別措置法の制定

昭和 50 年代に入り人口減少率が鈍化傾向を示してきたことから、過疎地域は落ち着きを取り戻しつつあるものと考えられたが、多くの過疎地域においては過去の多数かつ長期にわたった人口の流出により地域社会の機能が低下しつつあり、改善されてきたとはいっても各種公共施設の整備水準は他地域に比較して依然低位にあり、住民の就業機会や医療の確保等の面でも決して満足すべき状態とは言えなかった。また、若年層を中心とした人口流出は地域の高齢化をもたらし始めていた。

こうした状況を背景に、昭和 53 年頃より関係地方公共団体から過疎地域に対する特別措置の継続・拡充を求めて要望、意見書の提出が相次ぎ、第 89 回国会では衆参両院において過疎地域振興のための特別措置の強化拡充に関する請願が採択されるなど、緊急措置法失効後の対策について国会等各方面で検討が進められた。この結果、緊急措置法が議員立法で制定されたという経緯も踏まえ、地方行政委員長の提出する過疎地域振興特別措置法案としてまとめられ、昭和 55 年 3 月 31 日に全会一致で成立、即日公布され（法律第 19 号）、翌日から施行された。

(2) 過疎地域振興特別措置法の概要

1) 法の目的

過疎地域振興特別措置法（以下「振興法」という。）の目的は、緊急措置法が掲げていた「人口の過度の減少を防止する」という緊急の目的が一応達成されたことを前提に、いわば過去における激しい人口減少に起因して地域社会の機能の低下や、生活水準・生産機能が他地域に比較して低位にある状態を改善することとされた。そして、総合的かつ計画的な振興施策を積極的に講ずることにより、「これらの地域の振興を図り、もって住民福祉の向上、雇用の増大及び地域格差の是正に寄与すること」を目的とした。

また、過疎地域の状況を改善し振興を図る目的達成のために必要な期間として、10 年間の時限立法とされた。

2) 過疎地域の要件

上記の考え方の下、人口要件については、緊急措置法が過疎現象進行中の地域を対象とするため 5 年間の人口減少を指標としていたのに対し、振興法では人口が大幅に減少してしまった地域を対象とするため、昭和 35 年と昭和 50 年の国調人口を比較して 20% 以上減少していることとされた。また、財政力要件については、緊急措置法と同様、財政力に余裕のある団体は含めないこととされ、昭和 51 年度から 53 年度までの 3 年平均の財政力指数が全市町村の財政力指数の単純平均である 0.37 以下であり、かつ公営競技に係る収入が 10 億円以下であることとされた。以後、国調人口が公表されるたびに要件に当てはめ、追加公示

が行われることとされたのは緊急措置法と同じである。

なお、緊急措置法下においては、沖縄振興開発特別措置法（昭和46年法律第131号）により沖縄県に対する緊急措置法の適用が除外されていたが（第55条）、振興法の附則により改正され、振興法の規定が沖縄県に適用されることになった。

3) 過疎地域市町村数の動向

振興法に基づく過疎地域市町村は、昭和55年4月1日時点で1,119市町村が公示され、このうち993団体が緊急措置法から引き続き過疎地域市町村となった。つまり、緊急措置法失効時点の過疎地域市町村1,093市町村のうち、100市町村が振興法における過疎地域の要件を満たさなくなった（なお、当該100市町村のうち、地方交付税の不交付団体である4団体を除き、経過措置としての法第12条の準用があった）。以後、数次にわたる追加公示が行われた結果、平成元年4月には1,157市町村が過疎地域となった。

4) 事業の概要

緊急措置法において講じられた財政、行政、金融、税制上の特別措置は基本的に振興法に引き継がれ、過疎地域が引き続き抱える課題のほか過去の人口流出に起因する高齢化等新たな課題に対処するため、医療確保に関する配慮規定、老人福祉の増進に関する補助制度の規定、小規模校における教育の充実に関する配慮規定及び中小企業に対する資金確保の規定が新設された。

このほか、新法の過疎地域の要件を満たさなかった市町村の残事業の円滑な完了、財政上の激変緩和等の趣旨から特別の経過措置が講じられ、過疎対策事業債（以下「過疎債」という。）の発行及び基幹的市町村道等に係る都道府県代行整備事業について、昭和55年度から昭和58年度までの4年間、特別措置が継続されることとされた。また、振興法が適用されることになった沖縄県の市町村のうち、緊急措置法の要件は満たしていたが振興法の要件を満たさない4市町村について、上記の経過措置に準じて4年間に限り過疎債の発行を認めることとされた。これらの結果、経過措置を適用されるべき市町村は100団体が公示され、うち20市町村は後に再び過疎地域に追加公示された。

振興法においても都道府県、市町村が振興計画を策定して過疎対策事業を推進することとされ、前期・後期5年ずつの計画に基づいて実施された事業費の総額は交通通信体系の整備及び産業の振興を中心に17兆4千億円となった（図表1-1-1）。

5) 振興法までの20年間の成果と法の失効

昭和45年以来、法律に基づき、総合的な過疎対策事業が積極的に推進され、緊急措置法及び振興法を合わせた20年間の総事業費は約25兆円となった。その内容は交通通信体系の整備、教育文化施設の整備、生活環境施設の整備、産業の振興等多岐にわたっているが、中でも道路を中心とする交通通信体系の整備が総事業費の半分近くを占めた（図表1-1-1、図表1-1-2）。

様々な過疎対策の結果、公共施設を中心に整備が進み、例えば市町村道については、改

良率が昭和 45 年度の 9.0%から平成 2 年度の 39.0%へと向上し、舗装率は昭和 45 年度の 2.7%から平成 2 年度の 55.6%へと向上した（図表 2-5-2）。

また、過疎地域市町村が事業を行うに当たっては、過疎債の発行、統合小中学校等の建設事業に係る国庫補助率のかさ上げ等の財政上の特別措置が果たした役割は大きい。特に過疎債については 20 年間で 2 兆 3,087 億円が充当され、事業費の総額では 4 兆 2,754 億円に達し、過疎地域振興計画に基づく市町村事業全体の 31.0%を占め、一方、国庫補助率のかさ上げにより増額された補助金の総額は 20 年間で 605 億円となっており、事業の円滑な実施に寄与した（図表 1-1-3）。

こうして過疎対策事業が一定の成果を挙げる中で、振興法は平成 2 年 3 月 31 日限りで 10 年の期限を迎え失効した。

4 過疎地域活性化特別措置法

(1) 過疎地域活性化特別措置法の制定

昭和 45 年以来 20 年間にわたる過疎対策は公共施設の整備を中心に着実に成果を挙げたが、日本経済が第 2 次石油ショックを克服し新たな東京一極集中が始まる中で、過疎地域を抱える多くの都道府県で人口減少がみられ（昭和 60 年と平成 2 年の国調を比較すると 18 道県で減少）、多くの過疎地域においては人口の減少が続いたばかりではなく、若者の流出により高齢化が顕著になるなど、人口の著しい減少に伴って地域社会の活力が低下していると言わざるを得ない状況が生じた。また、過疎地域では産業面での遅れもみられ、公共施設の整備水準も他地域に比較して依然低位にあるものが多く、財政基盤は脆弱である等の課題を有しており、これらの諸課題全体をいわば「新たな過疎問題」の発生と捉えることができた。

こうした事情を背景に、昭和 63 年以降関係地方公共団体から過疎対策の継続、拡充を求める要望、意見書の提出等が相次いで行われ、国会はじめ関係各方面で検討が進められた。その結果、平成 2 年 3 月、過疎地域活性化特別措置法案が衆議院地方行政委員長から国会に提出され、3 月 30 日に全会一致で成立、翌日法律第 15 号として公布され、4 月 1 日から施行された。

(2) 過疎地域活性化特別措置法の概要

1) 法の目的

過疎地域活性化特別措置法（以下「活性化法」という。）の目的は、人口の著しい減少に伴って地域社会の活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域についてその活性化を図り、もって住民福祉の向上、雇用の増大及び地域

格差の是正に寄与することとされている。振興法では地域の「振興を図る」とされていたのに対し、活性化法では「活性化を図る」とされているが、これは従来の過疎対策の成果と過疎地域の現況を踏まえた場合、新たな過疎対策として、①地域の個性を活かして地域の主体性と創意工夫を基軸とした地域づくりを重視する必要があること、②基礎的な公共施設（ハード）のみならず、いわゆるソフト施策を含む総合的な地域の発展を重視し、民間活力の活用をも図る必要があること等を示すため特に用いられた言葉であり、こうした目的達成のために必要な期間として10年間の時限立法とされた。

2) 過疎地域の要件

活性化法の要件については、過去の著しい人口減少のみならず、人口減少が続いた結果として高齢者が多く若者が少ないという状態が、地域社会における活力の低下をもたらしているとの認識に基づき、人口要件において従来からの人口減少率に加えて高齢者比率及び若年者比率を用いている。すなわち、人口については、次のいずれかを満たし、かつ財政力要件を満たす市町村の区域を過疎地域としている。以後、国調人口が公表されるたびに要件に当てはめ、追加公示が行われることとされたのは緊急措置法及び振興法と同じである。

①人口要件

- ・昭和35年と昭和60年の国調人口を比較して25%以上減少していること。
- ・昭和35年と昭和60年の国調人口を比較して20%以上減少しており、高齢者（65歳以上）の比率が16%以上であること。
- ・昭和35年と昭和60年の国調人口を比較して20%以上減少しており、若年者（15歳以上30歳未満）の比率が16%以下であること。

②財政力要件

昭和61年度から昭和63年度まで3年平均の財政力指数が0.44以下であり、かつ、公営競技に係る収入が10億円以下であること。

3) 過疎地域市町村数の動向

この要件により活性化法に基づく過疎地域市町村は、平成2年4月1日時点で1,143市町村が公示され、このうち1,054市町村が振興法から引き続き過疎地域となった。つまり、振興法失効時点の過疎地域市町村1,157市町村のうち、103市町村が新法の過疎地域の要件を満たさなくなった（なお、当該103市町村のうち、地方交付税の不交付団体である3団体を除き、経過措置としての法第12条の準用があった）。以後、数次にわたる追加公示が行われた結果、平成11年4月には1,230市町村が過疎地域となった。

4) 事業の概要

振興法において講じられた財政、行政、金融、税制上の特別措置は基本的に活性化法に引き継がれたほか、新たな課題に対処するため、過疎債、基幹的市町村道等に係る都道府県代行整備事業等について拡充が図られ、高齢者生活福祉センター等の整備に係る規定が新設された。

さらに、振興法と同じく新法の過疎地域の要件を満たさなくなった市町村の残事業の円滑な完了、財政上の激変緩和等の趣旨から特別の経過措置が講じられ、過疎債の発行及び基幹的市町村道等に係る都道府県代行整備事業について、平成2年度から平成6年度までの5年間、特別措置が継続されることとされた。この経過措置を適用されるべき市町村として100団体が公示された。

平成3年には、活性化法の一部改正が行われ、公共下水道について都道府県が代行整備する制度が創設された。

また、活性化法においては、過疎地域市町村に廃置分合又は境界変更があった場合、一定の要件を満たせば廃置分合等により成立した新たな市町村を過疎地域市町村とみなす特例が設けられていたところであるが、平成7年には「市町村の合併の特例に関する法律」が改正され、過疎地域市町村の合併に関する特例（合併前の過疎市町村の区域について過疎債の発行を認める。）がさらに付け加えられた。

活性化法においても都道府県、市町村が活性化計画を策定して過疎対策事業を推進することとされ、前期・後期5年間ずつの計画に基づいて実施された事業費の総額は36兆3千億円となった（図表1-1-1）。

5) 活性化法までの30年間の成果と法の失効

昭和45年の緊急措置法制定以来、振興法、活性化法と3次にわたり、過疎対策のための法律が制定され、過疎対策が実施されてきた。30年間の過疎対策事業の事業費の総額は、緊急措置法の10年間には7兆9,018億円、振興法の10年間には17兆3,669億円、活性化法の10年間には36兆3,286億円、合計61兆5,973億円となった（図表1-1-1）。

その内容を分野別にみると、緊急措置法、振興法の時代には交通通信体系の整備がほぼ半分を占めていたのに対し、活性化法の10年間は、そのシェアがやや低下し、他方で、産業の振興のシェアが高まっており、また、生活環境の整備、高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進のシェアが、活性化法時代に大きく増加した（図表1-1-2）。

過疎地域市町村が事業を行うに当たって大きな役割を果たす過疎債については、30年間で5兆4,606億円が充当され、事業費の総額では10兆9,511億円に達し、一方、国庫補助率のかさ上げにより増額された補助金の総額は30年間で811億円となっている（図表1-1-3）。

これらの過疎対策事業により、過疎地域における基盤整備等が進み、全国との格差は総じて縮小し、過疎地域における生活や経済活動の利便性が大きく向上するとともに、都市との交流の促進にも大きく寄与した。

こうして過疎対策事業が一定の成果を挙げる中で、活性化法は平成12年3月31日限りで10年間の期限を迎え失効した。

図表 1-1-1 過去の過疎法における事業実績

(単位：億円、%)

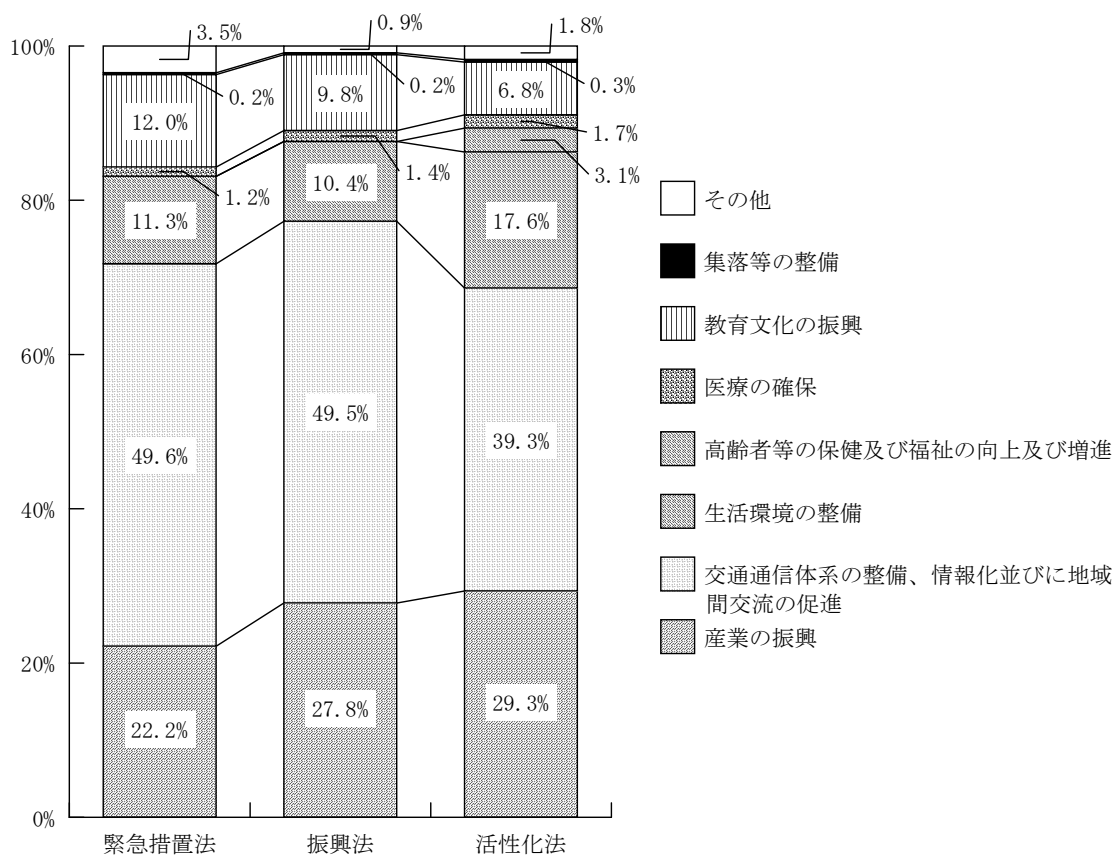
区 分		産業の振興	交通通信体系の整備、 情報化並びに地域間交流の促進	生活環境の整備	高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	医療の確保	教育文化の振興	集落等の整備	その他	合 計
緊急措置法 (S45～S54)	市町村	7,584 (17.3)	16,488 (37.7)	8,498 (19.4)		639 (1.5)	9,339 (21.4)	190 (0.4)	1,001 (2.3)	43,739 (100.0)
	都道府県	9,940 (28.2)	22,709 (64.4)	447 (1.3)		314 (0.9)	131 (0.4)	0 (0.0)	1,738 (4.9)	35,279 (100.0)
	合 計	17,524 (22.2)	39,197 (49.6)	8,945 (11.3)		953 (1.2)	9,470 (12.0)	190 (0.2)	2,739 (3.5)	79,018 (100.0)
振 興 法 (S55～H元)	市町村	22,061 (23.5)	35,319 (37.5)	17,173 (18.3)		1,430 (1.5)	16,263 (17.3)	402 (0.4)	1,422 (1.5)	94,069 (100.0)
	都道府県	26,196 (32.9)	50,623 (63.6)	810 (1.0)		1,027 (1.3)	822 (1.0)	10 (0.0)	112 (0.1)	79,600 (100.0)
	合 計	48,257 (27.8)	85,942 (49.5)	17,983 (10.4)		2,457 (1.4)	17,085 (9.8)	412 (0.2)	1,534 (0.9)	173,669 (100.0)
活 性 化 (H2～H11)	市町村	48,341 (25.4)	47,332 (24.8)	53,063 (27.9)	10,437 (5.5)	3,769 (2.0)	22,579 (11.9)	744 (0.4)	4,227 (2.2)	190,491 (100.0)
	都道府県	58,262 (33.7)	95,341 (55.2)	10,994 (6.4)	871 (0.5)	2,442 (1.4)	2,286 (1.3)	442 (0.3)	2,157 (1.2)	172,795 (100.0)
	合 計	106,604 (29.3)	142,673 (39.3)	64,057 (17.6)	11,308 (3.1)	6,211 (1.7)	24,864 (6.8)	1,186 (0.3)	6,384 (1.8)	363,286 (100.0)
実 績 計 (S45～H11)	市町村	77,986 (23.8)	99,139 (30.2)	78,734 (24.0)	10,437 (3.2)	5,838 (1.8)	48,181 (14.7)	1,336 (0.4)	6,650 (2.0)	328,299 (100.0)
	都道府県	94,398 (32.8)	168,673 (58.6)	12,251 (4.3)	871 (0.3)	3,783 (1.3)	3,239 (1.1)	452 (0.2)	4,007 (1.4)	287,674 (100.0)
	合 計	172,384 (28.0)	267,812 (43.5)	90,985 (14.8)	11,308 (1.8)	9,621 (1.6)	51,419 (8.3)	1,787 (0.3)	10,657 (1.7)	615,973 (100.0)

(備考) 1 総務省調べ。

2 ()は構成比である。

3 過疎計画は、総合的な計画であり、過疎地域に関連する施策が幅広く盛り込まれている。また、いわゆるハード事業・ソフト事業の双方が盛り込まれていることに留意。

図表1-1-2 過去の過疎法における事業実績



(備考) 総務省調べ。

図表 1-1-3 過去の過疎法における過疎債及び国庫補助かさ上げの実績

(単位：百万円)

区 分	過疎対策事業債		特例による国庫補助かさ上げ額				
	事業費	過疎債	校舎・屋内運動場	教職員宅	保育所	消防施設	合計
緊急措置法 (S45～S54)	1,278,607	665,687	14,607	615	4,027	8,690	27,939
振興法 (S55～H元)	2,996,811	1,642,999	10,802	401	3,463	17,904	32,570
活性化法 (H2～H11)	6,675,632	3,151,897	3,547	47	1,948	15,081	20,622
合計 (S45～H11)	10,951,050	5,460,583	28,956	1,063	9,438	41,675	81,132

(備考) 総務省調べ。

第 2 節 過疎地域自立促進特別措置法

1 過疎地域自立促進特別措置法の制定・改正

(1) 過疎地域自立促進特別措置法の制定

過疎地域活性化特別措置法の平成 12 年 3 月失効を控えて、平成 10 年以降関係地方公共団体から過疎対策の継続、拡大を求めて要望、意見書の提出等が行われ、国会はじめ関係各方面で検討が進められた。検討に当たっての関係者の基本的な認識はおおむね次のとおりであった。

すなわち、昭和 45 年以降の 3 次にわたる過疎立法に基づき、30 年にわたって過疎対策が展開されてきた結果、住民の生活の基盤である公共施設等の整備は相当進んできたものの、住民生活の基本的な部分において未だ大きな格差が残されていた。

平成 12 年当時の過疎地域の人口減少は、一時のような激しさは見られなくなったものの、社会減に加え、自然減が重みを増してきており、高齢化のさらなる進行、引き続き若年者の流出に、将来に不安を感じる市町村が少なくないなど、状況的にはむしろ以前より厳しいものがあった。

地域経済についても、かつての基幹産業であった農林水産業が著しく停滞した上に、経済環境の悪化などから製造業等の企業立地も極めて困難な状況にあった。

公共施設の整備も、道路の整備等が未だ不十分であるほか、上水道、下水道、情報通信施設、医療施設など生活の基本的部分で依然大きな格差が残されていた。

一方、「多様で美しく風格ある国づくりへの寄与」、「国民が新しい生活様式を実現できる場としての役割」、「長寿高齢化社会の先駆けとしての役割」など、21 世紀の我が国のあるべき将来像を形づくる上で、過疎地域が担うべき新しい意義・役割が明確になってきているなかで、地域格差是正など過疎地域の生活基盤等の整備を図る視点にとどまらず、過疎地域と都市との交流を通じて、相互補完関係にある新しい生活空間を確保し自立的な地域社会を構築することは、21 世紀にふさわしい真に豊かな国民生活を実現するために不可欠なことであった。

こうした事情を背景に、国会はじめ関係各方面において幅広い検討が進められた結果、平成 12 年 3 月、過疎地域自立促進特別措置法案が衆議院地方行政委員長から国会に提出され、3 月 24 日に全会一致で成立、3 月 31 日に法律第 15 号として公布され、4 月 1 日から施行された。

(2) 平成 22 年における過疎地域自立促進特別措置法の改正

過疎地域自立促進特別措置法(以下「自立促進法」という。)に基づく 10 年間をはじめ、40 年間にわたり過疎対策立法に基づき、過疎地域市町村を中心に関係都道府県、国の 3 者が一体となって時代に対応した過疎対策に着実に取り組み、過疎地域の産業振興や交通通信基盤・生産基盤の整備などに一定の成果を上げてきた。

しかしながら、過疎地域では、1990 年代前半に一時期緩やかになった人口減少も再び加速し、著しい高齢化の進行と併せて、地域によっては存続が危ぶまれる集落の増加、地域医療体

制の弱体化など、過疎地域の抱える課題は一層深刻さを増していった。このような中、自立促進法の平成 22 年 3 月末の失効期限が近づいた。

自立促進法の失効期限を控え、全国過疎地域自立促進連盟をはじめ、地方六団体、関係都道府県、過疎地域市町村などから新法制定に向けた切実な提言・活動が危機感をもって展開された。こうした声に応え、過疎対策を切れ目なく実施するための自立促進法を拡充・延長する法律案は、各党間の協議を経て取りまとめられ、平成 22 年 3 月 2 日に衆議院総務委員会委員長提案の法案として国会に提出され、当日の衆議院本会議に緊急上程、全会一致で可決、3 月 9 日の参議院総務委員会及び 3 月 10 日の参議院本会議で全会一致で可決、成立、3 月 17 日に公布され、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律として、平成 22 年 4 月 1 日に施行された。

(3) 平成 24 年における自立促進法の改正

以上のとおり、新たに平成 28 年 3 月 31 日を期限とする改正自立促進法が施行されたが、平成 23 年の東日本大震災の影響により、過疎対策事業の大幅な遅延が想定され、自立促進法の期限内において統合的かつ計画的な施策を展開することが困難な状況が生じたことから、被災市町村等から法の期限延長を求める強い要望が上がった。こうした声を受けて、各党各会派で協議が重ねられた結果、自立促進法の期限を令和 3 年 3 月 31 日まで 5 年間延長することについて合意された。

なお、平成 22 年に、自立促進法の延長期間が平成 27 年度末までの 6 年間とされたのは、過疎市町村の多くが合併市町村であり、そのうち大多数の過疎市町村の合併特例債の発行期限が平成 27 年度末であったことが考慮されたという経緯があったが、平成 24 年の自立促進法の期限延長の検討に当たっては、東日本大震災の影響を踏まえ、合併特例債の発行期限が延長されることも併せて考慮されている。取りまとめられた法案は過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律案として、平成 24 年 6 月 12 日に衆議院総務委員会委員長提案の法案として国会に提出された。その後、6 月 13 日の衆議院本会議に上程、全会一致で可決され、6 月 19 日の参議院総務委員会及び 6 月 20 日の参議院本会議で全会一致で可決、成立し、平成 24 年 6 月 27 日に公布、施行された。

(4) 平成 26 年における自立促進法の改正

平成 22 年における自立促進法の改正の際に、衆・参総務委員会において決議が行われ、「本法律施行後速やかに総合的かつ抜本的な検討を開始し、施行後三年を目途として、その検討結果や平成 22 年の国勢調査の結果、地方分権改革の進展状況等を勘案し、必要な措置を講ずること。」とされた。この決議を受け、平成 22 年の自立促進法の改正から 3 年を経過した平成 25 年において、平成 22 年国勢調査の結果の取扱いを含む対応方針が議論され、各党間の協議を経て当該調査の結果を反映した過疎地域の要件の追加や、過疎債の対象の拡大といった自立促進法を拡充する法律案が取りまとめられ、平成 26 年 3 月 13 日に衆議院総務委員会委員長提案の

法案として国会に提出された。その翌日の衆議院本会議に上程され全会一致で可決され、3 月 25 日の参議院総務委員会及び 3 月 26 日の参議院本会議において全会一致で可決、成立し、3 月 31 日に公布され、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律として、平成 26 年 4 月 1 日に施行された。

(5) 平成 29 年における自立促進法の改正

平成 29 年には、平成 27 年の国勢調査の結果が公表されたことを契機として、過疎対策の実施状況を踏まえつつ、現行法の見直しに向け会派間で協議が進められ、その結論として、平成 27 年の国勢調査の結果を用いた過疎地域の要件を追加するとともに、過疎対策事業債の対象施設の拡充等を行うこととされた改正案がまとめられ、平成 29 年 3 月 14 日に衆議院総務委員会委員長提案の法案として国会に提出された。3 月 16 日に衆議院本会議に上程され全会一致で可決され、3 月 30 日の参議院総務委員会及び 3 月 31 日の参議院本会議において全会一致で可決、成立し、同日に公布され、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律として、平成 29 年 4 月 1 日に施行された。

2 過疎地域自立促進特別措置法の概要

(1) 法の目的

自立促進法の目的は、人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域について、総合的かつ計画的な対策を実施するために必要な特別措置を講ずることにより、これらの地域の自立促進を図り、もって住民福祉の向上、雇用の増大、地域格差の是正及び美しく風格ある国土の形成に寄与することとされている。活性化法では地域の「活性化を図る」とされていたのに対し、自立促進法では「自立促進を図る」に加え、「美しく風格ある国土の形成に寄与する」とされているが、これは従来の過疎対策の成果と過疎地域の現況を踏まえた場合、新たな過疎対策として、大きく変化しつつある時代潮流の中で、ナショナル・ミニマムとしての安全・安心な暮らしの確保という従来の延長線上の考え方に加えて、全国的な視野に立った過疎地域の新しい価値・意義を認め、豊かな自然環境や広い空間の中での多様な居住・生活様式を実現する場として整備し、交流を通じて都市と相互補完関係にある新しい生活空間を確保するとともに、美しい景観の整備、地域文化の振興や多様な地域産業の振興等により、過疎地域がそれぞれの個性を発揮して自立できる地域社会を構築することを目的としたものである。

また、自立促進法の施行後も、過疎地域は、引き続く人口減少と著しい高齢化に直面し、財政状況も厳しく、農林水産業の衰退、維持・存続が危ぶまれる集落の発生、身近な生活交通の不足、地域医療の危機など、住民生活にかかわる様々な課題が生じている。その一方で、過疎地域は、安全・安心な食料や水の供給、エネルギーの提供、国土の保全、災害の防止、地球温暖化の防止等のもとより、都市住民へのやすらぎや教育の場として、当該地域の住民の福祉の向上のためのみならず、国民全体の安全・安心な生活を支えるという過疎地域の公益的機能を有している。このため、過疎対策の推進に当たっては、過疎地域が有するこれらの公益的機能について国民全体が適切に認識し、積極的に評価した上で、過疎問題の解決を国民全体の課題と捉え、過疎地域の住民のいのちと暮らしを守る実効性ある対策を講じていくことが求められており、平成 22 年の改正自立促進法の制定時には、衆議院及び参議院の総務委員会においてこうした内容の決議がなされている。

(2) 過疎地域の要件

1) 原則

自立促進法の要件については、著しい人口減少はひと頃に比べると鈍化傾向が定着しているが、依然として高齢者比率は高く、若者の流出はなお続いているという状態が、地域社会における活力の低下をもたらしているとの認識に基づき、昭和 35 年から直近の国勢調査の年である平成 7 年までの 35 年間の人口減少率、高齢者率及び若年者率に加えて、直近 25 年間（昭和 45 年から平成 7 年まで）の人口減少率を用いている。このことは、35 年間という長期にわたり大きな人口減少を呈している市町村は深刻な過疎問題を抱えている団体であると

考えることができるが、比較的最近において人口減少が大きく生じている団体も同様に深刻な過疎問題を抱えていると考えられたためである。

なお、自立促進法では、活性化法までのように国調人口が発表されるたびに要件に関する読み替えを行うことはせず、平成 8 年以降において最初に行われる国勢調査（平成 12 年調査）の結果が公表された場合にのみ、要件に関する読み替えを行い追加公示がなされるものとされた（法第 32 条）。このため、平成 17 年、平成 22 年、平成 27 年の国調人口については自立促進法を改正することにより直近の国勢調査人口を基とする地域指定要件が追加されており、結果として次のⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴのいずれかの人口要件及び財政力要件を満たす市町村の区域を過疎地域としている（法第 2 条第 1 項）。

Ⅰ ①人口要件

ア 昭和 35 年と平成 7 年の国調人口を比較して 30%以上減少していること。

イ 昭和 35 年と平成 7 年の国調人口を比較して 25%以上減少しており、高齢者（65 歳以上）の比率が 24%以上であること。

ウ 昭和 35 年と平成 7 年の国調人口を比較して 25%以上減少しており、若年者（15 歳以上 30 歳未満）の比率が 15%以下であること。

エ 昭和 45 年と平成 7 年の国調人口を比較して 19%以上減少していること。

ただし、ア、イ又はウに該当する場合には、昭和 45 年と平成 7 年の国調人口を比較して増加率が 10%未満であること。

②財政力要件

平成 8 年度から平成 10 年度までの 3 年平均の財政力指数が 0.42 以下であり、かつ、公営競技に係る収入が 13 億円以下であること。

Ⅱ ①人口要件

ア 昭和 40 年と平成 12 年の国調人口を比較して 30%以上減少していること。

イ 昭和 40 年と平成 12 年の国調人口を比較して 25%以上減少しており、高齢者（65 歳以上）の比率が 24%以上であること。

ウ 昭和 40 年と平成 12 年の国調人口を比較して 25%以上減少しており、若年者（15 歳以上 30 歳未満）の比率が 15%以下であること。

エ 昭和 50 年と平成 12 年の国調人口を比較して 19%以上減少していること。

ただし、ア、イ又はウに該当する場合には、昭和 50 年と平成 12 年の国調人口を比較して増加率が 10%未満であること。

②財政力要件

平成 10 年度から平成 12 年度までの 3 年平均の財政力指数が 0.42 以下であり、かつ、公営競技に係る収入が 13 億円以下であること。

Ⅲ ①人口要件

ア 昭和 35 年と平成 17 年の国調人口を比較して 33%以上減少していること。

イ 昭和 35 年と平成 17 年の国調人口を比較して 28%以上減少しており、高齢者（65 歳以上）の比率が 29%以上であること。

ウ 昭和 35 年と平成 17 年の国調人口を比較して 28%以上減少しており、
若年者（15 歳以上 30 歳未満）の比率が 14%以下であること。

エ 昭和 55 年と平成 17 年の国調人口を比較して 17%以上減少していること。

ただし、ア、イ又はウに該当する場合においては、昭和 55 年と平成 17 年の国調人口を比較して増加率が 10%未満であること。

②財政力要件

平成 18 年度から平成 20 年度までの 3 年平均の財政力指数が 0.56 以下であり、かつ、公営競技に係る収入が 20 億円以下であること。

IV ①人口要件

ア 昭和 40 年と平成 22 年の国調人口を比較して 33%以上減少していること。

イ 昭和 40 年と平成 22 年の国調人口を比較して 28%以上減少しており、
高齢者（65 歳以上）の比率が 32%以上であること。

ウ 昭和 40 年と平成 22 年の国調人口を比較して 28%以上減少しており、
若年者（15 歳以上 30 歳未満）の比率が 12%以下であること。

エ 昭和 60 年と平成 22 年の国調人口を比較して 19%以上減少していること。

ただし、ア、イ又はウに該当する場合においては、昭和 60 年と平成 22 年の国調人口を比較して増加率が 10%未満であること。

②財政力要件

平成 22 年度から平成 24 年度までの 3 年平均の財政力指数が 0.49 以下で、かつ、公営競技に係る収入が 40 億円以下であること。

V ①人口要件

ア 昭和 45 年と平成 27 年の国調人口を比較して 32%以上減少していること。

イ 昭和 45 年と平成 27 年の国調人口を比較して 27%以上減少しており、
高齢者（65 歳以上）の比率が 36%以上であること。

ウ 昭和 45 年と平成 27 年の国調人口を比較して 27%以上減少しており、
若年者（15 歳以上 30 歳未満）の比率が 11%以下であること。

エ 平成 2 年と平成 27 年の国調人口を比較して 21%以上減少していること。

ただし、ア、イ又はウに該当する場合においては、平成 2 年と平成 27 年の国調人口を比較して増加率が 10%未満であること。

②財政力要件

平成 25 年度から平成 27 年度までの 3 年平均の財政力指数が 0.5 以下であり、かつ、公営競技に係る収入が 40 億円以下であること。

2) 市町村の廃置分合等があった場合の特例

廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村であって総務省令、農林水産省令、国土交通省令に定める基準に該当するものは過疎地域とみなすこととされている（法第 33 条第 1 項）。

また、過疎地域市町村を含む合併があった場合に、過疎対策事業が引き続き円滑に実施で

きるようにする措置の充実を図るため、新たに、団体数が減少する合併の場合に限り、合併市町村で過疎地域の市町村に該当せず、法第 33 条第 1 項にも当てはまらないものについては、当該市町村の合併が行われた日の前日において過疎地域であった区域を過疎地域とみなすこととされている（同条第 2 項）。

(3) 過疎地域市町村数の動向

自立促進法に基づく過疎地域市町村は、平成 12 年 4 月 1 日時点で 1,171 市町村が公示され、このうち 1,129 市町村が活性化法から引き続き過疎地域となった（図表 1-2-1）。つまり、活性化法失効時点の過疎地域市町村 1,230 市町村のうち 101 市町村が新法の過疎地域の要件を満たさなくなった（なお、当該 101 市町村のうち、地方交付税の不交付団体である 1 団体を除き、経過措置としての法第 12 条の準用があった）。

また、当初の自立促進法失効時点（平成 22 年 3 月 31 日）の過疎地域市町村数は 718 団体であったが、平成 22 年の自立促進法の改正によって新たに過疎地域として公示された市町村数は 58 団体、平成 26 年の自立促進法の改正によって新たに過疎地域として公示された市町村数は 22 団体、平成 29 年の自立促進法の改正によって新たに過疎地域として公示された市町村数は 20 団体であり、平成 29 年 4 月 1 日現在で 817 市町村が過疎関係市町村となっている（図表 1-2-1）。このうち、市町村の一部の区域が過疎地域とみなされている市町村の数は 145 市町村である。

(4) 過疎地域自立促進計画

都道府県は、当該都道府県における過疎地域の自立促進を図るため、過疎地域自立促進方針（以下「自立促進方針」という。）を定めることができるとされている（法第 5 条）。さらに、都道府県は自立促進方針に基づき、過疎地域の市町村が定める過疎地域自立促進市町村計画（以下「市町村計画」という。）に掲げる事項について、過疎地域の市町村に協力して講じようとする措置の計画として、過疎地域自立促進都道府県計画（以下「都道府県計画」という。）を定めることができるとされている（法第 7 条）。

なお、過疎地域の市町村は、自立促進方針に基づき、あらかじめ、都道府県に協議し、議会の議決を経て市町村計画を定めることができるとされている（法第 6 条）。

自立促進方針、都道府県計画及び市町村計画の策定については、平成 22 年における法の改正時において、平成 21 年の「地方分権改革推進計画」に対応し、策定の義務付けを廃止（いわゆる「できる」規定化）するとともに、市町村から都道府県に対する事前協議の内容を見直す等の措置が講じられた。

自立促進法の下で都道府県、市町村が自立促進計画に基づいて推進してきた過疎対策事業についてみると、当初の 10 年間（H12～H21）の計画に基づいて実施された事業実績の総額は約 24 兆 5 千億円となっている。また、平成 22 年～平成 30 年の計画に基づいて実施された事業実績は約 23 兆 8 千億円であり、令和元年度の実績は約 2 兆 8 千億円となり、自立促

進計画に基づいて継続してきた過疎対策事業実績は合計で約 51 兆 2 千億円となっている（図表 1-2-2）。

その中で、過疎市町村が事業を行うに当たって大きな役割を果たす過疎債については、当初の 10 年間（H12～H21）で約 2 兆 8 千億円が充当され、事業費の総額は約 5 兆 5 千億円に達しており、平成 22 年度以降（H22～H30）の 9 年間では約 3 兆円が充当され、事業費の総額は約 4 兆 9 千億円となっている。令和元年度には約 4 千 5 百億円が充当されており、事業費の総額は約 7 千億円である。一方、国庫補助率のかさ上げにより増額された補助金は、当初の 10 年間（H12～H21）で約 116 億円であり、平成 22 年度以降（H22～H30）の 9 年間では約 53 億円、令和元年度については約 3 億円となっている（図表 1-2-3）。

(5) 過疎対策事業債

1) 対象の拡充

平成 22 年の自立促進法の改正により、過疎債の拡充が図られ、認定こども園、図書館、市町村立の幼稚園、自然エネルギーを利用するための施設の整備に係る規定が新設された。その後、平成 26 年の自立促進法の改正により、市町村有貸工場及び貸事務所、地域鉄道、一般廃棄物処理のための施設（し尿処理施設を含む）、火葬場、障害者福祉施設、公立小中学校の屋外運動場及びプール、市町村立高等学校（校舎、屋内運動場、屋外運動場、プール、寄宿舎、教員住宅及び通学バス等）、市町村管理の都道府県道の整備に係る規定が新設された。さらに、平成 29 年の自立促進法の改正により、市町村立の中等教育学校、特別支援学校、専修学校及び各種学校に係る規定が追加された。

2) 過疎債ソフト分

平成 22 年の自立促進法の改正により、いわゆるソフト事業が過疎債（以下「過疎債ソフト分」という。）の対象とされた。

過疎債ソフト分は、①市町村の行政運営に通常必要とされる内部管理経費、②生活保護等法令に基づき負担が義務づけられている経費、③地方債の元利償還に要する経費以外であれば、将来にわたり過疎地域の自立促進に資する事業を幅広く対象とすることとされており、過疎市町村において、過疎債を活用できる施策の範囲は大きく広がった。

その後、過疎債ソフト分の制度創設後 2 年間における過疎市町村の活用率の動向及び限度額まで活用している団体からの発行限度額の引き上げの要望等も踏まえて、平成 24 年度からハード分及びソフト分の起債要望額の合計が、地方債計画額の範囲内で、かつ、過疎債ソフト分の発行限度額の全国の合算額に達しない場合、財政力指数 0.56 以下の過疎市町村について、最大で現行発行限度額の 2 倍の発行が可能となる運用の弾力化が図られることとなった。

令和元年度の過疎債ソフト分の活用状況は発行限度額の総額 730 億円に対して発行予定額が 709 億円であった。活用率（発行限度額に対する発行予定額の割合をいう。）は、全体と

しては 97.1%であるが、都道府県毎に見た場合には、活用率に大きなばらつきが生じている（図表 1-2-4）。

図表 1-2-1 過疎関係市町村数の推移

	市町村数			人口（人）			面積（km ² ）		
	過疎地域(A)	全国(B)	A/B(%)	過疎地域(C)	全国(D)	C/D(%)	過疎地域(E)	全国(F)	E/F(%)
昭和 45 年 5 月 1 日 (緊急措置法施行)	776	3,340	23.2	6,867,964	99,209,137	6.9	102,023.04	372,165.57	27.4
昭和 55 年 4 月 1 日 (振興特別措置法施行)	1,119	3,256	34.4	8,463,023	111,939,643	7.6	166,302.82	377,534.99	44.0
平成 2 年 4 月 1 日 (活性化特別措置法施行)	1,143	3,246	35.2	7,859,466	121,048,923	6.5	170,101.26	377,737.11	45.0
平成 12 年 4 月 1 日 (自立促進特別措置法施行)	1,171	3,230	36.3	7,536,465	125,570,246	6.0	180,337.46	377,829.41	47.7
平成 22 年 4 月 1 日 (自立促進特別措置法延長)	776	1,728	44.9	11,237,434	127,767,994	8.8	216,476.66	377,853.76	57.3
令和 2 年 4 月 1 日 (現在)	817	1,719	47.5	10,878,661	127,094,745	8.6	225,467.94	377,970.75	59.7

- (備考) 1 東京都特別区は 1 団体として計上。
 2 昭和 45 年 5 月 1 日時点の数値は、昭和 40 年国勢調査（沖縄における国勢調査含む）による。（ただし、沖縄の面積については、国土地理院「昭和 45 年全国都道府県市区町村別調」別表に記載の、昭和 10 年内閣統計局の調査結果等の数値を使用。）
 3 昭和 55 年 4 月 1 日時点の数値は、昭和 50 年国勢調査結果による。
 4 平成 2 年 4 月 1 日時点の数値は、昭和 60 年国勢調査結果による。（ただし、面積については、集計可能な形式でデータが公開されていないため、平成 2 年国勢調査の結果を使用している。）
 5 平成 12 年 4 月 1 日時点の数値は、平成 7 年国勢調査結果による。
 6 平成 22 年 4 月 1 日時点の数値は、平成 17 年国勢調査結果による。
 7 令和 2 年 4 月 1 日時点の数値は、平成 27 年国勢調査結果による。

図表 1-2-2 自立促進法における事業実績

(単位：億円、%)

区分		産業の振興	交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の推進	生活環境の整備	高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	医療の確保	教育の振興	地域文化の振興等	集落の整備	その他	合計
自立促進法	実績 (H12～21)	69,629 (28.4)	91,919 (37.5)	49,657 (20.3)	9,521 (3.9)	5,330 (2.2)	13,298 (5.4)	2,142 (0.9)	1,003 (0.4)	2,629 (1.1)	245,128 (100.0)
	実績 (H22～30)	72,191 (30.3)	66,557 (27.9)	41,921 (17.6)	19,037 (8.0)	10,506 (4.4)	20,690 (8.7)	2,776 (1.2)	1,840 (0.8)	2,863 (1.2)	238,381 (100.0)
	実績 (R1)	9,752 (34.4)	7,135 (25.2)	4,692 (16.6)	2,335 (8.2)	1,077 (3.8)	2,255 (8.0)	298 (1.1)	306 (1.1)	459 (1.6)	28,308 (100.0)
合計		151,572 (29.6)	165,611 (32.4)	96,270 (18.8)	30,893 (6.0)	16,913 (3.3)	36,243 (7.1)	5,216 (1.0)	3,149 (0.6)	5,951 (1.2)	511,818 (100.0)

- (備考) 1 総務省調べ。
 2 過疎計画上の分野ごとに、いわゆるハード事業及びソフト事業が計上されている。
 3 端数処理の関係で合計が一致しないことがある。

図表 1-2-3 自立促進法における過疎債及び国庫補助額かさ上げの実績

(単位：百万円)

区分		過疎対策事業債		特例による国庫補助かさ上げ額				合計
		事業費	過疎債	校舎・屋内運動場	教職員住宅	保育所	消防施設	
自立促進法	実績 (H12～21)	5,492,002	2,759,937	4,765	2	1,735	5,055	11,557
	実績 (H22～30)	4,879,589	3,039,006	5,270	-	-	73	5,343
	実績 (R1)	701,279	450,614	326	-	-	4	330
合計		11,072,870	6,249,557	10,360	2	1,735	5,128	17,230

- (備考) 1 総務省調べ。

図表 1-2-4 過疎債ソフト分の都道府県別活用率（令和元年度発行状況ベース）

活用率	団体数	都道府県（活用率：％）
95％以上	27	大阪府（129.4％）、島根県（124.0％）、兵庫県（119.6％）、高知県（118.8％）、石川県（116.1％）、長崎県（114.8％）、京都府（112.4％）、北海道（109.0％）、神奈川県（108.6％）、栃木県（108.5％）、広島県（105.7％）、岡山県（104.7％）、山形県（104.2％）、福岡県（103.6％）、山梨県（103.5％）、奈良県（103.1％）、大分県（102.8％）、佐賀県（102.0％）、新潟県（100.4％）、和歌山県（100.2％）、千葉県（98.8％）、山口県（98.0％）、鳥取県（97.3％）、鹿児島県（96.8％）、三重県（96.2％）、茨城県（95.1％）、香川県（95.0％）
95％未満 80％以上	11	秋田県（91.6％）、宮城県（90.9％）、徳島県（88.9％）、宮崎県（85.4％）、福島県（85.1％）、愛媛県（84.0％）、富山県（83.7％）、青森県（83.1％）、群馬県（81.4％）、岩手県（81.9％）、長野県（80.2％）
80％未満 60％以上	3	愛知県（68.8％）、沖縄県（67.8％）、熊本県（65.9％）
60％未満 40％以上	5	埼玉県（51.4％）、静岡県（50.5％）、岐阜県（49.4％）、福井県（46.8％）、滋賀県（40.1％）
40％未満 20％以上	0	
20％未満	1	東京都（0.0％）

※活用率：各都道府県の過疎市町村の発行予定額の総和／各都道府県の過疎市町村の発行限度額の総和。

※発行予定額：当該年度の協議等に係る地方債のうち、当該年度内に発行する額及び次年度以降に繰り越した事業の財源として発行する見込みの額の合計。

※100％以上の団体は、発行限度額の運用弾力化を活用した団体である。

第2章

過疎地域の現況

第2章 過疎地域の現況

第1節 概況

1 過疎関係市町村数、人口、面積等

(1) 概要

(市町村数)

過疎関係市町村数は、令和2年4月1日現在で817(279市410町128村)であり、全国の市町村総数に占める割合は47.5%である(図表2-1-1、図表2-1-2、図表2-1-3)。

(人口)

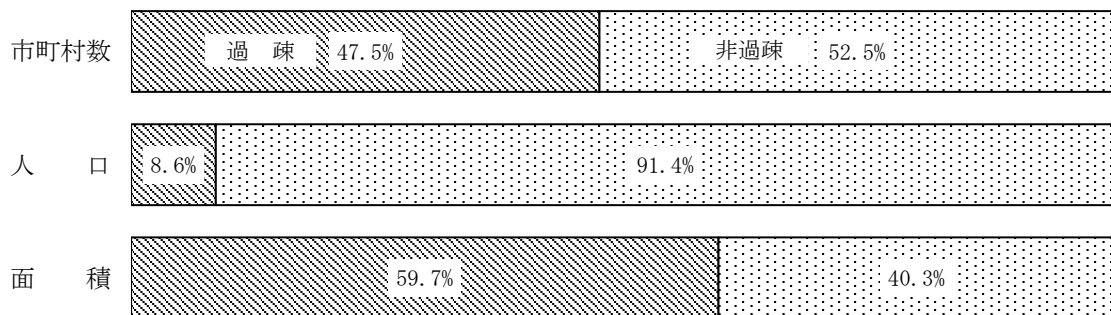
過疎地域の人口は、1,088万人であり、総人口(1億2,709万人)に占める割合は8.6%である(図表2-1-1。人口についての詳細は第2節)。

(面積)

過疎地域の面積は225,468km²であり、我が国の総面積(377,971km²)に占める割合は59.7%である(図表2-1-1)。

また、過疎地域の林野率は76.9%であり、全国の林野率(65.6%)と比べ10ポイント以上高くなっている。可住地率は10.2%であり、全国の可住地率(17.6%)と比べ7ポイント以上低い(図表2-1-4)。

図表2-1-1 市町村数、人口、面積



(単位：団体、人、km²、%)

区分	市町村	人口	面積
過疎地域	817 (47.5)	10,878,797 (8.6)	225,468 (59.7)
非過疎地域	902 (52.5)	116,215,948 (91.4)	152,503 (40.3)
全国	1,719 (100.0)	127,094,745 (100.0)	377,971 (100.0)

(備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在であり、過疎地域の市町村数は過疎関係市町村数による。
2 人口は平成27年国勢調査による。

- 3 面積は平成27年国勢調査による。ただし、一部過疎地域については、平成12年国勢調査による。
 4 東京都特別区は1団体とみなす。
 5 ()は構成割合である。

図表 2-1-2 市町村区分別団体数

(単位：団体、%)

区 分	市	町	村	計
過 疎 地 域	279 (34.15%)	410 (50.18%)	128 (15.67%)	817 (100.0%)
非過疎地域	514 (56.87%)	333 (37.03%)	55 (6.10%)	902 (100.0%)
全 国	793 (46.07%)	743 (43.28%)	183 (10.65%)	1,719 (100.0%)

- (備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在。過疎地域の市町村数は過疎関係市町村数による。
 2 東京都特別区は1団体とみなす。
 3 ()は構成割合である。

図表 2-1-3 人口規模別市町村数及び構成割合

(単位：団体、%)

人口規模	全 国	過 疎 関 係 市 町 村 数					※参考	
		合計	過疎市町村 (2条1項)	みなし過疎市町 村(33条1項)	一部過疎を有 する市町村 (33条2項)	一部過疎の区域 (33条2項)		
～1,000	36 (2.1)	30 (3.7)	30 (4.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	31 (11.0)		
～2,000	55 (3.2)	53 (6.5)	53 (8.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	50 (17.7)		
～3,000	53 (3.1)	51 (6.2)	51 (7.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	38 (13.4)		
～4,000	69 (4.0)	59 (7.2)	59 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	50 (17.7)		
～5,000	55 (3.2)	47 (5.8)	47 (7.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	33 (11.7)		
～6,000	59 (3.4)	49 (6.0)	49 (7.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	32 (11.3)		
～7,000	41 (2.4)	27 (3.3)	26 (4.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	21 (7.4)		
～8,000	58 (3.4)	30 (3.7)	29 (4.5)	1 (4.0)	0 (0.0)	11 (3.9)		
～9,000	46 (2.7)	27 (3.3)	26 (4.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	7 (2.5)		
～10,000	40 (2.3)	26 (3.2)	26 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (1.4)		
～15,000	151 (8.8)	75 (9.2)	70 (10.8)	1 (4.0)	4 (2.8)	4 (1.4)		
～20,000	134 (7.8)	66 (8.1)	62 (9.6)	0 (0.0)	4 (2.8)	1 (0.4)		
～25,000	80 (4.7)	38 (4.7)	30 (4.6)	2 (8.0)	6 (4.1)	0 (0.0)		
～30,000	77 (4.5)	28 (3.4)	22 (3.4)	1 (4.0)	5 (3.4)	1 (0.4)		
～35,000	87 (5.1)	30 (3.7)	15 (2.3)	2 (8.0)	13 (9.0)	0 (0.0)		
～40,000	57 (3.3)	25 (3.1)	19 (2.9)	2 (8.0)	4 (2.8)	0 (0.0)		
～45,000	49 (2.9)	13 (1.6)	6 (0.9)	2 (8.0)	5 (3.4)	0 (0.0)		
～50,000	50 (2.9)	15 (1.8)	7 (1.1)	2 (8.0)	6 (4.1)	0 (0.0)		
～100,000	261 (15.2)	64 (7.8)	16 (2.5)	10 (40.0)	38 (26.2)	0 (0.0)		
～300,000	189 (11.0)	49 (6.0)	4 (0.6)	2 (8.0)	43 (29.7)	0 (0.0)		
～1,000,000	60 (3.5)	14 (1.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	14 (9.7)	0 (0.0)		
1,000,001～	12 (0.7)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.7)	0 (0.0)		
合 計	1,719 (100.0)	817 (100.0)	647 (100.0)	25 (100.0)	145 (100.0)	283 (100.0)		

- (備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在。
 2 人口は平成27年国勢調査による。
 3 東京都特別区は1団体とみなす。
 4 ()は構成割合である。

図表 2-1-4 林野面積と可住地面積

(単位：km²、%)

区 分	総 面 積 a	林 野 面 積 b	可住地面積 c	林 野 率 b/a	可 住 地 率 c/a
過疎地域	194,634	149,689	19,819	76.9	10.2
非過疎地域	183,337	98,334	46,800	53.6	25.5
全 国	377,971	248,023	66,619	65.6	17.6

- (備考) 1 総面積は平成27年国勢調査による。
 2 林野面積は農林水産省「2015年農林業センサス」による。
 3 可住地面積は総務省「令和元年度(平成31年度)固定資産の価格等の概要調書」による。なお、可住地面積とは、田、畑及び宅地の評価総地積の合計である。
 4 過疎地域は令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村を含まない。非過疎地域は一部過疎市町村を含む。

(2) 市町村合併の進捗状況と過疎関係市町村数の推移

市町村合併の進捗状況と過疎関係市町村数の推移についてみると、平成12年4月1日時点の全市町村数3,229、過疎関係市町村数1,171に対して、令和2年4月1日時点の全市町村数は1,718、過疎関係市町村数は817となっている(図表2-1-5)。

図表 2-1-5 過疎地域数の推移

年月日	全市町村数	過疎地域数 (過疎関係 市町村数) (a+b+c)	過疎市町村数 (2条1項) a	過疎地域と みなされる市町村 (33条1項) b	過疎地域とみなされる区域を有 する市町村数(33条2項)		(参考) 過疎地域 の区域数 (a+b+d)
					c	(過疎地域とみな される区域数)d	
H12.4.1	3,229	1,171	1,171	0	0	0	1,171
H13.4.1	3,226	1,171	1,171	0	0	0	1,171
H14.4.1	3,218	1,210	1,210	0	0	0	1,210
H15.4.1	3,190	1,203	1,194	2	7	7	1,203
H16.4.1	3,100	1,167	1,149	5	13	15	1,169
H17.4.1	2,395	899	780	33	86	169	982
H18.4.1	1,820	739	513	71	155	275	859
H19.4.1	1,804	738	508	72	158	278	858
H20.4.1	1,788	732	500	73	159	279	852
H21.4.1	1,777	730	497	72	161	290	859
H22.4.1	1,727	776	582	35	159	303	920
H23.4.1	1,724	776	582	34	160	306	922
H24.4.1	1,719	775	581	34	160	306	921
H25.4.1	1,719	775	581	34	160	306	921
H26.4.1	1,719	797	616	30	151	293	939
H27.4.1	1,718	797	616	30	151	293	938
H28.4.1	1,718	797	616	30	151	293	938
H29.4.1	1,718	817	647	25	145	283	955
H30.4.1	1,718	817	647	25	145	283	955
H31.4.1	1,718	817	647	25	145	283	955
R2.4.1	1,718	817	647	25	145	283	955

(3) 都道府県別、ブロック別の特徴

過疎地域は、全都道府県に存在する。

都道府県別にみると、過疎地域の市町村数割合の大きい都道府県は、島根県（100.0%）、鹿児島県（95.3%）、秋田県（92.0%）、大分県（88.9%）、愛媛県（85.0%）となっている。

また、過疎地域の人口割合の大きい都道府県は、秋田県（66.4%）、島根県（47.3%）、大分県（39.0%）、岩手県（38.0%）、鹿児島県（36.5%）となっている（図表 2-1-6）。

ブロック別にみると、全市町村数に占める過疎関係市町村数の割合は、北海道（83.2%）、中国（73.8%）、四国（69.5%）の順に高い。

また、全人口に占める過疎地域に住む人口の割合についてみると、北海道（29.6%）、東北（23.7%）、九州（19.7%）、四国（19.4%）の順に高い（図表 2-1-7）。

図表 2-1-6 過疎地域の市町村数、人口、面積の割合が大きい都道府県、小さい都道府県

(単位：%)

順位	市町村数割合	人口割合	面積割合
1	島根県 100.0	秋田県 66.4	秋田県 92.3
2	鹿児島県 95.3	島根県 47.3	大分県 87.4
3	秋田県 92.0	大分県 39.0	島根県 85.4
4	大分県 88.9	岩手県 38.0	高知県 79.6
5	愛媛県 85.0	鹿児島県 36.5	北海道 78.4
43	滋賀県 10.5	滋賀県 0.4	埼玉県 14.8
44	愛知県 9.3	埼玉県 0.2	千葉県 12.7
45	埼玉県 6.3	東京都 0.2	滋賀県 8.3
46	神奈川県 3.0	神奈川県 0.1	大阪府 2.0
47	大阪府 2.3	大阪府 0.1	神奈川県 0.3

(備考) 1 市町村数は令和 2 年 4 月 1 日現在であり、過疎地域の市町村数は過疎関係市町村数による。

2 人口及び面積は平成 27 年国勢調査による。

図表 2-1-7 ブロック別過疎地域の市町村数、人口、面積

(単位：団体、千人、km²、%、人/km²)

項目 地域	市町村数			人			面積			人口密度			
	全市町村 a	過疎地域 b	全国に おける 構成比	過疎地域の割合 b/a	全市町村 c	過疎地域 d	全国に おける 構成比	過疎地域の割合 d/c	全市町村 e	過疎地域 f	全国に おける 構成比	全市町村 c/e	過疎地域 d/f
北海道	179	149	18.2	83.2	5,382	1,594	14.7	29.6	83,424	65,422	29.0	65	24
東北	257	152	18.6	59.1	11,287	2,674	24.6	23.7	79,531	51,918	23.1	142	52
関東	398	93	11.4	23.4	45,929	591	5.4	1.3	50,456	16,107	7.1	910	37
東海	160	37	4.5	23.1	15,031	373	3.4	2.5	29,346	11,512	5.1	512	32
北陸	51	20	2.5	39.2	3,007	304	2.8	10.1	12,624	5,135	2.3	238	59
近畿	198	59	7.2	29.8	20,725	732	6.8	3.5	27,351	11,882	5.3	758	62
中国	107	79	9.7	73.8	7,438	1,201	11.1	16.1	31,922	21,466	9.5	233	56
四国	95	66	8.1	69.5	3,846	747	6.9	19.4	18,803	13,050	5.8	205	57
九州	233	144	17.6	61.8	13,016	2,561	23.5	19.7	42,231	27,776	12.3	308	92
沖縄	41	18	2.2	43.9	1,434	101	0.9	7.0	2,281	1,199	0.5	629	84
全国	1,719	817	100.0	47.5	127,095	10,879	100.0	8.6	377,971	225,468	100.0	336	48

(備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在。過疎地域の市町村数は過疎関係市町村数による。

2 人口及び面積は国勢調査による。

3 東京都特別区は1団体とみなす。

2 他の地域振興関係法に基づく指定地域等との関係

過疎関係市町村 817 団体のうち、他の地域振興関係法に基づく指定地域等を区域内に有する市町村の割合をみると、「辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律」における辺地を有する市町村は 85.2%、「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律」における特定農山村地域を含む市町村は 81.9%、「山村振興法」の振興山村地域を含む市町村は 69.8%、「豪雪地帯対策特別措置法」の豪雪地帯に指定されている市町村は 46.3%となっている。

また、各地域振興関係法による指定地域等を区域内に有する全市町村のうち、過疎地域市町村が 50%以上を占めるものは、振興山村 (77.7%)、「半島振興法」による半島振興対策実施地域 (74.2%)、辺地 (71.7%)、「特殊土壌地帯災害防除及び振興臨時措置法」の特殊土壌地帯 (71.3%)、豪雪地帯 (71.1%)、特定農山村地域 (69.8%)、「離島振興法」の離島振興対策実施地域 (69.6%)、「低開発地域工業開発促進法」による低開発地域 (59.2%) となっている (図表 2-1-8)。

図表 2-1-8 ブロック別過疎関係市町村の地域振興関係法に基づく指定状況

(単位：団体、%)

区 分		過疎	特 定 農山村	山村	離島	半島	豪 雪	辺地	特土	低開発	リゾ ート	拠点 都市
過疎地域における指定数	北海道	149	92	90	6	21	149 (81)	107	0	36	20	16
	東北	152	132	124	5	16	131 (71)	138	0	38	19	58
	関東	93	83	77	4	5	22 (9)	77	0	10	22	22
	東海	37	36	34	1	14	9 (4)	32	1	5	7	18
	北陸	20	20	18	1	9	20 (7)	18	0	8	3	11
	近畿	59	55	48	0	32	13 (1)	50	2	12	16	22
	中国	79	77	63	20	7	34 (0)	74	57	27	12	30
	四国	66	62	51	12	8	0 (0)	60	45	13	0	23
	九州	144	106	65	29	32	0 (0)	123	76	57	35	40
	沖縄	18	6	0	0	0	0 (0)	17	0	0	0	7
計 a		817	669	570	78	144	378 (173)	696	181	206	134	247
全国における指定数 b		817	959	734	112	194	532 (201)	971	254	348	271	502
全国の指定数のうち過疎地域の割合 a/b		100.0	69.8	77.7	69.6	74.2	71.1 (86.1)	71.7	71.3	59.2	49.4	49.2
過疎地域における指定数の割合 a/817		100.0	81.9	69.8	9.5	17.6	46.3 (21.2)	85.2	22.2	25.2	16.4	30.2

(備考) 1 過疎地域は令和 2 年 4 月 1 日現在。

2 豪雪の () はうち特別豪雪地帯である。

第2節 人口・世帯

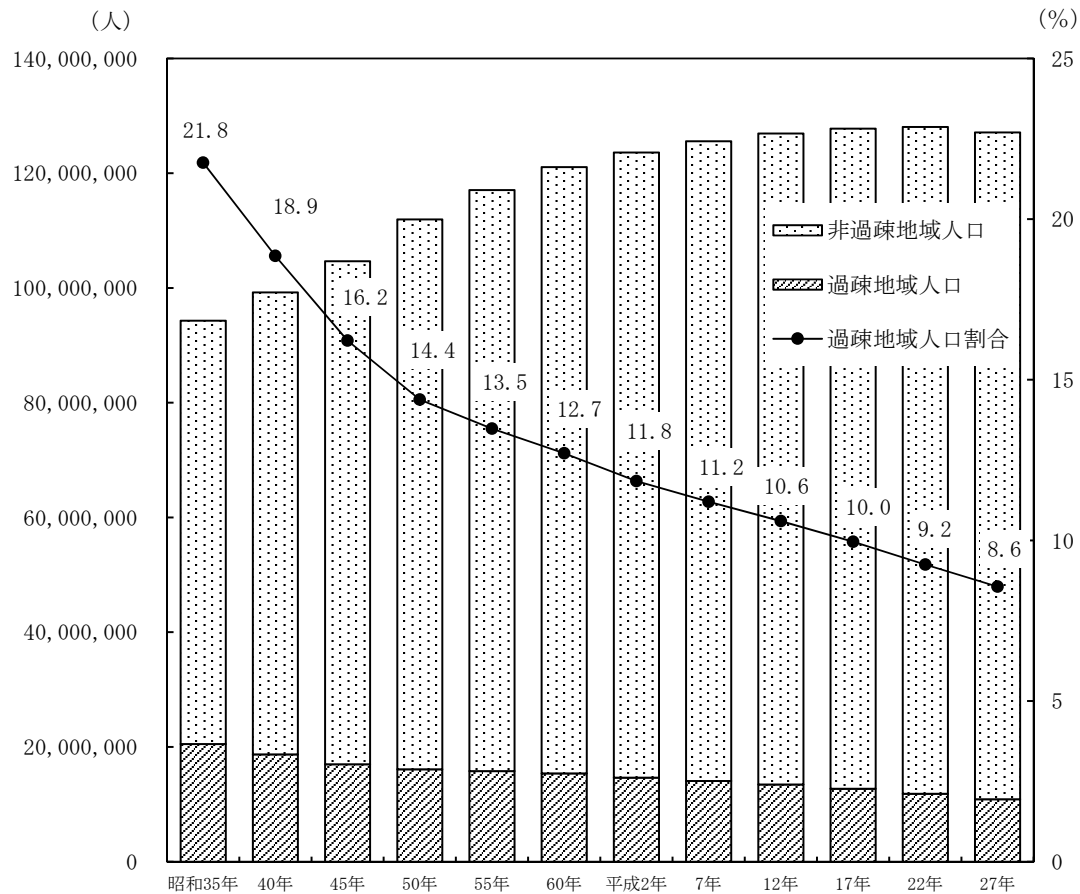
1 過疎地域の人口動態

(1) 過疎地域の人口の推移

1) 過疎地域の人口の推移

我が国の総人口に対する過疎地域（令和2年4月1日現在）の人口の割合の推移をみると、過疎問題が顕在化し始めた昭和35年には、総人口9,430万人に対し過疎地域の人口は2,052万人、構成割合は21.8%であった。その後過疎地域の人口割合は減少し、平成27年には全国1億2,709万人に対し過疎地域1,088万人、8.6%となっている（図表2-2-1）。

図表2-2-1 過疎・非過疎地域人口の推移



(備考) 1 国勢調査による。
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在

(単位：千人、%)

年次	総人口 a	過疎地域 人口 b	非過疎地域 人口 a-b	過疎地域 人口割合 b/a
昭和35年	94,302	20,515	73,787	21.8
昭和40年	99,209	18,706	80,503	18.9
昭和45年	104,665	16,976	87,689	16.2
昭和50年	111,940	16,098	95,842	14.4
昭和55年	117,060	15,774	101,286	13.5
昭和60年	121,049	15,385	105,664	12.7
平成2年	123,611	14,642	108,969	11.8
平成7年	125,570	14,066	111,504	11.2
平成12年	126,926	13,453	113,473	10.6
平成17年	127,768	12,720	115,048	10.0
平成22年	128,057	11,842	116,215	9.2
平成27年	127,095	10,879	116,216	8.6

(備考) 1 国勢調査による。

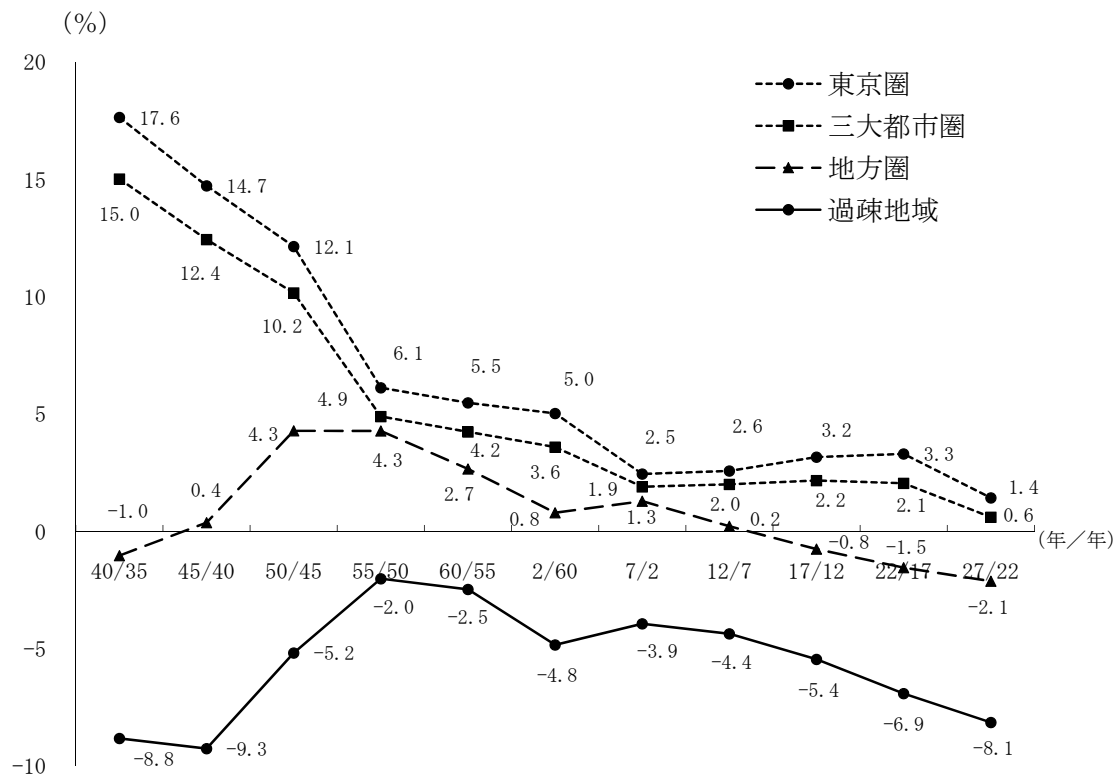
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

2) 人口増減率の推移

過疎地域における人口減少率は、昭和35年～昭和40年が8.8%、昭和40年～昭和45年では9.3%と著しかったが、その後鈍化し、昭和50年～昭和55年には2.0%にまで改善された。しかし、昭和60年～平成2年以降に再び増大し、平成22年～平成27年では8.1%となっている。

他方、三大都市圏における人口増加率は、昭和35年～昭和40年の15.0%から次第に縮小し、平成22年～平成27年では0.6%となっている。また、地方圏においては、平成12年～平成17年以降、昭和35年～昭和40年以来の人口減少率となっている（図表2-2-2）。

図表2-2-2 過疎地域、三大都市圏、地方圏等の人口増減率の推移



- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 三大都市圏とは、東京圏（埼玉県、千葉県、東京都及び神奈川県の一部）、大阪圏（京都府、大阪府及び兵庫県の一部）、名古屋圏（岐阜県、愛知県及び三重県の一部）をいい、地方圏とは三大都市圏以外の区域をいう。

3) ブロック別にみた過疎地域の人口動向

ブロック別に過疎地域における人口動向をみると、全てのブロックで人口が減少しており、人口減少率のピークは、中国及び九州では昭和35年～40年、四国では昭和35年～40年及び昭和40年～45年、北海道、関東、沖縄では昭和40年～45年、その他のブロックでは平成22年～27年となっている。ピーク時には10%を超えたブロックが半数を占め、特に沖縄では昭和40年～45年に16.4%となり、大幅に人口が減少した。その後、人口減少率は鈍化傾向を示し、昭和50年～55年には、1～4%台にまで改善したものの、昭和60年～平成2年には全ブロックで再び減少幅が拡大し、平成7年以降は拡大傾向にある（図表2-2-3）。

図表2-2-3 ブロック別過疎地域人口の推移

(人口)

(単位：千人)

区分	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
北海道	3,197	3,007	2,722	2,518	2,449	2,349	2,174	2,061	1,959	1,848	1,720	1,594
東北	4,660	4,338	4,039	3,864	3,812	3,727	3,577	3,465	3,335	3,160	2,945	2,674
関東	1,171	1,069	966	914	883	862	830	799	756	711	654	591
東海	760	695	631	606	581	560	532	510	484	453	416	373
北陸	531	497	461	451	443	436	417	398	377	356	331	304
近畿	1,207	1,123	1,052	1,031	1,018	996	964	943	908	856	796	732
中国	2,296	2,040	1,843	1,757	1,720	1,686	1,612	1,546	1,472	1,389	1,298	1,201
四国	1,539	1,376	1,230	1,167	1,140	1,106	1,046	994	943	884	817	747
九州	4,985	4,405	3,900	3,672	3,611	3,548	3,378	3,241	3,109	2,952	2,762	2,561
沖縄	170	156	130	120	118	117	113	111	110	109	104	101
計	20,515	18,706	16,976	16,098	15,774	15,385	14,642	14,066	13,453	12,720	11,842	10,879

(人口増減率)

(単位：%)

区分	S40/35	45/40	50/45	55/50	60/55	H2/60	7/2	12/7	17/12	22/17	27/22	H27/S35	H27/S45
北海道	-5.9	-9.5	-7.5	-2.7	-4.1	-7.4	-5.2	-4.9	-5.7	-6.9	-7.3	-50.1	-41.4
東北	-6.9	-6.9	-4.3	-1.3	-2.2	-4.0	-3.1	-3.7	-5.2	-6.8	-9.2	-42.6	-33.8
関東	-8.7	-9.6	-5.4	-3.4	-2.4	-3.7	-3.7	-5.3	-6.0	-8.0	-9.5	-49.5	-38.8
東海	-8.5	-9.2	-4.1	-4.1	-3.5	-4.9	-4.3	-5.1	-6.2	-8.3	-10.2	-50.9	-40.9
北陸	-6.3	-7.3	-2.1	-1.9	-1.5	-4.4	-4.6	-5.3	-5.4	-7.2	-8.0	-42.7	-34.0
近畿	-6.9	-6.3	-2.0	-1.3	-2.1	-3.3	-2.2	-3.7	-5.7	-7.0	-8.1	-39.4	-30.5
中国	-11.2	-9.7	-4.7	-2.1	-2.0	-4.4	-4.1	-4.8	-5.7	-6.5	-7.5	-47.7	-34.8
四国	-10.6	-10.6	-5.2	-2.3	-3.0	-5.5	-4.9	-5.1	-6.3	-7.6	-8.5	-51.4	-39.3
九州	-11.6	-11.4	-5.9	-1.7	-1.8	-4.8	-4.1	-4.1	-5.0	-6.4	-7.3	-48.6	-34.3
沖縄	-8.3	-16.4	-8.2	-1.1	-1.1	-3.8	-1.5	-1.0	-0.7	-4.4	-3.0	-40.6	-22.5
計	-8.8	-9.2	-5.2	-2.0	-2.5	-4.8	-3.9	-4.4	-5.4	-6.9	-8.1	-47.0	-35.9

(備考) 1 国勢調査による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

4) 過疎関係市町村の人口増減の動向

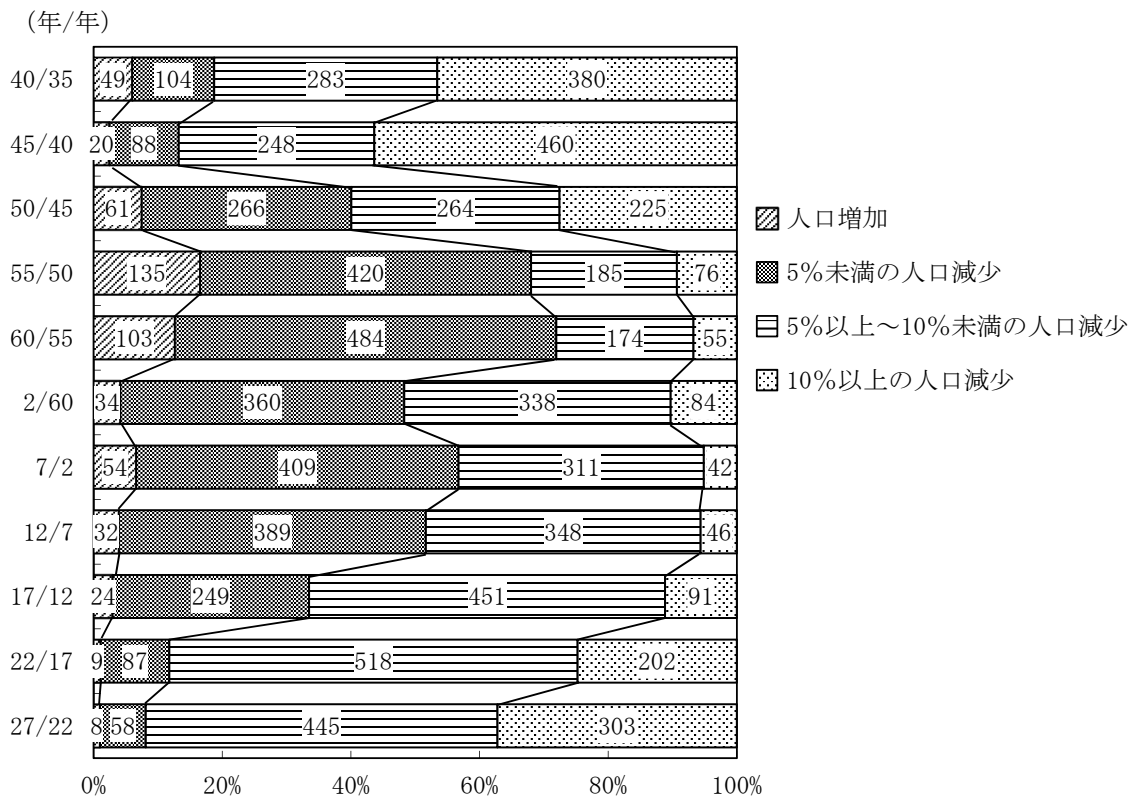
(人口増減の段階別市町村割合)

人口増減の段階別に過疎関係市町村数をみると、人口増加団体は昭和40年～45年の20団体から昭和50年～55年に135団体まで増加したが、昭和60年～平成2年には34団体に減少し、平成22年～27年には8団体となり過疎関係市町村全体の1.0%となっている。

一方、人口が5年間で10%以上減少した団体は、昭和40年～45年の460団体をピークに昭和55年～60年には55団体までに減少したが、平成22年～27年には303団体となり、過疎関係市町村全体の37.2%を占めている。

平成22年～27年の人口増減率をみると、5%以上減少した団体が748団体であり、全体の9割強を占めている(図表2-2-4、図表2-2-5)。

図表 2-2-4 人口増減率の段階別過疎関係市町村数の推移



- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村については、一部過疎地域内の人口による。
 3 平成7年～平成12年、平成12年～平成17年は、噴火のため全島避難していた東京都三宅村を除く。
 4 平成22年～平成27年は、東日本大震災により町村全域に避難指示が出ていた福島県浪江町、葛尾村、飯館村を除く。
 5 分村合併後に2市町の一部過疎地域となった山梨県上九一色村は、昭和35年から平成17年までの国勢調査において、各地域内のデータが取得できないため、1団体として算出。

図表 2-2-5 人口減少率の段階別過疎関係市町村数

(単位：団体、%)

区分	40/35	45/40	50/45	55/50	60/55	2/60	7/2	12/7	17/12	22/17	27/22
減	40%～	3 (0.4)	3 (0.4)	5 (0.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
	30%～	10 (1.2)	9 (1.1)	7 (0.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.1)	0 (0.0)
	25%～	11 (1.3)	21 (2.6)	8 (1.0)	0 (0.0)	1 (0.1)	2 (0.2)	1 (0.1)	0 (0.0)	2 (0.2)	1 (0.1)
	20%～	26 (3.2)	38 (4.7)	17 (2.1)	5 (0.6)	2 (0.2)	5 (0.6)	1 (0.1)	1 (0.1)	5 (0.6)	4 (0.5)
	15%～	69 (8.5)	126 (15.4)	36 (4.4)	15 (1.8)	2 (0.2)	9 (1.1)	4 (0.5)	6 (0.7)	2 (0.2)	22 (2.7)
	10%～	261 (32.0)	263 (32.2)	152 (18.6)	56 (6.9)	50 (6.1)	66 (8.1)	36 (4.4)	39 (4.8)	81 (9.9)	175 (21.4)
少	5%～	283 (34.7)	248 (30.4)	264 (32.4)	185 (22.7)	174 (21.4)	338 (41.4)	311 (38.1)	348 (42.7)	451 (55.3)	518 (63.5)
	0%～	104 (12.7)	88 (10.8)	266 (32.6)	420 (51.5)	484 (59.2)	360 (44.1)	409 (50.1)	389 (47.7)	249 (30.6)	87 (10.7)
	小計	767 (94.0)	796 (97.5)	755 (92.5)	681 (83.5)	713 (87.4)	782 (95.8)	762 (93.4)	783 (96.1)	791 (97.1)	807 (98.9)
増 加	49 (6.0)	20 (2.5)	61 (7.5)	135 (16.5)	103 (12.6)	34 (4.2)	54 (6.6)	32 (3.9)	24 (2.9)	9 (1.1)	8 (1.0)
計	816 (100.0)	816 (100.0)	816 (100.0)	816 (100.0)	816 (100.0)	816 (100.0)	816 (100.0)	815 (100.0)	815 (100.0)	816 (100.0)	814 (100.0)

- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村については、一部過疎区域内の人口による。
 3 平成7年～平成12年、平成12年～平成17年は、噴火のため全島避難していた東京都三宅村を除く。
 4 平成22年～平成27年は、東日本大震災により町村全域に避難指示が出ていた福島県浪江町、葛尾村、飯舘村を除く。
 5 分村合併後に2市町の一部過疎地域となった山梨県上九一色村は、昭和35年から平成17年までの国勢調査において、各地域内のデータが取得できないため、1団体として算出。
 6 () は構成比である。

5) 近年の人口増加市町村の人口増加要因

平成22年から平成27年までにかけて人口が増加している過疎関係市町村は、8団体であった。これらの市町村に人口増加の主な要因を聞き取りなどにより調査したところ、「自然環境等を求めている移住・UJIターン」や「地元の創意工夫による独自の活性化施策による人口定住」などが要因として挙げられた。

なお、人口が増加した過疎関係市町村数は、平成12年から平成17年までにかけては25団体であったが、その後は減少を続けており、過疎地域を取り巻く状況は一層厳しい状況となっている（図表2-2-6）。

図表2-2-6 人口が増加した過疎関係市町村における人口増加要因

(単位：団体、%)

項目	H12～H17 人口増加 市町村(24 団体)	H17～H22 人口増加 市町村(9 団体)	H22～H27 人口増加 市町村(8 団体)
1 企業立地、企業誘致等による就業の場の拡大	1 (4.0)	1 (11.1)	0 (0.0)
2 第1次産業従事者の定着、増加	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
3 地元の創意工夫による独自の活性化施策による人口定住	2 (8.0)	0 (0.0)	2 (25.0)
4 宅地分譲、公営住宅建設等の住宅整備	5 (20.0)	2 (22.2)	0 (0.0)
5 生活環境整備の充実	0 (0.0)	1 (11.1)	1 (12.5)
6 寿命の伸長等による自然増加	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
7 自然環境等を求めている移住・UJIターン	7 (28.0)	0 (0.0)	4 (50.0)
8 交通体系の整備による近郊都市の通勤圏化、ベッドタウン化	2 (8.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
9 学校等公共施設の開設に伴う教職員、学生の居住	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
10 病院、老人ホーム等の医療・厚生福祉施設の入院・入所者、職員の増加	1 (4.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
11 公共事業等工事関係者の一時的流入	3 (12.0)	2 (22.2)	0 (0.0)
12 宗教団体の進出	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
13 その他	4 (16.0)	3 (33.3)	1 (12.5)

- (備考) 1 総務省調べ。人口増加市町村数は調査時点のもの。
 2 H12～H17についての過疎地域は、過疎地域自立促進特別措置法に基づく
 (平成19年4月1日現在 737団体(噴火のため全島避難していた東京都三宅村を除く。))。
 3 H17～H22についての過疎地域は、過疎地域自立促進特別措置法に基づく
 (平成28年4月1日現在 797団体)
 4 H22～H27についての過疎地域は、過疎地域自立促進特別措置法に基づく
 (令和2年4月1日現在 814団体(東日本大震災により町村全域に避難指示が出ていた福島県浪江町、葛尾村、飯舘村を除く。))。
 5 一部過疎地域については、その区域の人口に基づく。

(2) 社会増減と自然増減

1) 人口増減の要因：社会増減と自然増減

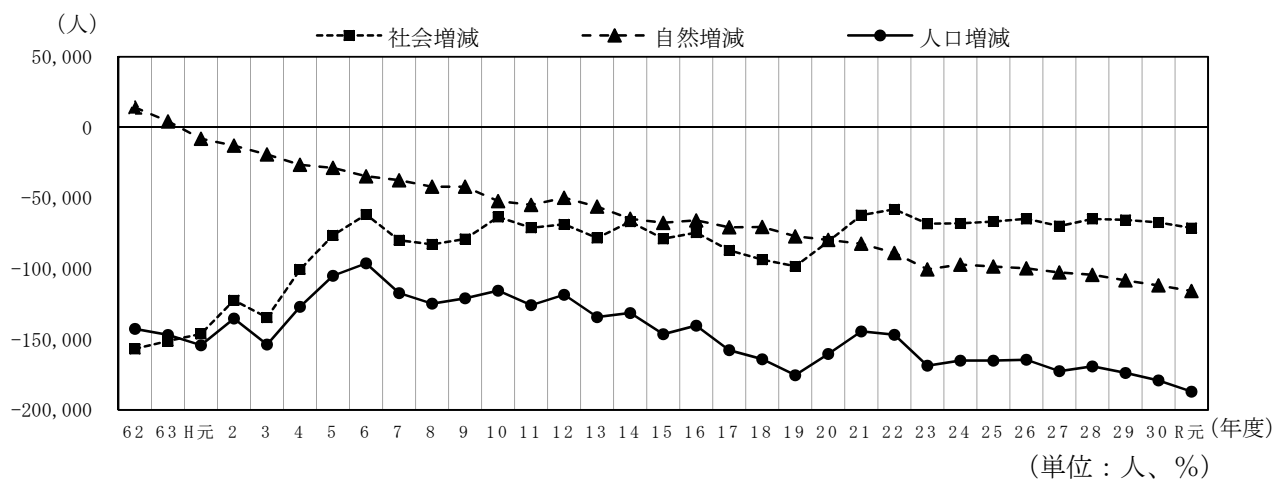
過疎地域における近年の人口増減の推移をみると、昭和 62 年度から平成元年度までは減少幅が拡大傾向であったが、平成 2 年度から平成 6 年度にかけては縮小した。平成 7 年度以降は、平成 19 年度から平成 21 年度までを除き、再び緩やかな拡大傾向となっている。

人口増減を社会増減と自然増減に分解すると、社会増減については、平成 3 年度までは年間 12 万人から 15 万人の間で減少し、平成 4 年度以降は減少幅が縮小したものの、年間 5～10 万人前後で推移している。

一方、自然増減をみると、昭和 62 年度の約 1.4 万人増から年々減少しており、平成元年度には自然増から自然減に転じ、平成 13 年度以降は年間 5 万人以上の自然減となっている。

また、過疎地域の人口増減の要因を社会増減及び自然増減の寄与率からみると、昭和 63 年度以前は自然増を上回る社会減による人口減少、平成元年度以降は社会減と自然減の両方が人口減少の要因となっており、平成 21 年度以降、自然減の寄与率が社会減の寄与率を上回っていることが分かる（図表 2-2-7）。

図表 2-2-7 過疎地域における人口増減（社会増減と自然増減）の推移



年 度	社会増減 a	自然増減 b	人口増減 c=a + b	社会増減寄与率 a/c	自然増減寄与率 b/c
昭和62年度	-156,783	14,161	-142,622	110	-10
昭和63年度	-151,133	4,253	-146,880	103	-3
平成元年度	-146,156	-8,020	-154,176	95	5
平成2年度	-122,356	-12,910	-135,266	90	10
平成3年度	-134,585	-19,120	-153,705	88	12
平成4年度	-100,503	-26,454	-126,957	79	21
平成5年度	-76,331	-28,630	-104,961	73	27
平成6年度	-61,631	-34,595	-96,226	64	36
平成7年度	-79,832	-37,402	-117,234	68	32
平成8年度	-82,768	-41,964	-124,732	66	34
平成9年度	-79,007	-41,934	-120,941	65	35
平成10年度	-63,356	-52,170	-115,526	55	45
平成11年度	-71,007	-54,827	-125,834	56	44
平成12年度	-68,603	-49,826	-118,429	58	42
平成13年度	-78,209	-56,043	-134,252	58	42
平成14年度	-66,703	-64,654	-131,357	51	49
平成15年度	-78,846	-67,517	-146,363	54	46
平成16年度	-74,492	-65,819	-140,311	53	47
平成17年度	-86,988	-70,686	-157,674	55	45
平成18年度	-93,616	-70,467	-164,083	57	43
平成19年度	-98,285	-77,115	-175,400	56	44
平成20年度	-80,721	-79,657	-160,378	50	50
平成21年度	-62,069	-82,317	-144,386	43	57
平成22年度	-57,935	-88,819	-146,754	39	61
平成23年度	-68,174	-100,478	-168,652	40	60
平成24年度	-67,949	-97,113	-165,062	41	59
平成25年度	-66,594	-98,445	-165,039	40	60
平成26年度	-64,707	-99,744	-164,451	39	61
平成27年度	-69,842	-102,686	-172,528	40	60
平成28年度	-64,792	-104,350	-169,142	38	62
平成29年度	-65,474	-108,290	-173,764	38	62
平成30年度	-67,282	-111,801	-179,083	38	62
令和元年度	-71,186	-115,798	-186,984	38	62

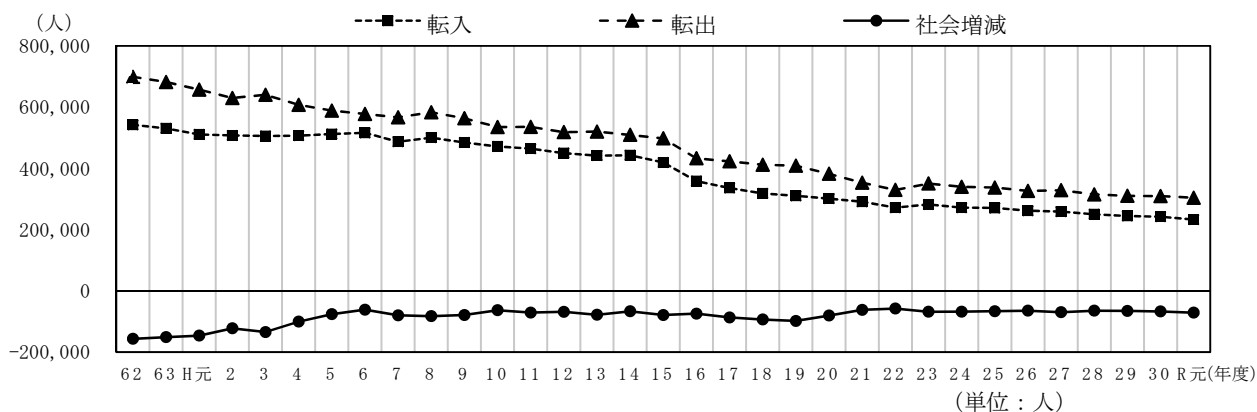
(備考) 1 総務省「住民基本台帳人口要覧」による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、データの取得ができない一部過疎地域を含まない。

2) 社会増減：転入と転出

過疎地域における転入・転出の動向をみると、転入者数と転出者数ともに緩やかに減少している（図表 2-2-8）。

図表 2-2-8 過疎地域における社会増減（転入と転出）の推移

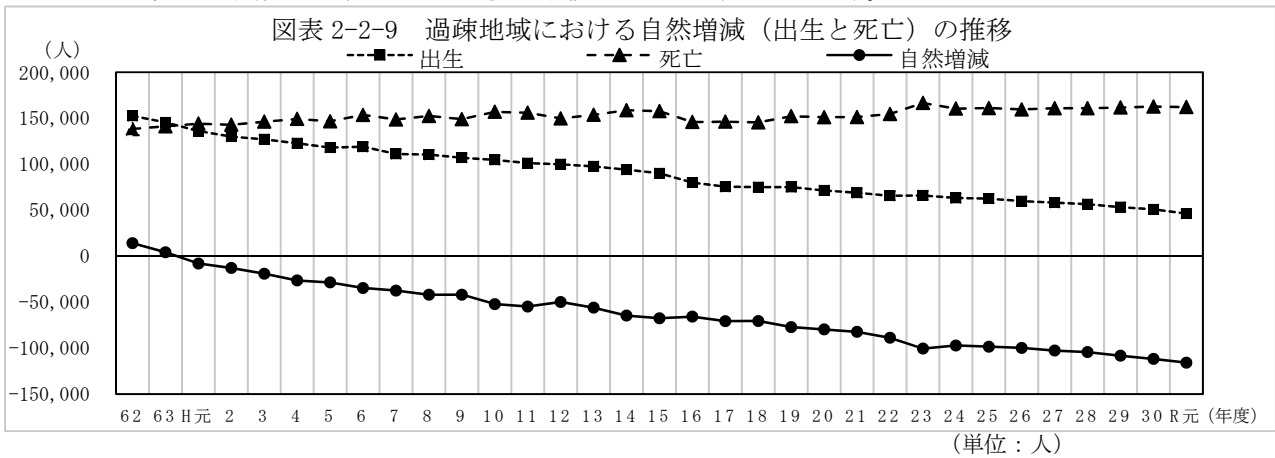


年 度	転 入 a	転 出 b	社会増減 a - b
昭和62年度	542,228	699,011	-156,783
昭和63年度	530,599	681,732	-151,133
平成元年度	510,802	656,958	-146,156
平成 2年度	507,439	629,795	-122,356
平成 3年度	505,431	640,016	-134,585
平成 4年度	506,879	607,382	-100,503
平成 5年度	512,023	588,354	-76,331
平成 6年度	515,980	577,611	-61,631
平成 7年度	486,910	566,742	-79,832
平成 8年度	500,301	583,069	-82,768
平成 9年度	484,407	563,414	-79,007
平成10年度	471,586	534,942	-63,356
平成11年度	464,275	535,282	-71,007
平成12年度	449,687	518,290	-68,603
平成13年度	441,843	520,052	-78,209
平成14年度	442,632	509,335	-66,703
平成15年度	419,099	497,945	-78,846
平成16年度	358,381	432,873	-74,492
平成17年度	335,974	422,962	-86,988
平成18年度	317,998	411,614	-93,616
平成19年度	310,314	408,599	-98,285
平成20年度	301,303	382,024	-80,721
平成21年度	291,082	353,151	-62,069
平成22年度	271,536	329,471	-57,935
平成23年度	282,185	350,359	-68,174
平成24年度	271,750	339,699	-67,949
平成25年度	270,696	337,290	-66,594
平成26年度	261,607	326,314	-64,707
平成27年度	258,686	328,528	-69,842
平成28年度	249,932	314,724	-64,792
平成29年度	244,694	310,168	-65,474
平成30年度	242,185	309,467	-67,282
令和元年度	232,843	304,029	-71,186

- (備考) 1 総務省「住民基本台帳人口要覧」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、データの取得できない一部過疎地域を含まない。

3) 自然増減：出生と死亡

過疎地域における出生・死亡の動向をみると、出生者数はほぼ一貫して減少している。一方、死亡者数は近年16万人前後で推移している（図表2-2-9）。



年 度	出 生 a	死 亡 b	自然増減 a - b
昭和62年度	152,440	138,279	14,161
昭和63年度	145,422	141,169	4,253
平成元年度	136,043	144,063	-8,020
平成2年度	129,946	142,856	-12,910
平成3年度	127,050	146,170	-19,120
平成4年度	122,742	149,196	-26,454
平成5年度	118,011	146,641	-28,630
平成6年度	118,984	153,579	-34,595
平成7年度	111,151	148,553	-37,402
平成8年度	110,407	152,371	-41,964
平成9年度	106,965	148,899	-41,934
平成10年度	104,727	156,897	-52,170
平成11年度	101,125	155,952	-54,827
平成12年度	99,904	149,730	-49,826
平成13年度	97,600	153,643	-56,043
平成14年度	93,994	158,648	-64,654
平成15年度	90,062	157,579	-67,517
平成16年度	80,039	145,858	-65,819
平成17年度	75,472	146,158	-70,686
平成18年度	74,976	145,443	-70,467
平成19年度	75,047	152,162	-77,115
平成20年度	71,415	151,072	-79,657
平成21年度	68,880	151,197	-82,317
平成22年度	65,693	154,512	-88,819
平成23年度	66,021	166,499	-100,478
平成24年度	63,289	160,402	-97,113
平成25年度	62,554	160,999	-98,445
平成26年度	59,765	159,509	-99,744
平成27年度	58,144	160,830	-102,686
平成28年度	56,459	160,809	-104,350
平成29年度	53,241	161,531	-108,290
平成30年度	50,882	162,683	-111,801
令和元年度	46,265	162,063	-115,798

(備考) 1 総務省「住民基本台帳人口要覧」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、データの取得できない一部過疎地域を含まない。

2 過疎地域の人口構成

(1) 男女別人口

過疎地域における男女別人口の推移をみると、一貫して女性の数が男性の数より多い傾向は全国と同様であるが、女性の構成比は常に全国より高く、平成 27 年では全国の 51.3% に対して 52.6% となっている。

また、過疎地域における男女別の人口増減率の推移をみると、昭和 45 年から昭和 55 年を除き男性の減少率が女性を上回っていたが、平成 22 年から平成 27 年には再び女性の減少率が男性を上回っている。(図表 2-2-10)。

図表 2-2-10 男女別人口の推移

(人口)

(単位：千人、%)

区分		昭和 35年	昭和 40年	昭和 45年	昭和 50年	昭和 55年	昭和 60年	平成 2年	平成 7年	平成 12年	平成 17年	平成 22年	平成 27年
過疎 地域	男	9,994 (48.7)	9,018 (48.2)	8,103 (47.7)	7,704 (47.9)	7,573 (48.0)	7,371 (47.9)	6,968 (47.6)	6,685 (47.5)	6,382 (47.4)	6,013 (47.3)	5,591 (47.2)	5,152 (47.4)
	女	10,521 (51.3)	9,688 (51.8)	8,873 (52.3)	8,394 (52.1)	8,201 (52.0)	8,015 (52.1)	7,674 (52.4)	7,381 (52.5)	7,070 (52.6)	6,707 (52.7)	6,251 (52.8)	5,727 (52.6)
全 国	男	46,300 (49.1)	48,692 (49.1)	51,369 (49.1)	55,091 (49.2)	57,594 (49.2)	59,497 (49.2)	60,697 (49.1)	61,574 (49.0)	62,111 (48.9)	62,349 (48.8)	62,328 (48.7)	61,842 (48.7)
	女	48,001 (50.9)	50,517 (50.9)	53,296 (50.9)	56,849 (50.8)	59,467 (50.8)	61,552 (50.8)	62,914 (50.9)	63,996 (51.0)	64,815 (51.1)	65,419 (51.2)	65,730 (51.3)	65,253 (51.3)

(人口増減率)

(単位：%)

区分		40/35	45/40	50/45	55/50	60/55	2/60	7/2	12/7	17/12	22/17	27/22
過疎 地域	男	△9.8	△10.1	△4.9	△1.7	△2.7	△5.5	△4.1	△4.5	△5.8	△7.0	△7.8
	女	△7.9	△8.4	△5.4	△2.3	△2.3	△4.3	△3.8	△4.2	△5.1	△6.8	△8.3
全 国	男	5.2	5.5	7.2	4.5	3.3	2.0	1.4	0.9	0.4	△0.0	△0.8
	女	5.2	5.5	6.7	4.6	3.5	2.2	1.7	1.3	0.9	0.5	△0.7

- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。
 3 () は構成比である。

(2) 未婚者数

平成27年国勢調査における25歳～39歳人口に占める未婚者の割合を男女別にみると、男性については、過疎地域は50.6%と全国の47.4%に対して3.2ポイント高くなっている一方で、女性については、過疎地域は35.4%と全国の37.0%に対して1.6ポイント低くなっている。

また、25歳～39歳における未婚女性1人に対する未婚男性の数は、過疎地域は1.51人であり、全国の1.31人を上回っている(図表2-2-11)。

図表2-2-11 男女別未婚者数

(単位：千人、%)

区 分		男			女		
		総 数	未婚者数	未婚率	総 数	未婚者数	未婚率
		a	b	b/a	a	b	b/a
過 疎 地 域	15歳以上総数	4,073	1,108	27.2	4,624	770	16.7
	20～24歳	150	138	92.0	140	121	86.4
	25～29歳	181	129	71.3	168	95	56.5
	30～34歳	217	106	48.8	206	68	33.0
	35～39歳	254	96	37.8	241	56	23.2
	25～39歳	652	330	50.6	615	218	35.4
全 国	15歳以上総数	52,880	16,324	30.9	56,874	12,918	22.7
	20～24歳	3,046	2,756	90.5	2,922	2,572	88.0
	25～29歳	3,256	2,223	68.3	3,154	1,853	58.8
	30～34歳	3,685	1,649	44.7	3,606	1,211	33.6
	35～39歳	4,204	1,416	33.7	4,112	960	23.3
	25～39歳	11,145	5,287	47.4	10,872	4,024	37.0

(備考) 1 平成27年国勢調査による。

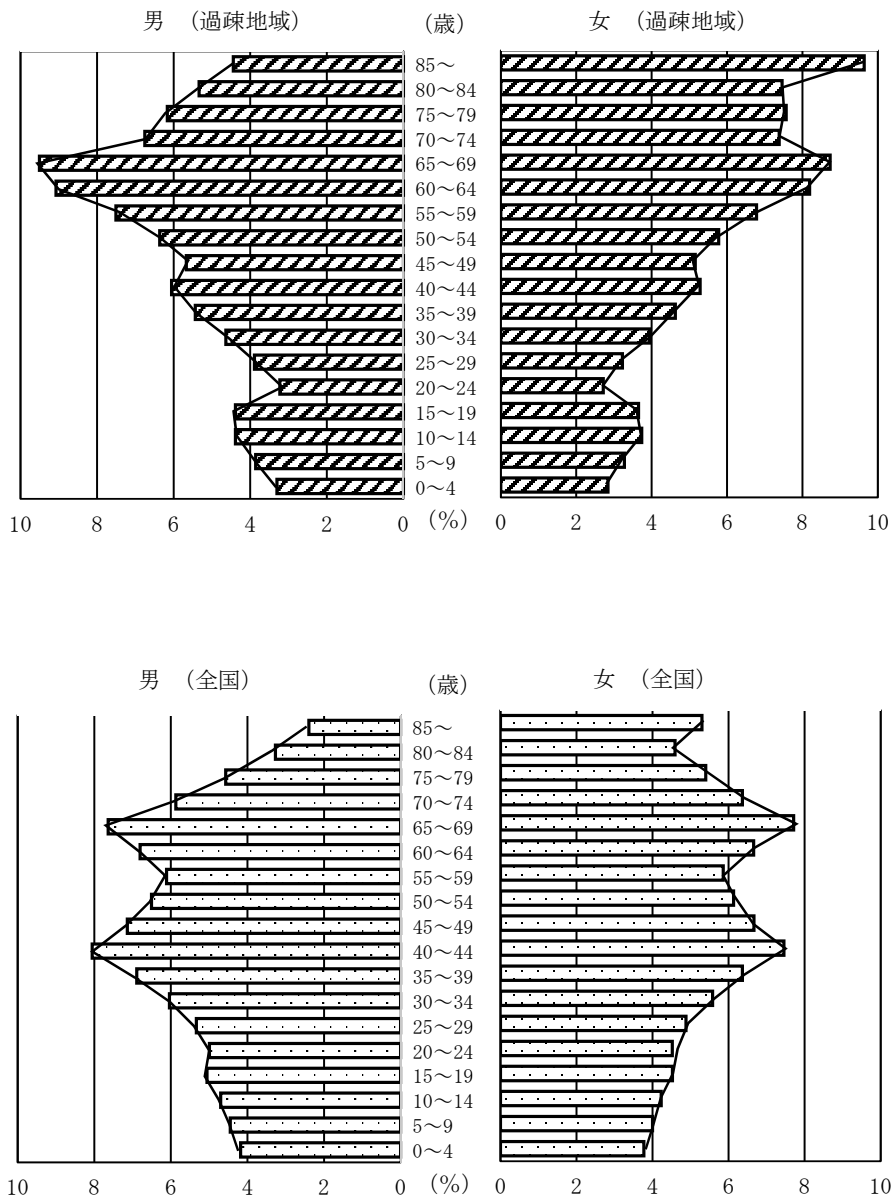
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

(3) 年齢階層別人口

1) 過疎地域と全国の比較

過疎地域と全国における年齢階層別の人口構成を平成 27 年国勢調査人口で比較すると、過疎地域は、男女ともに 55 歳以上の各区分の構成が全国より高く、0 歳から 54 歳の各区分で全国より低くなっている（図表 2-2-12）。

図表 2-2-12 男女別・年齢階層別の人口構成



(備考) 1 平成 27 年国勢調査による。
2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。

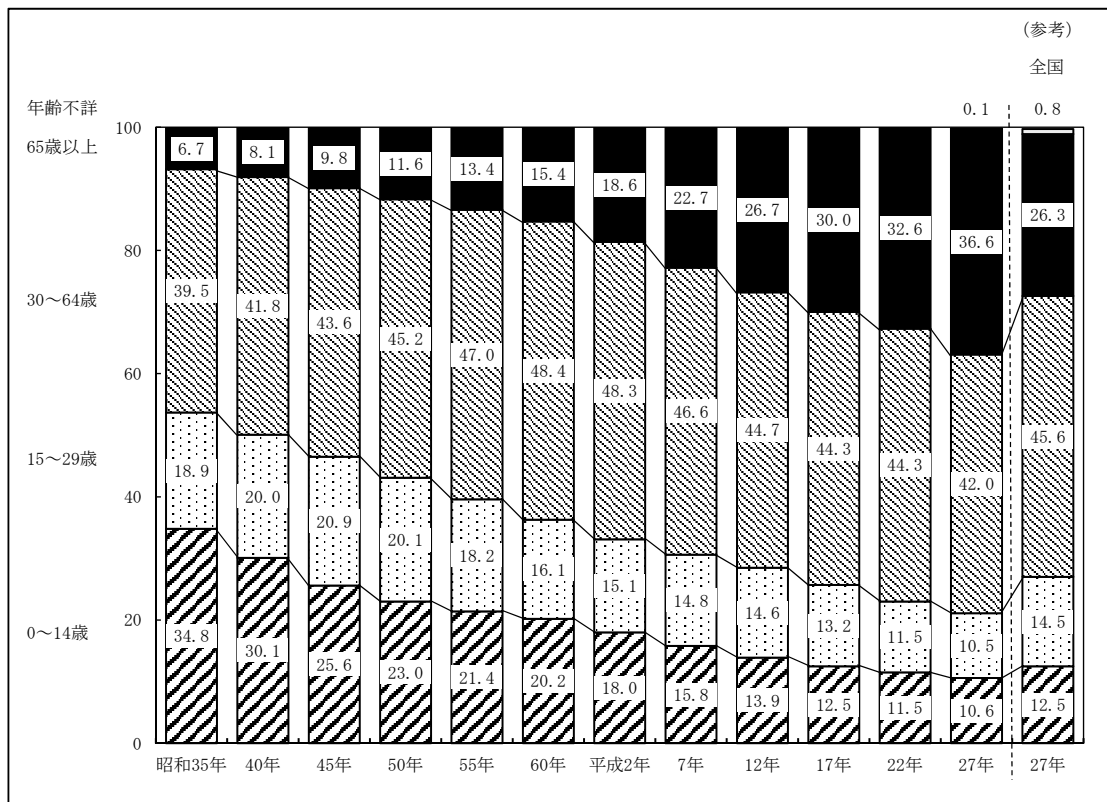
2) 年齢階層別人口の推移

過疎地域の昭和35年から平成27年までの年齢階層別人口の推移をみると、0歳～14歳の階層は714万5千人から115万7千人と大幅に減少（83.8%減）し、構成比も34.8%から10.6%に大きく減少している。また、15歳～29歳の階層についても、この期間に388万5千人から113万9千人に減少（70.7%減）しており、構成比をみると、平成27年では全国が14.5%であるのに対し、過疎地域は10.5%となっている。

また、生産年齢人口である15歳～64歳の階層は、この期間に1,198万5千人から571万人に減少（52.4%減）している。

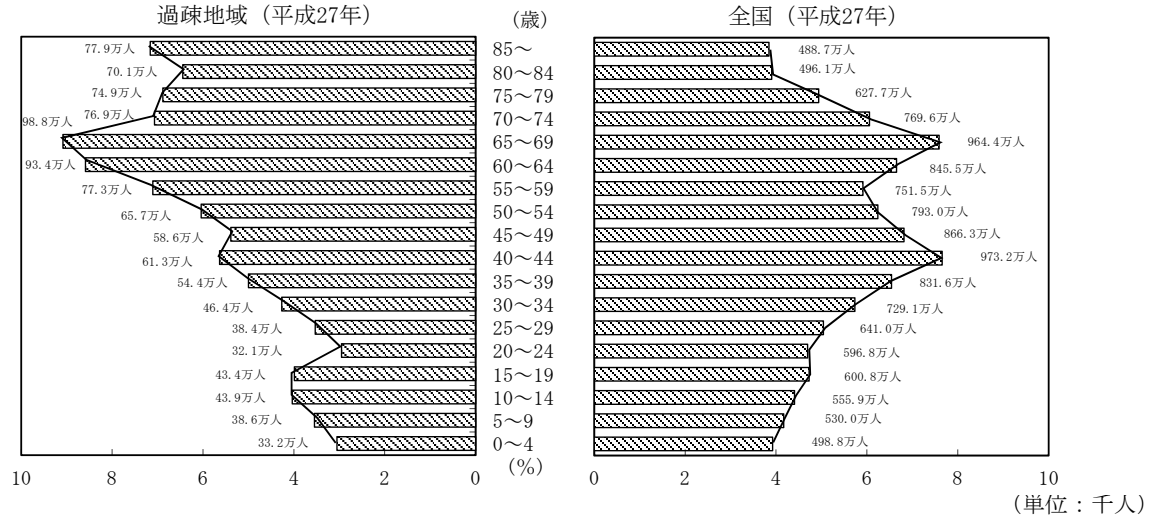
一方、65歳以上の高齢者階層については、この期間に138万4千人から398万5千人と大幅に増加（187.9%増）し、構成比も6.7%から36.6%へと上昇しており、全国における構成比（26.3%）を10.3ポイント上回っている（図表2-2-13、図表2-2-14）。

図表2-2-13 過疎地域の年齢階層別人口構成比の推移



(備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

図表 2-2-14 年齢階層別人口及び構成比



区分	過疎地域												全国	
	昭和35年		昭和50年		平成2年		平成12年		平成22年		平成27年		平成27年	
	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比	人口	構成比
0~4	1,974	9.6	1149	7.1	729	5.0	527	3.9	387	3.3	332	3.1	4,988	3.9
5~9	2,342	11.4	1178	7.3	895	6.1	615	4.6	450	3.8	386	3.5	5,300	4.2
10~14	2,829	13.8	1375	8.5	1017	6.9	732	5.4	519	4.4	439	4.0	5,599	4.4
(0~14)	(7,145)	(34.8)	(3,703)	(23.0)	(2,641)	(18.0)	(1,873)	(13.9)	(1,356)	(11.5)	(1,157)	(10.6)	(15,887)	(12.5)
15~19	1,584	7.7	1171	7.3	921	6.3	728	5.4	500	4.2	434	4.0	6,008	4.7
20~24	1,234	6.0	951	5.9	576	3.9	566	4.2	386	3.3	321	3.0	5,968	4.7
25~29	1,066	5.2	1119	7.0	707	4.8	668	5.0	479	4.0	384	3.5	6,410	5.0
(15~29)	(3,885)	(18.9)	(3,241)	(20.1)	(2,204)	(15.1)	(1,963)	(14.6)	(1,365)	(11.5)	(1,139)	(10.5)	(18,386)	(14.5)
30~34	1,200	5.8	953	5.9	832	5.7	630	4.7	561	4.7	464	4.3	7,291	5.7
35~39	1,420	6.9	1,063	6.6	1015	6.9	702	5.2	631	5.3	544	5.0	8,316	6.5
40~44	1,441	7.0	1,249	7.8	1094	7.5	821	6.1	604	5.1	613	5.6	9,732	7.7
45~49	1,230	6.0	1,268	7.9	901	6.2	990	7.4	673	5.7	586	5.4	8,663	6.8
50~54	1,028	5.0	1,062	6.6	983	6.7	1,064	7.9	792	6.7	657	6.0	7,930	6.2
55~59	944	4.6	877	5.4	1128	7.7	872	6.5	957	8.1	773	7.1	7,515	5.9
60~64	836	4.1	810	5.0	1120	7.6	937	7.0	1,027	8.7	934	8.6	8,455	6.7
(30~64)	(8,101)	(39.5)	(7,281)	(45.2)	(7,072)	(48.3)	(6,016)	(44.7)	(5,244)	(44.3)	(4,571)	(42.0)	(57,903)	(45.6)
(15~64)	(11,986)	(58.4)	(10,522)	(65.4)	(9,276)	(63.4)	(7,979)	(59.3)	(6,609)	(55.8)	(5,710)	(52.5)	(76,289)	(60.0)
65~69	535	2.6	688	4.3	908	6.2	1,036	7.7	825	7.0	988	9.1	9,644	7.6
70~74	404	2.0	542	3.4	694	4.7	976	7.3	841	7.1	769	7.1	7,696	6.1
75~79	251	1.2	363	2.3	549	3.7	727	5.4	856	7.2	749	6.9	6,277	4.9
80~84	132	0.6	187	1.2	346	2.4	462	3.4	702	5.9	701	6.4	4,961	3.9
85~	63	0.3	93	0.6	225	1.5	397	3.0	643	5.4	779	7.2	4,887	3.8
(65~)	(1,384)	(6.7)	(1,873)	(11.6)	(2,723)	(18.6)	(3,597)	(26.7)	(3,866)	(32.6)	(3,985)	(36.6)	(33,465)	(26.3)
年齢不詳	0	0.0	1	0.0	3	0.0	3	0.0	11	0.1	27	0.2	1,454	1.1
合計	20,515	100.0	16,099	100.0	14,643	100.0	13,452	100.0	11,842	100.0	10,879	100.0	127,095	100.0

(備考) 1 国勢調査による。
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

3) コーホート人口の増減

図表 2-2-15 及び図表 2-2-16 は、人口の動向をコーホート（同一年齢階層区分に属する出生者集団）により示したものである。

これによると、過疎地域には、次のような特色がある。

第一に、全ての期間で 15～19 歳及び 20～24 歳の区分の人口減少率が 20～30%前後と著しく拡大している。つまり、前回国勢調査時に 10～14 歳もしくは 15～19 歳であった者が、その次の国勢調査時には著しく減少していることとなる。これは、中学校卒業者や高等学校等卒業者が、進学や就職を機に郷里である過疎地域を転出することが推測される。

第二に、昭和 55 年～平成 17 年まで、25～29 歳の区分及び 5 歳～9 歳の区分については増加の傾向が見受けられた。つまり、前回国勢調査時に 20～24 歳及び 0～4 歳であった年齢層が次の国勢調査時には増加していることとなる。これは、大学卒業者や、幼児を持つ若い夫婦世帯が U I ターンとして過疎地域に転入しているものと推測される。しかし、平成 17 年以降はどちらの年齢層も減少に転じている（図表 2-2-15）。

図表 2-2-15 コーホート人口増減率

(1) 過疎地域

(単位：%)

年齢区分	50年/45年	55年/50年	60年/55年	2年/60年	7年/2年	12年/7年	17年/12年	22年/17年	27年/22年
5～9歳	△ 1.9	2.1	0.9	△ 1.0	1.3	1.6	0.7	△ 0.9	△ 0.4
10～14歳	△ 3.5	△ 0.6	△ 0.8	△ 2.0	△ 1.1	△ 0.8	△ 1.5	△ 2.2	△ 2.4
15～19歳	△32.0	△24.7	△20.4	△20.8	△18.4	△17.7	△17.8	△17.4	△16.3
20～24歳	△34.3	△32.3	△34.3	△38.2	△32.1	△31.8	△33.1	△35.8	△35.8
25～29歳	△ 0.8	9.9	8.9	4.0	9.4	6.9	3.1	△ 1.7	△ 0.5
30～34歳	△ 2.2	1.4	△ 0.3	△ 3.6	△ 0.4	0.0	△ 2.8	△ 3.9	△ 3.2
35～39歳	△ 3.1	0.1	△ 0.5	△ 2.6	△ 0.3	△ 0.3	△ 2.1	△ 2.9	△ 3.0
40～44歳	△ 3.9	△ 1.7	△ 2.1	△ 3.1	△ 1.0	△ 1.0	△ 1.9	△ 2.1	△ 2.8
45～49歳	△ 3.8	△ 2.7	△ 2.6	△ 3.5	△ 1.4	△ 1.4	△ 2.0	△ 2.2	△ 2.9
50～54歳	△ 5.7	△ 3.3	△ 3.0	△ 3.5	△ 1.5	△ 1.4	△ 1.5	△ 1.6	△ 2.3
55～59歳	△ 6.8	△ 4.5	△ 4.3	△ 4.2	△ 2.4	△ 1.8	△ 1.8	△ 1.8	△ 2.3
60～64歳	△ 6.2	△ 5.6	△ 4.6	△ 4.6	△ 3.5	△ 2.3	△ 1.7	△ 1.8	△ 2.4

(備考) 1 国勢調査による。

2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。

3 コーホート人口については、図表 2-2-16 の備考 3 を参照。

(2) 非過疎地域

(単位：%)

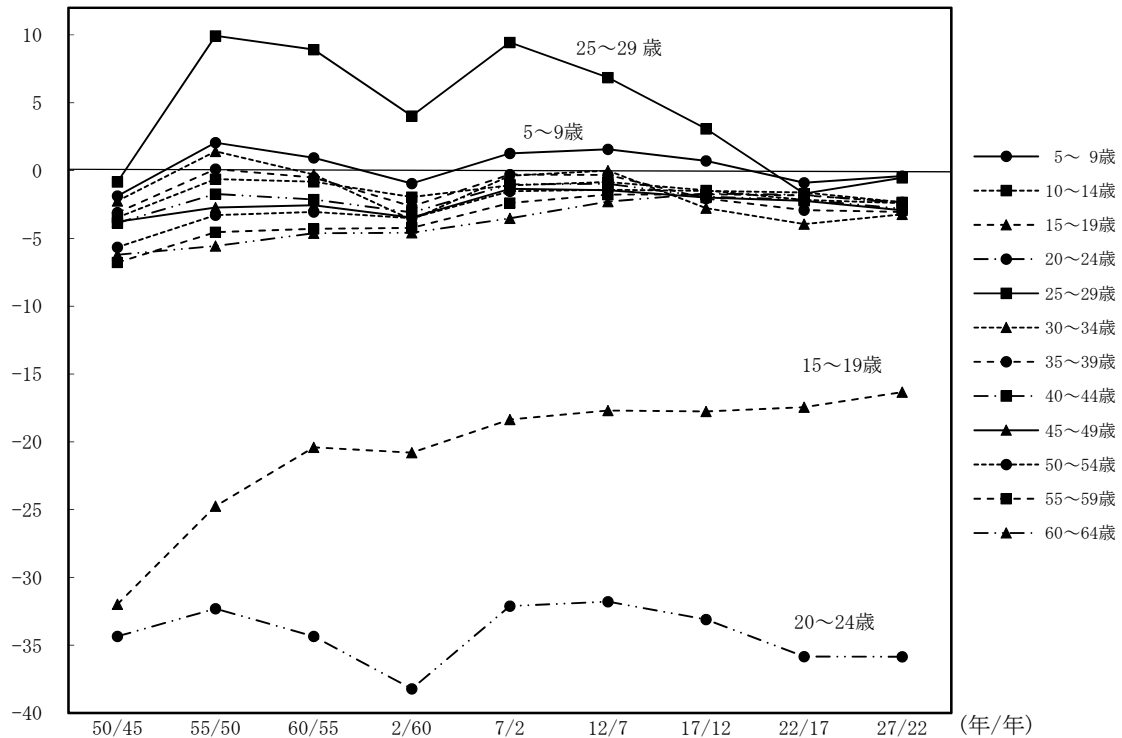
年齢区分	50年/45年	55年/50年	60年/55年	2年/60年	7年/2年	12年/7年	17年/12年	22年/17年	27年/22年
5～9歳	0.7	0.1	0.1	0.2	0.7	0.3	0.4	0.2	0.1
10～14歳	0.9	0.4	0.2	0.2	0.3	0.2	0.0	0.1	0.5
15～19歳	8.3	4.8	3.3	2.3	2.9	2.5	2.6	2.9	3.2
20～24歳	5.2	4.0	3.9	2.2	2.0	1.6	1.5	1.2	1.5
25～29歳	0.8	△ 1.5	△ 1.3	△ 2.1	△ 0.8	△ 1.6	△ 2.0	△ 0.7	△ 0.2
30～34歳	1.5	△ 0.4	0.2	△ 0.1	0.8	△ 0.1	△ 0.2	1.1	0.2
35～39歳	0.2	△ 0.5	△ 0.3	△ 0.3	0.5	△ 0.1	△ 0.3	0.6	△ 0.1
40～44歳	0.0	△ 0.9	△ 0.6	△ 0.5	0.2	△ 0.2	△ 0.3	0.2	△ 0.4
45～49歳	0.3	△ 1.4	△ 1.0	△ 1.0	△ 0.3	△ 0.9	△ 0.8	△ 0.4	△ 0.8
50～54歳	△ 1.6	△ 2.0	△ 1.8	△ 1.6	△ 1.0	△ 1.7	△ 1.3	△ 1.0	△ 1.2
55～59歳	△ 2.7	△ 2.5	△ 2.5	△ 2.3	△ 1.6	△ 2.1	△ 1.8	△ 1.5	△ 1.6
60～64歳	△ 3.3	△ 4.2	△ 3.5	△ 3.4	△ 3.2	△ 2.8	△ 2.2	△ 2.2	△ 2.4

(備考) 1 国勢調査による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

3 コーホート人口については、図表2-2-16の備考3を参照。

図表2-2-16 過疎地域におけるコーホート人口増減率の推移



(備考) 1 国勢調査による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

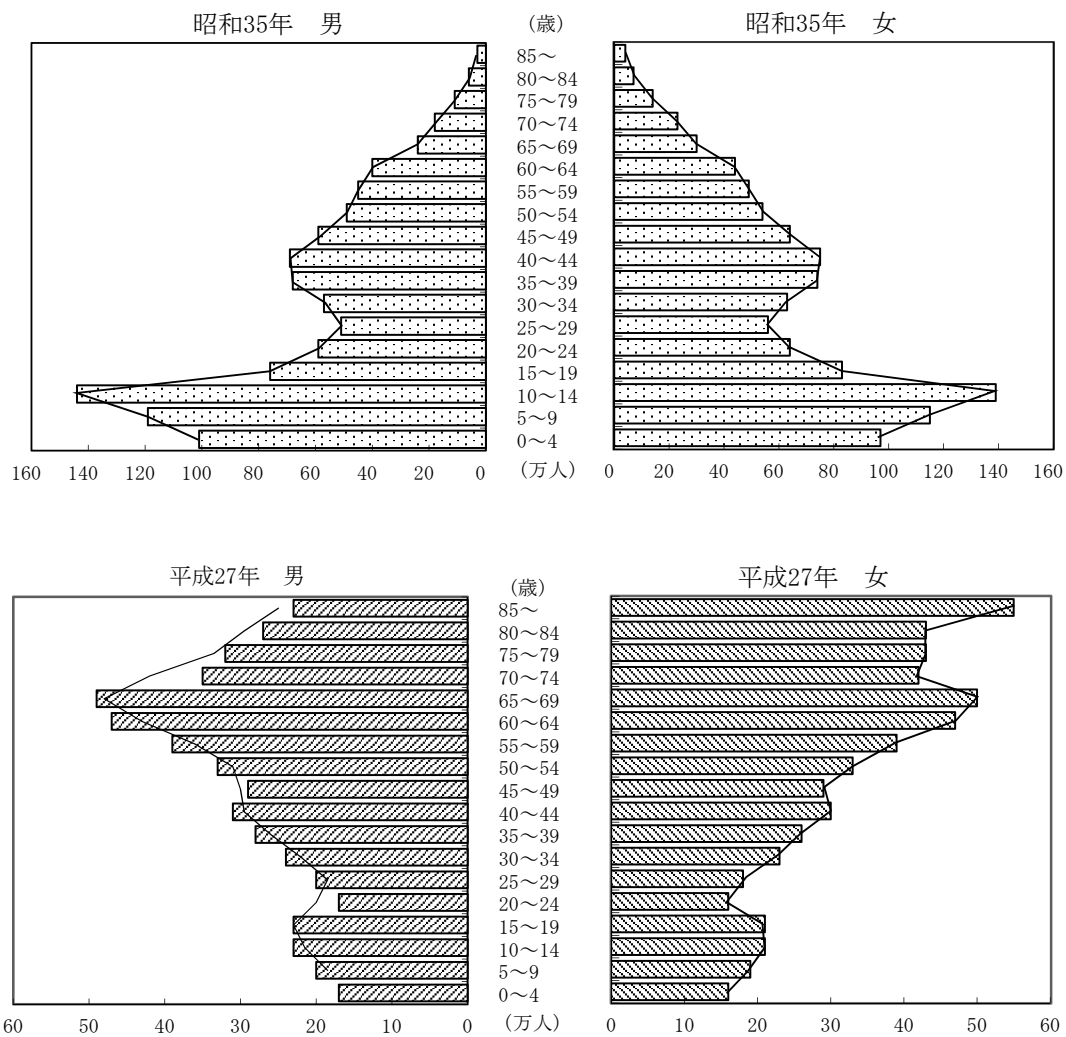
3 コーホートとは、同一年齢階層区分に属する出生者集団をいう。コーホート人口増減率は、各年齢

階層区分人口を、それぞれ直前の国勢調査時の一段階若い年齢階層区分人口と比較したものである。例えば、図表 2-2-15 において、「(1) 過疎地域」の表側「20～24 歳」欄、表頭「2 年/60 年」欄の△38.2%とは、昭和 60 年国勢調査時の 15～19 歳の年齢階層人口が、平成 2 年国勢調査時（この時点では、次の 20～24 歳の年齢階層となっている）には 38.2%減少したことを示している。

4) 人口構造の変化

昭和 35 年と平成 27 年の過疎地域の人口構造を人口ピラミッドで比較すると、15 歳未満の年少人口が 6 分の 1 程度に減少し、15 歳～40 歳未満人口も 3 分の 1 程度に減少している。一方、60 歳以上の人口が 2 倍以上増加していることが分かる（図表 2-2-17）。

図表 2-2-17 過疎地域における人口構造の変化



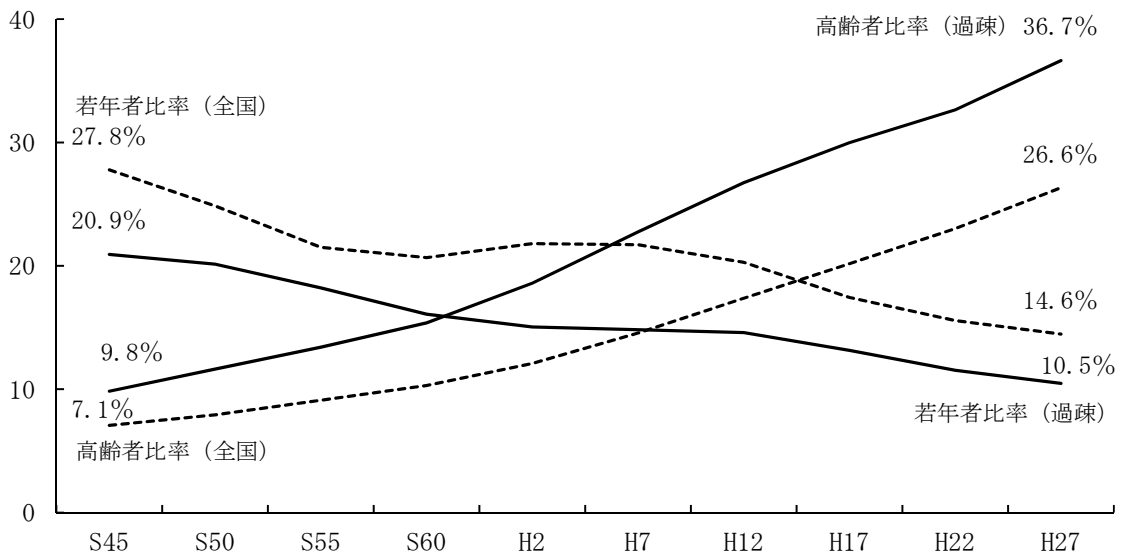
(備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。

5) 高齢者比率・若年者比率の推移

昭和45年から平成27年までの65歳以上の高齢者比率の推移をみると、全国で19.5ポイント増加しているのに対し、過疎地域では26.9ポイント増加している。また、過疎地域と全国との差については、昭和45年では2.7ポイントであったものが平成27年では10.1ポイントと次第に広がっている。

15歳～29歳の若年者比率については、全国、過疎地域ともに減少傾向にある（図表2-2-18）。

図表2-2-18 高齢者比率及び若年者比率の推移



(単位: %)

区分		S45	S50	S55	S60	H2	H7	H12	H17	H22	H27
高齢者比率	全国①	7.1	7.9	9.1	10.3	12.1	14.6	17.4	20.2	23.0	26.6
	過疎②	9.8	11.6	13.4	15.4	18.6	22.7	26.7	30.0	32.7	36.7
	②-①	2.7	3.7	4.3	5.1	6.5	8.1	9.3	9.8	9.7	10.1
若年者比率	全国①	27.8	24.9	21.5	20.7	21.8	21.7	20.3	17.4	15.6	14.6
	過疎②	20.9	20.1	18.2	16.1	15.1	14.8	14.6	13.2	11.5	10.5
	②-①	△ 6.9	△ 4.8	△ 3.3	△ 4.6	△ 6.7	△ 6.9	△ 5.7	△ 4.1	△ 4.1	△ 4.1

- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村については、一部過疎地域内の人口による。
 3 高齢者比率、若年者比率とも加重平均である。

6) 高齢者・若年者比率の段階別市町村数

(高齢者比率の段階別過疎関係市町村数)

高齢者比率の段階別の分布をみると、平成2年には15%～20%未満が393団体が最多となっていたが、市町村数が最多の区分は次第に高齢者比率の高い方にシフトし、平成27年には35%～40%未満が323団体が最多となっている。また、高齢者比率40%以上の市町村は、平成2年には0団体であったが、平成27年には281団体まで増加している(図表2-2-19)。

(若年者比率の段階別過疎関係市町村数)

若年者比率の段階別の分布をみると、平成2年以降10%～15%未満の区分が最多となっていたが、平成27年には5%～10%未満が419団体が最多となっている。また、5%～10%未満の区分については、平成2年の48団体から平成27年には419団体まで増加しており、全体の51.5%を占めている(図表2-2-19)。

図表2-2-19 高齢者比率・若年者比率の段階別過疎関係市町村数

(単位: 団体、%)

区 分	5%未満	5%～ 10%未満	10%～ 15%未満	15%～ 20%未満	20%～ 25%未満	25%～ 30%未満	30%～ 35%未満	35%～ 40%未満	40%以上	計	
高 齢 者	平 成 2 年	0 (0.0)	4 (0.5)	60 (7.4)	393 (48.2)	277 (33.9)	69 (8.5)	11 (1.3)	2 (0.2)	0 (0.0)	816 (100.0)
	平 成 7 年	0 (0.0)	0 (0.0)	12 (1.5)	106 (13.0)	375 (46.0)	238 (29.2)	63 (7.7)	20 (2.5)	2 (0.2)	816 (100.0)
	平 成 12 年	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.2)	16 (2.0)	170 (20.9)	362 (44.4)	186 (22.8)	53 (6.5)	26 (3.2)	815 (100.0)
	平 成 17 年	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (0.2)	4 (0.5)	48 (5.9)	258 (31.6)	317 (38.8)	124 (15.2)	63 (7.7)	816 (100.0)
	平 成 22 年	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.1)	3 (0.4)	16 (2.0)	115 (14.1)	343 (42.0)	218 (26.7)	121 (14.8)	817 (100.0)
	平 成 27 年	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.1)	4 (0.5)	5 (0.6)	27 (3.3)	173 (21.3)	323 (39.7)	281 (34.5)	814 (100.0)
若 年 者	平 成 2 年	2 (0.2)	48 (5.9)	452 (55.4)	302 (37.0)	10 (1.2)	1 (0.1)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	816 (100.0)
	平 成 7 年	1 (0.1)	64 (7.8)	480 (58.8)	258 (31.6)	11 (1.3)	1 (0.1)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	816 (100.0)
	平 成 12 年	3 (0.4)	56 (6.9)	509 (62.5)	239 (29.3)	6 (0.7)	2 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	815 (100.0)
	平 成 17 年	2 (0.2)	111 (13.6)	621 (76.1)	79 (9.7)	3 (0.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	816 (100.0)
	平 成 22 年	4 (0.5)	255 (31.2)	538 (65.9)	19 (2.3)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	817 (100.0)
	平 成 27 年	5 (0.6)	419 (51.5)	380 (46.7)	9 (1.1)	1 (0.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	814 (100.0)

(備考) 1 国勢調査による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村については、一部過疎地域内の人口による。

3 平成12年は、噴火のため全島避難していた東京都三宅村を除く。

4 平成27年は、東日本大震災により町村全域に避難指示が出ていた福島県浪江町、葛尾村、飯館村を除く。

5 分村合併後に2市町の一部過疎地域となった山梨県上九一色村は、平成2年から平成17年までの国勢調査において、各地域内のデータが取得できないため、1団体として算出。

6 ()は構成比である。

3 過疎地域の世帯の動向

(1) 世帯数及び世帯人員数

平成22年から平成27年までの5年間における世帯数及び1世帯当たり世帯人員数の変動をみると、世帯数については、全国で2.9%増加しているのに対して、過疎地域では3.6%減少している。ブロック別にみると、沖縄以外の全てのブロックで減少している。

1世帯当たり世帯人員数については、全国及び過疎地域で共に減少しており、平成27年における過疎地域の世帯人員数は1世帯当たり2.46人と、全国より0.13人多い。ブロック別にみると、全てのブロックで減少しており、平成27年において、1世帯当たりの世帯人員数が最大の北陸と最小の北海道との差は0.63人となっている（図表2-2-20）。

図表2-2-20 ブロック別世帯数及び1世帯当たり世帯人員数

(単位：世帯、人)

区 分		世 帯 数			1世帯当たり世帯人員数		
		平成22年	平成27年	増減率	平成22年	平成27年	増減率
過 疎 地 域	北海道	738,613	712,389	△ 3.6	2.24	2.14	△ 4.5
	東 北	977,685	943,194	△ 3.5	2.93	2.75	△ 6.2
	関 東	236,802	226,734	△ 4.3	2.70	2.54	△ 5.9
	東 海	155,103	146,930	△ 5.3	2.61	2.47	△ 5.5
	北 陸	110,404	106,404	△ 3.6	2.91	2.77	△ 5.0
	近 畿	292,780	283,656	△ 3.1	2.65	2.50	△ 5.5
	中 国	482,740	466,285	△ 3.4	2.60	2.47	△ 4.8
	四 国	329,146	314,495	△ 4.5	2.40	2.29	△ 4.6
	九 州	1,064,226	1,026,501	△ 3.5	2.50	2.39	△ 4.4
	沖 縄	42,772	43,900	2.6	2.38	2.24	△ 5.8
	計	4,430,271	4,270,488	△ 3.6	2.59	2.46	△ 5.1
全 国		51,842,307	53,331,797	2.9	2.42	2.33	△ 3.8

(備考) 1 国勢調査による。

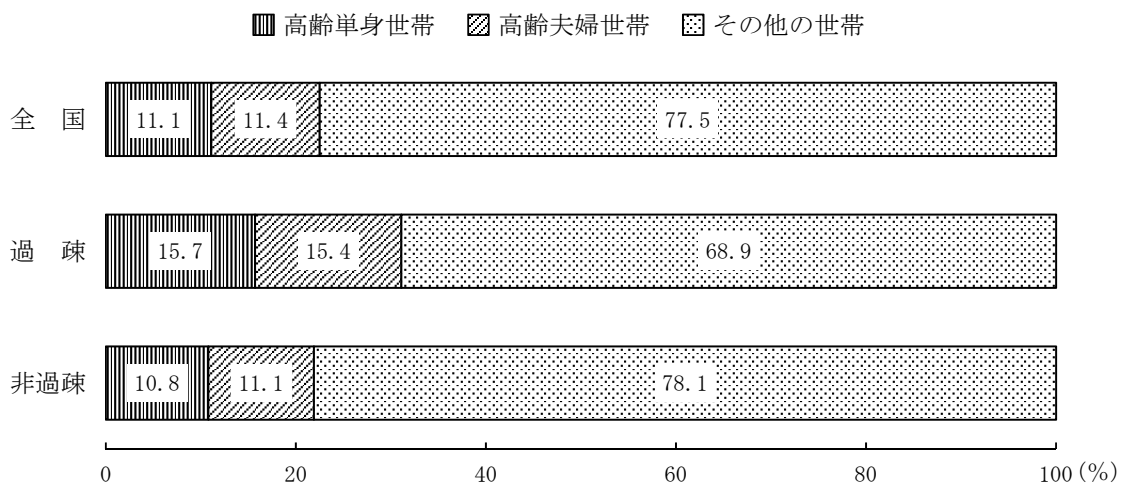
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

(2) 高齢者世帯

1) 概況

平成 27 年国勢調査における高齢者世帯の総世帯数に占める割合をみると、過疎地域は高齢単身世帯（65 歳以上の者 1 人のみからなる一般世帯）15.7%、高齢夫婦世帯（夫 65 歳以上、妻 60 歳以上の夫婦 1 組の世帯）15.4%、計 31.1%となっている。非過疎地域は高齢単身世帯 10.8%、高齢夫婦世帯 11.1%、計 21.9%となっており、過疎地域は非過疎地域よりも高齢世帯の割合が高い（図表 2-2-21）。

図表 2-2-21 高齢者世帯割合



(単位：世帯、%)

区分	総世帯数	高齢者単身世帯数 a	高齢者夫婦世帯数 b	高齢者世帯計 a + b
全国	53,331,797 (100.0)	5,927,686 (11.1)	6,079,126 (11.4)	12,006,812 (22.5)
過疎地域	3,853,564 (100.0)	604,450 (15.7)	593,713 (15.4)	1,198,163 (31.1)
非過疎地域	49,478,233 (100.0)	5,323,236 (10.8)	5,485,413 (11.1)	10,808,649 (21.9)

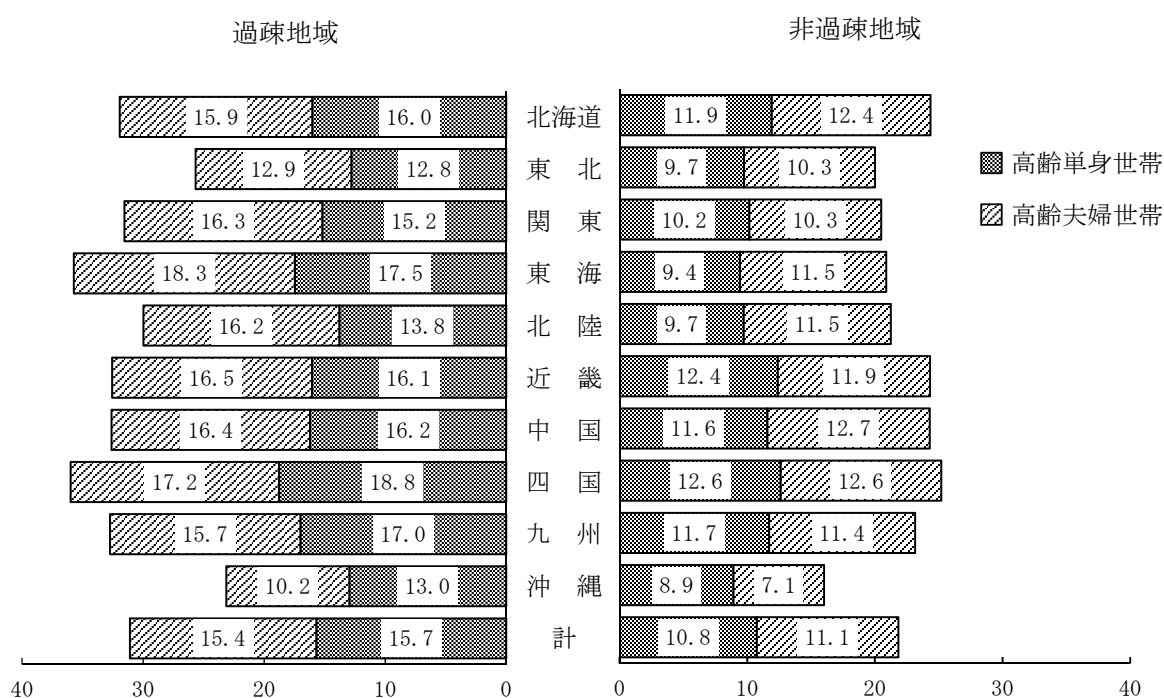
- (備考) 1 平成 27 年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在であり、一部過疎地域を含まない。非過疎地域は、一部過疎市町村を含む。
 3 高齢単身世帯とは、65 歳以上の者 1 人のみの一般世帯（他の世帯員がいないもの）をいい、高齢夫婦世帯とは、夫 65 歳以上、妻 60 歳以上の夫婦 1 組の一般世帯（他の世帯員がいないもの）をいう。
 4 () は総世帯数に対する構成比である。

2) ブロック別の状況

平成 27 年国勢調査における高齢者世帯の状況をブロック別にみると、過疎地域は全てのブロックにおいて非過疎地域よりも高齢者世帯数の割合が高い。

また、過疎地域では東海、四国で高齢者世帯の割合が高い。一方、割合が低いのは、東北、沖縄である（図表 2-2-22）。

図表 2-2-22 高齢者世帯割合のブロック別状況



- (備考) 1 ブロック別の総世帯数に占める高齢者世帯の割合であり、平成 27 年国勢調査による。
- 2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在であり、一部過疎地域を含まない。非過疎地域は一部過疎市町村を含む。

第3節 財政状況

1 決算の状況

(1) 概況

平成30年度における過疎関係市町村の1団体当たりの決算額をみると、過疎関係市町村は歳入歳出とも全国市町村の約3分の1に過ぎず、財政規模は極めて小さい(図表2-3-1)。

図表2-3-1 市町村決算の状況

(単位：百万円)

区 分		平成30年度	
		決 算 額	1 団体当たり の決算額
過疎関係市町村	歳入	7,617,635	11,335.8
	歳出	7,316,665	10,887.9
全国市町村	歳入	59,256,351	34,471.4
	歳出	57,439,320	33,414.4

- (備考) 1 総務省「平成30年度地方財政状況調査」による。
 2 過疎関係市町村、全国市町村は、令和2年4月1日現在。
 3 過疎関係市町村には、一部過疎市町村を含まない。

(2) 歳入

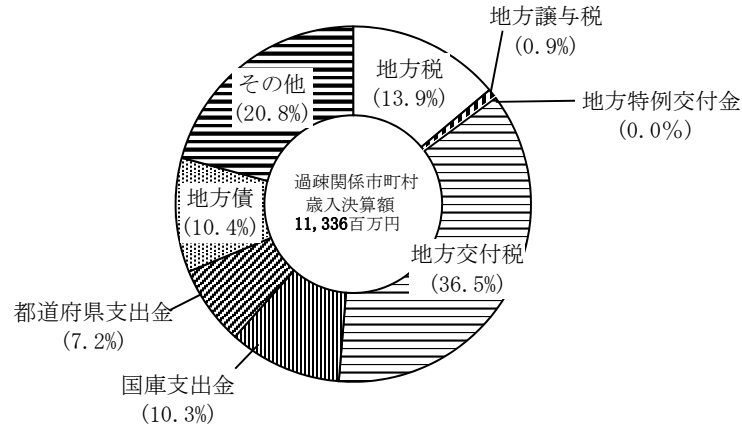
平成30年度における過疎関係市町村の歳入決算の状況をみると、地方税の歳入総額に占める割合は13.9%で、全国市町村の34.0%に比べて著しく低い。

一方、地方公共団体の財源調整を行う地方交付税が歳入に占める割合は、過疎関係市町村は36.5%、全国市町村は13.5%であり、過疎関係市町村の方が著しく高い。

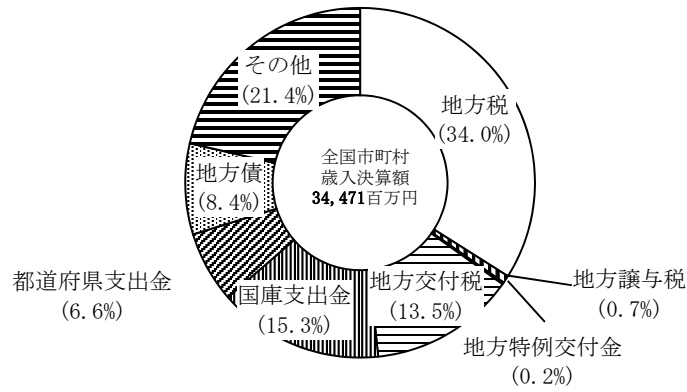
また、国庫支出金が歳入に占める割合は、過疎関係市町村では10.3%で全国市町村の15.3%より低い。都道府県支出金(過疎関係市町村7.2%、全国市町村6.6%)及び地方債(過疎関係市町村10.4%、全国市町村8.4%)については、過疎関係市町村の方が高い(図表2-3-2)。

図表 2-3-2 市町村歳入決算額の状況

過疎関係市町村 1団体当たり決算



全国市町村 1団体当たり決算



区分 費目	過疎関係市町村			全国市町村		
	決算額	1団体当たりの決算額	構成比	決算額	1団体当たりの決算額	構成比
地方税	1,059,776	1,577	13.9	20,131,306	11,711	34.0
地方譲与税	68,691	102	0.9	418,640	244	0.7
地方特例交付金	3,451	5	0.0	99,454	58	0.2
地方交付税	2,780,328	4,137	36.5	7,980,515	4,643	13.5
国庫支出金	781,193	1,162	10.3	9,039,414	5,259	15.3
都道府県支出金	547,479	815	7.2	3,888,305	2,262	6.6
地方債	792,469	1,179	10.4	4,998,769	2,908	8.4
その他	1,584,248	2,358	20.8	12,699,948	7,388	21.4
合計	7,617,635	11,336	100.0	59,256,351	34,471	100.0

(備考) 1 総務省「平成30年度地方財政状況調査」による。
 2 過疎関係市町村は、令和2年4月1日現在。
 3 過疎関係市町村には、一部過疎市町村は含まない。

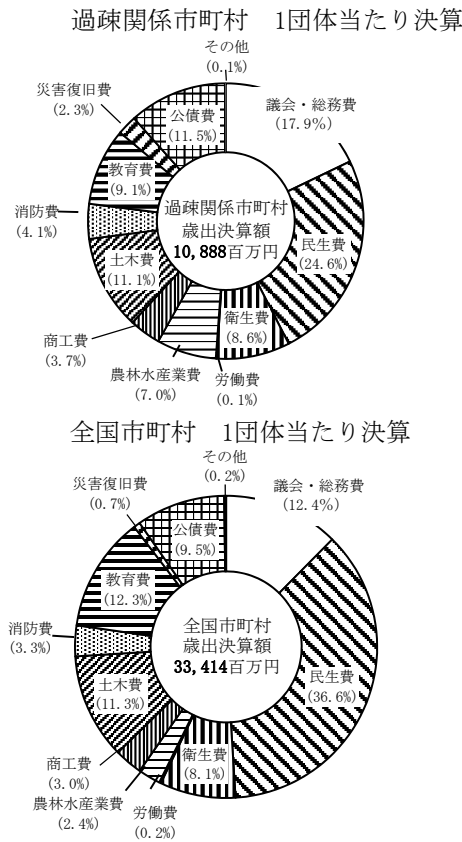
(3) 歳出

平成30年度における市町村の歳出決算の状況を目的別にみると、過疎関係市町村には農山漁村が多いことから、農林水産業費の割合が7.0%と、全国市町村の2.4%を上回っている。また、公債費の割合も11.5%と、全国市町村の9.5%を上回っている。一方、民生費、教育費の割合については、過疎関係市町村が全国市町村を下回っている。

この歳出決算の状況を性質別にみると、投資的経費の割合が全国市町村より高い。これは過疎関係市町村では社会基盤の整備が遅れており、地域間格差を解消するために積極的に公共事業を展開しているためと考えられる。その中でも、補助事業の割合は全国市町村の5.5%に対して8.3%と、2.8ポイント上回っている。(図表2-3-3)。

(1) 目的別

図表 2-3-3 市町村歳出決算額の状況

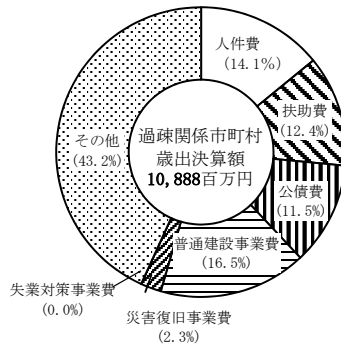


区分 費目	過疎関係市町村			全国市町村		
	決算額	1団体当たりの決算額	構成比	決算額	1団体当たりの決算額	構成比
議会・総務費	1,310,645	1,950	17.9	7,130,525	4,148	12.4
民生費	1,796,319	2,673	24.6	21,040,611	12,240	36.6
衛生費	629,301	936	8.6	4,657,326	2,709	8.1
労働費	8,481	13	0.1	99,753	58	0.2
農林水産業費	514,641	766	7.0	1,358,988	791	2.4
商工費	268,506	400	3.7	1,716,502	999	3.0
土木費	812,455	1,209	11.1	6,495,788	3,779	11.3
消防費	297,524	443	4.1	1,866,923	1,086	3.3
教育費	666,560	992	9.1	7,058,957	4,106	12.3
災害復旧費	167,371	249	2.3	420,257	244	0.7
公債費	941,185	1,252	11.5	5,478,367	3,187	9.5
その他	3,678	5	0.1	115,323	67	0.2
合計	7,316,665	10,888	100.0	57,439,320	33,414	100.0

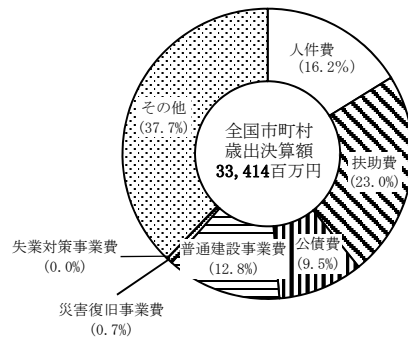
(備考) 1 総務省「平成30年度地方財政状況調査」による。
 2 過疎関係市町村は、令和2年4月1日現在。
 3 過疎関係市町村には、一部過疎市町村を含まない。

(2) 性質別

過疎関係市町村 1団体当たり決算



全国市町村 1団体当たり決算



区分 費目	過疎関係市町村			全国市町村		
	決算額	1団体当たりの決算額	構成比	決算額	1団体当たりの決算額	構成比
義務的経費	2,779,087	4,136	38.0	28,018,782	16,299	48.8
人件費	1,028,086	1,530	14.1	9,330,996	5,428	16.2
扶助費	909,931	1,354	12.4	13,215,872	7,688	23.0
公債費	841,070	1,252	11.5	5,471,914	3,183	9.5
投資的経費	1,377,245	2,049	18.8	7,782,778	4,528	13.5
普通建設事業費	1,209,898	1,800	16.5	7,362,697	4,283	12.8
補助事業	604,291	899	8.3	3,173,678	1,846	5.5
単独事業	562,678	837	7.7	3,956,774	2,302	6.9
その他	42,929	64	0.6	232,245	135	0.4
災害復旧事業費	167,321	249	2.3	420,048	244	0.7
失業対策事業費	26	0	0.0	33	0	0.0
その他の経費	3,160,333	4,703	43.2	21,637,760	12,587	37.7
合計	7,316,665	10,888	100.0	57,439,320	33,414	100.0

(備考) 1 総務省「平成30年度地方財政状況調査」による。

2 過疎関係市町村は、令和2年4月1日現在。

3 過疎関係市町村には、一部過疎市町村を含まない。

2 財政力指数等の状況

(1) 財政力指数

過疎地域について市町村の財政力を示す指標である財政力指数の状況をみると、平成30年度の財政力指数の平均は0.26であり、全国平均0.51と比べて著しく低く、過疎関係市町村の財政力は極めて弱いものとなっている。

なお、過疎関係市町村の財政力指数の段階別分布をみると、平成30年において最も多かったのは0.2以上0.3未満の229団体である（図表2-3-4）。

図表 2-3-4 財政力指数段階別過疎関係市町村数

(単位：団体、%)

		平成29年度	平成30年度
過 疎 関 係 市 町 村	0.1未満	14 (2.1)	11 (1.6)
	0.1以上0.2未満	214 (31.8)	208 (31.0)
	0.2以上0.3未満	232 (34.5)	229 (34.1)
	0.3以上0.4未満	151 (22.5)	160 (23.8)
	0.4以上0.5未満	53 (7.9)	57 (8.5)
	0.5以上	8 (1.2)	7 (1.0)
	団体数合計	672 (100.0)	672 (100.0)
	平均値 A	0.25	0.26
全国平均値 B		0.51	0.51
B - A		0.26	0.25

(備考) 1 総務省「地方財政状況調査」及び「地方交付税等関係計数資料」による。

2 過疎関係市町村は、令和2年4月1日現在。

3 過疎関係市町村には、一部過疎市町村は含まない。

4 () は団体数合計に対する構成比である。

5 平均値は単純平均である。

(2) 公債費負担比率等

地方債の元利償還金に充てられる公債費は、義務的経費の中でも特に非弾力的な経費であるため、その増加は財政を圧迫することとなる。

この公債費による財政負担の度合をみると、公債費負担比率については、過疎関係市町村は15.6%と、全国市町村の13.7%より1.9ポイント高くなっている。

また、実質公債費比率については、過疎関係市町村8.4%、全国市町村6.1%と、過疎関係市町村が2.3ポイント高くなっている。

全国との比率の差については、過疎地域がこれまで実施してきた、地方債を活用したインフラ整備などによる元利償還金の負担が大きいことがひとつの要因と考えられる(図表2-3-5)。

図表 2-3-5 公債費負担比率等の状況

(単位：%)

区 分	公債費負担比率	実質公債費比率	将来負担比率
過疎関係市町村	15.6	8.4	30.1
全国市町村	13.7	6.1	28.9

- (備考) 1 総務省「平成30年度地方財政状況調査」及び「地方財政状況調査関係資料」による。
- 2 過疎関係市町村は、令和2年4月1日現在であり、過疎関係市町村には、一部過疎市町村を含まない。
- 3 数値は単純平均である。
- 4 将来負担比率については、充当可能財源等が将来負担額を上回っている団体に関する数値を含んでいない。
- 5 公債費負担比率とは、一般財源総額に占める公債費に充当された一般財源の割合である。
- 6 実質公債費比率とは、地方公共団体の借入金(地方債)の返済額(公債費)の大きさを、その地方公共団体の財政規模に対する割合で表したものである。

(参考)

$$\bullet \text{公債費負担比率 (\%)} = \frac{\text{公債費充当一般財源}}{\text{一般財源総額}} \times 100$$

$$\bullet \text{実質公債費比率 (\%)} = \frac{(A+B) - (C+D)}{E-F}$$

A = 地方債の元利償還金 (繰上償還等を除く)

B = 準元利償還金 (イからホまでの合計額: イ満期一括償還地方債について、償還期間を 30 年とする元金均等年賦償還とした場合における 1 年当たりの元金償還金相当額、ロ一般会計等から一般会計等以外の特別会計への繰出金のうち、公営企業債の償還の財源に充てたと認められるもの、ハ組合・地方開発事業団(組合等)への負担金・補助金のうち、組合等が起こした地方債の償還の財源に充てたと認められるもの、ニ債務負担行為に基づく支出のうち公債費に準ずるもの、ホ一時借入金の利子)

C = 特定財源

D = 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額

E = 標準財政規模

F = 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額

(注) 平成 25 年度～平成 27 年度の各年度毎に求めた数値を平均し、小数点第 2 位以下を切り捨てたものである。

$$\bullet \text{将来負担比率 (\%)} = \frac{A - (B+C+D)}{E-F}$$

A = 将来負担額 (イからチまでの合計額: イ一般会計等の当該年度の前年度末における地方債現在高、ロ債務負担行為に基づく支出予定額 (地方財政法第 5 条各号の経費に係るもの)、ハ一般会計等以外の会計の地方債の元金償還に充てる一般会計等からの繰入見込額、ニ当該団体が加入する組合等の地方債の元金償還に充てる当該団体からの負担等見込額、ホ退職手当支給予定額 (全職員に対する期末要支給額) のうち、一般会計等の負担見込額、地方公共団体が設立した一定の法人の負債の額、その者のために債務を負担している場合の当該債務の額のうち、当該法人等の財務・経営状況を勘案した一般会計等の負担見込額、ト連結実質赤字額、チ組合等の連結実質赤字額相当額のうち一般会計等の負担見込額)

B = 充当可能基金額 (上記イからへまでの償還額等に充てることのできる基金)

C = 特定財源見込額

D = 地方債現在高等に係る基準財政需要額算入見込額

E = 標準財政規模

F = 元利償還金・準元利償還金に係る基準財政需要額算入額

第4節 産業・雇用

1 労働力人口及び雇用の状況

(1) 労働力人口の状況

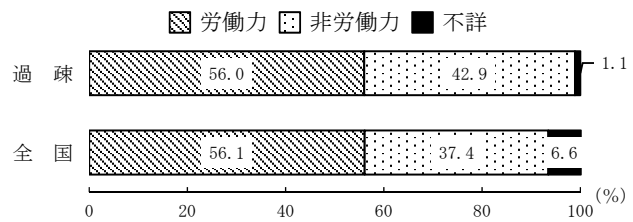
1) 労働力人口割合

平成27年国勢調査における労働力・非労働力人口割合をみると、全年齢層(15歳以上)で労働力の占める割合は、過疎地域及び全国ともに60%弱程度である。年齢階層別にみると、15歳～29歳では4.2ポイント、30歳～64歳では6.6ポイント、65歳以上では1.4ポイント過疎地域が全国を上回っている(図表2-4-1)。

図表2-4-1 労働力・非労働力人口割合

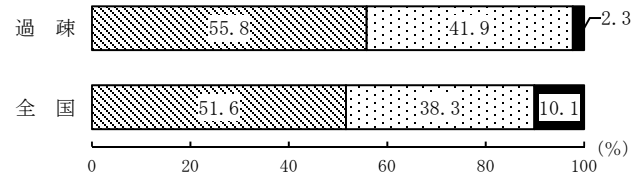
全年齢層(15歳以上) (単位:千人)

区分	全国	過疎	非過疎
労働力	61,523	4,873	56,650
非労働力	41,022	3,729	37,293



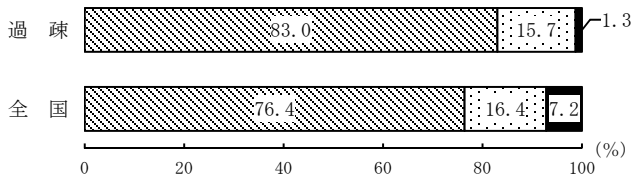
15～29歳 (単位:千人)

区分	全国	過疎	非過疎
労働力	9,488	576	8,912
非労働力	7,042	432	6,610



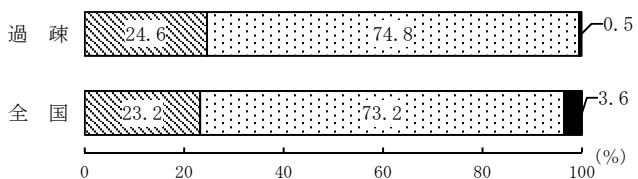
30～64歳 (単位:千人)

区分	全国	過疎	非過疎
労働力	44,259	3,424	40,835
非労働力	9,495	647	8,847



65歳以上 (単位:千人)

区分	全国	過疎	非過疎
労働力	7,776	873	6,903
非労働力	24,486	2,649	21,836



- (備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村を含まない。非過疎地域は一部過疎市町村を含む。

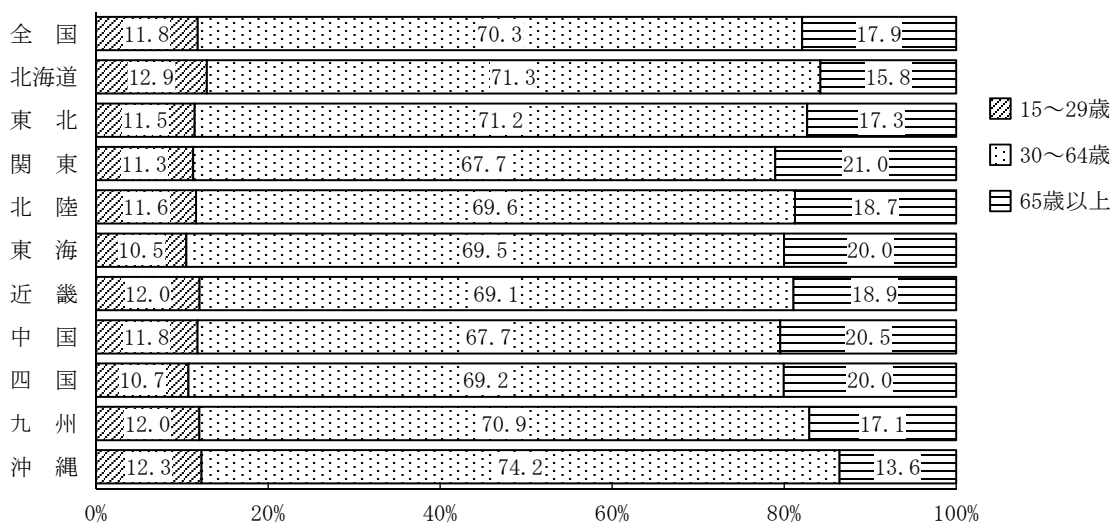
2) ブロック別労働力人口の年齢構成割合

労働力人口の年齢構成割合をみると、過疎地域では15歳～29歳が11.8%で全国を3.6ポイント下回っており、逆に65歳以上が17.9%で全国を5.3ポイント上回っている。このことから、過疎地域の労働力人口が全国よりも高齢化していることが分かる。

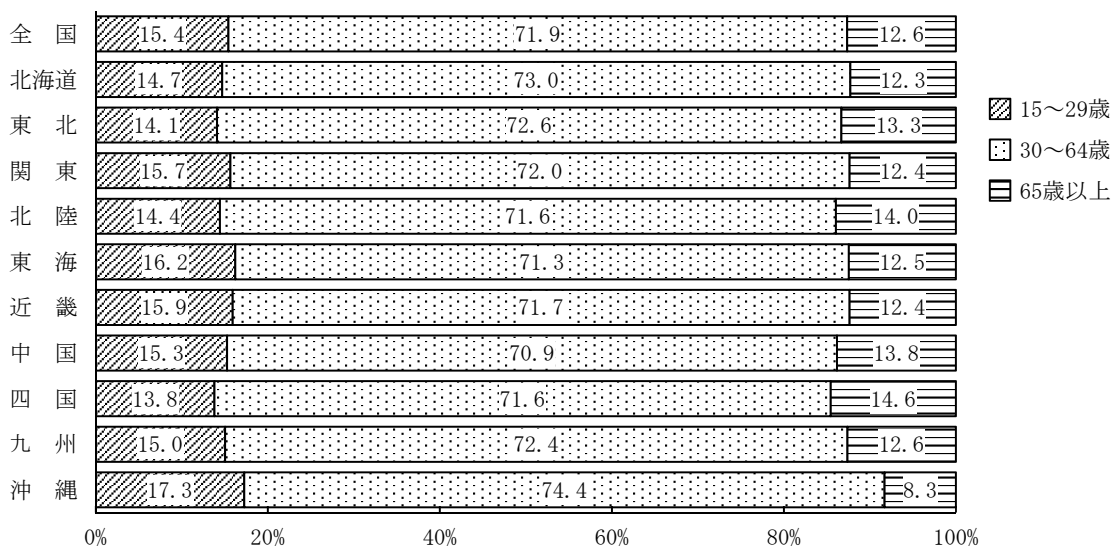
また、ブロック別にみると、15歳～29歳の割合が高いのは、過疎地域、全国ともに北海道及び沖縄であり、65歳以上の割合が高いのは、過疎地域では関東及び中国、全国では四国及び北陸となっている（図表2-4-2）。

図表2-4-2 ブロック別労働力人口の年齢構成割合

(過疎地域)



(全国)

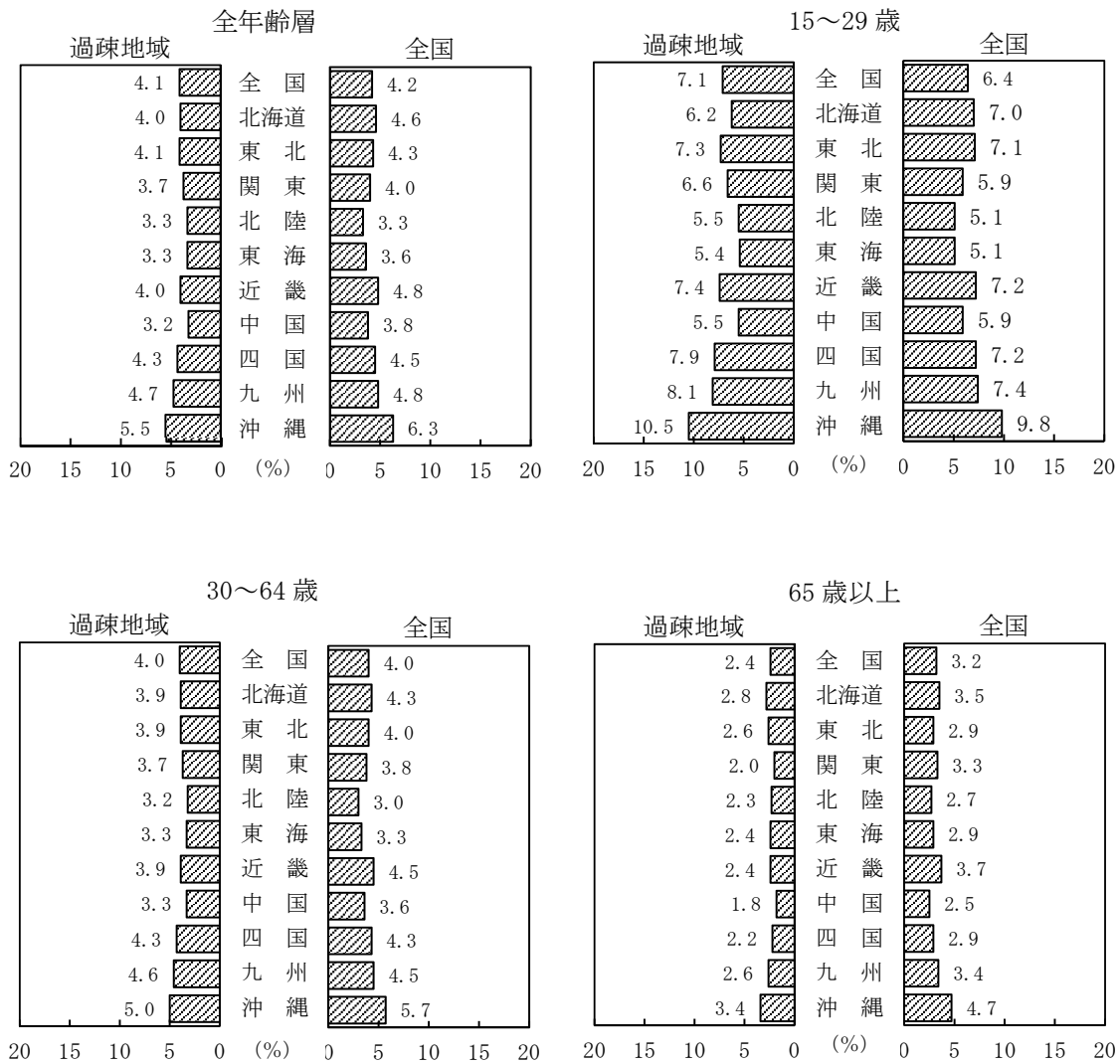


- (備考) 1 平成27年国勢調査による。
2 過疎地域は令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村を含まない。

3) 完全失業者割合

労働力人口に占める完全失業者の割合をブロック別かつ年齢階層別にみると、15～29歳では過疎地域、全国ともに沖縄が高く、過疎地域では九州、四国がこれに続く。30～64歳、65歳以上についても、全国、過疎地域ともに沖縄が高い（図表 2-4-3）。

図表 2-4-3 ブロック別・年齢階層別完全失業者割合



(備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。
 3 数値は、加重平均である。

(2) 雇用の状況

雇用や賃金の状況については、市町村単位の統計がないため、以下では、過疎関係市町村の比率が相対的に大きい県（以下「過疎の多い県」という。）を選び、その平均値を全国と比較した。

「過疎の多い県」は、過疎関係市町村数、人口及び面積を基準に、地域バランスも勘案して、秋田県、山形県、山梨県、和歌山県、島根県、高知県、熊本県、大分県、宮崎県及び鹿児島県とした。

1) 雇用機会

(求人倍率)

過疎の多い県における新規求人倍率をみると平成2、3年度をピークに減少傾向にあったものの、平成22年度以降は回復傾向にある。

また、有効求人倍率についても新規求人倍率と同様の傾向を示している（図表2-4-4）。

図表2-4-4 新規、有効求人倍率（一般）

	新規求人倍率		有効求人倍率	
	過疎の多い県	全国	過疎の多い県	全国
昭和50年度	0.52	0.96	0.32	0.58
55	0.58	1.00	0.44	0.71
60	0.58	0.91	0.43	0.64
平成2年度	1.38	1.95	1.04	1.29
3	1.38	1.83	1.03	1.24
4	1.20	1.41	0.84	0.93
5	1.05	1.07	0.69	0.66
6	1.06	0.99	0.68	0.59
7	0.98	0.98	0.61	0.57
8	1.05	1.08	0.64	0.63
9	0.96	0.98	0.59	0.59
10	0.76	0.74	0.43	0.41
11	0.74	0.74	0.40	0.39
12	0.80	0.87	0.46	0.49
13	0.63	0.76	0.36	0.43
14	0.64	0.76	0.36	0.43
15	0.71	0.91	0.41	0.54
16	0.87	1.19	0.54	0.73
17	0.94	1.33	0.61	0.87
18	1.01	1.40	0.67	0.95
19	0.98	1.30	0.65	0.90
20	0.72	0.91	0.48	0.66
21	0.63	0.65	0.33	0.36
22	0.76	0.79	0.44	0.47
23	0.89	0.96	0.54	0.59
24	0.97	1.13	0.60	0.71
25	1.13	1.33	0.72	0.85
26	1.26	1.46	0.84	0.98
27	1.36	1.60	0.93	1.08
28	1.61	1.80	1.12	1.23
29	1.85	2.03	1.34	1.41
30	2.01	2.19	1.47	1.52
令和元年度	1.96	2.13	1.42	1.47

(備考) 1 厚生労働省「労働市場年報」による。

2 新規学卒者及びパートタイムを除く。

新規求人数（期間中新たに受けた求人（採用予定人員））

$$3 \text{ 新規求人倍率} = \frac{\text{新規求人数}}{\text{新規求職申込件数}}$$

有効求人数（前期から繰越された有効求人数と当期の新規求人数）

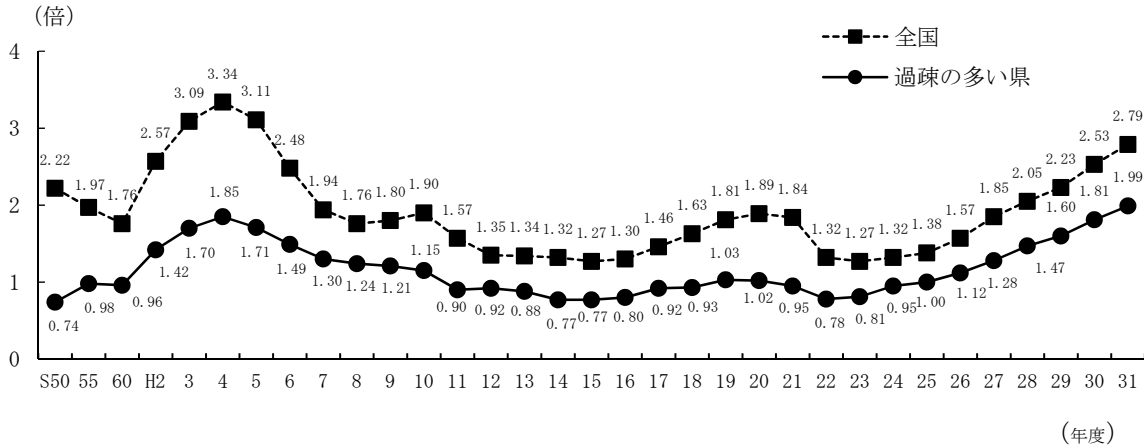
$$\text{有効求人倍率} = \frac{\text{有効求人数}}{\text{有効求職者数（就職未定の求職者）}}$$

（新規学卒者（高校）の求人倍率・県内就職率）

高校卒業者の雇用状況について、求人倍率をみると、過疎の多い県が全国を下回っており、その格差は平成4年度の1.49から縮小しつつあったが、平成18年度以降に全国との格差が拡大した。平成22年度以降には、格差が縮小傾向に転じたが、平成26年度より再び格差が拡大傾向に転じている（図表2-4-5）。

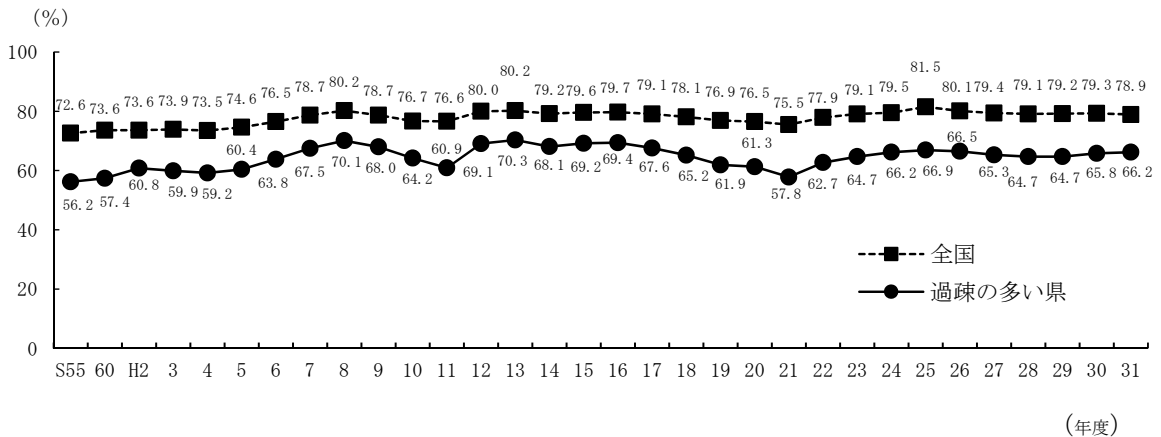
また、高校卒業者の県内就職率をみると、過疎の多い県が全国を下回る傾向が続いている（図表2-4-6）。

図表2-4-5 新規学卒者（高校）求人倍率



（備考）厚生労働省「新規学卒者の労働市場」による。

図表2-4-6 新規学卒者（高校）県内就職率



（備考）1 厚生労働省「新規学卒者の労働市場」による。
 2 県内就職率（%）＝（県内就職者数／就職全数）×100

2) 賃金

過疎の多い県における賃金を企業規模別にみると、令和元年では過疎の多い県は全国比84.3%となっており、全国との格差が見受けられる(図表2-4-7)。

図表 2-4-7 企業規模別月間所定内給与

(単位：万円, %)

区分 年	1,000人以上			100人~999人			10人~99人			計		
	全国	過疎の多い県	(%)	全国	過疎の多い県	(%)	全国	過疎の多い県	(%)	全国	過疎の多い県	(%)
昭和45年	57.6	53.4	(92.7)	49.7	40.5	(81.5)	47.3	37.1	(78.4)	52.1	43.4	(83.3)
50	138.9	135.4	(97.5)	119.1	102.3	(85.9)	107.9	89.3	(82.8)	122.8	106.5	(86.7)
55	199.2	179.3	(90.0)	168.4	141.1	(83.8)	156.5	130.7	(83.5)	173.1	142.7	(82.4)
60	250.3	225.1	(89.9)	207.3	169.4	(81.7)	189.9	156.2	(82.3)	213.8	173.6	(81.2)
平成2年	298.3	265.9	(89.1)	244.9	199.5	(81.5)	227.7	183.5	(80.6)	254.7	204.4	(80.3)
3	308.4	270.6	(87.7)	257.0	208.7	(81.2)	238.7	193.1	(80.9)	266.3	213.3	(80.1)
4	316.4	282.0	(89.1)	264.8	220.3	(83.2)	249.7	203.8	(81.6)	275.2	224.2	(81.5)
5	324.7	272.3	(83.9)	272.0	221.2	(81.3)	254.5	204.7	(80.4)	281.1	229.4	(81.6)
6	332.2	298.1	(89.7)	279.4	228.4	(81.7)	260.1	214.1	(82.3)	288.4	234.7	(81.4)
7	337.3	305.0	(90.4)	282.6	241.3	(85.4)	262.8	222.9	(84.8)	291.3	243.8	(83.7)
8	344.3	306.6	(89.1)	285.9	241.2	(84.4)	264.8	227.3	(85.8)	295.6	245.8	(83.2)
9	349.3	308.3	(88.3)	289.1	245.3	(84.8)	267.1	228.5	(85.5)	298.9	249.3	(83.4)
10	351.4	309.3	(88.0)	289.9	245.6	(84.7)	267.1	228.3	(85.5)	299.1	248.3	(83.0)
11	352.7	309.3	(87.7)	292.2	253.6	(86.8)	268.2	227.0	(84.6)	300.6	250.8	(83.4)
12	356.6	283.8	(79.6)	292.4	243.9	(83.4)	267.7	220.7	(82.5)	302.2	240.4	(79.5)
13	362.4	289.8	(80.0)	295.5	242.5	(82.1)	268.9	222.2	(82.6)	305.8	241.0	(78.8)
14	355.7	291.2	(81.9)	295.7	244.7	(82.8)	264.3	218.8	(82.8)	302.6	240.4	(79.4)
15	358.7	288.8	(80.5)	293.6	246.2	(83.9)	265.1	220.4	(83.2)	302.1	241.7	(80.0)
16	359.5	283.8	(78.9)	292.7	243.0	(83.0)	267.2	221.2	(82.3)	301.6	239.6	(79.4)
17	359.5	310.5	(86.4)	289.5	254.2	(87.8)	263.1	227.5	(86.5)	302.0	252.7	(83.7)
18	359.3	307.7	(85.6)	290.1	248.1	(85.5)	263.5	227.8	(86.5)	301.8	250.8	(83.1)
19	354.5	308.0	(86.9)	287.6	245.9	(85.5)	265.5	227.7	(85.8)	301.1	251.1	(83.4)
20	345.7	299.2	(86.5)	290.4	244.6	(84.2)	265.6	230.9	(86.9)	299.1	250.5	(83.8)
21	342.5	304.2	(88.8)	285.4	246.2	(86.2)	260.1	223.9	(86.1)	294.5	247.8	(84.1)
22	348.1	306.8	(88.1)	286.1	242.9	(84.9)	259.2	223.2	(86.1)	296.2	246.9	(83.4)
23	351.2	308.5	(87.8)	285.9	244.3	(85.4)	257.4	223.6	(86.9)	296.8	247.6	(83.4)
24	344.9	301.8	(87.5)	286.7	250.7	(87.5)	258.2	224.9	(87.1)	297.7	251.4	(84.5)
25	344.6	288.4	(83.7)	281.1	243.8	(86.7)	261.5	225.3	(86.2)	295.7	246.5	(83.4)
26	347.2	301.4	(86.8)	284.4	252.8	(88.9)	262.4	228.8	(87.2)	299.6	253.4	(84.6)
27	351.5	301.4	(85.7)	291.4	255.1	(87.5)	264.4	228.5	(86.4)	304.0	255.0	(83.9)
28	347.2	303.0	(87.3)	291.7	255.5	(87.6)	266.4	236.9	(88.9)	304.0	253.8	(83.5)
29	346.8	298.5	(86.1)	289.7	251.5	(86.8)	269.0	232.5	(86.4)	304.3	255.8	(84.0)
30	349.0	292.7	(83.7)	292.9	251.9	(86.0)	268.3	234.3	(87.3)	306.2	255.2	(83.3)
令和元年	344.1	297.1	(86.3)	295.7	255.0	(86.2)	273.2	237.8	(87.1)	307.7	259.4	(84.3)

(備考) 1 厚生労働省「賃金構造基本統計調査」による。

2 月間所定内給与とは、6月分として支給された常用労働者1人当たりの給与で、基本給、職務手当、精皆勤手当、通勤手当、家族手当等をいい、超過勤務手当、賞与、期末手当を含まない。

3 過疎の多い県の給与額は、各県の数値を加重平均したものである。

4 () は対全国比である。

3) 所得

過疎地域における令和元年度の納税義務者1人当たりの総所得金額は2,586千円であり、非過疎地域と比較して707千円低い。また、納税義務者割合は40.4%であり、非過疎地域と比較して6.5ポイント低くなっている(図表2-4-8)。

図表 2-4-8 納税義務者1人当たりの総所得金額等

令和元年度	納税義務者1人当たり総所得金額	納税義務者割合
過疎地域	2,586千円	40.4%
非過疎地域	3,293千円	46.9%

(備考) 1 総務省「令和元年度市町村税課税状況等の調」による。(納税義務者は均等割、所得割を納める者)

2 人口は住民基本台帳人口(令和2年1月1日現在)による。

3 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

(3) 産業別就業人口

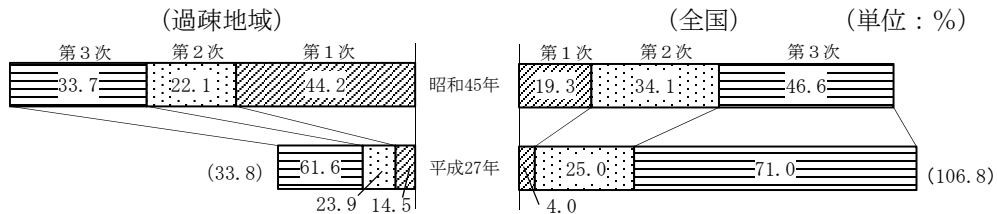
1) 産業別就業人口の推移

過疎地域では、かつて第1次産業が中核的な産業であったが、産業別人口割合をみると、第1次産業は、昭和45年から平成27年までの45年間で、44.2%から14.5%へと大きく減少しており、現在では、第2次及び第3次産業の人口割合が8割以上を占めている(図表2-4-9、図表2-4-10)。

一方、全国では、昭和45年の時点ですでに第3次産業の割合が高く、その後昭和45年の46.6%から平成27年の71.0%へ大幅に増加している。逆に第1次産業の割合は昭和45年から減少しており、第3次産業との差が拡大している。

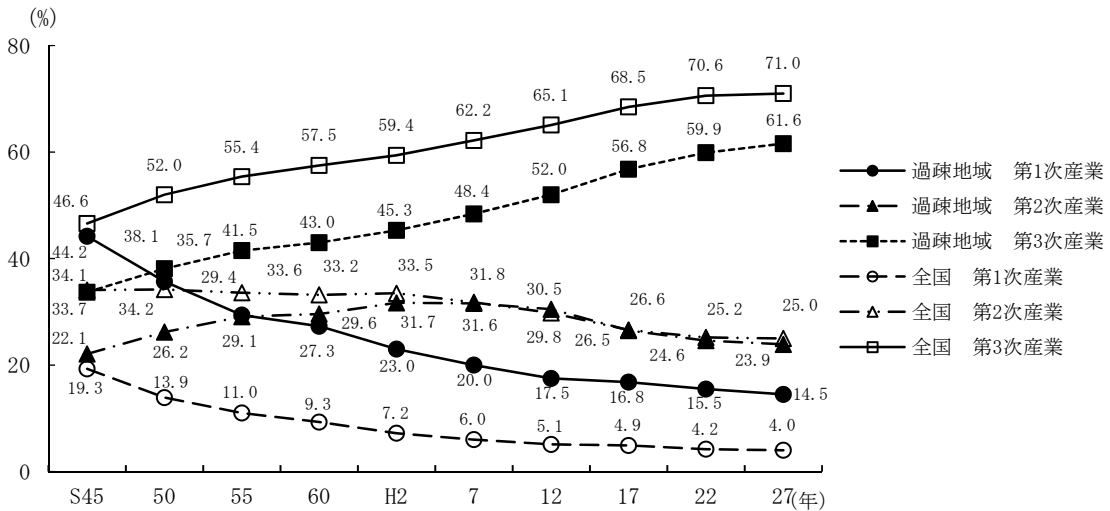
また、産業別就業人口の増減をみると、過疎地域においては、この45年間に第1次産業就業人口が331万3千人(88.9%)、第2次産業就業人口が118万1千人(63.3%)減少している(図表第2-4-11)。非過疎地域においては、概ね第1次産業及び第2次産業が減少し、第3次産業が増加している。

図表 2-4-9 産業別就業人口及び構成割合の変動状況



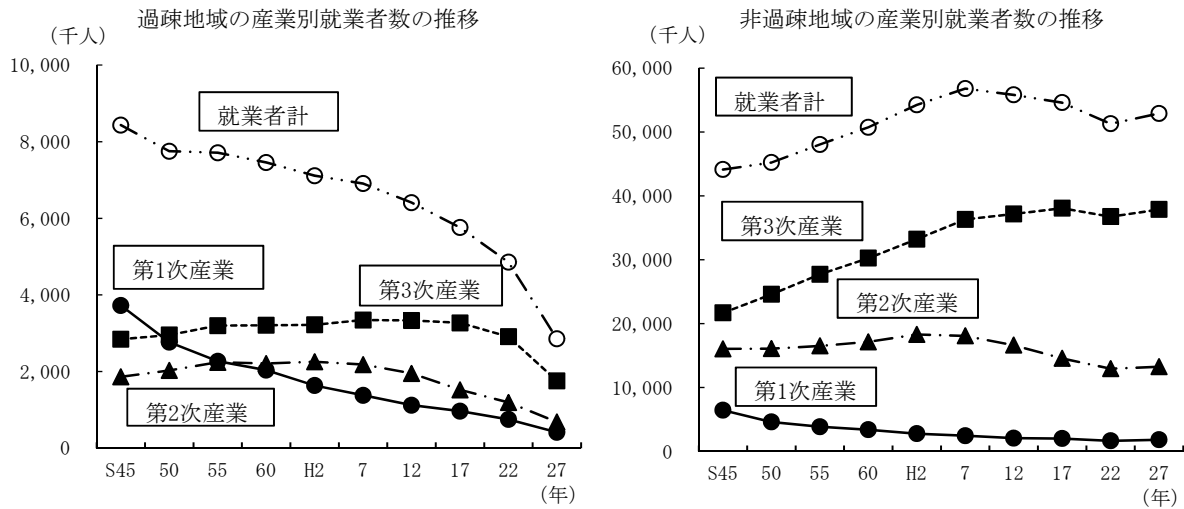
- (備考) 1 国勢調査による。
 2 () は昭和45年の就業人口を100とした時の指数。
 3 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 4 平成27年の過疎地域は、一部過疎地域を含まない。
 5 総数には分類不能産業を含まない。

図表 2-4-10 産業別就業人口割合の推移



- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 平成17年度については、一部過疎地域のうちデータが取得できない190区域を過疎地域から除いている。
 4 平成22年以降の過疎地域は、一部過疎地域を含まない。

図表 2-4-11 産業別就業者数の推移



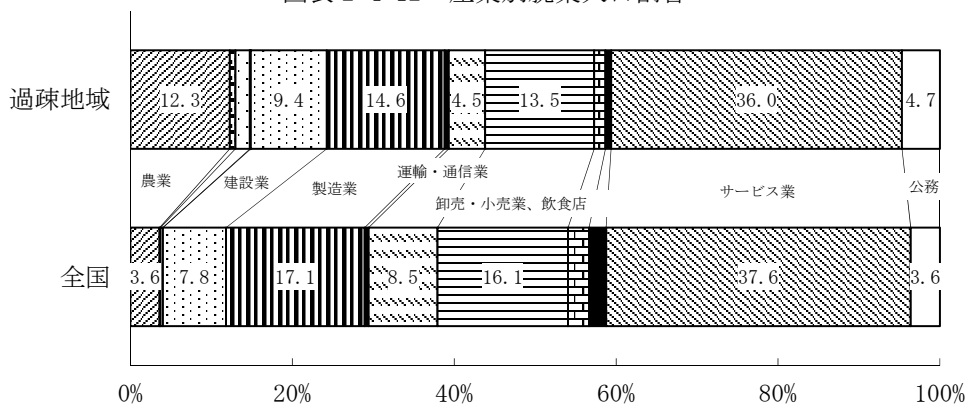
- (備考) 1 国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 平成17年については、一部過疎地域のうちデータが取得できない190区域を過疎地域から除いている。
 4 平成22年以降の過疎地域は、一部過疎地域を含まない。

2) 産業別就業人口割合

平成27年国勢調査による産業大分類別の就業人口割合をみると、過疎地域においては、サービス業36.0%、製造業14.6%、卸売・小売業、飲食店13.5%の順であり、全国では、大きいものから順にサービス業37.6%、製造業17.1%、卸売・小売業、飲食店16.1%である。また、農業、漁業、林業、鉱業、建設業については、全国より就業人口割合が高い。

このうち農業についてみると、過疎地域において就業人口割合は12.3%と全国の3倍以上あるものの、年齢階層別にみると、65歳以上が51.4%と半数以上を占めており、15歳～29歳は4.1%に過ぎないことから、過疎地域における農業は、全国と同様、高齢者に大きく依存していることが分かる(図表2-4-12、図表2-4-13、図表2-4-14)。

図表 2-4-12 産業別就業人口割合



- (備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

図表 2-4-13 産業別・年齢階層別就業人口

(単位：人)

	総数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業・飲食店	金融・保険業	不動産業	サービス業	公務 (他に分類されないもの)
過疎地域	総数	572,624	30,971	83,698	6,492	441,389	679,908	21,832	209,753	629,461	63,360	34,072	1,679,492	217,869
	15～29歳	23,610	2,618	6,188	463	34,593	101,935	3,446	17,469	80,018	9,819	3,443	213,231	37,240
	30～64歳	3,294,204	21,136	50,137	5,144	334,696	512,356	17,528	168,058	441,232	49,598	22,518	1,246,085	171,158
	65歳以上	294,456	7,217	27,373	885	72,100	65,617	858	24,226	108,211	3,943	8,111	220,176	9,471
全国	総数	2,004,289	63,663	153,747	22,281	4,341,338	9,557,215	283,193	4,724,946	9,001,414	1,428,710	1,197,560	20,952,756	2,025,988
	15～29歳	83,986	5,732	11,905	1,931	443,318	1,416,986	39,358	585,056	1,522,915	217,106	113,382	3,433,059	354,849
	30～64歳	880,116	44,763	91,431	17,316	3,278,723	7,326,417	235,531	3,768,653	6,414,236	1,143,858	755,920	14,953,093	1,600,918
	65歳以上	1,040,187	13,168	50,411	3,034	619,297	813,812	8,304	371,237	1,064,263	67,746	328,258	2,566,604	70,221

(備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。
 3 総数には分類不能の産業を含まない。

図表 2-4-14 産業別・年齢階層別就業人口構成比

(1) 年齢区分構成比

(単位：%)

地域区分 産業区分 年齢区分	過疎地域													
	総数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業・飲食店	金融・保険業	不動産業	サービス業	公務 (他に分類されないもの)
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
15～29歳	11.4	4.1	8.5	7.4	7.1	7.8	15.0	15.8	8.3	12.7	15.5	10.1	12.7	17.1
30～64歳	70.5	44.5	68.2	59.9	79.2	75.8	75.4	80.3	80.1	70.1	78.3	66.1	74.2	78.6
65歳以上	18.0	51.4	23.3	32.7	13.6	16.3	9.7	3.9	11.5	17.2	6.2	23.8	13.1	4.3

地域区分 産業区分 年齢区分	全国													
	総数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業・飲食店	金融・保険業	不動産業	サービス業	公務 (他に分類されないもの)
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
15～29歳	14.8	4.2	9.0	7.7	8.7	10.2	14.8	13.9	12.4	16.9	15.2	9.5	16.4	17.5
30～64歳	72.7	43.9	70.3	59.5	77.7	75.5	76.7	83.2	79.8	71.3	80.1	63.1	71.4	79.0
65歳以上	12.6	51.9	20.7	32.8	13.6	14.3	8.5	2.9	7.9	11.8	4.7	27.4	12.2	3.5

- (備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。
 3 総数には、分類不能の産業を含まない。

(2) 産業区分構成比

(単位：%)

産業区分 年齢区分	総数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・ 熱供給・水道業	運輸・ 通信業	卸売・小売 業・飲食店	金融・ 保険業	不動産業	サービス業	公務 (他に分類さ れないもの)
過疎地域	総数	100.0	12.3	0.7	1.8	0.1	9.4	14.6	4.5	13.5	1.4	0.7	36.0	4.7
	15～29歳	100.0	4.4	0.5	1.2	0.1	6.5	19.1	3.3	15.0	1.8	0.6	39.9	7.0
	30～64歳	100.0	7.7	0.6	1.5	0.2	10.2	15.6	5.1	13.4	1.5	0.7	37.8	5.2
	65歳以上	100.0	34.9	0.9	3.2	0.1	8.6	7.8	2.9	12.8	0.5	1.0	26.1	1.1

産業区分 年齢区分	総数	農業	林業	漁業	鉱業	建設業	製造業	電気・ガス・ 熱供給・水道業	運輸・ 通信業	卸売・小売 業・飲食店	金融・ 保険業	不動産業	サービス業	公務 (他に分類さ れないもの)
全 国	総数	100.0	3.6	0.1	0.3	0.0	7.8	17.1	8.5	16.1	2.6	2.1	37.6	3.6
	15～29歳	100.0	1.0	0.1	0.1	0.0	5.4	17.2	7.1	18.5	2.6	1.4	41.7	4.3
	30～64歳	100.0	2.2	0.1	0.2	0.0	8.1	18.1	9.3	15.8	2.8	1.9	36.9	4.0
	65歳以上	100.0	14.8	0.2	0.7	0.0	8.8	11.6	5.3	15.2	1.0	4.7	36.6	1.0

- (備考) 1 平成27年国勢調査による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。
 3 総数には、分類不能の産業を含まない。

2 産業分野別の状況

(1) 第1次産業の状況

1) 農林漁家数の推移

農業・林業・漁業の各センサスにより農林漁家数の推移をみると、平成2年～平成27年の過疎地域の農家数の減少率は44.9%であり、全国を1.1ポイント上回っている。林家数については、平成2年～平成27年の過疎地域の減少率が20.3%であり、全国を1.2ポイント下回っている。漁家数についても、平成5年～平成30年の過疎地域の減少率は53.7%であり、全国を1.2ポイント下回っている（図表2-4-15）。

図表2-4-15 農林漁家数の推移

(1) 農 家

(単位：千戸、%)

区 分	平成2年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	増 減 率				
						H12/H2	H17/H12	H22/H17	H27/H22	H27/H2
過疎地域	1,288	1,041	955	831	710	△19.2	△ 8.3	△ 13.0	△ 14.6	△ 44.9
全 国	3,835	3,120	2,848	2,528	2,155	△18.6	△ 8.7	△ 11.2	△ 14.8	△ 43.8

- (備考) 1 農林水産省「農林業センサス」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 農家とは経営耕地面積が10a以上の農業を営む世帯及び農産物販売金額が年監15万円以上あった世帯をいう。

(2) 林 家

(単位：千戸、%)

区 分	平成2年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	増 減 率				
						H12/H2	H17/H12	H22/H17	H27/H22	H27/H2
過疎地域	581	546	499	481	463	△ 6.0	△ 8.6	△ 3.6	△ 3.7	△ 20.3
全 国	1,056	1,019	920	886	829	△ 3.5	△ 9.7	△ 3.7	△ 6.4	△ 21.5

- (備考) 1 農林水産省「農林業センサス」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 林家とは保有山林面積が1ha以上の世帯をいう。

(3) 漁 家

(単位：千戸、%)

区 分	平成5年	平成15年	平成20年	平成25年	平成30年	増 減 率				
						H15/H5	H20/H15	H25/H20	H30/H25	H30/H5
過疎地域	95	73	63	53	44	△ 23.2	△ 13.7	△ 15.9	△ 17.0	△ 53.7
全 国	164	126	109	89	74	△ 23.2	△ 13.5	△ 18.3	△ 16.9	△ 54.9

- (備考) 1 農林水産省「漁業センサス」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 漁家とは個人で漁業を自営する世帯をいう。

2) 専業別農家数

農家数を専業別にみると、過疎地域は専業農家の割合が全国よりも高く、平成27年では36.9%を占め、全国を3.6ポイント上回っている。一方、第2種兼業農家は50.8%であり、全国を3.5ポイント下回っている。

また、昭和55年～平成27年の間における農家数の推移をみると、専業農家については過疎地域で7.7%、全国で28.9%の減少、第1種兼業農家は過疎地域で77.9%、全国で83.5%の減少、第2種兼業農家は過疎地域で63.4%、全国で76.2%の減少となっており、いずれも全国より過疎地域の減少率が小さい(図表2-4-16)。

図表2-4-16 専業別農家数の推移

(戸数)

(単位：千戸、%)

区分	昭和55年		平成2年		平成12年		平成22年度		平成27年	
	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
専業	182 (17.1)	623 (13.4)	169 (19.9)	473 (15.9)	125 (23.4)	426 (18.2)	169 (32.5)	451 (27.7)	168 (36.9)	443 (33.3)
第1種兼業	253 (23.7)	1,002 (21.5)	134 (15.7)	521 (17.5)	84 (15.7)	350 (15.0)	71 (13.6)	225 (13.8)	56 (12.3)	165 (12.4)
第2種兼業	631 (59.2)	3,036 (65.1)	548 (64.4)	1,977 (66.5)	326 (60.9)	1,561 (66.8)	280 (53.8)	955 (58.6)	231 (50.8)	722 (54.3)
計	1,066 (100.0)	4,661 (100.0)	851 (100.0)	2,971 (100.0)	534 (100.0)	2,337 (100.0)	521 (100.0)	1,631 (100.0)	455 (100.0)	1,330 (100.0)

(増減率)

(単位：%)

区分	H2/S55		H12/H2		H22/H12		H27/H22		H27/S55	
	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
専業	△ 7.1	△ 24.1	△ 26.0	△ 9.9	35.2	5.9	△ 0.6	△ 1.8	△ 7.7	△ 28.9
第1種兼業	△ 47.0	△ 48.0	△ 37.3	△ 32.8	△ 15.5	△ 35.7	△ 21.1	△ 26.7	△ 77.9	△ 83.5
第2種兼業	△ 13.2	△ 34.9	△ 40.5	△ 21.0	△ 14.1	△ 38.8	△ 17.5	△ 24.4	△ 63.4	△ 76.2
計	△ 20.2	△ 36.3	△ 37.3	△ 21.3	△ 2.4	△ 30.2	△ 12.7	△ 18.5	△ 57.3	△ 71.5

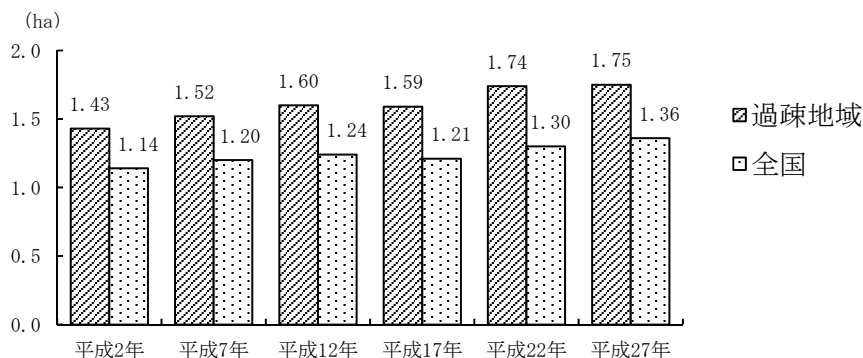
- (備考) 1 農林水産省「農林業センサス」による。
 2 過疎地域は令和2年4月1日現在。
 3 農家は販売農家(経営耕地面積30a以上又は農産物販売金額50万円以上)である。
 4 第1種兼業農家とは農業所得を主とする兼業農家、第2種兼業農家とは農業所得を従とする兼業農家をいう。
 5 ()は農家総数に対する構成比である。

3) 農業経営規模

(1 戸当たり経営耕地面積の推移)

平成 2 年から平成 27 年までの 1 戸当たり経営耕地面積の推移をみると、過疎地域では 1.43ha から 1.75ha (22.4%増) に増加しており、全国の 1.14ha から 1.36ha (19.3%増) よりも増加率が大きい (図表 2-4-17)。

図表 2-4-17 1 戸当たり経営耕地面積の推移



- (備考) 1 農林水産省「農林業センサス」による。
 2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。
 3 経営耕地面積/総農家数により算出している。

(経営規模別農家数割合の推移)

昭和 55 年から平成 27 年までの経営規模別農家数割合の推移を都府県と北海道に分けてみると、都府県では、過疎地域及び全体ともに 3.0ha 以上、北海道では、過疎地域及び全体ともに 20.0ha 以上の経営規模の大きな農家割合が増加傾向にある (図表 2-4-18)。また、都府県では、過疎地域及び全体ともに 0.5ha 未満の経営規模の小さな農家数の割合についても増加傾向にある。

図表 2-4-18 経営規模別農家数割合の推移

(単位：%)

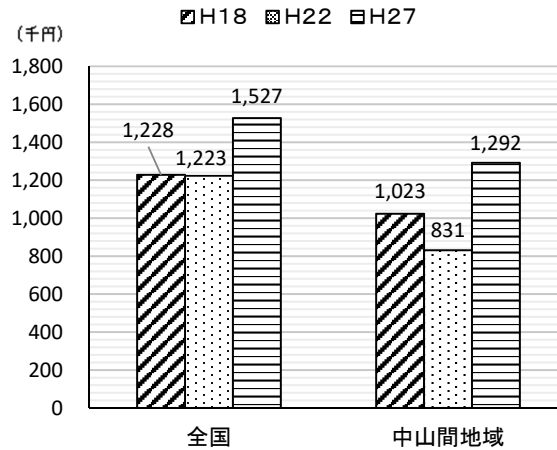
経営規模	昭和 55 年		平成 2 年		平成 12 年		平成 22 年度		平成 27 年		
	過疎地域	全体	過疎地域	全体	過疎地域	全体	過疎地域	全体	過疎地域	全体	
都府県	0.5ha 未満	41.3	42.3	41.5	41.7	45.5	43.3	49.0	50.0	50.3	51.9
	0.5ha~1.0ha 未満	29.5	28.7	29.1	28.1	26.5	26.7	22.4	22.3	20.8	20.5
	1.0ha~1.5ha 未満	14.4	14.4	13.6	13.7	11.8	12.7	10.8	10.9	10.1	10.1
	1.5ha~2.0ha 未満	7.1	7.2	6.8	7.2	6.0	6.7	5.7	5.7	5.6	5.5
	2.0ha~3.0ha 未満	5.4	5.2	5.7	6.0	5.5	6.0	5.6	5.4	5.7	5.4
	3.0ha~5.0ha 未満	2.0	1.8	2.6	2.7	3.3	3.2	3.9	3.5	4.1	3.6
	5.0ha 以上	0.3	0.3	0.7	0.7	1.5	1.4	2.8	2.3	3.4	2.9
北海道	1.0ha 未満	15.7	19.0	15.3	18.8	18.3	18.6	20.4	21.0	19.9	20.9
	1.0ha~3.0ha 未満	13.5	15.5	10.4	12.5	8.6	10.4	7.3	8.4	7.0	7.6
	3.0ha~5.0ha 未満	17.5	16.8	12.4	12.5	9.2	9.8	6.4	6.6	6.2	6.0
	5.0ha~10.0ha 未満	29.1	24.8	26.2	22.9	19.3	18.4	13.6	12.7	12.6	11.5
	10.0ha~20.0ha 未満	14.7	13.3	19.3	16.7	19.9	18.3	19.4	18.0	19.3	17.5
	20.0ha 以上	9.4	10.7	16.4	16.7	24.7	24.4	32.5	33.0	35.1	36.6

- (備考) 1 農林水産省「農林業センサス」による。
 2 過疎地域は令和 2 年 4 月 1 日現在。

4) 1 経営体当たりの農業所得

基盤整備や生産体制の強化、6次産業化等が進められたこと等により、過疎地域等の中山間地域の1経営体当たりの農業所得は増加しているが、依然として全国との格差がある(図表2-4-19)。

図表 2-4-19 1 経営体当たりの農業所得



- (備考) 1 農林水産省「農業経営統計調査」による。
 2 「中山間地域」は農林統計上用いられている地域区分のうち、中間農業地域と山間農業地を合わせた地域を指す。

(2) 第2次産業・第3次産業の状況

1) 製造業の状況

(事業所数等)

工業統計調査により製造業の状況をみると、過疎地域、全国ともに、事業所数は減少傾向にある。

過疎地域における昭和60年度から平成30年度までの、1事業所当たり製造品出荷額の伸び率及び従業者1人当たり製造品出荷額の伸び率は全国を上回っている(図表2-4-20)。

図表2-4-20 製造業の状況

項目	単位	区分	昭和60年度	平成2年度	平成7年度	平成12年度	平成17年度	平成22年度	平成27年度	平成30年度	H30/S60
事業所数	箇所	過疎	50,192	51,323	46,727	40,488	31,497	25,273	22,601	20,395	△ 59.4
		全国	438,518	435,997	387,726	341,421	276,715	224,403	217,601	185,116	△ 57.8
従業者数	人	過疎	1,074,161	1,148,230	1,047,810	913,729	746,012	666,157	587,914	612,688	△ 43.0
		全国	10,889,949	11,172,829	10,320,583	9,183,833	8,156,992	7,663,847	7,497,792	7,318,196	△ 32.8
製造品出荷額等	百万円	過疎	14,187,623	17,764,406	18,241,507	18,257,519	15,415,248	15,324,614	15,882,856	17,688,738	24.7
		全国	265,320,551	323,372,603	306,029,559	300,477,603	295,345,543	289,107,683	313,128,563	331,809,377	25.1
1事業所当たり従事者数	人	過疎	21.4	22.4	22.4	22.6	23.7	26.4	26.0	30.0	40.2
		(86.3)	(87.5)	(84.2)	(84.0)	(80.3)	(77.2)	(75.4)	(75.9)		
1事業所当たり製造品出荷額	百万円	過疎	282.7	346.1	390.4	450.9	489.4	606.4	702.8	867.3	206.8
		(46.7)	(46.7)	(49.5)	(51.2)	(45.9)	(47.1)	(48.8)	(48.4)		
従業者1人当たり製造品出荷額	百万円	過疎	13.2	15.5	17.4	20.0	20.7	23.0	27.0	28.9	118.9
		(54.1)	(53.6)	(58.6)	(61.2)	(57.2)	(61.0)	(64.6)	(63.8)		
		全国	24.4	28.9	29.7	32.7	36.2	37.7	41.8	45.3	85.7

- (備考) 1 経済産業省「工業統計調査」及び総務省・経済産業省「経済センサス」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
 3 従業者4人以上の事業所について集計。
 4 () は対全国比(%)である。

2) 商業の状況

平成26年度の過疎地域における商業の状況をみると、商店数は全国約104万箇所に対して過疎地域約11万箇所、従業者数は全国857万人に対して過疎地域57万人であり、それぞれ全国の10.9%、6.7%を占めている。一方で、年間販売額は全国の2.8%である。

1商店当たりの従業者数は、全国が8.2人であるのに対して過疎地域は5.0人、1商店当たりの年間販売額は、全国461百万円に対して過疎地域117百万円、従業者1人当たりの年間販売額は、全国56百万円に対して過疎地域23百万円であり、過疎地域においては小規模な商店が中心となっている(図表2-4-21)。

図表2-4-21 商業の状況

(単位：箇所、人、百万円、%)

項目	平成19年			平成26年			26/19
	過疎	全国	(%)	過疎	全国	(%)	
商店数 (箇所)	166,414	1,472,658	(11.3)	113,623	1,039,079	(10.9)	△ 31.7
	△ 29.4						
従業者数 (人)	782,760	11,105,669	(7.0)	573,189	8,569,694	(6.7)	△ 26.8
	△ 22.8						
年間販売額 (百万円)	15,312,842	548,237,119	(2.8)	13,258,417	478,828,374	(2.8)	△ 13.4
	△ 12.7						
1商店当たり従業者数 (人)	4.7	7.5	(62.4)	5.0	8.2	(61.2)	7.2
	9.4						
1商店当たり年間販売額 (百万円)	92.0	372.3	(24.7)	116.7	460.8	(25.3)	26.8
	23.8						
従業者1人当たり年間販売額 (百万円)	19.6	49.4	(39.6)	23.1	55.9	(41.4)	18.2
	13.2						

- (備考) 1 経済産業省「商業統計調査」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。
 3 () は対全国比(%)である。

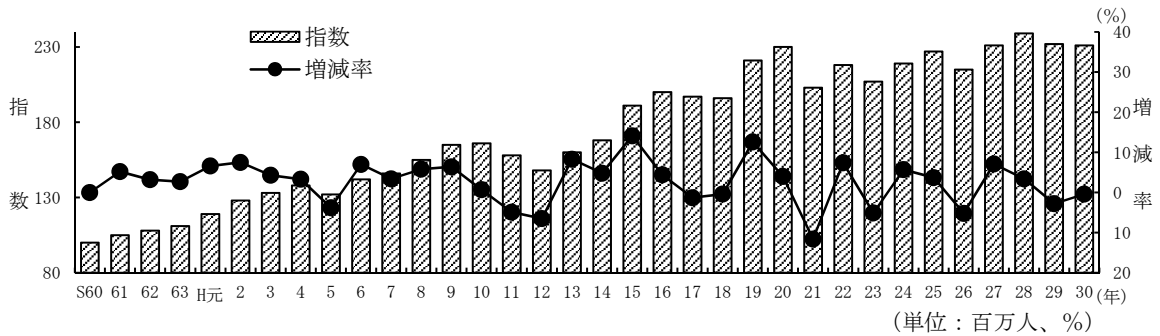
(3) 観光の状況

1) 入込観光客数

過疎地域における入込観光客数は、昭和60年の271百万人から徐々に増加し、平成28年では647百万人と過去最高となっている。

また、過疎地域を訪れた観光客のうち延宿泊者数をみると、昭和60年の52百万人から徐々に増加し、平成30年は83百万人となっている（図表2-4-22）。

図表 2-4-22 過疎地域の入込観光客数の推移



(単位：百万人、%)

過疎地域					全国（参考）			
年次	入込客数	増減率	指数	延宿泊者数	年次	入込客数	増減率	指数
昭和60年	271	—	100	52	昭和60年	1,750	—	100
昭和61年	285	5.2	105	55	昭和61年	1,818	3.9	104
昭和62年	294	3.2	108	57	昭和62年	1,870	2.9	107
昭和63年	302	2.7	111	63	昭和63年	1,860	-0.5	106
平成元年	322	6.6	119	62	平成元年	2,098	12.8	120
平成2年	346	7.5	128	66	平成2年	2,154	2.7	123
平成3年	361	4.3	133	68	平成3年	2,108	-2.1	120
平成4年	373	3.3	138	66	平成4年	2,188	3.8	125
平成5年	359	-3.8	132	63	平成5年	2,144	-2.0	123
平成6年	384	7.0	142	66	平成6年	2,177	1.5	124
平成7年	397	3.4	146	64	平成7年	2,162	-0.7	124
平成8年	420	5.8	155	66	平成8年	2,222	2.8	127
平成9年	447	6.4	165	71	平成9年	2,090	-5.9	119
平成10年	450	0.7	166	63	平成10年	2,911	39.3	166
平成11年	428	-4.9	158	56	平成11年	2,424	-16.7	139
平成12年	400	-6.5	148	56	平成12年	2,423	0.0	138
平成13年	433	8.3	160	64	平成13年	2,355	-2.8	135
平成14年	454	4.8	168	64	平成14年	2,359	0.2	135
平成15年	518	14.1	191	70	平成15年	2,371	0.5	135
平成16年	541	4.4	200	70	平成16年	2,666	12.4	152
平成17年	534	-1.3	197	67	平成17年	2,782	4.4	159
平成18年	532	-0.4	196	64	平成18年	2,818	1.3	161
平成19年	599	12.6	221	72	平成19年	2,809	-0.3	161
平成20年	623	4.0	230	77	平成20年	2,786	-0.8	159
平成21年	551	-11.6	203	68	平成21年	2,807	0.8	160
平成22年	592	7.4	218	70	—	—	—	—
平成23年	562	-5.1	207	70	—	—	—	—
平成24年	594	5.7	219	73	—	—	—	—
平成25年	616	3.7	227	77	—	—	—	—
平成26年	584	-5.2	215	74	—	—	—	—
平成27年	626	7.1	231	82	—	—	—	—
平成28年	647	3.4	239	77	—	—	—	—
平成29年	629	-2.8	232	80	—	—	—	—
平成30年	627	-0.4	231	83	—	—	—	—

(備考) 1 全国は日本観光協会「全国観光動向」による。
 2 過疎地域は総務省調べ。平成21年については、岩手県、宮城県、福島県の3県分の数値を含まない。
 また、平成27年については、九州北部豪雨により被災した福岡県朝倉市、大分県日田市の数値は含まない。
 3 全国の入込客数については、平成10年から東京都と大阪府を算入して両方で8億人増加したこと、平成11年には東京都が集計手法を変更して5億人減少したことにより、数字の変動が大きい。

2) 三大都市圏及び地方圏における外国人延べ宿泊者数比較

平成 25～令和元年の間の外国人延べ宿泊者数の推移は、全国的に年々増加傾向にある。三大都市圏と地方圏を比較すると、どちらの宿泊者数も増加しているものの、依然として宿泊者数の6割以上は三大都市圏が占めている（図表 2-4-23）。

図表 2-4-23 三大都市圏及び地方部における外国人延べ宿泊者数比較

(単位：万人)

	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
三大都市圏	2,164 (64.6%)	2,907 (65.4%)	4,047 (61.7%)	4,186 (60.3%)	4,703 (59.0%)	5,579 (59.2%)	7,257 (62.7%)
地方圏	1,186 (35.4%)	1,535 (34.6%)	2,514 (38.3%)	2,753 (39.7%)	3,266 (41.0%)	3,847 (40.8%)	4,309 (37.3%)

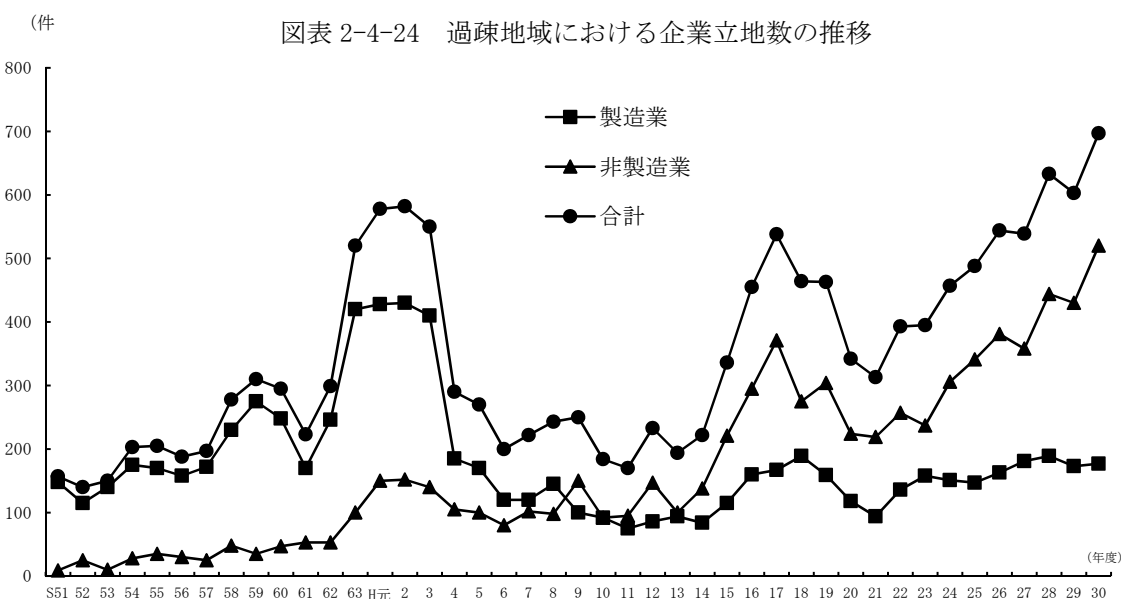
(備考) 1 観光庁「宿泊旅行統計調査」による。

2 () は全体に占める割合。

3 過疎地域における企業立地

1) 企業立地の状況

過疎地域における企業立地数の推移をみると、昭和 50 年代に着実に増加し、昭和 62 年度から平成 3 年度にかけて非常に高水準となった後、平成 4 年度以降は昭和 50 年代の水準に戻っている。平成 14 年度から製造業及び非製造業ともに再び増加傾向にあったものの、平成 18 年度に非製造業、平成 19 年度に製造業が減少に転じた。平成 22 年度以降は、いずれも増加傾向に転じている。また、平成 8 年度までは製造業が非製造業を上回っていたが、平成 9 年度以降は逆転している（図表 2-4-24）。



	S51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H元	2	3	4	5
製造業	148	115	140	175	170	158	172	230	275	248	170	246	420	428	430	410	185	170
非製造業	9	25	10	28	35	30	25	48	35	47	53	53	100	150	152	140	105	100
合計	157	140	150	203	205	188	197	278	310	295	223	299	520	578	582	550	290	270

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
製造業	120	120	145	100	92	75	86	94	84	115	160	167	189	159	118	94	136	158
非製造業	80	102	98	150	92	95	147	100	138	221	295	371	275	304	224	219	257	237
合計	200	222	243	250	184	170	233	194	222	336	455	538	464	463	342	313	393	395

	24	25	26	27	28	29	30
製造業	151	147	163	181	189	173	177
非製造業	306	341	381	358	444	430	520
合計	457	488	544	539	633	603	697

- (備考) 1 総務省調べ。
 2 調査対象は、操業又は営業を目的として年度内に用地取得した（借地を含む。）企業又は事業所である（未操業及び常用雇用者のないものを除く）。
 3 平成 21 年度の数値については、岩手県、宮城県、福島県の 3 県分の数値を含まない。
 平成 27 年度～平成 28 年度については、九州北部豪雨により被災した福岡県朝倉市、大分県日田市の数値は含まない。

2) ブロック別工場立地動向

過疎地域における平成30年の工場立地動向をブロック別にみると、立地件数においては東北及び九州が最も多く、敷地面積においては東北が最も多い(図表2-4-25)。

また、工場立地件数の推移をみると、非過疎地域では平成19年、過疎地域では平成20年を境に減少に転じたが、平成23年以降は両地域ともに増加している。過疎地域では平成30年に109件と、前年の113件から4件減少した。(図表2-4-26)。

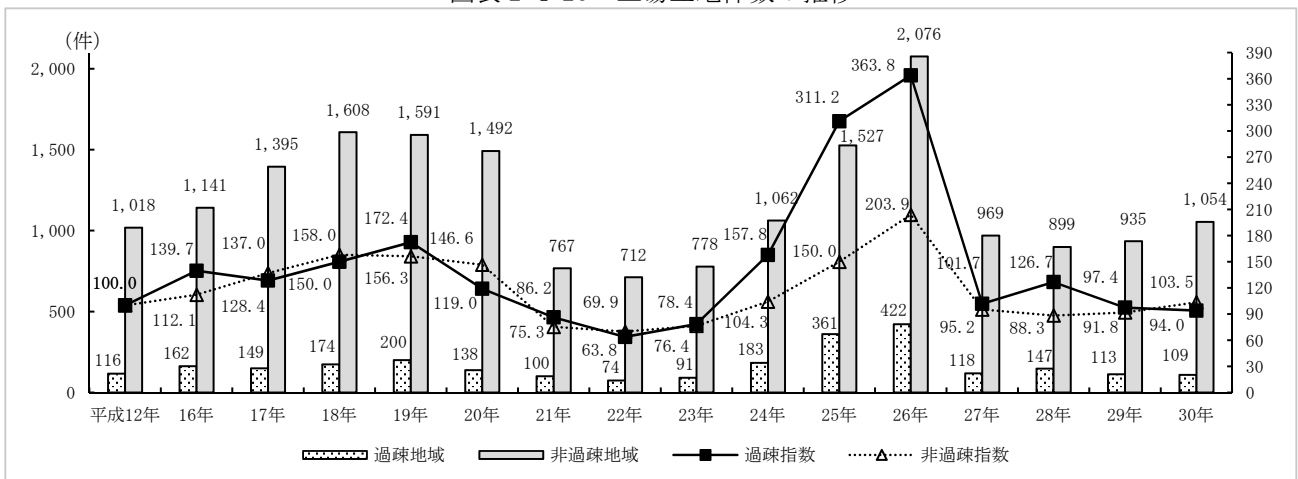
図表2-4-25 ブロック別工場立地動向

(単位：件、千㎡、%)

区分	立地件数	敷地面積			
		うち工業団地内	うち工業団地内		
過疎地域	北海道	9	1 (11.1)	60	7 (10.9)
	東北	24	10 (35.3)	313	190 (60.7)
	関東	4	0 (0.0)	20	0 (0.0)
	北陸	11	5 (45.5)	279	174 (62.5)
	東海	2	0 (0.0)	13	0 (0.0)
	近畿	14	6 (42.9)	129	97 (75.1)
	中国	16	6 (37.5)	135	48 (35.3)
	四国	5	0 (0.0)	15	0 (0.0)
	九州	24	8 (33.0)	308	138 (44.8)
	沖縄	0	0 (0.0)	0	0 (0.0)
計	109	36 (33.0)	1,273	654 (51.4)	
全国	1,163	413 (35.5)	15,020	6,797 (45.3)	

- (備考) 1 経済産業省「平成30年工場立地動向調査」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域は含まない。
 3 調査対象は、全国の製造業、電気業(水力発電所、地熱発電所、太陽光発電所を除く)、ガス業、熱供給業のための工場又は事業場を建設する目的をもって取得(借地を含む)された1,000㎡以上の用地(埋立予定地を含む)である。
 4 平成24年度以降の大幅な増加は、太陽光発電を目的とした電気業の立地案件の増加が大きき要因となっており、平成27年度以降は太陽光発電に係る立地案件が調査対象から除外されたため大きく減少している。
 5 () は全体に対する工業団地内の割合である。

図表2-4-26 工場立地件数の推移



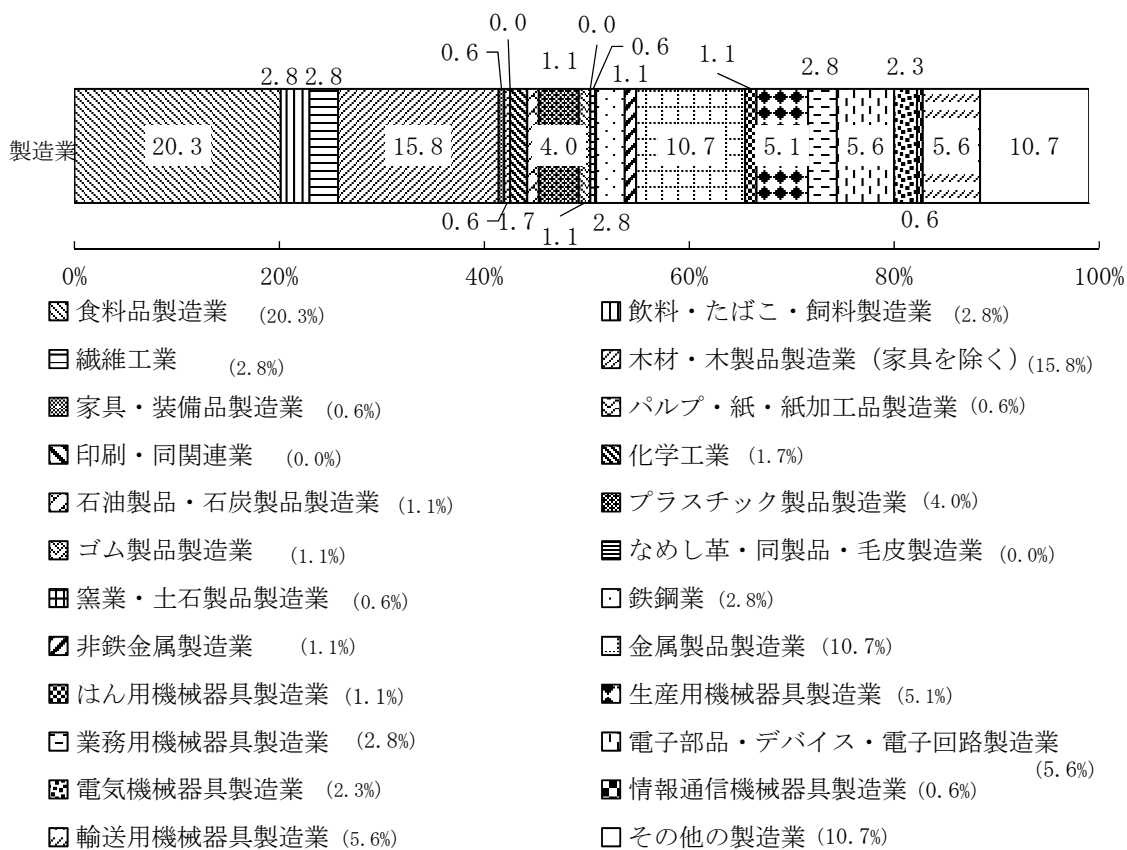
- (備考) 1 経済産業省「平成30年工場立地動向調査」による。
 2 過疎指数、非過疎指数は、平成12年の件数を100とした場合の指数である。

3) 業種別・規模別立地動向

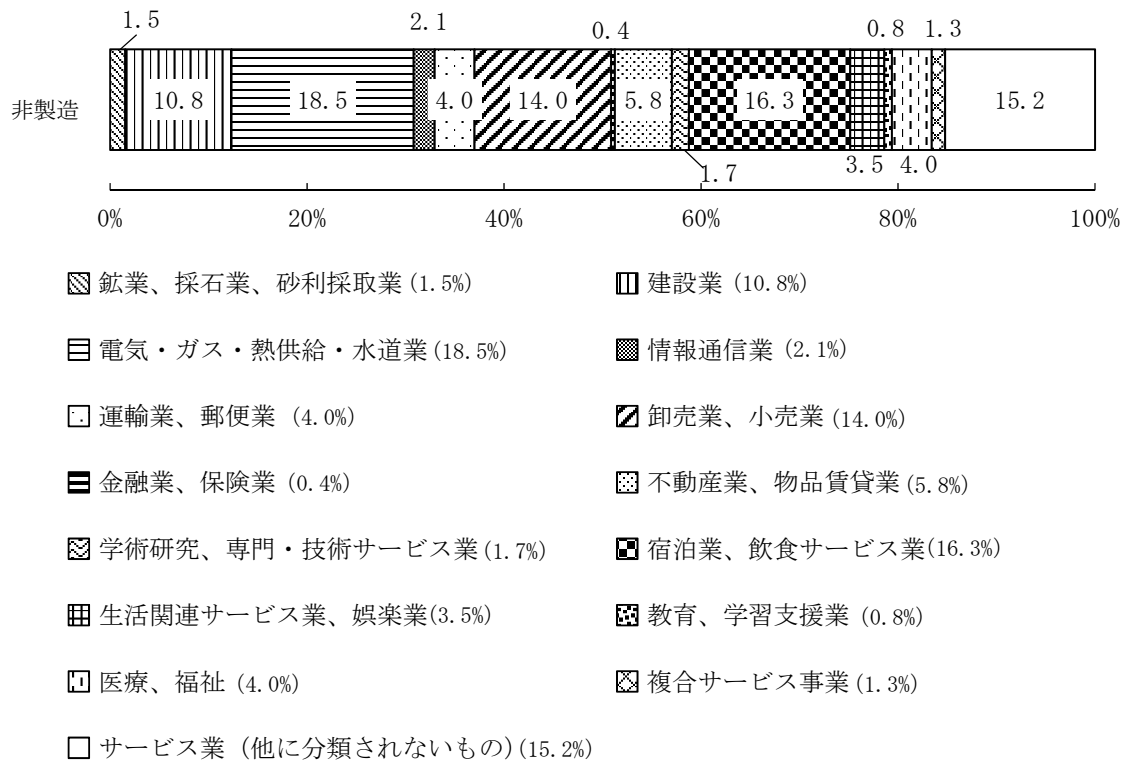
(業種別の立地動向)

過疎地域における平成30年度に立地した製造業・非製造業の立地動向を業種別にみると、製造業では食料品製造業が20.3%を占め、木材・木製品製造業（家具を除く）15.8%、金属製品製造業10.7%と続いている。非製造業では、電気・ガス・熱供給・水道業が18.5%を占め、宿泊業、飲食サービス業16.3%、サービス業（他に分類されないもの）が15.2%、卸売業・小売業が14.0%と続いている（図表2-4-27）。

図表 2-4-27 産業別就業立地割合



(備考) 1 総務省調べ。
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。



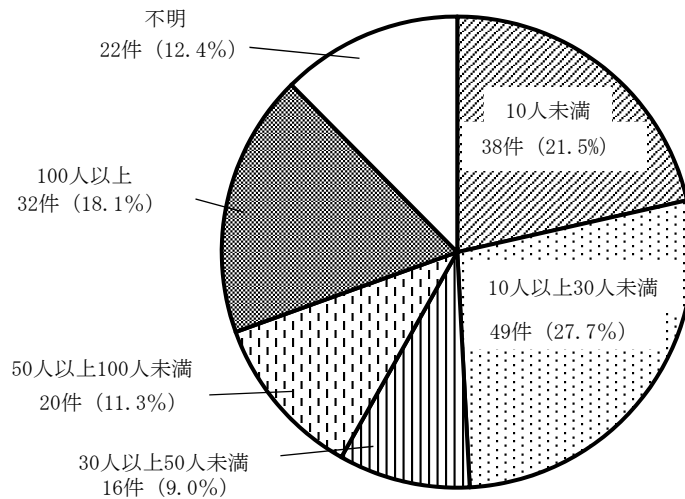
(備考) 1 総務省調べ。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。

(企業規模別の立地動向)

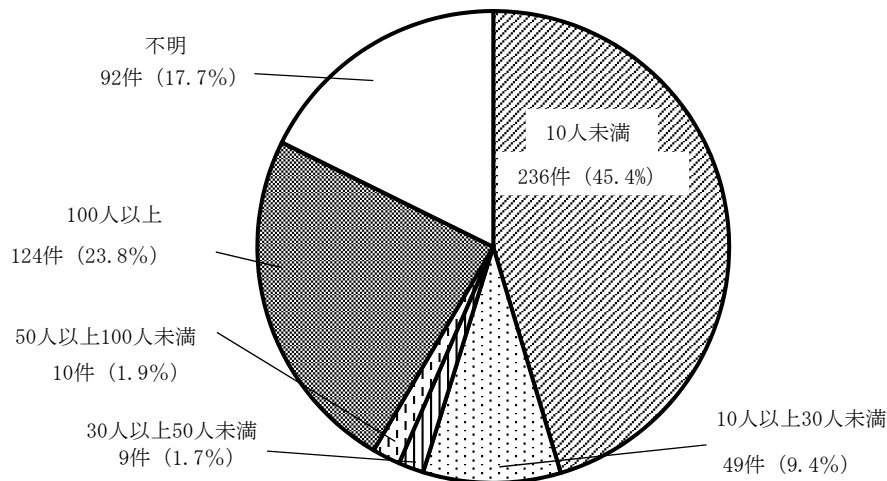
平成 30 年度において、過疎地域に立地した企業（697 件）を製造業（177 件）と非製造業（520 件）に分け、常用雇用者数の規模別にみると、常用雇用者 10 人未満の企業が、製造業では 21.5%であるのに対し、非製造業では 45.4%となっており、非製造業は小規模な企業が主体となっていることが分かる（図表 2-4-28）。

図表 2-4-28 平成 30 年度の過疎地域における企業規模別立地件数

製造業 N=177



非製造業 N=520



- (備考) 1 総務省調べ。
2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。

第5節 交通・通信

1 交通

交通体系の整備は、産業、雇用、教育、医療等の基礎となるものである。特に過疎地域においては、地形、気象等の自然的・地理的条件が厳しく、遠隔な立地特性のため、日常生活圏が広域化せざるを得なくなっている場合も多く、交通条件の改善は過疎地域自立促進の基本的条件となっている。

(1) 道路の整備状況

1) 国道・都道府県道の整備状況

道路の改良率、改良済幅員5.5m以上の整備率をみると、着実に整備が進められているものの、国道、都道府県道とも過疎地域は非過疎地域を下回っており、依然として格差がみられる。改良率のうち特に都道府県道については、平成30年の過疎地域と非過疎地域を比べると8.4ポイントの格差がある(図表2-5-1)。

図表 2-5-1 国道・都道府県道の整備状況

(単位：%)

区分	平成12年			平成28年			平成29年			平成30年		
	全国	過疎	非過疎	全国	過疎	非過疎	全国	過疎	非過疎	全国	過疎	非過疎
(改良率)												
国道	92.9	88.3	96.0	96.0	94.1	97.3	96.1	94.2	97.4	96.2	94.3	97.5
都道府県道	75.1	66.2	79.8	80.5	75.2	83.5	80.7	75.4	83.7	80.9	75.6	84.0
(改良済幅員5.5m以上の整備率)												
国道	89.2	83.2	93.2	93.6	91.0	95.4	93.6	91.1	95.5	93.8	91.2	95.6
都道府県道	63.2	54.0	67.9	70.2	64.3	73.6	70.2	64.5	73.8	70.6	64.7	73.9

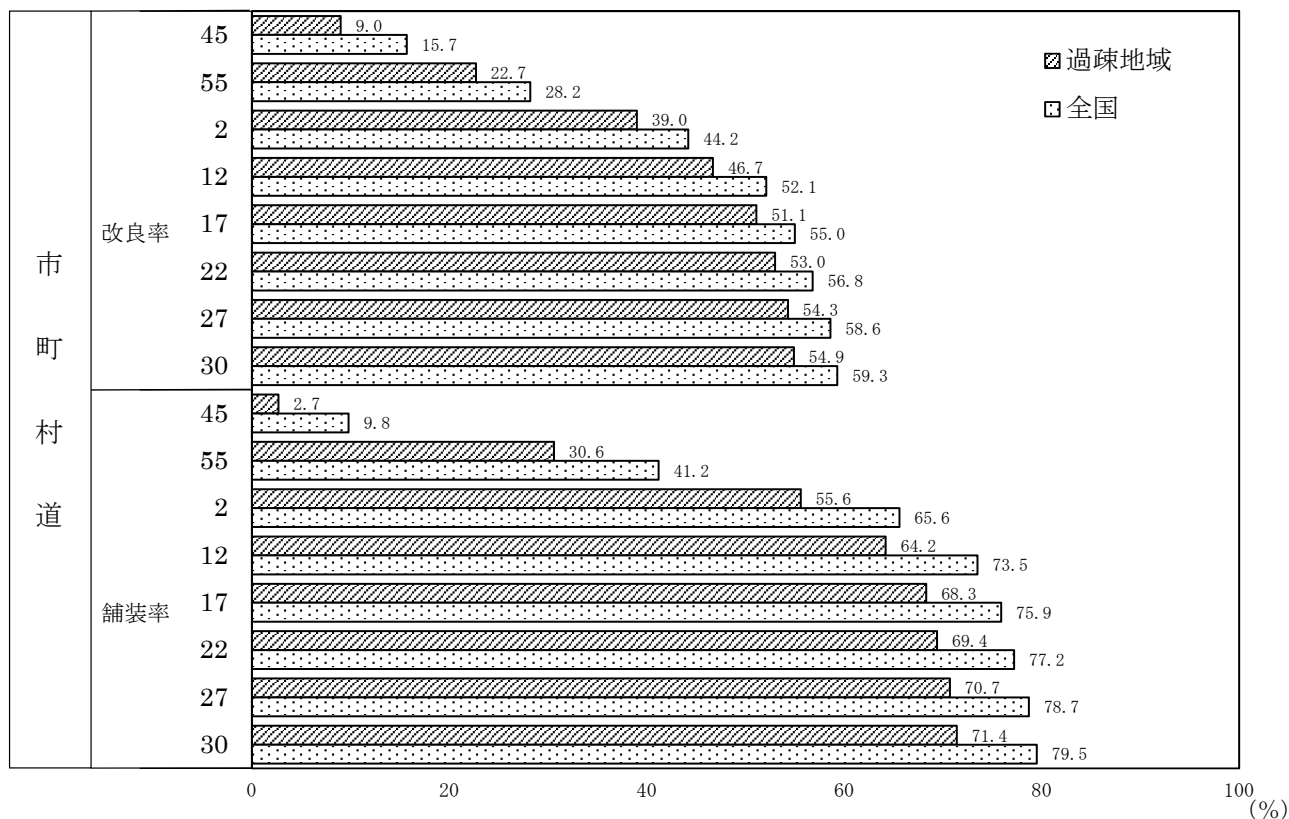
(備考) 1 国土交通省の資料を基に総務省が作成したものである。

2 過疎地域は令和2年4月1日現在であり、一部過疎市町村を含まない。非過疎地域は一部過疎市町村を含む。

2) 市町村道の整備状況

過疎地域における市町村道の整備水準は、昭和45年度から平成17年度の間には改良率、舗装率とも著しく改善されているが、未だに全国との間には格差がある（図表2-5-2）。

図表 2-5-2 市町村道の整備状況



項目	単位	昭和45年度		昭和55年度		平成2年度		平成12年度		平成17年度		
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	
市町村道	改良率	%	9.0	15.7	22.7	28.2	39.0	44.2	46.7	52.1	51.1	55.0
	舗装率	%	2.7	9.8	30.6	41.2	55.6	65.6	64.2	73.5	68.3	75.9

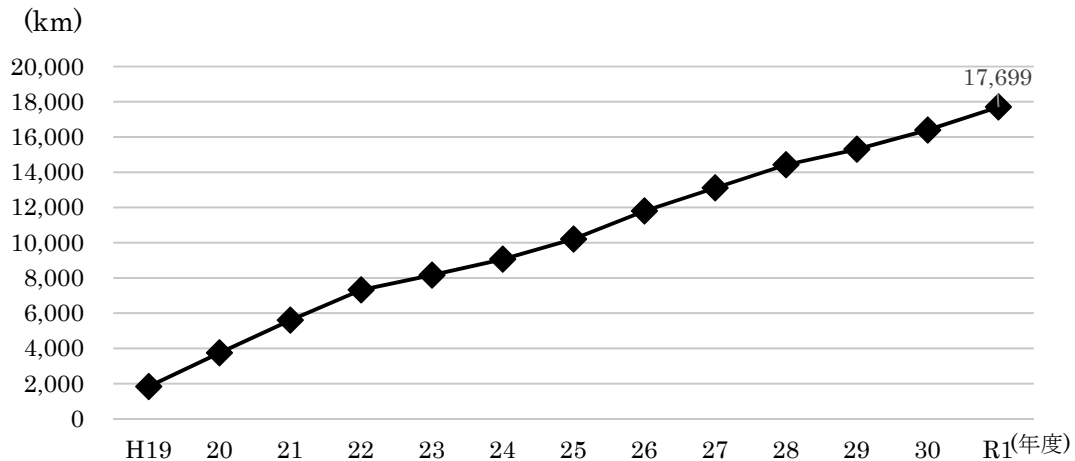
項目	単位	平成22年度		平成27年度		平成30年度		
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	
市町村道	改良率	%	53.0	56.8	54.3	58.6	54.9	59.3
	舗装率	%	69.4	77.2	70.7	78.7	71.4	79.5

- (備考) 1 平成17年度までのデータは、総務省「公共施設状況調査」等による。平成22年度以降の「改良率」及び「舗装率」のデータは国土交通省の資料を基に総務省が作成したものである。
- 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在である。平成17年度については、一部過疎地域のうちデータが取得できない286区域を過疎地域から除いている。また、平成22年度以降のデータは一部過疎地域を含まない。

(2) 乗合バスと鉄軌道路線の廃止状況

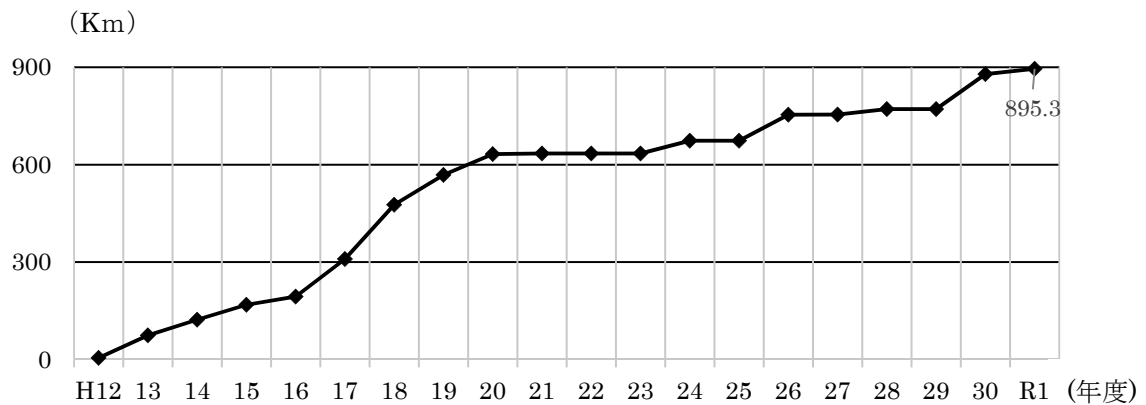
人口減少等による採算性の悪化を受けて、一般路線バスの路線数の減少や地方部の鉄軌道路線の廃止がなされているところもあり、全国の乗合バスの廃止路線キロ数の累計と全国の鉄軌道の廃止路線長の累計は、以下のとおりとなっている（図表 2-5-3、2-5-4）。

図表 2-5-3 全国の乗合バスの廃止路線キロ数（累計）



（高速バスを除く、代替がない完全廃止のもの）

図表 2-5-4 全国の鉄軌道の廃止路線長（累計）



（備考） 国土交通省の資料を基に総務省が作成したものである。

2 高度情報化への対応

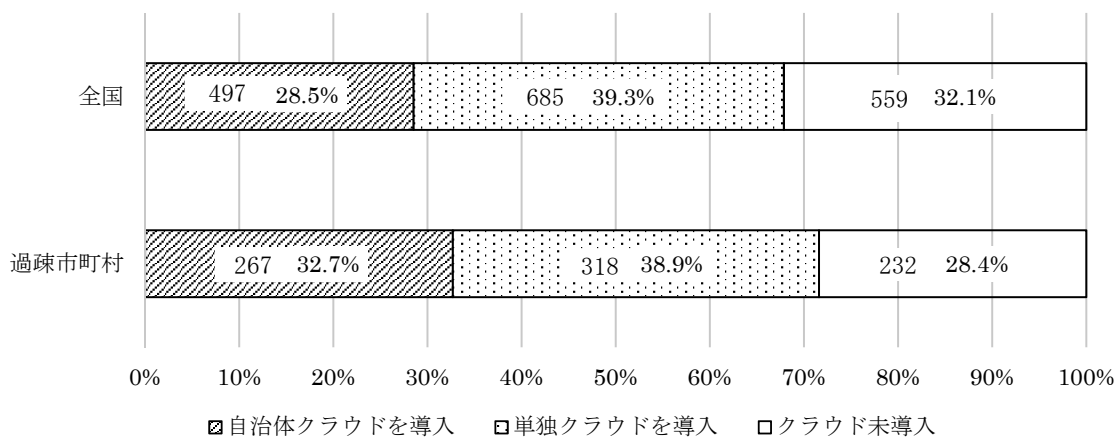
情報化の進展は、時間・距離の制約が緩和される点において、遠隔な立地という過疎地域の不利な条件を克服する大きな手がかりとなる。

(1) 地方公共団体におけるクラウドの導入状況

自治体クラウドは、近年様々な分野で活用が進んでいるクラウドコンピューティング技術を電子自治体の基盤構築にも活用して、地方公共団体の情報システムの集約と共同利用を進めることにより、情報システムに係る経費の削減や住民サービスの向上等を図るものである。また、東日本大震災の経験も踏まえ、堅牢なデータセンターを活用することで、行政情報を保全し、災害・事故等発生時の業務継続を確保する観点からも、自治体クラウドの推進が求められている。

平成30年4月1日現在の地方公共団体におけるクラウドの導入状況をみると、全国1,741市区町村のうち、「自治体クラウドを導入」または「単独クラウドを導入」している団体は1,182団体(67.9%)であるのに対し、過疎地域では、817市町村のうち、585団体(71.6%)となり、全国を3.7ポイント上回っている(図表2-5-5)。

図表 2-5-5 クラウドの導入状況



- (備考) 1 総務省「地方行政サービス改革の取組状況等に関する調査等」による。
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在である。

(2) 携帯電話サービスエリアの状況

過疎地域における携帯電話サービスエリアカバー率については、平成19年度末の98.1%に対して、令和元年度末は99.94%となっており、全国との格差はほぼ改善されている（図表2-5-6）。

図表2-5-6 携帯電話サービスエリアカバー率（夜間人口ベース）の状況
（単位：％）

		過疎地域	全 国
平成19年度	エリア内	98.1	99.8
	エリア外	1.9	0.2
令和元年度	エリア内	99.94	99.99
	エリア外	0.06	0.01

- （備考）1 総務省調べ。
2 過疎地域、サービスエリアカバー率は各年度末時点。
3 夜間人口とは、夜間に常住する（そこに居住する）人口である。

(3) ブロードバンドの整備状況

平成31年3月末の過疎地域における超高速ブロードバンドサービスエリアの世帯カバー率に関しては、移動系では99.2%と全国との差はほぼない。一方、固定系では97.1%と全国の99.9%と比べ2.4ポイント低い。また、固定系のうちFTTH（光回線）については、92.7%と全国の98.8%と比べ6.1ポイント低い（図表2-5-7）。

図表2-5-7 超高速ブロードバンドの整備状況

区 分	移動系超高速ブロードバンドサービスエリアの世帯カバー率	固定系ブロードバンドサービスエリアの世帯カバー率
過疎地域	99.2%	97.1%（うちFTTH 92.7%）
全 国	99.9%	99.5%（うちFTTH 98.8%）

- （備考）1 平成31年3月末の整備状況について推計したもの（総務省調べ）。
2 過疎地域は、令和2年4月1日現在。
3 移動系超高速ブロードバンドサービス：LTE、BWA
固定系超高速ブロードバンドサービス：FTTH、CATV、FWA
※BWA、CATV及びFWAについては、下り30Mbps以上に限る。
4 世帯カバー率は、住民基本台帳等に基づき、事業者情報等から一定の仮定の下に推計したエリア内の利用可能世帯数を総世帯で除したもの（小数点以下第2位を切捨て）。

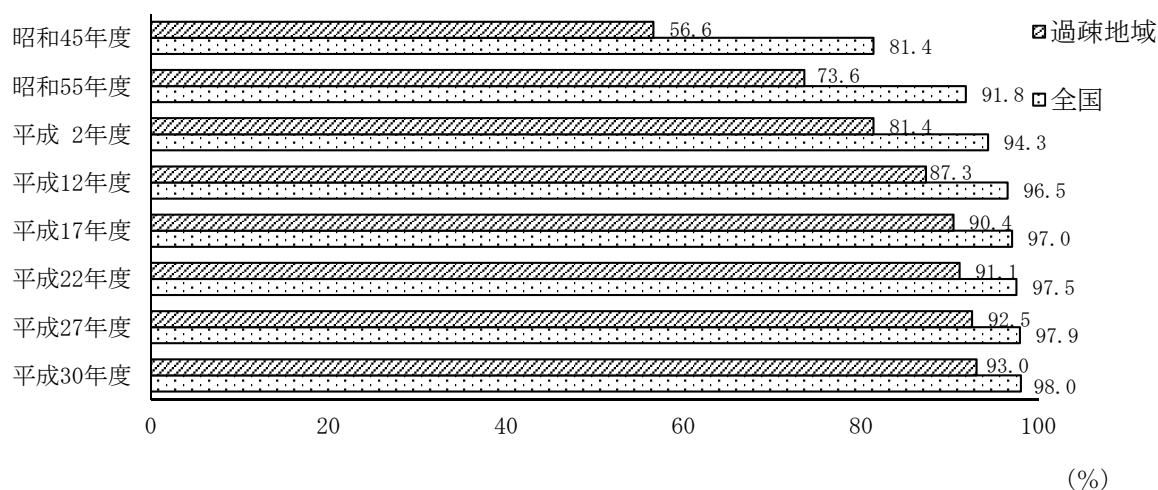
第6節 生活環境

過疎地域における主要な公共施設の整備水準は、全国水準とかなりの格差があるものも少なく存在しているが、昭和45年の緊急措置法以来の各種事業の推進により、以下に示すとおり、かなりの程度の改善がみられる。

1 上水道

上水道、簡易水道を含めた水道の普及率は、昭和45年度には、過疎地域56.6%に対し全国81.4%と大きな格差があったものが、平成30年度には過疎地域93.0%、全国98.0%となっており、格差はかなり縮小しつつある（図表2-6-1）。

図表2-6-1 水道普及率の推移



(単位: %)

区 分	昭和45年度	昭和55年度	平成2年度	平成12年度	平成17年度	平成22年度	平成27年度	平成30年度
過疎地域	56.6	73.6	81.4	87.3	90.4	91.1	92.5	93.0
全 国	81.4	91.8	94.3	96.5	97.0	97.5	97.9	98.0

- (備考) 1 平成17年度までは、総務省「公共施設状況調査」等による。
 2 平成17年度については、一部過疎地域のうちデータを取得できない275区域を過疎地域から除いている。
 3 平成22年度以降は、日本水道協会「水道統計」によるものであり、一部過疎地域を除いている。また、水道普及率には専用水道を含む。

2 生活排水関連施設

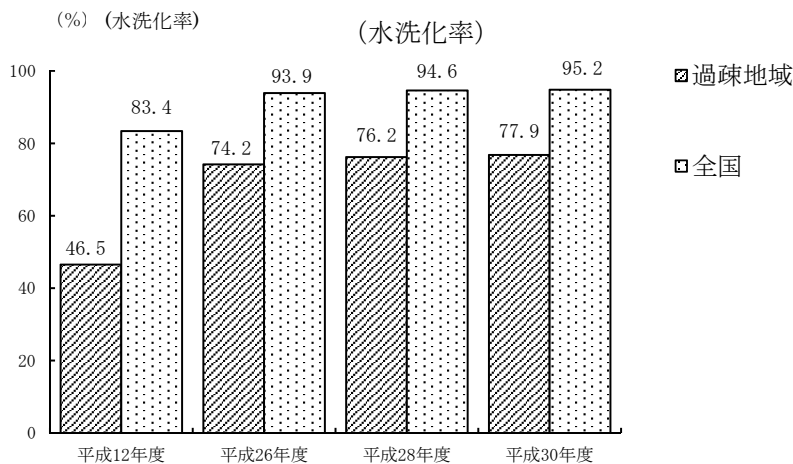
1) 水洗化人口の推移

過疎地域における水洗化率の推移をみると、平成12年度の46.5%から平成30年度には77.9%に増加しているが、全国と比べると、なお格差が残されている（図表2-6-2）。

2) 水洗化人口の内訳

平成30年度における水洗化人口の内訳をみると、全国では公共下水道が79.4%を占めているのに対し、過疎地域では浄化槽が52.0%と水洗化人口の過半数を占めている（図表2-6-2）。

図表2-6-2 水洗化人口の状況



(水洗化人口の内訳)

(単位：千人、%)

項目	平成12年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度	
	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎
公共下水道人口 A	71,222 (67.4)	823 (22.2)	95,056 (78.6)	3,545 (46.8)	95,703 (79.0)	3,533 (47.1)	96,280 (79.4)	3,520 (47.0)
コミュニティ プラント人口 B	414 (0.4)	19 (0.5)	286 (0.2)	37 (0.5)	320 (0.3)	76 (1.0)	336 (0.3)	76 (1.0)
浄化槽人口 C	34,095 (32.2)	2,865 (77.3)	25,648 (21.2)	3,995 (52.7)	25,100 (20.7)	3,896 (51.9)	24,657 (20.3)	3,889 (52.0)
うち合併処理	10,806 (10.2)	14,630 (12.1)	2,565 (33.9)	14,557 (12.0)	2,546 (33.9)	2,565 (33.9)	14,506 (12.0)	2,587 (34.6)
水洗化人口 D=A+B+C	105,731 (100.0)	3,707 (100.0)	120,991 (100.0)	7,578 (100.0)	121,123 (100.0)	7,505 (100.0)	121,273 (100.0)	7,485 (100.0)
非水洗化人口 E	21,002	4,258	6,933	2,363	6,596	2,271	6,165	2,122
総人口 F	126,734	7,966	127,924	9,941	127,718	9,776	127,438	9,607
水洗化率 D/F	83.4	46.5	94.6	76.2	94.8	76.8	95.2	77.9

- (備考) 1 環境省「一般廃棄物処理事業実態調査」による。
 2 ()内は水洗化人口の構成割合である。
 3 過疎地域は、一部過疎地域を含まない。

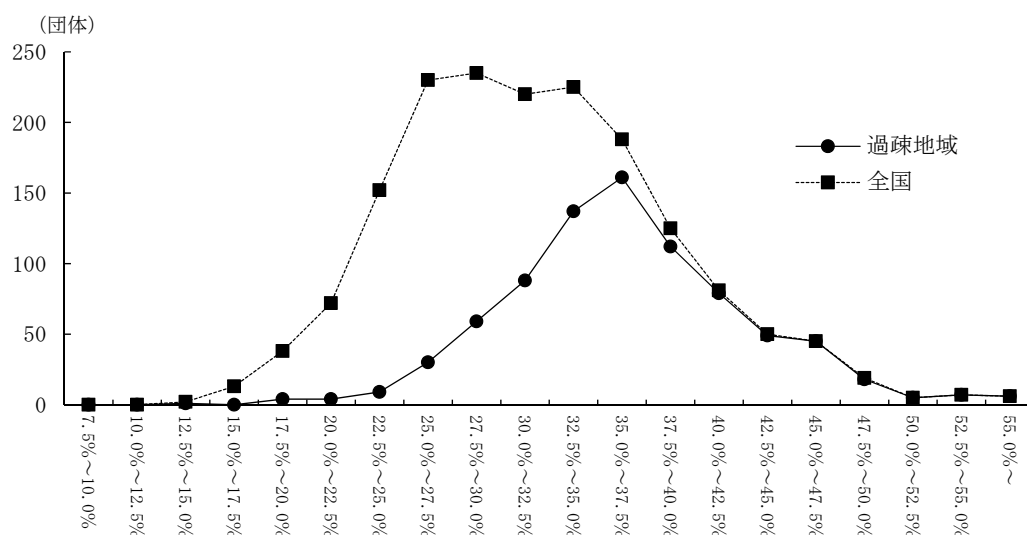
第7節 高齢化・福祉・医療

1 高齢化への対応

(1) 過疎地域の高齢化

過疎地域全体の高齢者比率（単純平均）は36.7%であり、非過疎地域の27.4%を大きく上回っている。高齢者比率の度数分布をみても、全国のピークが27.5%～30.0%であるのに対して過疎地域のピークは35.0%～37.5%であり、過疎地域は全国に先行して高齢化が進んでいるといえる（図表2-7-1）。

図表 2-7-1 高齢者比率の度数分布



区 分	市町村数	単純平均	中 央 値	最多頻度
過疎地域	814	36.7%	36.3%	35.0%～37.5%
				161 団体
非過疎地域	899	27.4%	27.3%	25.0%～27.5%
				200 団体
全 国	1,713	31.8%	31.3%	27.5%～30.0%
				235 団体

- (備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在であり、過疎地域の市町村数は、過疎関係市町村数による。
また、東京都特別区を1団体とみなす。なお、東日本大震災により町村全域に避難指示が出ていた福島県浪江町、葛尾村、飯館村を過疎地域の市町村数から除き、富岡町、大熊町、双葉町を非過疎地域の市町村数から除く。
- 2 人口は平成27年国勢調査であり、一部過疎市町村については、市町村全域の人口による。
- 3 数値は、各市町村ごとの高齢者比率を単純平均したものである。

(2) 高齢者福祉施設及び児童福祉施設の整備・サービスの状況

1) 高齢者福祉施設の整備状況

平成30年における、過疎地域での65歳以上人口1万人に対しての各種高齢者施設の定員数をみると、軽費老人ホームを除き、いずれの施設についても、全国平均より多くなっている(図表2-7-2)。

また、平成12年から平成30年までの施設数の増減率をみると、軽費老人ホームでは過疎地域が全国を上回っているものの、その他の施設は過疎地域が全国を下回っている(図表2-7-3)。

図表2-7-2 65歳以上人口1万人に対しての高齢者福祉施設の整備状況(定員)

(単位:人/65歳以上1万人)

区分	平成12年		平成17年		平成22年		平成27年		平成30年		12→30増減率	
	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
特別養護老人ホーム	151	89	171	115	169	121	188	134	204	167	35.1	87.6
養護老人ホーム	40	20	41	20	38	17	39	19	39	19	-2.5	-5.0
軽費老人ホーム	16	18	22	25	24	21	26	27	27	28	68.8	55.6
介護老人保健施設	91	70	104	89	106	92	114	98	120	112	31.9	60.0

- (備考) 1 厚生労働省「介護サービス施設・事業所調査」及び「社会福祉施設等調査」による。
 2 65歳以上の人口は平成27年度国勢調査による。
 3 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

図表2-7-3 高齢者福祉施設の整備状況(施設数)

(単位:箇所)

区分	平成12年		平成17年		平成22年		平成27年		平成30年		12→30増減率	
	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
特別養護老人ホーム	1,014	4,463	1,142	5,535	1,098	5,676	1,281	7,065	1,380	8,097	36.1	81.4
養護老人ホーム	260	949	264	964	280	822	256	936	259	953	-0.4	0.4
軽費老人ホーム	185	1,444	255	1,966	322	1,683	296	2,166	313	2,306	69.2	59.7
老人福祉センター	498	2,271	469	2,284	451	1,814	385	2,001	395	1,992	-20.7	-12.3
通所介護事業所	1,754	8,037	2,685	17,652	2,980	22,738	3,971	36,757	4,398	43,824	150.7	445.3
短期入所生活介護事業所	1,047	4,515	1,271	6,216	1,306	7,096	1,747	9,924	1,916	11,434	83.0	153.2
老人介護支援センター	1,481	6,964	1,768	8,668	-	-	-	-	-	-	-	-
介護老人保健施設	452	2,667	510	3,278	523	3,382	591	3,857	642	4,335	42.0	62.5

- (備考) 1 特別養護老人ホーム、通所介護事業所(地域密着型通所介護事業所を含む)、短期入所生活介護事業所、介護老人保健施設は厚生労働省「介護サービス施設・事業所調査」による。養護老人ホーム、軽費老人ホーム、老人福祉センター、老人介護支援センターは厚生労働省「社会福祉施設等調査」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

2) 居宅介護サービスの利用状況

高齢化の進展に伴い、居宅介護サービスの利用状況は、過疎地域を含めた全国的な傾向として大きく増加をしているが、過疎地域における居宅介護サービスの利用状況を高齢者 100 人当たりの年間利用件数で見ると、平成 30 年度における通所サービスは 63.5 件（全国 65.4 件）、短期入所サービスは 18.3 件（全国 14.4 件）であり、全国と大きな差はないものの、訪問サービスは 61.8 件（全国 107.6 件）と全国を大きく下回っている（図表 2-7-4）。

図表 2-7-4 居宅介護サービスの利用状況

（単位：件）

区 分		訪問サービス		通所サービス		短期入所サービス	
		利 用 延件数	100 人当 たり年間 利用件数	利 用 延件数	100 人当 たり年間 利用件数	利 用 延件数	100 人当 たり年間 利用件数
平 成 14 年度	過疎地域	1,306,127	36.9	1,747,565	49.4	280,219	7.9
	全 国	14,328,946	42.8	13,147,749	39.3	2,377,631	7.1
平 成 21 年度	過疎地域	1,930,952	54.5	2,821,918	79.7	537,276	15.2
	全 国	19,987,937	59.7	21,673,909	64.8	4,093,227	12.2
平 成 27 年度	過疎地域	2,468,219	69.7	3,275,004	92.5	648,171	18.3
	全 国	34,933,556	104.4	30,848,606	92.2	4,724,457	14.1
平 成 28 年度	過疎地域	2,438,480	68.9	2,803,746	79.2	648,508	18.3
	全 国	35,886,808	107.2	26,257,264	78.5	4,740,372	14.2
平 成 29 年度	過疎地域	2,272,392	64.2	2,449,532	69.2	650,065	18.4
	全 国	35,364,323	105.7	23,334,609	69.7	4,792,592	14.3
平 成 30 年度	過疎地域	2,187,161	61.8	2,249,865	63.5	649,399	18.3
	全 国	36,010,971	107.6	21,871,168	65.4	4,824,989	14.4

（備考）1 厚生労働省「介護保険事業状況報告」による。

2 100 人当たりは、65 歳以上人口の 100 人当たりをいう。

3 人口は平成 27 年国勢調査による。

4 過疎地域は令和 2 年 4 月 1 日現在であり、一部過疎地域を含まない。また、広域連合、事務組合については、構成市町村に一部過疎地域又は非過疎地域のいずれかを含むものは除いている。

2 医療

(1) 診療施設の整備状況

過疎地域における診療施設の整備状況を人口1万人当たりの病床数に着目してみると、昭和45年度以降、過疎地域における病床数は全国を下回っていたが、最近は全国的に病床数が減少していることや、過疎地域の人口減少もあり、全国と過疎地域が逆転している(図表2-7-5)。

また、主な専門科別医師数をみると、過疎地域は、全国に比べて小児科や産婦人科・産科の医師が少ない(図表2-7-6)。

図表2-7-5 診療施設の整備状況

項目	単位	昭和45年度		昭和55年度		平成2年度		平成12年度		平成17年度	
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
病院数	箇所	652	8,212	607	9,356	642	10,436	673	9,331	960	9,063
診療所数	箇所	4,666	88,835	4,759	110,227	4,596	130,220	6,282	151,280	9,427	158,349
病院・診療所の病床数	床	77,649	1,280,023	79,110	1,607,870	90,726	1,951,338	95,327	1,870,020	153,798	1,806,480
1万人当たりの病床数	床	78.1	122.4	92.6	137.4	118.9	158.4	123.9	148.1	161.2	142.2

項目	単位	平成22年度		平成27年度		平成29年度		平成30年度	
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国
病院数	箇所	1,027	8,343	977	8,254	960	8,197	955	8,155
診療所数	箇所	10,159	154,928	10,009	159,942	9,947	162,068	9,857	162,767
病院・診療所の病床数	床	161,129	1,658,957	150,516	1,629,778	146,796	1,615,673	144,401	1,595,828
1万人当たりの病床数	床	151.9	129.5	154.0	128.2	150.2	127.1	147.7	125.6

- (備考) 1 総務省「公共施設状況調査」等による。
 2 平成17年度については、一部過疎市町村のうち、データが取得できない275区域を除いている。
 3 平成22年度以降の過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

図表 2-7-6 主な専門科別医師

(単位：人)

	総数	内科	小児科	外科	眼科
過疎地域	15,064	7,057	651	1,529	536
人口1万人当たり	15.4	7.2	0.7	1.6	0.5
全 国	311,922	112,439	17,319	26,566	13,325
人口1万人当たり	24.5	8.8	1.4	2.1	1.0

	耳鼻いんこう科	産婦人科・産科	臨床研修医	その他
過疎地域	295	430	449	4,117
人口1万人当たり	0.3	0.4	0.5	4.2
全 国	9,286	11,332	17,321	104,334
人口1万人当たり	0.7	0.9	1.4	8.2

(備考) 1 厚生労働省「令和元年医師・歯科医師・薬剤師調査」による。
 2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域は含まない。

(2) 無医地区の状況

全国的に無医地区の減少が図られる中、過疎市町村における無医地区数をみると、昭和53年の1,168地区から令和元年には543地区へと減少しているが、非過疎市町村と比較して減少のペースは鈍く、無医地区の約90%が過疎地域に存在している(図表2-7-7)。

※無医地区とは、医療機関のない地域で、当該地区の中心的な場所を起点として、概ね半径4kmの区域内に50人以上が居住している地域であって、かつ容易に医療機関を利用することができない地区をいう。

図表 2-7-7 無医地区の状況

(単位：箇所、%)

区 分		昭和 53年 10月	昭和 59年 10月	平成 6年 9月	平成 11年 6月	平成 16年 12月	平成 21年 10月	平成 26年 10月	令和 元年 10月	S53 ~R1 増減率
過疎	無医地区数	1,168	887	725	715	621	565	574	543	△ 53.5
市町村	無医地区を有する市町村数	555	463	389	368	312	203	219	205	△ 63.1
非過疎	無医地区数	582	389	272	199	165	140	63	58	△ 90.0
市町村	無医地区を有する市町村数	323	230	156	127	97	86	37	35	△ 89.2

(備考) 1 厚生労働省「無医地区等調査」による。
 2 令和元年の過疎地域は、令和2年4月1日現在。

第8節 教育・文化の振興

1 教育

(1) 義務教育

過疎地域における小学校及び中学校の状況をみると、昭和45年度に比べ、令和元年度には児童数が60.9%、生徒数が66.7%減少している。また、これに伴い学校数、教員数も減少している。

一方、全国の推移をみると、児童数及び生徒数はいわゆる団塊ジュニア世代（昭和46～49年生まれ）が就学している昭和55年度にピークを迎え、その後減少していることがわかる。

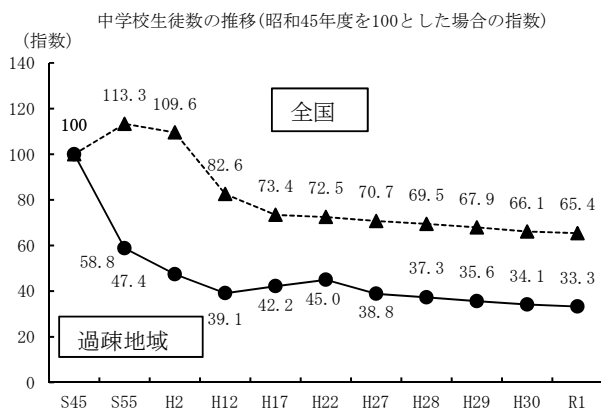
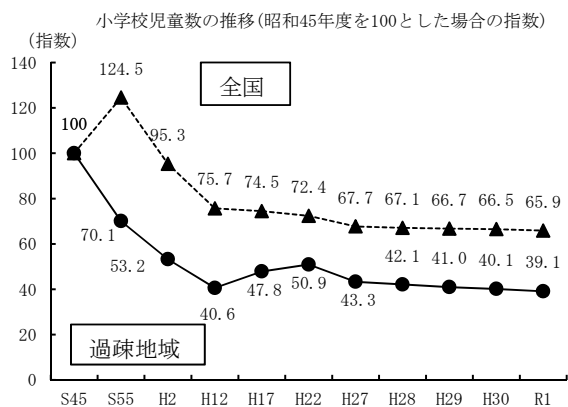
また、令和元年度における1学校当たりの児童数及び生徒数は、児童数が117人、生徒数が119人となっており、全国と比較すると、児童数が36.3%、生徒数が37.8%の水準であることから、過疎地域においては比較的小規模校が多いことが分かる（図表2-8-1）。

図表2-8-1 義務教育の状況

項目	単位	昭和45年度		昭和55年度		平成2年度		平成12年度		平成17年度		
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	
小学校	学校数	校	6,622	24,313	5,677	24,732	4,950	24,557	4,890	23,719	4,475	22,606
	うち分校数	校	929	2,346	522	1,244	315	775	211	514	132	344
	教員数	人	55,570	370,578	50,354	469,343	46,209	440,443	44,587	396,834	46,770	404,367
	児童数	人	1,023,569	9,491,866	717,134	11,819,045	544,812	9,045,154	415,369	7,182,432	489,718	7,067,832
	1学校当たり児童数	人	155	390	126	478	110	368	85	303	109	313
中学校	学校数	校	2,793	10,215	2,261	10,178	1,973	10,595	2,053	10,428	1,970	10,154
	うち分校数	校	120	323	34	130	22	92	15	73	12	70
	教員数	人	37,380	216,520	29,036	249,778	26,312	275,761	26,548	238,651	27,787	228,947
	生徒数	人	632,131	4,510,815	371,719	5,111,822	299,639	4,942,223	247,266	3,724,593	266,524	3,312,007
	1学校当たり生徒数	人	226	442	164	502	152	466	120	357	135	326

項目	単位	平成22年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度		
		過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	過疎地域	全国	
小学校	学校数	校	4,602	21,713	3,640	20,011	3,550	19,794	3,479	19,591	3,418	19,432
	うち分校数	校	99	270	44	174	41	166	40	163	39	155
	教員数	人	51,930	413,473	45,555	410,116	44,923	411,898	44,420	413,720	43,994	414,901
	児童数	人	521,016	6,869,318	431,214	6,366,785	419,244	6,333,289	410,890	6,312,251	400,159	6,253,022
	1学校当たり児童数	人	113	316	118	318	118	320	118	322	117	322
中学校	学校数	校	2,125	9,982	1,866	9,555	1,819	9,479	1,819	10,270	1,770	9,371
	うち分校数	校	13	80	9	80	8	78	8	80	8	81
	教員数	人	31,246	234,471	28,565	235,223	27,788	233,247	27,226	230,366	26,795	229,895
	生徒数	人	284,271	3,270,582	235,651	3,133,644	225,037	3,063,833	215,858	2,983,705	210,288	2,950,331
	1学校当たり生徒数	人	134	328	126	328	124	323	119	291	119	315

- (備考) 1 平成17年度までは、総務省「公共施設状況調査」等、平成22年度以降は、文部科学省「学校基本調査」による。
 2 平成17年度については、一部過疎地域のうちデータを取得できない275区域を過疎地域から除いている。
 3 平成22年度以降の過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。



- (備考) 1 平成17年度までは、総務省「公共施設状況調査」等、平成22年度以降は、文部科学省「学校基本調査」による。
 2 平成17年度については、一部過疎地域のうちデータを取得できない275区域を過疎地域から除いている。
 3 平成22年度以降の過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域を含まない。

(2) 幼児教育

1) 保育所の状況

過疎地域と全国の保育所数等についてみると、平成14年から平成29年における過疎地域の保育所等数及び在所要者数は一貫して減少しているが、全国では増加傾向にある。また、同期間における在所要率をみると、過疎地域、全国ともに減少している。

幼保連携型認定こども園についてみると、平成27年の数値に比べて平成29年の数値が過疎地域、全国ともに増加している（図表2-8-2）。

図表2-8-2 保育所の状況について

区分	単位	平成14年		平成22年		平成27年		平成29年	
		過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
保育所等数	箇所	3,942	22,288	3,333	21,681	3,272	24,234	3,258	25,660
定員数	千人	253	1,960	231	2,033	236	2,352	241	2,505
在所要者数	千人	235	2,005	213	2,057	212	2,295	212	2,504
1市町村あたり 保育所数	箇所	5.9	13.0	5.0	12.6	4.9	14.1	4.8	14.9
在所要率	%	92.8	102.3	92.0	101.2	90.1	97.6	88.0	99.9
うち幼保連携型認定 こども園数	箇所	—	—	—	—	259	1,817	418	3,377
定員数	千人	—	—	—	—	20	175	33	341
在所要者数	千人	—	—	—	—	19	170	32	331
1市町村あたり 保育所数	箇所	—	—	—	—	0.4	1.1	0.6	2.0
在所要率	%	—	—	—	—	94.7	97.1	96.5	97.0

(備考) 1 厚生労働省「社会福祉施設等調査」による。

2 保育所等とは、平成14年、平成22年については「保育所」、平成27年から平成29年については「保育所」「小規模保育事務所」「幼保連携型認定こども園」「保育所型認定こども園」のことをいう。

3 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域は含まない。

2) 待機児童数の状況

待機児童数は過疎地域と全国いずれも平成30年に大きく減少したが、過疎地域については平成31年には再び増加した（図表2-8-3）。

図表2-8-3 待機児童数の状況

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	平成31年
過疎地域	414	352	288	208	329
全国	23,167	23,553	26,081	19,895	16,772

(備考) 1 厚生労働省「保育所等関連状況」より

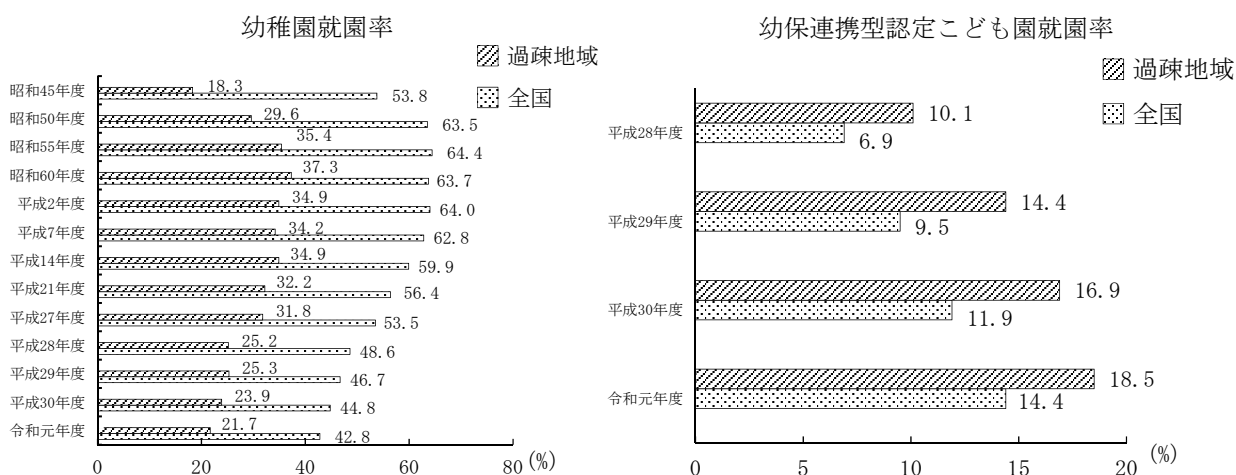
2 過疎地域は令和2年4月1日現在。一部過疎は含まない。

3) 幼稚園就園率

幼稚園就園率を過疎地域と全国で比較すると、昭和45年度以降、格差が小さくなる傾向にある。近年では過疎地域及び全国ともに就園率が低下傾向にある。

また、幼保連携型認定こども園就園率では、平成28年度から令和元年度において、過疎地域が全国を上回っている（図表2-8-4）。

図表 2-8-4 幼稚園就園率



(単位：%)

区分	昭和45年度		昭和50年度		昭和55年度		昭和60年度		平成2年度		平成7年度		平成14年度		平成21年度	
	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
幼稚園	18.3	53.8	29.6	63.5	35.4	64.4	37.3	63.7	34.9	64	34.2	62.8	34.9	59.9	32.2	56.4
幼保連携型認定こども園	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

区分	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度	
	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
幼稚園	31.8	53.5	25.2	48.6	25.3	46.7	23.9	44.8	21.7	41.8
幼保連携型認定こども園	-	-	10.1	6.9	14.4	9.5	16.9	11.9	18.5	14.4

(備考) 1 全国は、文部科学省「学校基本調査」による。

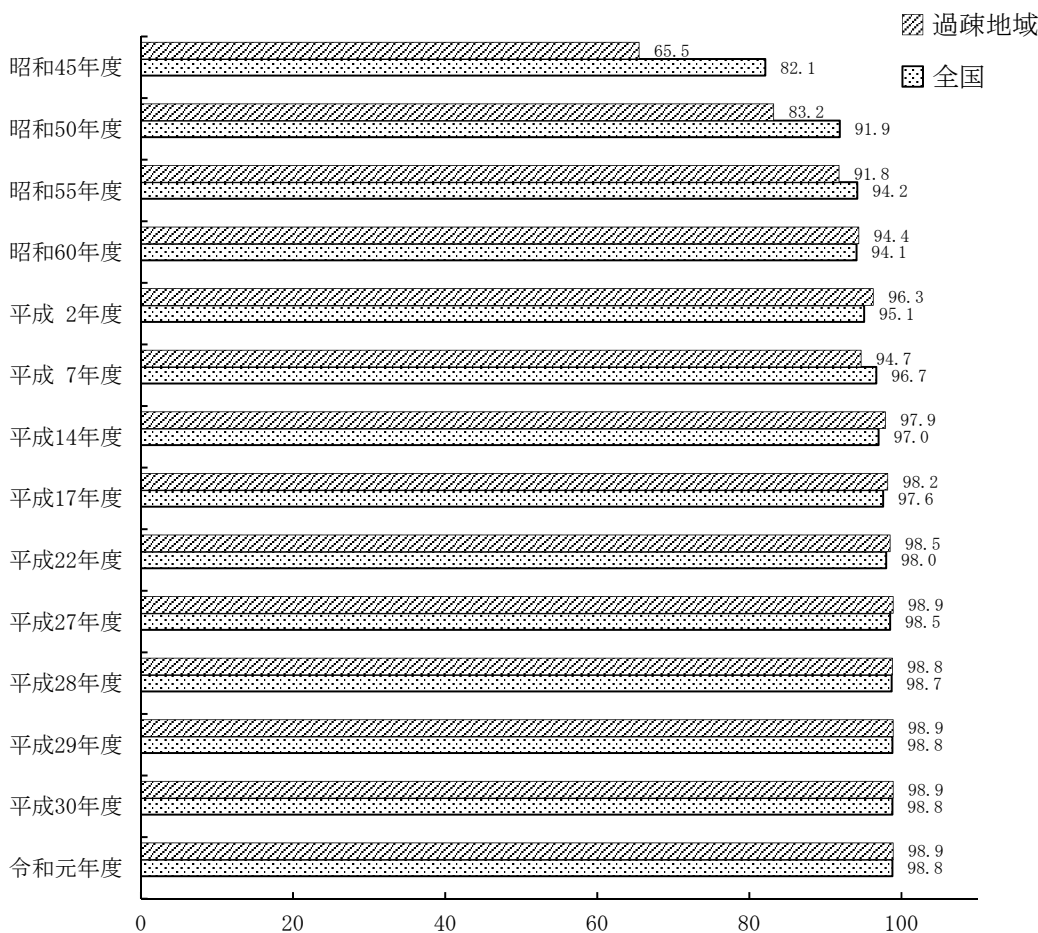
2 過疎地域は、総務省調べ。

(3) 高等学校・大学等

1) 高等学校等

高等学校等への進学率は、昭和60年度以降は全国と過疎地域とはほぼ同様の水準であり、格差はみられない(図表2-8-5)。

図表2-8-5 高等学校等への進学率



昭和45年度		昭和50年度		昭和55年度		昭和60年度		平成2年度		平成7年度		平成14年度		平成17年度	
過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
65.5	82.1	83.2	91.9	91.8	94.2	94.4	94.1	96.3	95.1	94.7	96.7	97.9	97.0	98.2	97.6

平成22年度		平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度	
過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
98.5	98.0	98.9	98.5	98.8	98.7	98.9	98.8	98.9	98.8	98.9	98.8

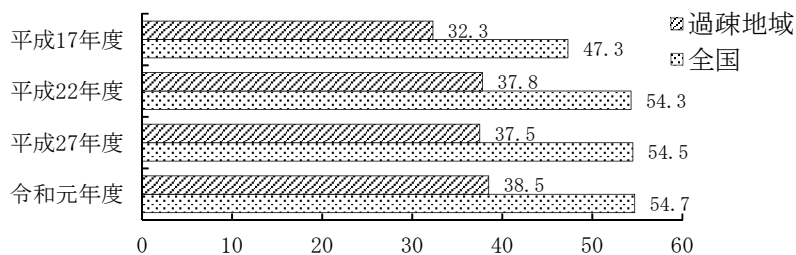
(備考) 1 全国は文部科学省「学校基本調査」による。
 2 過疎地域は総務省調べ。

2) 大学等

平成17年度から令和元年度までの過疎地域における大学等への進学率をみると、大学・短期大学進学率及び専修学校進学率は全国を下回っており、令和元年度において、前者では16.2ポイント、後者では2.4ポイント下回っている。一方、専門学校進学率では全国を上回っており、令和元年度においては6.3ポイント上回っている（図表2-8-6）。

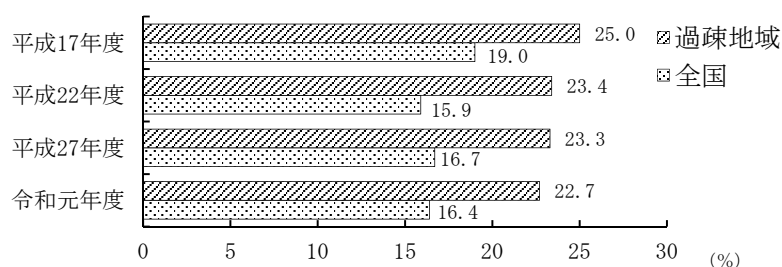
図表 2-8-6 大学等への進学率

(1) 大学・短期大学進学率



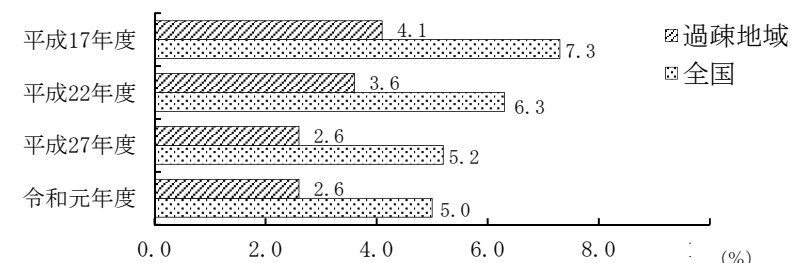
平成17年度		平成22年度		平成27年度		令和元年度	
過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
32.3	47.3	37.8	54.3	37.5	54.5	38.5	54.7

(2) 専門学校進学率



平成17年度		平成22年度		平成27年度		令和元年度	
過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
25.0	19.0	23.4	15.9	23.3	16.7	22.7	16.4

(3) 専修学校（専門学校を除く）進学率



平成17年度		平成22年度		平成27年度		令和元年度	
過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国	過疎	全国
4.1	7.3	3.6	6.3	2.6	5.2	2.6	5.0

(備考) 1 文部科学省「学校基本調査」による。

2 過疎地域は、令和2年4月1日現在であり、一部過疎地域は含まない。

第9節 集落の整備等

1 集落の現状

令和2年度に総務省及び国土交通省が共同で実施した「過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査」により、過疎地域等における集落の現状について概観する。

調査の対象は、平成31年4月1日時点の過疎地域市町村のほか、過疎地域活性化特別措置法に基づく過疎地域を有する市町村及び以下の関係各法により指定される地域を有する全市町村としている。

- ・山村振興法に基づく振興山村を有する市町村
- ・離島振興法に基づく離島振興対策実施地域を有する市町村
- ・半島振興法に基づく半島振興対策実施地域を有する市町村
- ・豪雪地帯対策特別措置法に基づく特別豪雪地帯を有する市町村

※ 東日本大震災に伴う原発事故被災地のうち、平成27年4月30日時点で、全域が避難指示区域にあった5町村（うち2町村が過疎地域市町村）は調査対象外としている。

なお、本調査における各地方ブロックは次のとおりである。

北海道…北海道

東北圏…青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県

首都圏…茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県

北陸圏…富山県、石川県、福井県

中部圏…長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

近畿圏…滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中国圏…鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国圏…徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州圏…福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県

沖縄圏…沖縄県

また、この調査における「集落」とは、「一定の土地に数戸以上の社会的なまとまりが形成された、住民生活の基本的な地域単位であり、市町村行政において扱う行政区の基本単位」としている。

(1) 集落の現状

1) 過疎地域等における集落数

過疎地域等における集落数を市町村区分別にみると、市が 49,576 集落 (64.6%)、町が 24,145 集落 (31.5%)、村が 2,989 集落 (3.9%) であり、6 割以上の集落が市に属している。

また、1 市町村あたり平均集落数をみると、全国平均で 73.4 集落となっており、中国圏では 147.6 集落と最も多くなっている (図表 2-9-1)。

図表 2-9-1 地方ブロック別・市町村区分別集落数及び 1 市町村あたり平均集落数

全体	市町村区分別 集落数				1 市町村あたり 平均集落数
	市	町	村	計	
1 北海道	855 (21.3%)	2,950 (73.5%)	206 (5.1%)	4,011 (100.0%)	24.9
2 東北圏	12,794 (70.4%)	4,701 (25.9%)	672 (3.7%)	18,167 (100.0%)	92.7
3 首都圏	1,401 (44.0%)	1,523 (47.9%)	257 (8.1%)	3,181 (100.0%)	35.0
4 北陸圏	2,110 (64.5%)	1,163 (35.5%)	0 (0.0%)	3,273 (100.0%)	81.8
5 中部圏	2,909 (55.9%)	1,470 (28.3%)	824 (15.8%)	5,203 (100.0%)	46.0
6 近畿圏	2,831 (61.2%)	1,501 (32.5%)	293 (6.3%)	4,625 (100.0%)	53.2
7 中国圏	10,598 (77.2%)	3,100 (22.6%)	27 (0.2%)	13,725 (100.0%)	147.6
8 四国圏	4,111 (54.3%)	3,370 (44.5%)	86 (1.1%)	7,567 (100.0%)	94.6
9 九州圏	11,862 (71.1%)	4,286 (25.7%)	540 (3.2%)	16,688 (100.0%)	100.5
10 沖縄県	105 (38.9%)	81 (30.0%)	84 (31.1%)	270 (100.0%)	15.0
合計	49,576 (64.6%)	24,145 (31.5%)	2,989 (3.9%)	76,710 (100.0%)	73.4

(備考) 市町村区分別集落数欄の () はブロック毎の構成比である。

2) 集落人口

過疎地域等の集落人口数をみると、集落人口の合計は1,525万人であり、その内訳は市が71.6%、町が25.9%、村が2.6%となっている。

また、市町村別の1集落あたり平均人口をみると、全体では市部(220.3人)と村部(131.6人)に88.7人の差がみられ、地方ブロック別にみると、市部において北海道が1041.7人、村部において沖縄県が265.7人と突出している(図表2-9-2)。

図表2-9-2 地方ブロック別・市町村別 集落人口及び1集落あたり平均人口

全体	市町村別 集落人口				市町村別 集落人口			
	市	町	村	計	市	町	村	全体
1 北海道	890,621 (54.7%)	714,166 (43.8%)	24,886 (1.5%)	1,629,673 (100.0%)	1,041.7 [855]	242.2 [2,949]	120.8 [206]	406.4 [4,010]
2 東北圏	3,334,090 (78.7%)	781,281 (18.5%)	118,623 (2.8%)	4,233,994 (100.0%)	260.7 [12,790]	166.5 [4,693]	177.0 [670]	233.2 [18,153]
3 首都圏	420,821 (56.4%)	279,475 (37.5%)	45,287 (6.1%)	745,583 (100.0%)	300.4 [1,401]	183.5 [1,523]	176.2 [257]	234.4 [3,181]
4 北陸圏	373,612 (62.0%)	229,286 (38.0%)	0 (0.0%)	602,898 (100.0%)	177.1 [2,110]	197.2 [1,163]	0 [0]	184.2 [3,273]
5 中部圏	825,218 (66.5%)	323,931 (26.1%)	91,693 (7.4%)	1,240,842 (100.0%)	284.0 [2,906]	220.4 [1,470]	111.3 [824]	238.6 [5,200]
6 近畿圏	809,511 (66.9%)	369,339 (30.5%)	30,815 (2.5%)	1,209,665 (100.0%)	286.1 [2,829]	246.1 [1,501]	105.2 [293]	261.7 [4,623]
7 中国圏	1,178,298 (80.7%)	279,211 (19.1%)	3,010 (0.2%)	1,460,519 (100.0%)	111.2 [10,595]	90.1 [3,098]	111.5 [27]	106.5 [13,720]
8 四国圏	514,923 (64.0%)	284,173 (35.3%)	6,020 (0.7%)	805,116 (100.0%)	125.4 [4,105]	84.3 [3,369]	70.0 [86]	106.5 [7,560]
9 九州圏	2,512,358 (78.1%)	655,510 (20.4%)	50,193 (1.6%)	3,218,061 (100.0%)	212.0 [11,848]	153.0 [4,284]	93.1 [539]	193.0 [16,671]
10 沖縄県	54,421 (52.5%)	26,926 (26.0%)	22,317 (21.5%)	103,664 (100.0%)	518.3 [105]	332.4 [81]	265.7 [84]	383.9 [270]
合計	10,913,873 (71.6%)	3,943,298 (25.9%)	392,844 (2.6%)	15,250,015 (100.0%)	220.3 [49,544]	163.4 [24,131]	131.6 [2,986]	198.9 [76,661]

(備考) 1 市町村別集落人口欄の()はブロック毎の構成比である。

2 市町村別集落あたり平均人口欄の[]は人口の回答があった集落数である。

3) 人口規模別集落数

人口規模別集落数をみると、全体では50人未満の集落が30.4%を占めており、100人未満の集落が53.4%と半数以上を占めている。

地方ブロック別でみると、中国圏において100人未満の集落の占める割合が約70%となっており、沖縄県では200人以上の集落が60%を越えている（図表2-9-3）。

図表2-9-3 地方ブロック別・人口規模別 集落数

全体	集落の人口規模 (人)									計
	～9	10～24	25～49	50～99	100～199	200～499	500～999	1000～	無回答	
1 北海道	170 (4.2%)	419 (10.4%)	727 (18.1%)	769 (19.2%)	779 (19.4%)	682 (17.0%)	255 (6.4%)	209 (5.2%)	1 (0.0%)	4,011 (100.0%)
2 東北圏	463 (2.5%)	958 (5.3%)	2,226 (12.3%)	4,133 (22.8%)	4,731 (26.0%)	3,929 (21.6%)	1,050 (5.8%)	492 (2.7%)	185 (1.0%)	18,167 (100.0%)
3 首都圏	46 (1.4%)	212 (6.7%)	419 (13.2%)	683 (21.5%)	716 (22.5%)	661 (20.8%)	204 (6.4%)	110 (3.5%)	130 (4.1%)	3,181 (100.0%)
4 北陸圏	171 (5.2%)	255 (7.8%)	443 (13.5%)	816 (24.9%)	835 (25.5%)	537 (16.4%)	141 (4.3%)	74 (2.3%)	1 (0.0%)	3,273 (100.0%)
5 中部圏	234 (4.5%)	560 (10.8%)	826 (15.9%)	1,080 (20.8%)	1,107 (21.3%)	859 (16.5%)	309 (5.9%)	223 (4.3%)	5 (0.1%)	5,203 (100.0%)
6 近畿圏	143 (3.1%)	340 (7.4%)	582 (12.6%)	984 (21.3%)	1,126 (24.3%)	906 (19.6%)	299 (6.5%)	226 (4.9%)	19 (0.4%)	4,625 (100.0%)
7 中国圏	776 (5.7%)	2,325 (16.9%)	3,450 (25.1%)	3,416 (24.9%)	1,943 (14.2%)	1,068 (7.8%)	310 (2.3%)	131 (1.0%)	306 (2.2%)	13,725 (100.0%)
8 四国圏	563 (7.4%)	1,086 (14.4%)	1,596 (21.1%)	1,838 (24.3%)	1,334 (17.6%)	696 (9.2%)	141 (1.9%)	56 (0.7%)	257 (3.4%)	7,567 (100.0%)
9 九州圏	423 (2.5%)	1,386 (8.3%)	2,504 (15.0%)	3,882 (23.3%)	3,892 (23.3%)	3,110 (18.6%)	935 (5.6%)	357 (2.1%)	199 (1.2%)	16,688 (100.0%)
10 沖縄県	2 (0.7%)	2 (0.7%)	13 (4.8%)	23 (8.5%)	63 (23.3%)	101 (37.4%)	46 (17.0%)	20 (7.4%)	0 (0.0%)	270 (100.0%)
合計	2,991 (3.9%)	7,543 (9.8%)	12,786 (16.7%)	17,624 (23.0%)	16,526 (21.5%)	12,549 (16.4%)	3,690 (4.8%)	1,898 (2.5%)	1,103 (1.4%)	76,710 (100.0%)

(備考) 市町村別集落人口欄の()はブロック毎の構成比である。

4) 65歳以上人口割合

集落人口に占める65歳以上人口割合別集落数をみると、全体では65歳以上の人口が半数以上を占める集落が29.2%あり、そのうち65歳以上人口が70%以上の集落が6.2%ある。また、全ての人口が65歳以上である集落が1,072集落(1.4%)ある。

地方ブロック別で見ると、中国圏や四国圏で65歳以上人口が40%以上の集落が多くみられるが、沖縄県では、65歳以上人口が40%未満の集落が比較的多くみられる(図表2-9-4)。

図表2-9-4 地方ブロック別・集落人口に占める65歳以上人口割合別 集落数

全体	集落人口に占める 65歳以上 の割合							計	【再掲】65歳以上 割合
	0%	1～19%	20～39%	40～49%	50～69%	70%～	無回答		(うち100%)
1 北海道	52 (1.3%)	124 (3.1%)	1,609 (40.1%)	1,166 (29.1%)	898 (22.4%)	138 (3.4%)	24 (0.6%)	4,011 (100.0%)	36 (0.9%)
2 東北圏	79 (0.4%)	507 (2.8%)	8,096 (44.6%)	5,890 (32.4%)	2,740 (15.1%)	513 (2.8%)	342 (1.9%)	18,167 (100.0%)	132 (0.7%)
3 首都圏	7 (0.2%)	52 (1.6%)	1,122 (35.3%)	1,070 (33.6%)	636 (20.0%)	126 (4.0%)	168 (5.3%)	3,181 (100.0%)	18 (0.6%)
4 北陸圏	15 (0.5%)	109 (3.3%)	1,197 (36.6%)	953 (29.1%)	730 (22.3%)	226 (6.9%)	43 (1.3%)	3,273 (100.0%)	79 (2.4%)
5 中部圏	30 (0.6%)	127 (2.4%)	1,791 (34.4%)	1,488 (28.6%)	1,196 (23.0%)	332 (6.4%)	239 (4.6%)	5,203 (100.0%)	70 (1.3%)
6 近畿圏	14 (0.3%)	84 (1.8%)	1,535 (33.2%)	1,420 (30.7%)	992 (21.4%)	297 (6.4%)	283 (6.1%)	4,625 (100.0%)	54 (1.2%)
7 中国圏	179 (1.3%)	449 (3.3%)	3,644 (26.6%)	3,663 (26.7%)	4,156 (30.3%)	1,284 (9.4%)	350 (2.6%)	13,725 (100.0%)	293 (2.1%)
8 四国圏	52 (0.7%)	149 (2.0%)	1,925 (25.4%)	1,986 (26.2%)	2,211 (29.2%)	967 (12.8%)	277 (3.7%)	7,567 (100.0%)	236 (3.1%)
9 九州圏	85 (0.5%)	510 (3.1%)	5,988 (35.9%)	4,893 (29.3%)	4,134 (24.8%)	847 (5.1%)	231 (1.4%)	16,688 (100.0%)	154 (0.9%)
10 沖縄県	3 (1.1%)	36 (13.3%)	177 (65.6%)	40 (14.8%)	12 (4.4%)	2 (0.7%)	0 (0.0%)	270 (100.0%)	0 (0.0%)
合計	516 (0.7%)	2,147 (2.8%)	27,084 (35.3%)	22,569 (29.4%)	17,705 (23.1%)	4,732 (6.2%)	1,957 (2.6%)	76,710 (100.0%)	1,072 (1.4%)

(備考) 市町村別集落人口欄の()はブロック毎の構成比である。

5) 75歳以上人口割合

集落人口に占める75歳以上人口割合別集落数をみると、全体では75歳以上の人口が3割以上を占める集落が25.9%あり、そのうち半数以上を占める集落が5.3%ある。また、全ての人口が75歳以上の集落が389集落(0.5%)ある。

地方ブロック別でみると、中国圏や四国圏で75歳以上人口が30%以上の集落が多くみられるが、東北圏や北海道、沖縄県では75歳以上人口が20%未満の集落が比較的多くみられる(図表2-9-5)。

図表 2-9-5 地方ブロック別・集落人口に占める75歳以上人口割合別 集落数

全体	集落人口に占める 75歳以上 の割合							計	【再掲】75歳以上 割合
	0%	1~9.9%	10~19%	20~29%	30~49%	50~	無回答		(うち100%)
1 北海道	95 (2.4%)	182 (4.5%)	1,234 (30.8%)	1,565 (39.0%)	797 (19.9%)	114 (2.8%)	24 (0.6%)	4,011 (100.0%)	16 (0.4%)
2 東北圏	176 (1.0%)	766 (4.2%)	6,055 (33.3%)	7,912 (43.6%)	2,461 (13.5%)	455 (2.5%)	342 (1.9%)	18,167 (100.0%)	47 (0.3%)
3 首都圏	25 (0.8%)	81 (2.5%)	924 (29.0%)	1,315 (41.3%)	554 (17.4%)	114 (3.6%)	168 (5.3%)	3,181 (100.0%)	5 (0.2%)
4 北陸圏	42 (1.3%)	158 (4.8%)	950 (29.0%)	1,284 (39.2%)	612 (18.7%)	184 (5.6%)	43 (1.3%)	3,273 (100.0%)	41 (1.3%)
5 中部圏	136 (2.6%)	145 (2.8%)	1,238 (23.8%)	1,996 (38.4%)	1,159 (22.3%)	290 (5.6%)	239 (4.6%)	5,203 (100.0%)	29 (0.6%)
6 近畿圏	29 (0.6%)	121 (2.6%)	1,119 (24.2%)	1,861 (40.2%)	940 (20.3%)	272 (5.9%)	283 (6.1%)	4,625 (100.0%)	20 (0.4%)
7 中国圏	320 (2.3%)	581 (4.2%)	2,855 (20.8%)	4,925 (35.9%)	3,635 (26.5%)	1,059 (7.7%)	350 (2.6%)	13,725 (100.0%)	95 (0.7%)
8 四国圏	117 (1.5%)	228 (3.0%)	1,559 (20.6%)	2,576 (34.0%)	1,933 (25.5%)	877 (11.6%)	277 (3.7%)	7,567 (100.0%)	89 (1.2%)
9 九州圏	351 (2.1%)	678 (4.1%)	4,546 (27.2%)	6,518 (39.1%)	3,681 (22.1%)	683 (4.1%)	231 (1.4%)	16,688 (100.0%)	47 (0.3%)
10 沖縄県	3 (1.1%)	43 (15.9%)	140 (51.9%)	62 (23.0%)	18 (6.7%)	4 (1.5%)	0 (0.0%)	270 (100.0%)	0 (0.0%)
合計	1,294 (1.7%)	2,983 (3.9%)	20,620 (26.9%)	30,014 (39.1%)	15,790 (20.6%)	4,052 (5.3%)	1,957 (2.6%)	76,710 (100.0%)	389 (0.5%)

(備考) 市町村別集落人口欄の()はブロック毎の構成比である。

6) 生活サービス機能の立地状況

生活サービス機能の立地状況をみると、全体の54.4%の集落に駅やバス停があり、22.5%の集落には商店やスーパーがある。一方で、それ以外のサービス機能については1割に満たない状況である。

地方ブロック別でみると、北海道ではガソリンスタンドや(簡易)郵便局が、近畿圏では医療施設が、沖縄県では商店・スーパーや教育施設が立地している集落が多くなっている(図表2-9-6)。

図表 2-9-6 地方ブロック別・生活サービス機能の立地状況別集落数

全体	生活サービス機能の立地状況 (各サービスが立地している集落数)								総集落数
	病院・診療所	商店・スーパー	ガソリンスタンド	(簡易)郵便局	老人デイサービスセンター	駅・バス停	小学校	幼稚園・保育所等	
1 北海道	394 (9.8%)	988 (24.6%)	551 (13.7%)	692 (17.3%)	321 (8.0%)	2,473 (61.7%)	445 (11.1%)	439 (10.9%)	4,011 (100.0%)
2 東北圏	1,437 (7.9%)	4,589 (25.3%)	1,480 (8.1%)	1,546 (8.5%)	1,316 (7.2%)	9,991 (55.0%)	1,131 (6.2%)	1,309 (7.2%)	18,167 (100.0%)
3 首都圏	315 (9.9%)	744 (23.4%)	339 (10.7%)	369 (11.6%)	305 (9.6%)	1,892 (59.5%)	239 (7.5%)	238 (7.5%)	3,181 (100.0%)
4 北陸圏	256 (7.8%)	821 (25.1%)	210 (6.4%)	265 (8.1%)	216 (6.6%)	2,257 (69.0%)	177 (5.4%)	230 (7.0%)	3,273 (100.0%)
5 中部圏	576 (11.1%)	1,184 (22.8%)	530 (10.2%)	557 (10.7%)	515 (9.9%)	3,704 (71.2%)	429 (8.2%)	451 (8.7%)	5,203 (100.0%)
6 近畿圏	595 (12.9%)	1,118 (24.2%)	451 (9.8%)	577 (12.5%)	442 (9.6%)	3,219 (69.6%)	403 (8.7%)	386 (8.3%)	4,625 (100.0%)
7 中国圏	935 (6.8%)	1,962 (14.3%)	658 (4.8%)	902 (6.6%)	661 (4.8%)	5,496 (40.0%)	555 (4.0%)	633 (4.6%)	13,725 (100.0%)
8 四国圏	582 (7.7%)	1,442 (19.1%)	521 (6.9%)	527 (7.0%)	375 (5.0%)	3,314 (43.8%)	341 (4.5%)	391 (5.2%)	7,567 (100.0%)
9 九州圏	1,741 (10.4%)	4,286 (25.7%)	1,566 (9.4%)	1,512 (9.1%)	1,407 (8.4%)	9,177 (55.0%)	1,148 (6.9%)	1,529 (9.2%)	16,688 (100.0%)
10 沖縄県	45 (16.7%)	149 (55.2%)	41 (15.2%)	39 (14.4%)	65 (24.1%)	194 (71.9%)	65 (24.1%)	71 (26.3%)	270 (100.0%)
合計	6,876 (9.0%)	17,283 (22.5%)	6,347 (8.3%)	6,986 (9.1%)	5,623 (7.3%)	41,717 (54.4%)	4,933 (6.4%)	5,677 (7.4%)	76,710 (100.0%)

(備考) () はブロック毎の構成比である。

7) サポート人材が活動する集落の状況

集落支援員や地域おこし協力隊などのサポート人材が活動する集落の状況をみると、全体では集落支援員が活動する地域が 19.3%、地域おこし協力隊等が 19.9%となっている。

地方ブロック別でみると、集落支援員が活動する集落は中国圏（29.9%）や北陸圏（24.7%）で高くなっており、地域おこし協力隊等が活動する地域も中国圏（36.5%）や北陸圏（30.5%）で高くなっている（図表 2-9-7）。

図表 2-9-7 地方ブロック別・サポート人材が活動する集落数

全体	サポート人材が活動する集落数			総集落数
	集落支援員	地域おこし協力隊等	その他	
1 北海道	192 (4.8%)	472 (11.8%)	37 (0.9%)	4,011 (100.0%)
2 東北圏	2,349 (12.9%)	1,623 (8.9%)	117 (0.6%)	18,167 (100.0%)
3 首都圏	306 (9.6%)	493 (15.5%)	0 (0.0%)	3,181 (100.0%)
4 北陸圏	807 (24.7%)	999 (30.5%)	9 (0.3%)	3,273 (100.0%)
5 中部圏	1,031 (19.8%)	1,093 (21.0%)	15 (0.3%)	5,203 (100.0%)
6 近畿圏	954 (20.6%)	598 (12.9%)	234 (5.1%)	4,625 (100.0%)
7 中国圏	4,099 (29.9%)	5,016 (36.5%)	562 (4.1%)	13,725 (100.0%)
8 四国圏	1,471 (19.4%)	2,140 (28.3%)	0 (0.0%)	7,567 (100.0%)
9 九州圏	3,605 (21.6%)	2,850 (17.1%)	517 (3.1%)	16,688 (100.0%)
10 沖縄県	11 (4.1%)	18 (6.7%)	0 (0.0%)	270 (100.0%)
合計	14,825 (19.3%)	15,302 (19.9%)	1,491 (1.9%)	76,710 (100.0%)

- (備考) 1 () はブロック毎の構成比である。
- 2 「地域おこし協力隊等」には、旧田舎で働き隊及び地域おこし協力隊の任期終了後も地方自治体が独自制度として継続して活用しているものを含む。
- 3 「その他」とは、地域おこし企業人や緑のふるさと協力隊などの国の支援制度や地方自治体独自の制度による外部人材のこと。

8) 集落機能の維持状況

集落機能の維持状況をみると、全体では78.3%の集落で良好に維持されているが、20.8%の集落では機能低下や維持困難とされている。

地方ブロック別にみると、良好とされている集落の割合が高い中、東北圏（86.1%）や沖縄県（84.1%）で特に高くなっている。また、首都圏においては機能低下が25.2%と高くなっており、四国圏においては維持困難が9.9%と他のブロックと比べ高くなっている（図表2-9-8）。

図表2-9-8 地方ブロック別・集落機能の維持状況別 集落数

全体	集落機能の維持状況別 集落数				計
	良好	機能低下	維持困難	無回答	
1 北海道	3,355 (83.6%)	520 (13.0%)	135 (3.4%)	1 (0.0%)	4,011 (100.0%)
2 東北圏	15,636 (86.1%)	1,953 (10.8%)	269 (1.5%)	309 (1.7%)	18,167 (100.0%)
3 首都圏	2,304 (72.4%)	802 (25.2%)	65 (2.0%)	10 (0.3%)	3,181 (100.0%)
4 北陸圏	2,652 (81.0%)	502 (15.3%)	118 (3.6%)	1 (0.0%)	3,273 (100.0%)
5 中部圏	3,771 (72.5%)	1,179 (22.7%)	229 (4.4%)	24 (0.5%)	5,203 (100.0%)
6 近畿圏	3,444 (74.5%)	883 (19.1%)	272 (5.9%)	26 (0.6%)	4,625 (100.0%)
7 中国圏	9,919 (72.3%)	3,078 (22.4%)	506 (3.7%)	222 (1.6%)	13,725 (100.0%)
8 四国圏	5,104 (67.5%)	1,687 (22.3%)	749 (9.9%)	27 (0.4%)	7,567 (100.0%)
9 九州圏	13,665 (81.9%)	2,488 (14.9%)	515 (3.1%)	20 (0.1%)	16,688 (100.0%)
10 沖縄県	227 (84.1%)	40 (14.8%)	3 (1.1%)	0 (0.0%)	270 (100.0%)
合計	60,077 (78.3%)	13,132 (17.1%)	2,861 (3.7%)	640 (0.8%)	76,710 (100.0%)

(備考) 1 () はブロック毎の構成比である。

2 集落機能とは以下のとおりである。

「資源管理機能」・・・水田や山林などの地域資源の維持保全に係る集落機能。

「生産補完機能」・・・農林水産業等の生産に際しての草刈、道普請などの相互扶助機能。

「生活扶助機能」・・・冠婚葬祭など日常生活における相互扶助機能。

9) 集落の消滅可能性

過疎地域等における 76,710 集落のうち、505 集落（全体の 0.7%）が今後 10 年以内に消滅するおそれがあり、3,117 集落（全体の 4.1%）がいずれ消滅するおそれがあると予測されている（図表 2-9-9）。

図表 2-9-9 地方ブロック別・集落の消滅可能性別 集落数

全体	集落の消滅可能性別 集落数				計
	10 年以内に消滅	いずれ消滅	当面存続	無回答	
1 北海道	14 (0.3%)	237 (5.9%)	3,378 (84.2%)	382 (9.5%)	4,011 (100.0%)
2 東北圏	72 (0.4%)	471 (2.6%)	16,555 (91.1%)	1,069 (5.9%)	18,167 (100.0%)
3 首都圏	9 (0.3%)	99 (3.1%)	2,683 (84.3%)	390 (12.3%)	3,181 (100.0%)
4 北陸圏	33 (1.0%)	120 (3.7%)	3,030 (92.6%)	90 (2.7%)	3,273 (100.0%)
5 中部圏	37 (0.7%)	298 (5.7%)	4,116 (79.1%)	752 (14.5%)	5,203 (100.0%)
6 近畿圏	29 (0.6%)	234 (5.1%)	4,021 (86.9%)	341 (7.4%)	4,625 (100.0%)
7 中国圏	62 (0.5%)	417 (3.0%)	12,439 (90.6%)	807 (5.9%)	13,725 (100.0%)
8 四国圏	174 (2.3%)	654 (8.6%)	5,494 (72.6%)	1,245 (16.5%)	7,567 (100.0%)
9 九州圏	75 (0.4%)	586 (3.5%)	14,258 (85.4%)	1,769 (10.6%)	16,688 (100.0%)
10 沖縄県	0 (0.0%)	1 (0.4%)	263 (97.4%)	6 (2.2%)	270 (100.0%)
合計	505 (0.7%)	3,117 (4.1%)	66,237 (86.3%)	6,851 (8.9%)	76,710 (100.0%)

（備考）（ ）はブロック毎の構成比である。

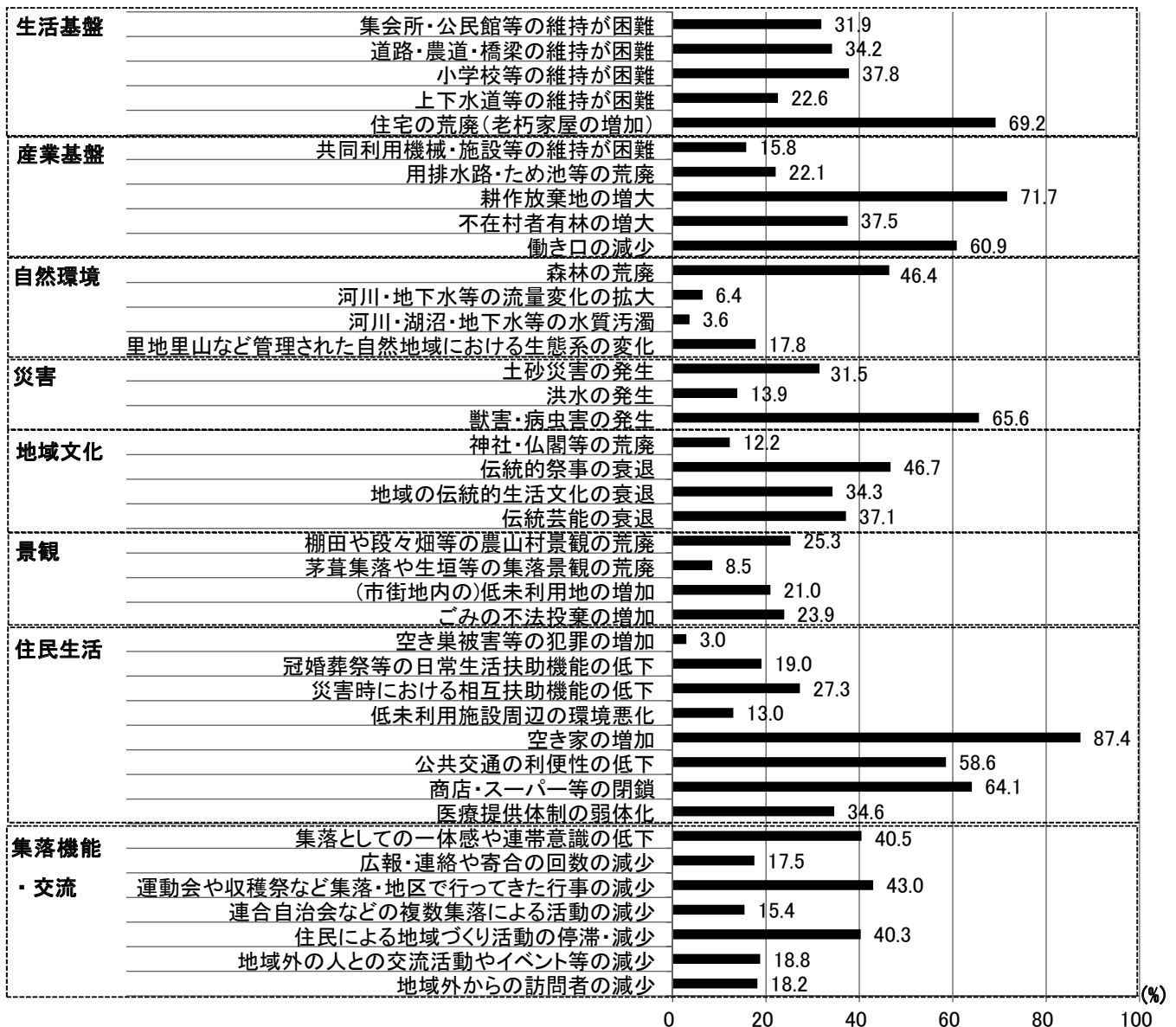
(2) 集落対策について

「過疎地域等条件不利地域における集落の現況把握調査」では、過疎地域市町村等及び都道府県に対しアンケートを実施し、集落対策の実施状況等について取りまとめている。

1) 集落での問題の発生状況

過疎地域等の集落で発生している問題や現象についてみると、「空き家の増加」が87.4%と最も多くの集落で発生しているほか、「耕作放棄地の増大」(71.7%)、「住宅の荒廃(老朽家屋の増加)」(69.2%)、「獣害・病虫害の発生」(65.6%)、「商店・スーパー等の閉鎖」(64.1%)、「働き口の減少」(60.9%)が6割を超えており、多くの集落で問題となっていることがわかる(図表2-9-10)。

図表2-9-10 多くの集落で発生している問題や現象(複数回答)

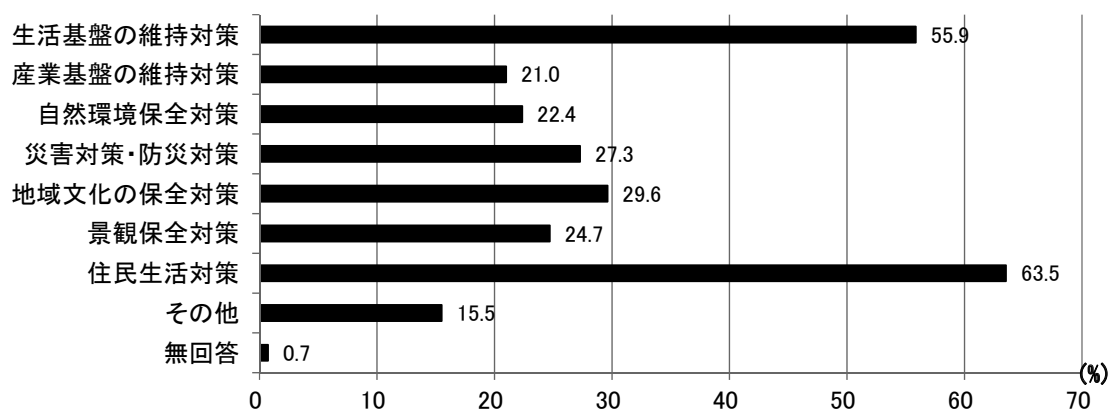


2) 市町村による集落対策

集落機能の維持・保全に向けた行政施策の事例を3つまであげてもらったところ、分野としては、「住民生活対策」(63.5%)や「生活基盤の維持対策」(55.9%)が多くなっている(図表2-9-11)。

ハード面での施策(19.6%)に比べソフト面での施策(83.2%)が多くなっており、特に集落や自治会等を対象とした活動費の助成に係る施策(301件)や生活交通サービスの確保に係る施策(287件)で多くなっている。ハード面では、生活基盤・産業基盤の整備(125件)や活動拠点の整備(66件)で多く事例があげられている(図表2-9-12)。

図表 2-9-11 集落の維持・保全に向けた行政施策事例



図表 2-9-12 集落の維持・保全に向けた行政施策事例の内容（記述回答より整理）

施策の内容の分類と具体的な施策(例)		事例数(%)	
ソフト面での施策	集落や自治会等を対象とした活動費の助成に係る施策 ・町内会・自治会で管理している街灯のLED化改良工事に係る費用や修繕費用に対する助成 ・自主防災組織の災害対応力の強化を図るため、実践的な防災訓練の実施に対し支援する ・町内各集落で交通手段を持たない高齢者等に対し商工会が移動販売に関する事業費の補助	301	24.3%
	生活交通サービスの確保に係る施策 ・高齢者に対して公共交通空白(不便)地帯解消のためデマンド型乗合タクシーを運行する ・移動手段を持たない高齢者(65最上を対象)のため、中心市街地への無料バスを運行 ・高齢者等の交通弱者のため、地元組織が主体となって構築した住民ボランティア輸送の運行	287	23.2%
	集落活性化活動等の補助に関する施策 ・住民自治活動及び集落機能の維持強化を支援するために1集落20万円を上限とし交付 ・地域における問題や課題の解決のために行う事業を提案し、それに対して補助金を交付 ・地域資源型のビジネスの展開のため、雇用、経済波及効果等に繋がる事業費の一部を補助	203	16.4%
	生活支援や定住対策、空き家活用等に係る施策 ・単独では移動が困難な高齢者や身体障害者の方々を対象に、医療機関等への送迎を行う ・空き家バンクを運営し、賃貸借等が成立した時に1物件につき町会へ50千円の報奨金を支払 ・転入後、過疎地域に住所を有し、地区外へ通勤するものに対して3年間通勤費を補助する	84	6.8%
	集落等の協働体制や医療・福祉等見守り体制の構築に係る施策 ・地域の高齢者や障がい者を対象に、災害対策基本法の「避難行動要支援者名簿」を作成する ・小学校区単位に地域運営組織を設置し、集落の維持存続及び地域の活性化を図っている ・離島における医療のため、従前の医師の派遣に加えテレビ電話等を用いた遠隔診療を行う	81	6.5%
	地域人材の確保や配置、育成に係る施策 ・住民の日常生活や買い物や通院等に関してサポート人材を配置し、安心できる環境を確保 ・担当地域を職員に割り当て、住民と協働で、各地域の実情に合わせた地域づくりに取り組む ・集落支援員を配置し、地域と行政の橋渡しや、話し合い等を通じ、困りごとへの対応を行う	63	5.1%
	地域づくりに係る調査や研究・開発、計画策定等に関する施策 ・地域コミュニティ機能の活性化を目的とした将来ビジョン策定等に取り組む町内会等を支援 ・安心して暮らし続けることができる地域づくりを目的としたアンケート調査、ワークショップの開催	35	2.8%
小 計		1,012	83.2%
ハード面での施策	生活基盤や産業基盤の整備に関する施策 ・いちご栽培に取り組む新規就農者等のリース用ハウスを整備して就農支援のシステム化を図る ・地域情報化事業により光ファイバ網を村内全域に整備し、各世帯に情報端末を整備する ・廃校になった小学校を農産物加工施設に改修し、施設の有効活用と地域産業の振興を図る	125	10.1%
	活動拠点等の整備に関する施策 ・コミュニティ活動の推進を図るため、地域づくりの場である自治公民館施設の整備を支援する ・新たな交流拠点作りに取り組む集落に対し、空き家を活用した拠点の立ち上げ経費を支援 ・自治会が自主的に実施する道路・水路関連整備に対し、原材料の支給又は補助金を交付	66	5.3%
	施設等の維持管理に関する施策 ・各集落の集会所を「地区生きがいセンター」として指定し施設管理に要する費用の一部を助成 ・農林道等の補修などの事業に対して、補修原材料を支給し地元主体で道路舗装などを実施 ・赤字である運行費用の一部を補填するため、生活交通路線バス運行者に維持補助金を交付	35	2.8%
	既存施設の改修等に関する施策 ・各地区公民館に対し地域活動の維持と地域住民の福祉向上のため改修事業へ補助金を交付 ・歴史的まちなみを構成する古民家を歴史的風致形成建造物として修理を行う際に支援を行う ・自治会が実施する集会所の建築・修繕、バリアフリー化に要する経費に対して、補助金を交付	16	1.3%
小 計		238	19.6%
総回答事例数(N)		1,217	(100.0%)

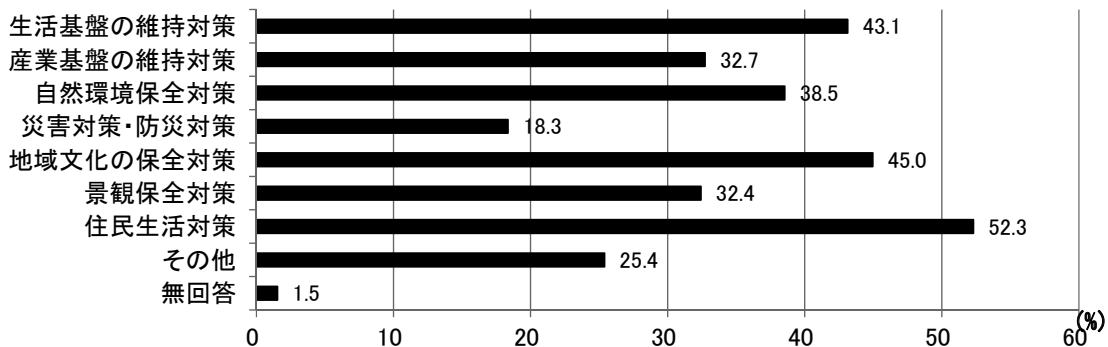
※複数に該当する回答あり

3) 行政以外の主体による集落活性化

NPO や地域住民等の行政以外の主体による集落活性化の取組事例を2つまであげてもらったところ、324件の回答があった。分野としては住民生活対策（52.3%）や地域文化の保全（45.0%）で多くなっている（図表2-9-13）。

取組内容では、集落コミュニティの維持・活性化（101件）や都市との交流による集落活性化（80件）が比較的多くみられる（図表2-9-14）。

図表 2-9-13 行政以外の主体による集落活性化の事例



図表 2-9-14 NPO 等による集落活性化事例の内容（記述回答より整理）

取組内容の分類	具体的な取組(例)	事案件数(%)
集落コミュニティの維持・活性化	・2年に一度の集落行事を安定・継続して運営するため住民や出身者が主体的に活動 ・撤退することが決まったJA購買店舗を、地域住民が引き継ぐ形で店舗運営を実施	101 31.2%
都市との交流による集落活性化	・化石や地層の博物館であるエコミュージアムセンターの管理運営や、イベントを開催 ・地域体験プログラムの開発・提供をはじめ特産品の開発、移住者の受け入れを実施	80 24.7%
高齢者の生活支援	・高齢者を対象に「集いの場」を開所しカラオケや料理教室、体操、買い物レクを実施 ・廃港跡を高齢者の拠点としたいNPO法人が小規模多機能型居宅介護事業所を運営	43 13.3%
集落環境の維持・整備等	・荒廃した里山を下刈、樹木伐採等を行った上で桜を植栽し地域住民が自ら管理 ・集落で産地直売所設置や特産品開発・販売、竹林整備、体験交流事業などを実施	37 11.4%
環境保全・景観保全	・春と秋に各1回、町内一斉に自治振興会により河川清掃（ごみ拾い、草刈）を行う ・集落住民とNPO法人が集落の農地再生を中心として活性化と景観の保全活動を行う	35 10.8%
特産品の開発・加工・販売	・地域名産のそばづくりを通した外部との交流や高齢者の生きがいがづくりの場を創出 ・地区内の山林で収穫される特産品の松茸を利用した料理をふるまう観光施設を運営	33 10.2%
地域文化の継承・保全	・大学等と連携し伝統文化（ねぶた祭）の伝承や地域を巡る散策ルートの設定等を実施 ・明治時代に多くの人手と私財を投じて開かれた農業用水の“堰”を維持保全する取組	28 8.6%
農林業や商業の活性化等	・JAの撤退を受け、建物を借り受け、地域住民から1株3万円の出資を得て商店を運営 ・体験イベントの開催や体験施設の運営、6次産業化など小さなビジネス活動を推進	24 7.4%
生活交通の確保	・小型バスで地区内3コース、1日5便が循環し、居住地の近所で乗降可（無料バス） ・公共交通空白地有償運送や地域商店が高齢者宅へ配達するなどの事業を実施	24 7.4%
定住促進に向けた取組	・集落の存続を目指した地域づくり（移住対策、田んぼオーナー制度、集落点検など） ・SNSを活用した情報発信や芸術家が数多く移り住む地域イベントの開催を実施	24 7.4%
高齢者等の買い物支援	・介護認定者、身体障害者等の通院、買い物等の日常生活の移手段の確保を図る ・住民で農水産物直売所を運営し、地域活性化や買い物弱者対策に取組んでいる	14 4.3%
地域ぐるみでの防災・防犯活動等	・自然災害に備え、集落ごとに自主的避難活動を行う組織の設置を図っている ・休校の小学校を用いて年に一度、自主防災訓練を行うなど集落機能の維持に貢献	10 3.1%
住民による地域プランづくり	・地域の将来ビジョンを策定して地域資源を活用した特色ある地域づくり活動を実施 ・集落支援員等による支援を受けながら主体的なプラン策定や取組実施を進めている	8 2.5%
その他	・複数の縦割りの組織が個々に役員を置き会計を持っている現状を見直し、地区が一丸となって横断的・一体的に諸問題に取組む組織づくりの実施	15 4.6%
総回答事例数(N)		324 (100.0%)

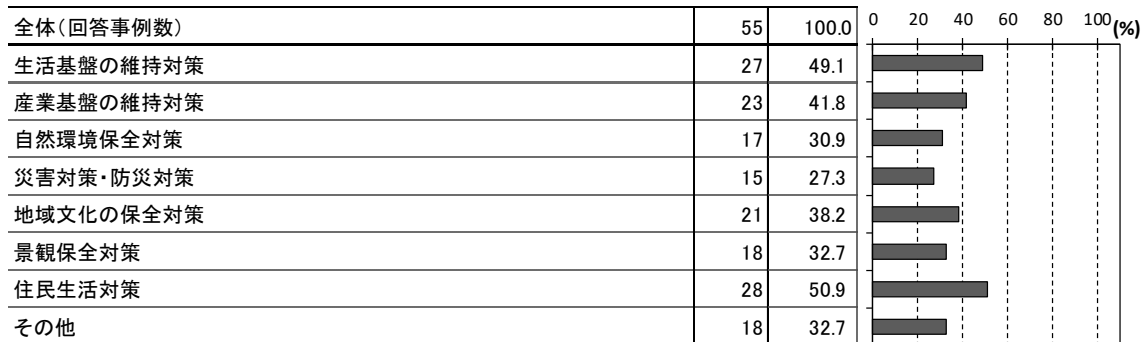
※複数に該当する回答あり

4) 都道府県による集落対策

集落に対して直接の主体となって施策を講じている都道府県は47団体中25団体あり、55の施策事例があげられた。事例を分野別にみると、「住民生活対策」が28事例と最も多いほか、「生活基盤の維持対策」(27事例)や「産業基盤の維持対策」(23事例)、「地域文化の保全対策」(21事例)にかかる施策が比較的多く挙げられている(図表2-9-15)。

施策の内容をみると、財政支援が12事例と最も多いほか、基盤整備や人材派遣に関する施策も10件以上挙げられている(図表2-9-16)。

図表2-9-15 都道府県が集落に対して直接支援している対策



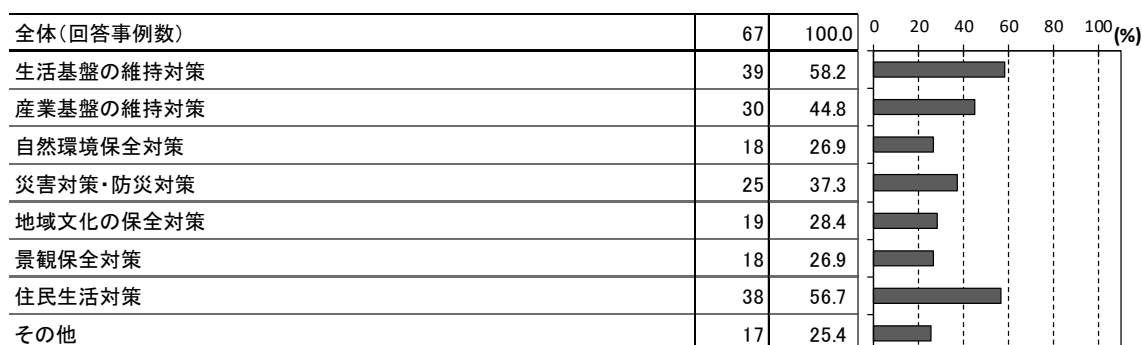
図表2-9-16 都道府県が集落に対して直接実施している対策の内容

分類	施策の内容(例)	事例数(%)
財政支援	地域が主体的に取り組む事業や地域の活動団体の運営費の一部等を財政的に支援	12 (21.8%)
基盤整備	生活道路の安全確保や農地の区画整理など産業基盤の整備を通じて支援	11 (20.0%)
人材派遣	地域の取組に対して専門的アドバイザーの派遣や地域活動の支援要員を派遣	10 (18.2%)
モデル支援	「小さな拠点」づくりなど集落活性化の取組をモデル的に支援	9 (16.4%)
人材育成	活動の担い手や地域リーダー育成のための研修会の開催など	8 (14.5%)
助言・指導	市町村や地域の取組に対し都道府県が技術的な側面等から指導・助言	8 (14.5%)
連携調整	県が関係団体と連携したり、協議の場づくりや人材のマッチングを図る等の調整により支援	6 (10.9%)
大学・企業連携	県が大学や企業・団体等と連携して集落活性化や地域づくりに係る取組を支援	5 (9.1%)
人材配置	地域活動を支援するために都道府県職員や委嘱した専門職員を当該地域等に配置	3 (5.5%)
情報発信	イベントの開催や各種の情報媒体を活用して地域の取組や魅力を情報発信	2 (3.6%)
総回答事例数(N) ※複数に該当する回答あり		55

市町村が行う集落対策に対して補助・支援等を行っている都道府県は34団体であり、67の施策事例があげられた。事例を分野別にみると、「生活基盤の維持対策」(39事例)や「住民生活対策」(38事例)など、生活に密着した分野に係る施策が多く挙げられている(図表2-9-17)。

また、施策の内容をみてみると、ソフト支援が31施策と最も多く、次いでソフト・ハードの両面にわたり市町村が実施する事業を補助・助成する総合支援が16施策と多く挙げられている(図表2-9-18)。

図表 2-9-17 都道府県が市町村に補助を行っている施策



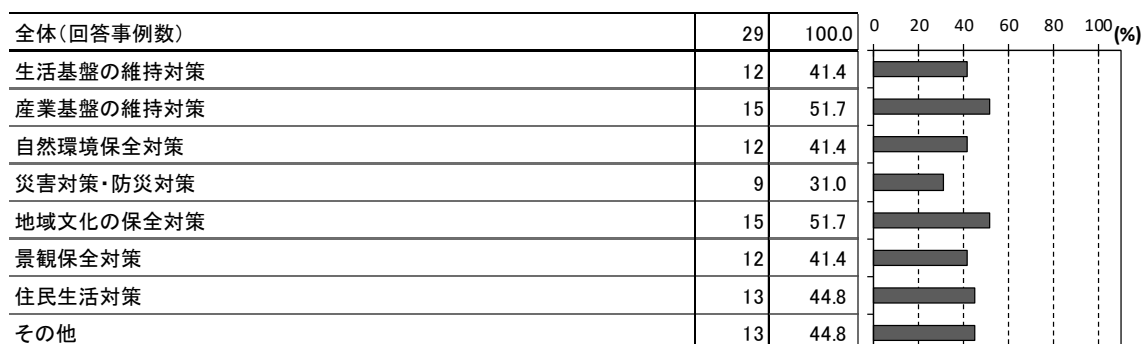
図表 2-9-18 都道府県が市町村に補助を行っている施策の内容

分類	施策の内容(例)	事例数(%)
ソフト支援	集落活性化モデル事業や買い物難民対策、空き家の利活用などに対する補助・支援	31 (46.3%)
総合支援	ソフト・ハードの両面にわたり市町村が実施する事業を補助、助成	16 (23.9%)
ハード支援	施設整備や基盤整備などのハード事業に対する補助・支援	9 (13.4%)
交通支援	生活交通の確保に係る事業費や経費等を補助・支援	7 (10.4%)
人的支援	県が職員や専門家、アドバイザー等を派遣して支援	4 (6.0%)
その他	県職員による現況把握調査、関係者を一堂に会した円卓会議の開催など	2 (3.0%)
総回答事例数(N) ※複数に該当する回答あり		67 (100%)

地域のNPOや住民団体等が行う集落機能の維持・保全対策に対し間接的に支援を行っている都道府県は19団体あり、29の施策事例が挙げられた。施策事例を分野別にみると、「産業基盤の維持対策」や「地域文化の保全対策」(15事例)への支援施策が多くあげられている(図表2-9-19)。

施策の内容をみると、多くは「活動費の補助・助成」(15施策)である(図表2-9-20)。

図表 2-9-19 都道府県がNPOや住民団体を通じて支援している施策



図表 2-9-20 都道府県がNPOや住民団体を通じて支援している施策の内容

分類	施策の内容(例)	事例数(%)
活動支援	NPO や住民団体を対象に事業費の一部を補助して支援	15 (51.7%)
事業委託	県がNPO や民間団体にモデル事業を委託して集落活性化を支援	4 (13.8%)
人材配置・派遣	県が委嘱した地域づくり関連職員やアドバイザーを派遣して支援	3 (10.3%)
体制構築	協働プラットフォームを設置して支援	3 (10.3%)
その他	県がイベントを共同開催したり情報発信等を行う	4 (13.8%)
総回答事例数(N)		29

(備考) 具体的な内容が不明な事例は除いている。

5) 過疎地域の地域運営組織・集落ネットワーク圏（小さな拠点）について

近年、地域住民自らが主体となって、地域の将来プランを作成するとともに、高齢者の見守り、生活サービスの提供、域外からの収入確保などの地域課題の解決に向けた多機能型の取組を持続的に行うための組織である「地域運営組織」の形成が進んでいる（図表 2-9-21）。

また、地域住民の活動・交流拠点の強化や生活サービス機能の集約・確保と集落生活圏内外との交通ネットワークの整備を行う「集落ネットワーク圏（小さな拠点）」の形成も進んでいる（図表 2-9-22）。

図表 2-9-21 過疎地域の地域運営組織の形成数

	平成 29 年度		平成 30 年度		令和元年度	
	形成数	市町村数	形成数	市町村数	形成数	市町村数
過疎	988	246 (36.6%)	1115	259 (38.5%)	1,126	269 (40.0%)
全国	4,177	675 (39.3%)	4,787	711 (41.4%)	5,236	742 (43.2%)

(備考) 1 総務省調べによる。

2 過疎地域は、令和 2 年 4 月 1 日現在。

3 「過疎地域」には、一部過疎市町村は含んでいない。

4 過疎については、一部過疎市町村を除く過疎関係市町村（672 団体）に占める割合。全国については、全市町村（特別区を除く、1,718 団体）に占める割合。

図表 2-9-22 集落ネットワーク圏（小さな拠点）の形成数・市町村数

	平成 29 年度		平成 30 年度		令和元年度	
	形成数	市町村数	形成数	市町村数	形成数	市町村数
過疎	547	145 (21.6%)	597	163 (24.3%)	672	171 (25.4%)
全国	908	258 (15.0%)	1,069	307 (17.9%)	1,181	314 (18.3%)

(備考) 1 内閣府「小さな拠点の形成に関する実態調査」による。

2 形成数は、市町村版総合戦略に位置付けのある小さな拠点の形成数であり、市町村数は、市町村版総合戦略に位置付けて取組を進めている市町村の数である。

3 過疎地域は令和 2 年 4 月 1 日現在。

4 「過疎地域」には、一部過疎市町村を含まない。

5 過疎については、一部過疎市町村を除く過疎関係市町村（672 団体）に占める割合。全国については、全市町村（特別区を除く、1,718 団体）に占める割合。

2 市町村による住宅整備の状況

(1) 空き家の状況について

過疎の多い県では、住宅総数における空き家数の割合が全国より高くなっている（図表 2-9-23）。

図表 2-9-23 空き家の状況について

	(A)住宅総数	(B)空き家数	(B)/(A) 割合	(C)空き家数 (二次的住宅、賃貸 用又は売却用の住宅 を除く)	(C)/(A) 割合
全国	62,407,400	8,488,600	13.6%	3,487,200	5.6%
過疎の多い県	5,329,000	887,100	16.6%	511,000	9.6%

- (備考)
- 1 総務省「平成30年住宅・土地統計調査」による
 - 2 この調査では、「空き家」の種類を「二次的住宅」、「賃貸用の住宅」、「売却用の住宅」、「その他の住宅」に分類している。
 - ・「二次的住宅」とは、別荘及びその他（たまに寝泊まりする人がいる住宅等）である。
 - ・「賃貸用の住宅」とは、新築・中古を問わず、賃貸のために空き家になっている住宅である。
 - ・「売却用の住宅」とは、新築・中古を問わず、売却のために空き家になっている住宅である。
 - ・「その他の住宅」とは、上記以外の人が住んでいない住宅で、例えば、転勤・入院などのため居住世帯が長期にわたって不在の住宅や、建て替えなどのために取り壊すことになっている住宅などである。
 - 3 「過疎の多い県」は、過疎関係市町村数、人口及び面積を基準に、地域バランスも勘案して、秋田県、山形県、山梨県、和歌山県、島根県、高知県、熊本県、大分県、宮崎県及び鹿児島県としている。

(2) 定住促進のための住宅整備の状況

人口の増加や地域の担い手確保を図るためには、UIターン者や当該地域の若者等のための良質で低廉な住宅や宅地を整備することが重要である。

このため、過疎関係市町村においては、定住促進のための住宅整備を実施している。平成12年度から令和元年度までに過疎関係市町村が整備した宅地は35,696区画であり、その形態別の区画数をみると、「宅地及び住宅を市町村が整備し、賃貸する」が51.4%を占め、次いで、「宅地を分譲し、住宅は個人が建設する」が44.7%となっている。

令和元年度においては、732区画が整備されており、その内訳としては、「宅地及び住宅を市町村が整備し、賃貸する」が48.8%、「宅地を分譲し、住宅は個人が建設する」が48.2%となっている（図表2-9-24）。

図表 2-9-24 過疎地域における定住促進のための宅地整備状況

(単位：戸)

年度		H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
団体数		273	288	286	238	168	141	92	113	104	114	100	117	122
戸数（区画数）		2,724	3,128	3,727	3,217	2,492	2,262	1,081	1,772	1,761	2,050	928	1,130	1,449
内 訳	宅地を分譲し、住宅は個人が建設する	1,444	1,542	1,850	1,567	1,247	1,158	422	456	944	494	319	561	381
	宅地及び住宅を市町村が整備し、分譲する	106	19	33	44	172	70	26	0	0	0	0	1	11
	宅地を賃貸し、住宅は個人が建設する	13	70	96	136	59	71	72	27	82	28	12	6	34
	宅地及び住宅を市町村が整備し、賃貸する	1,161	1,497	1,748	1,470	1,014	963	561	1,289	735	1,528	597	562	1,023

年度		H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	計
団体数		129	108	141	134	126	123	107	3,024
戸数（区画数）		1,947	1,197	1,154	1,054	1,057	834	732	35,696
内 訳	宅地を分譲し、住宅は個人が建設する	1,312	572	397	264	264	411	353	15,939
	宅地及び住宅を市町村が整備し、分譲する	3	0	20	32	32	0	9	554
	宅地を賃貸し、住宅は個人が建設する	3	11	13	6	6	12	13	844
	宅地及び住宅を市町村が整備し、賃貸する	629	614	724	755	755	411	357	18,359

(備考) 1 総務省調べ。

2 一部過疎地域については、その区域の整備状況に基づく。

3 平成22年度については、岩手県、宮城県、福島県の3県分の数値を含んでいない。

平成27年度～平成29年度については、九州北部豪雨により被災した福岡県朝倉市、大分県日田市の数値は含まない。

第3章

過疎対策の現況

第3章 過疎対策の現況

第1節 近年の過疎対策

総務省では、過疎地域の課題の解決に向け、時代に対応した実効性ある過疎対策のあり方等について学識経験者等の意見交換を行う場として、過疎問題懇談会を開催している。同懇談会では、これまでの過疎対策の成果や過疎地域の現状を踏まえながら、今後の過疎地域における振興方策全般について意見交換等を行っている。

本節では、近年の過疎対策に関する国の動向及び施策を紹介する。

1 新たな過疎対策に向けて～過疎地域の持続的な発展の実現～

過疎問題懇談会では、過疎地域自立促進特別措置法の令和3年3月末の期限切れを見据え、平成29年度から19回の会合と8回の現地視察を実施し、新たな過疎対策の理念、目標、施策の視点、対象地域のあり方、支援制度のあり方について提言を行った。

提言の要旨は次のとおり。

1. 過疎地域の現状と課題

過疎関係市町村は、全都道府県に817団体あり、全市町村の約5割となっている。過疎地域の人口は全国の約1割、面積は全国の約6割を占めている。

懇談会では、これまでの過疎対策の成果についての検証が行われ、産業の振興、交通・情報通信・生活環境・福祉等の施設整備、地域医療の確保、教育の機会の確保等に一定の成果をあげてきたとの評価がなされた。

一方、過疎地域の人口減少は加速しており、経済指標や公共施設の整備水準の格差は未だ残っているほか、人口構造の変化を背景として、公共交通手段の確保や医療・福祉分野をはじめとした担い手の確保、集落の維持・活性化といった課題が深刻化してきているとの指摘がなされている。

2. 過疎地域を取り巻く環境の変化

① 厳しい環境の見通し

過疎地域を取り巻く厳しい環境の見通しとして、①人口減少社会の到来、東京一極集中と過疎地域の人口減少の加速、②担い手不足の深刻化、③公共施設等の老朽化・統廃合等、④農地、森林、住まい等の管理といった課題が示されている。

② 過疎地域の課題の克服に向けた新たな潮流

過疎地域の課題の克服に向けた新たな潮流について、①過疎対策の理念や過疎地域の価値・役割の背景となる新たな動き、②過疎地域の課題を解決するための新たな取組、③過疎対策を推進するための手法として、次のことが示されている。

(1) 過疎対策の理念や過疎地域の価値・役割の背景となる新たな動き

- ・ 過疎対策の理念の理論的基礎となり得る SDGs（持続可能な開発目標）の理念が広がりを見せている
- ・ 近年、農地や森林が有する公益的機能の維持増進を図ることを目的とした新たな法律が制定されてきており、農地や森林が多い過疎地域の役割や価値の重要性についての認識が高まっている

(2) 過疎地域の課題を解決するための新たな取組

- ・ 小規模校ゆえの一人一人の学びをサポートに適した環境、過疎地域ゆえの地域社会に貢献できるという感覚を得やすい環境等の特性を積極的に生かした教育を推進する地域が現れている
- ・ 若い世代を中心に都市部から過疎地域等の農山漁村へ移住しようとする「田園回帰」の潮流が高まっており、この潮流を活かして、人の流れの創出、人と地域とのつながりに着目した施策が強化されてきている
- ・ 移住者などによる「起業化」、「継業化（地域の事業を承継するもの）」、「移業化（サテライトオフィスなど地域外から仕事を持ち込むもの）」、「多業化（農林漁業と観光業など複数の仕事を組み合わせて生計を立てるもの）」といった新たなコンセプトのしごとづくりが行われてきている
- ・ 地域住民自らが主体となって、地域の将来プランを作成するとともに、地域課題の解決に向けた多機能型の取組を持続的に行う「地域運営組織」の形成や、生活サービス機能の集約・確保と集落生活圏内外との交通ネットワークの整備を行う「集落ネットワーク圏（小さな拠点）」の形成が進められている
- ・ 超スマート社会（Society5.0）を見据え、過疎地域の条件不利性を改善し、少ない人口で地域経済・社会を存続・発展させていくための手法として、革新的技術への期待が高まっている

(3) 過疎対策を推進するための手法

- ・ 過疎対策において、地域住民の参画の下、市町村よりもきめ細かな小さい単位で、地域診断や将来人口の推計・分析を行い、将来人口の目標や地域を維持・活性化するための戦略の設定を行い、人口の社会増を実現した地域が現れている
- ・ 定住自立圏や連携中枢都市圏をはじめとした市町村間の広域連携、都道府県による市町村の規模・能力に応じた補完・支援の取組を進める地域が現れてきている
- ・ 地方分権改革・提案募集制度等を活用して、過疎地域等の条件不利地域の実情を踏まえた規制の見直しが進んでいる

3. 今後の過疎対策のあり方・方向性

① 過疎地域の価値・役割と過疎対策の必要性

「過疎地域の社会的価値に関するアンケート調査（H30）」（総務省）によると、過疎地域に対する支援や対策の必要性は、都市部の住民を含めて7割を超える国民に認識されている。

過疎地域の価値・役割については、「食料や水の生産・供給」、「日本人の心のふるさ

と」、「多様な生態系を持つ自然環境の保全」、「都市とは異なる新しいライフスタイルが実現できる場」などが都市部の住民を含めて国民の間で広く認識されている。

これらの過疎地域の価値・役割を發揮させるとともに、条件不利性の改善や人口構造の変化を背景として深刻化が見込まれる過疎地域の課題を解決するため、現行の過疎法の期限以降についても、引き続き過疎対策を講じていくための制度が必要であることが強調されている。

②新たな過疎対策の理念・目標・施策の視点

(1) 新たな過疎対策の理念

提言では、「我が国全体が人口減少社会を迎え、過疎地域において、人口減少が加速し、担い手不足等を背景に過疎地域の住民の暮らしや地域社会の持続可能性に影響が生じることが懸念される中、新たな過疎対策では、いかに持続可能な地域社会を形成していくかが重要である。」との指摘がなされており、「過疎地域の持続的発展」という理念が提示されている。

(2) 新たな過疎対策の目標

「過疎地域の持続的発展」のために、「地域資源を生かした内発的発展」、「条件不利性の改善」、「住民の安心な暮らしの確保」、「豊かな個性の伸長」の目標を掲げることの重要性が示されている。

(3) 新たな過疎対策の施策の視点

新たな過疎対策の目標を達成するため、「地域、住民、学校の連携による人材の育成」、「人の流れと人と地域のつながりの創出」、「働く場の創出」、「再生可能エネルギーの活用」、「革新的な技術の活用」、「地域運営組織と集落ネットワーク圏（小さな拠点）の推進」、「市町村間の広域連携と都道府県による補完」、「目標設定とフォローアップ」の視点で施策を講じることの重要性が示されている。

③過疎対策の対象地域のあり方

過疎対策の対象地域のあり方については、次の方向性が示されている。

(1) 過疎地域の要件・指標

現行の過疎法においては、過疎地域の要件として、人口要件及び財政力要件が設けられている。

人口要件については、過疎現象をとらえる指標として、人口減少に着目することが適当との考えのもと、人口減少率が用いられている。また、人口の減少が引き続いた結果として、高齢者が多く若年者が少ないという状態が地域社会における活力の低下をもたらしているということに着目し、高齢者比率及び若年者比率が用いられている。新たな過疎対策においても、これらの指標を用いることが適当と考えられる。

財政力要件の指標としては、財政力指数及び公営競技収益が用いられている。過疎法が過疎対策のための行財政上の特別措置を講じるものであることから、財政力が相対的に弱い市町村を対象とすることが適当との考え方によるものである。新たな過疎対策においても、財政力要件を引き続き設けることが適当と考えられる。

(2) 合併市町村の取扱い

現行の過疎法においては、現行法の期間内に行われる市町村合併の特例として、みなし過疎制度、一部過疎制度が設けられており、現在、みなし過疎市町村は 25 団体、一部過疎市町村は 145 団体ある。

一部過疎制度については、①一部過疎市町村には財政力指数が高い都市も含まれていること、②平成の合併からすでに一定の期間が経過していること、③合併市町村においては、現在でも市町村合併の課題等に対応するための様々な取組が行われていることを踏まえ、平成の合併による合併市町村については、当該市町村の財政力に留意しつつ、人口減少が著しい旧市町村単位での取組を支援する仕組みを設けることも検討していく必要があるとの指摘がなされている。

④支援制度のあり方

支援制度のあり方については、次の方向性が示されている。

(1) 市町村計画

現行の過疎法においては、市町村が、過疎法に基づく国庫補助の特例や過疎対策事業債を活用しようとする際には、市町村議会の議決を経た市町村計画を策定する必要がある。

この市町村計画については、地域住民等の参画の下、過疎地域の将来像を行政や地域住民等の関係者が共有できるよう、十分に検討して作成することが重要である。また、将来人口の推計、地域の目標の設定、フォローアップなど市町村計画の内容を充実・強化し、実質性を向上させることが、過疎対策の実効性を向上させることにつながる。

さらに、過疎対策は、市町村単位だけではなく、平成の合併前の旧市町村や小学校区、集落ネットワーク圏など、地域の実情に応じて設定される市町村よりも小さな単位で目標設定、フォローアップを実施することも有効である。

(2) 国庫補助等

「地域、住民、学校の連携による人材の育成」、「人の流れと人と地域のつながりの創出」、「集落の維持・活性化」、「情報通信基盤の整備」、「産業振興」、「医療の確保」、「公共交通の確保」に関する施策を推進していくことが重要である。

(3) 過疎対策事業債

過疎対策事業債については、ハード事業・ソフト事業ともに、事業の実効性を向上させるために、市町村計画に記載される目標の達成に資する事業であることを明確化していくことが重要である。

ハード事業については、公共施設等の長寿命化・更新・統廃合・転用・除却が大きな課題となる中で、公共施設等総合管理計画、個別施設計画に基づき、適切なストックマネジメントの考え方の下に推進していくことが重要である。

ソフト事業については、過疎地域の条件不利性の改善や内発的発展に資する事業に効果的に使われており、過疎地域の自立促進に寄与している。しかしながら、観光イベントやプレミアム商品券といった一過性の地元消費喚起策に使われている事例もある。ソフト事業への起債が建設公債の原則の例外として認められていることに鑑みると、特に教育・医療・交通等の体制の構築や人材育成、中間支援組織の育成など中長期的な地域の資産・財

産となり得る事業に充当していくことが望ましい。このことについては、市町村計画に記載される目標の達成に資する事業であることを明確化する際に、中長期的な地域の資産・財産となり得る事業であることをできる限り説明することが重要である。

(4) 規制の見直し

地方分権改革・提案募集制度や規制改革ホットラインの活用によって、過疎地域等の条件不利地域の実情を踏まえた規制の見直しが進められてきている。新たな過疎対策においては、過疎地域の実態に即した見直しを一層促していくことが重要である。

(5) 税制措置

過疎地域においては、若者の働く場の確保・創出や、Society5.0時代を見据えた地域産業の振興といった施策の視点が特に重要になっていることから、これらの視点を踏まえて、税制措置を充実することが重要である。

(6) 金融措置

日本政策金融公庫等による低利融資を充実することが重要である。

(7) 市町村間の広域連携と都道府県による補完

市町村間の広域連携と都道府県による補完の取組について、過疎対策の視点から地域の実情に応じて対応することが重要である。

2 集落対策

(1) 過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業

総務省では、過疎問題懇談会の「過疎地域等における今後の集落対策のあり方に関する提言（平成27年3月31日）」を踏まえ、「過疎地域等自立活性化推進交付金」のメニューとして、平成27年度に「過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業」を創設した。

本事業は過疎地域の集落等において深刻化する喫緊の課題に対応するため、基幹集落を中心として、周辺の集落との間で「集落ネットワーク圏」を形成し、生活の営み（日常生活支援機能）を確保するとともに、生産の営み（地域産業）を振興するために地域運営組織等が行う取組を支援することにより、集落の維持・活性化を図ることを目的としている。

具体的には、過疎地域等の条件不利地域内において、地域運営組織が活性化プランに基づき取り組む事業の実施に必要な経費（食糧費及び建設地方債が充当可能な経費を除く）について支援するものである。

※語句解説

- ・**地域運営組織**：地域の生活や暮らしを守るため、地域で暮らす人々が中心となって形成され、地域内の様々な関係主体が参加する協議組織が定めた地域経営の指針に基づき、地域課題の解決に向けた取り組みを持続的に実践する組織。

(2) 集落支援員

過疎問題懇談会の「過疎地域等の集落対策についての提言（平成20年4月）」を踏まえ、総務省は、地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関してノウハウ・知見を有した人材が、地方公共団体からの委嘱を受け、市町村職員と連携し、集落への「目配り」として集落の巡

回、状況把握等を実施する「集落支援員」の設置、集落点検の実施、集落のあり方に関する住民同士や住民と市町村の話し合いによる集落対策等に取り組む必要がある旨の通知（平成 20 年 8 月）を各都道府県宛に行うとともに、これらの経費等について、特別交付税による財政措置を講じることとした。

令和元年度の集落支援員に関する各自治体の取組状況についてみると、集落対策の業務に専ら従事する集落支援員を設置している都道府県及び市町村は、4 府県 348 市町村であり、人数は 1,741 人であった。そのほか、自治会長、行政区長といった他の業務と兼ねる集落支援員は全国で 3,320 人であった（令和元年度特別交付税算定ベース）。

（3）まち・ひと・しごと創生基本方針 2020（令和 2 年 7 月 17 日閣議決定）

地方都市生活圏においてはコンパクト・プラス・ネットワーク等の推進や、地域交通の維持・確保に取り組むとともに、集落生活圏においては小さな拠点の形成等を推進することで、都市機能及び日常生活サービス機能を維持・確保し、訪れたい、住み続けたいと思えるような地域をつくるとされている。

また、次のように具体的取組を定めている。

○魅力的な集落生活圏の形成（「小さな拠点」の形成等）

- ・地域の自立共助の運営組織の形成や「小さな拠点」の更なる形成拡大と質的向上を目指し、事例集やポータルサイトの活用、遠隔でも参加できる関係人口の参画などの取組を支援する。また、コンパクトシティ施策の取組とも整合性を図りつつ、周辺地域とネットワークで結ぶ基幹地域においてモデル的な「小さな拠点」事業の効率的な実施を推進するため、既存施設を活用した生活機能の集約に係る改修等を支援する。さらに、地域の特性を活かした農林水産物の生産や 6 次産業化による高付加価値化、安定的な石油製品の供給システムの確立など分野横断的な取組を進めるとともに、農業協同組合、郵便局など地域内外の多様な組織との連携を推進する。

（内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局、内閣府地方創生推進事務局、総務省情報流通行政局郵政行政部企画課、農林水産省農村振興局農村政策部農村計画課、資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課、国土交通省総合政策局地域交通課、国土政策局地方振興課、海事局内航課）

- ・過疎地域をはじめとした条件不利地域において、「小さな拠点」の形成に向けて、住民の生活支援やなりわいの創出を支援するとともに、優良事例を周知する。また、過疎地域自立促進特別措置法の期限切れを控え、過疎地域の厳しい現状を踏まえ、その持続的発展を目指す新たな過疎対策に取り組む。

（総務省自治行政局地域自立応援課過疎対策室、厚生労働省老健局振興課）

- ・「道の駅」第 3 ステージとして、子育て応援施設や外国人観光案内所などの福祉、観光等に関する機能や広域的な復旧・復興活動の拠点としての防災機能を強化することによ

り、地方創生を推進する。

(国土交通省道路局企画課)

- ・ 地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律（令和元年法律第64号）に基づく特定地域づくり事業協同組合が農業協同組合などの地域の事業者団体と連携しつつ地域づくり人材のベースキャンプとして機能するよう支援する。

(内閣府地方創生推進事務局、総務省自治行政局地域自立応援課地域振興室、厚生労働省職業安定局需給調整事業課、農林水産省農村振興局農村政策部農村計画課、中小企業庁経営支援部経営支援課)

- ・ 郵便局と地方公共団体等との連携を促進する一環として、ICTを活用した事例の全国展開を推進し、新たな分野における地域課題解決の事例を創出する。

(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局、総務省情報流通行政局郵政行政部企画課)

3 移住・定住に向けた取組

(1) 田園回帰に関する調査研究

近年、若い世代を中心に都市部から過疎地域等の農山漁村へ移住しようとする「田園回帰」の潮流が高まっていると言われている。このため、総務省では、平成28年度から平成29年度にかけて、6回にわたり「『田園回帰』に関する調査研究会」（座長：小田切徳美明治大学農学部教授）を開催し、過疎地域への移住の実態やその要因を分析した。

調査研究会では、国勢調査を用いて移住者数の推移や特徴等について分析し、「田園回帰」の実態を統計的に捉えるデータ分析のほか、移住の背景や移住理由、移住者の特性等について分析するための移住者アンケート、過疎関係市町村の移住・定住促進施策の実施状況調査等を行ったが、それぞれの調査で明らかになった傾向は、次のとおり。

[人口移動に関するデータ分析]

- ・ 過疎地域において、都市部からの移住者が増加している「旧市町村単位の区域」の数が拡大している傾向がある。

[過疎地域への移住者に対するアンケート調査]

- ・ 過疎地域への転居に際して、「地域の魅力や農山漁村地域（田舎暮らし）への関心が、転居の動機となったり、地域の選択に影響した」と回答した人は、全体の27.4%である。
- ・ 都市部からの移住者はこの割合が約37%であり、都市部からの移住者の方が、地域の魅力や農山漁村地域への関心が影響したという回答の割合が高い。

[過疎市町村に対する調査（移住・定住施策の実施状況）]

- ・ 過疎関係市町村（817団体）のうち、85%を超える市町村が移住相談窓口の設置、7割を超える市町村が移住・定住フェアへの出展・開催や空き家バンクなどの取組を行っている。

- ・ 移住・定住促進施策の実施状況と、移住者数の関係をみると、施策を開始した時期が早いほど移住者が増加している傾向が見られる。平成 11 年度以前に施策を始めた市町村のうち、移住者増となった区域を含む割合は 50%を超えているのに対して、施策開始時期が遅くなると、概ねその割合は低下する傾向にある。

(2) 地域おこし協力隊

人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図ることは、都市住民のニーズに応えながら、地域力の維持・強化に資する取組となる。

「地域おこし協力隊」とは、地方公共団体が三大都市圏をはじめとする都市地域等から、過疎地域等の条件不利地域に住民票を移動するとともに、生活の拠点を移した者を地域おこし協力隊員としておおむね 1 年以上 3 年以下の期間で委嘱し、地域ブランドや地場産品の開発・販売・PR や、農林水産業への従事及び住民の生活支援などの地域協力活動に従事してもらいながら、当該地域への定住・定着を図る取組である。

総務省では、地域おこし協力隊を配置する地方公共団体に対し、隊員の活動や起業・事業承継に要する経費等について、地方交付税により財政支援を講じており、全国で 5,349 人が活動している（令和元年度特別交付税ベース）。

(3) 移住・交流情報ガーデン

総務省では、地方への新しいひとの流れをつくるため、東京駅八重洲口近くに、地方への移住関連情報の提供・相談支援の一元的な窓口として「移住・交流情報ガーデン」を開設している。

「移住・交流情報ガーデン」では、地方への移住・交流に係る相談を実施し、利用者のニーズに応じて地方公共団体の窓口に繋ぐことや、厚生労働省や農林水産省と連携し、しごと情報や就農支援情報を提供しているほか、地方公共団体の移住・交流に関するパンフレット等の閲覧コーナーを設けている。また、週末を中心に地方公共団体による移住・交流に関する相談会やセミナー等が開催されている。

4 地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律

我が国の総人口が減少に転じる中、特に地域人口の急減に直面している地域において、地域社会及び地域経済の重要な担い手である地域づくり人材が安心して活躍できる環境の整備を図ることが喫緊の課題となっている。このような課題に対処するため、特定地域づくり事業協同組合の認定その他特定地域づくり事業を推進するための措置等を定める「地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律案」が議員立法によって令和元年 11 月 27 日に成立（12 月 4 日公布）し、令和 2 年 6 月 4 日に施行された。その概要は次のとおり。

(1) 目的

- ・ 特定地域づくり事業を推進し、併せて地域づくり人材の確保及びその活躍の推進を図り、もって地域社会の維持及び地域経済の活性化に資すること

(2) 地域づくり人材

- ・ 地域人口の急減に直面している地域において就労その他の社会的活動を通じて地域社会の維持及び地域経済の活性化に寄与する人材

(3) 特定地域づくり事業共同組合

- ・ 都道府県知事の認定を受けた中小企業等協同組合法上の事業協同組合

① 認定基準

- (i) 自然的経済的社会的条件からみて一体であり、地域づくり人材の確保について特に支援を行うことが必要な地区

- (ii)イ 特定地域づくり事業が適正に行われることを確保する見地から適当であり、かつ組合の職員の就業条件に十分に配慮されている計画

- ロ 当該事業が地域社会の維持及び地域経済の活性化に特に資すること

- (iii) 当該事業を確実に遂行するに足りる経理的及び技術的な基礎

*労働者派遣法における労働者派遣事業の許可の基準を参酌

- (iv) 事業協同組合、関係事業者団体及び市町村の間の十分な連携協力体制

② 特定地域づくり事業

- (i) 地域づくり人材がその組合員の事業に従事する機会の提供

- イ このうち労働者派遣事業に該当するものを、届出のみで行うことができる

- ロ 組合は、労働関係法令を遵守するとともに、労働者派遣事業の適正な実施に努める

- ハ 国及び地方公共団体は(ロ)のために必要な助言、指導その他の措置を講ずる

- (ii) 地域づくり人材の確保及び育成並びにその活躍の推進のための事業の企画及び実施

③ 国及び地方公共団体の援助等

- ・ 組合に対する必要な財政上の措置その他の措置

- ・ 組合に対する必要な情報の提供、助言、指導その他の援助

第2節 地方公共団体の過疎対策

1 過疎地域自立促進計画等の体系

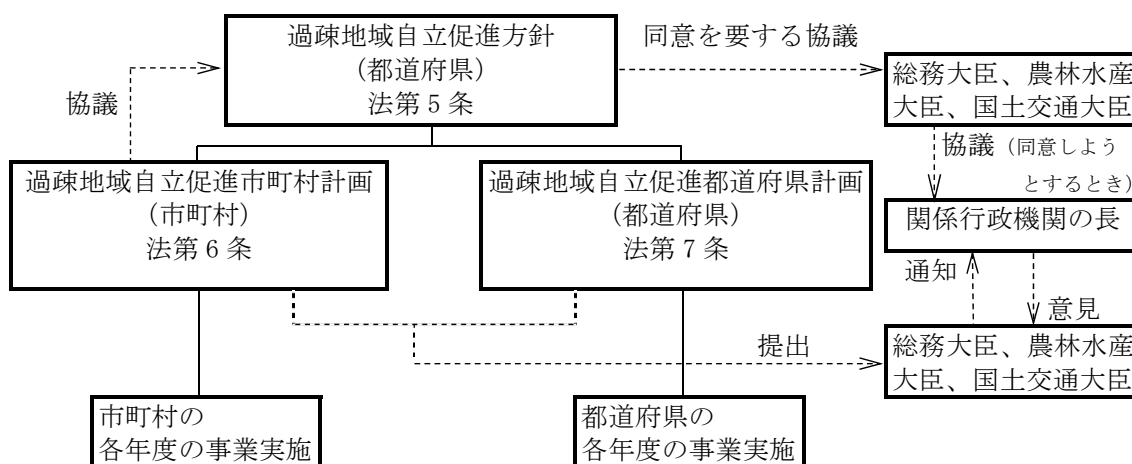
過疎対策については、過疎地域市町村の自主的な取組が重要であることから、対策の主体は基本的に市町村とされており、これに都道府県が協力し、国が特例措置により支援することによって推進されるよう組み立てられている。都道府県が策定する「過疎地域自立促進方針」（以下「自立促進方針」という。）に基づき、過疎地域市町村や都道府県は、それぞれ「過疎地域自立促進市町村計画」（以下「市町村計画」という。）又は「過疎地域自立促進都道府県計画」（以下「都道府県計画」という。）を策定し、過疎対策に取り組むこととされている。

「自立促進方針」は、都道府県が行う過疎地域自立促進のための施策の大綱であるとともに、市町村計画及び都道府県計画の策定指針となるもので、策定に当たっては総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣（以下「三大臣」という。）に協議を行いその同意を得ることとされており、国の施策の方針との調和が図られている。

「市町村計画」は、過疎地域市町村の総合的、計画的な自立促進を図るための総合計画、地域計画としての性格を備えており、それぞれの地域の状況を踏まえ、地域の特性を活かしつつ、離島振興計画、山村振興計画等の他の地域振興計画等とも調和を図り定められるものである。策定に当たっては、一部の事項を除いてあらかじめ都道府県に協議することとされており、また、当該市町村の議会の議決が必要とされている。

「都道府県計画」は、都道府県が過疎地域市町村に協力して講じようとする措置の計画であり、都道府県自らが実施する広域的かつ基幹的な諸事業及び市町村事業の円滑な実施に必要な措置が織り込まれている。

図表 3-2-1 過疎地域自立促進特別措置法の仕組み



「自立促進方針」に基づいて定められる「市町村計画」及び「都道府県計画」は、三大臣に提出されるが、三大臣は、その内容を関係行政機関の長に通知し、関係行政機関の長は、当該計画について意見があれば、三大臣に申し出ることができる。「市町村計画」及び「都道府県計画」は、このような一連の手続きを通じて、国の方針及び施策との整合性が確保されている（図表 3-2-1）。

なお、平成 22 年 4 月 1 日施行の改正「自立促進法」は、平成 22 年度から平成 27 年度までの 6 年間の時限立法として施行されたが、平成 24 年 6 月 24 日にさらに 5 年間延長となる改正がなされ、令和 2 年度までの時限立法となったところである。法期限の延長に伴い、都道府県や過疎地域市町村では、新たな自立促進方針や都道府県計画、市町村計画を定め、それぞれの施策を講じているところである。

2 自立促進方針

過疎地域は地域ごとにその状況を異にしており、過疎対策の方向もまたそれぞれ地域の実態に適合したものでなければならない。したがって、「自立促進方針」は、それぞれの地域の特性を活かし、各地域の自主性、主体性、創意工夫等を尊重するとともに、国、都道府県の各種地域開発計画等における過疎地域の位置づけやそれらの計画の過疎地域に及ぼす影響等をも検討し、過疎地域自立促進のための基本的方向を定めるものである。

また、策定に当たっては「広域的な経済社会生活圏の整備の体系」に配慮することとなっているが、これは、経済、社会及び生活の活動範囲が広域化していることに鑑み、過疎地域の自立促進を都道府県の総合計画などの中に位置付け、広域的な観点に立っての総合的かつ計画的な自立促進が図られることが肝要であることによるものである。

「自立促進方針」は、おおむね①基本的な事項、②産業の振興及び観光の開発、③交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進、④生活環境の整備、⑤高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進、⑥医療の確保、⑦教育の振興、⑧地域文化の振興等、⑨集落の整備の 9 つの項目について定められる。

過疎地域がある都道府県は、平成 27 年度末までに、平成 28 年度から令和 2 年度までを期間とする自立促進方針を策定している。なお、平成 29 年度に初めて過疎関係市町村が追加された神奈川県については、平成 29 年度から令和 2 年度までを期間とする自立促進方針を策定している。

自立促進方針の策定にあたり、総務省、農林水産省及び国土交通省の三省の通知において、策定にあたって配慮すべき事項や、具体的な施策の事例を示しており、その一部を挙げると、次のとおりである。

(1) 基本的な事項

○過疎地域の現状と問題点を踏まえて、過疎地域が、豊かな自然環境、再生可能なクリーンエネルギー、安全な食糧、歴史文化資産といったそれぞれの有する地域資源を最大限活用して地域の自給力を高めるとともに、国民全体の生活にかかわる公益的機能を十分

に発揮することで、住民が誇りと愛着を持つことができる活力に満ちた地域社会の実現を図ること。

(2) 産業の振興

- 交流拠点や遊休施設等を活かした新たな流通・販売チャンネルの構築、情報通信基盤を活用した新たな雇用の場の確保・充実等。
- 農林水産業の振興については、生産基盤の整備、経営近代化のための施設整備のほか、営農指導、農商工連携、生産・加工・流通・販売の一体化による取組、農林資源の持続可能な利用のための森林整備等のソフト事業。
- 地域資源を活かしたコミュニティビジネス、スモールビジネス等地域の实情に即した多様な分野における新規事業の立ち上がりを支援するための幅広い情報提供、共同利用施設の整備、金融措置等のソフト事業。
- 観光及びレクリエーションについては、近年におけるゆとりある生活への指向、余暇の増大、自然環境への関心の高まり等の要請を踏まえつつ、地域間交流の促進の観点も含めたソフト事業。

(3) 交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進

- コミュニティバスやデマンドバスの導入、スクールバスや福祉バスの活用、民間バス路線の確保、公営バス等身近な交通手段の確保や、住民の交通の利便の確保のためのハード事業及びソフト事業。
- 過疎地域のニーズに対応した情報通信基盤整備とともに、医療・教育等公共サービスの確保（医療情報連携ネットワーク等）、高齢者の安否確認・生活情報伝達サービスの提供、場所にとらわれない就業や起業を可能とする取組（テレワーク等）、地域がその実情に応じた形で ICT を最大限活用していくためのハード事業及びソフト事業。

(4) 生活環境の整備

- 洪水や土砂災害等の自然災害対策、景観保全、水源保全、森林や水路等の保全活動、耕作放棄地の復元、ゴミ分別活動やリサイクル活動等のソフト事業。
- 簡易水道、下水処理施設等の整備及び消防・救急施設等の整備。また、新規整備のほか、費用対効果の高い維持管理の実施等。
- 消防・救急の広域応援体制や災害時要援護者対策等、防災力向上のためのソフト事業。

(5) 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進

- 地域全体で高齢者を支える仕組みづくりなど施設整備以外のソフト事業。
- 保育所、児童館及び認定こども園の配置のあり方並びにその整備、少子化対策、子育て支援対策等、子どもを育てる若い世代を対象とした保健及び福祉対策。

(6) 医療の確保

- 医師修学資金貸付事業への支援や専門医の派遣に対する支援等の医師確保対策。
- 地域の中核的な病院等による過疎地域への支援や、病院間・病院診療所間の協力体制の構築、遠隔医療の環境整備を始めとする新たな ICT 等の活用について、地域医療確保の観点から行うハード事業及びソフト事業。

(7) 教育の振興

- 耐震化を含めた良好な教育環境の確保のための施設整備。
- コミュニティの中核的施設としての学校施設の活用等。
- 統廃合に伴う廃校舎等について、企業誘致による新たな産業拠点としての活用や、都市との交流拠点、子どもの体験活動のフィールドとしての再整備等の有効活用。

(8) 地域文化の振興等

- 施設の整備に限らず、施設を活用した地域文化の振興事業や、施設にかかわらないソフト事業

(9) 集落の整備

- 集落における生活機能を確保するため、基幹集落の機能を強化し、複数集落をネットワーク化する事業（「集落ネットワーク圏」の形成を含む「小さな拠点」の形成等）。
- 地域自治組織が行う自主的・自発的活動を支援する仕組み作りや、集落支援員や地域おこし協力隊など人材の確保等に係る施策等。

<各分野に含まれる事業の例>

産業の振興	農林水産業振興、地場産業振興、観光又はレクリエーション 等
交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進	市町村道、農林道、電気通信施設、地域間交流 等
生活環境の整備	水道施設、下水処理施設、消防施設、公営住宅 等
高齢者等の保護及び福祉の向上及び増進	高齢者福祉施設、児童福祉施設、認定こども園、母子福祉施設 等
医療の確保	診療施設、無医地区対策、へき地医療確保 等
教育の振興	学校教育関連施設（校舎、屋内運動場、スクールバス、給食施設 等）、幼稚園、集会施設、体育施設 等
地域文化の振興等	地域文化の振興等に係る施設、地域特有の伝統文化等の保存 等
集落の整備	公共施設、農地、定住促進団地等の整備 等
その他地域の自立促進に関し必要な事項	自然エネルギーを利用するための施設 等

3 自立促進計画の事業費

(1) 全体事業費

自立促進法に基づく自立促進計画（都道府県計画及び市町村計画）における地方公共団体の事業費の実績額の合計は、51兆1,819億円となっている（図表3-2-2）。

令和元年度の自立促進計画における項目別実績額をみると、「産業の振興」が全体の34.4%を占めており、以下、「交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進」（25.2%）、「生活環境の整備」（16.6%）となっている（図表3-2-2、図表3-2-3）。なお、緊急措置法、振興法、活性化法、自立促進法に基づく実績額の合計は112兆7,794億円となっている。

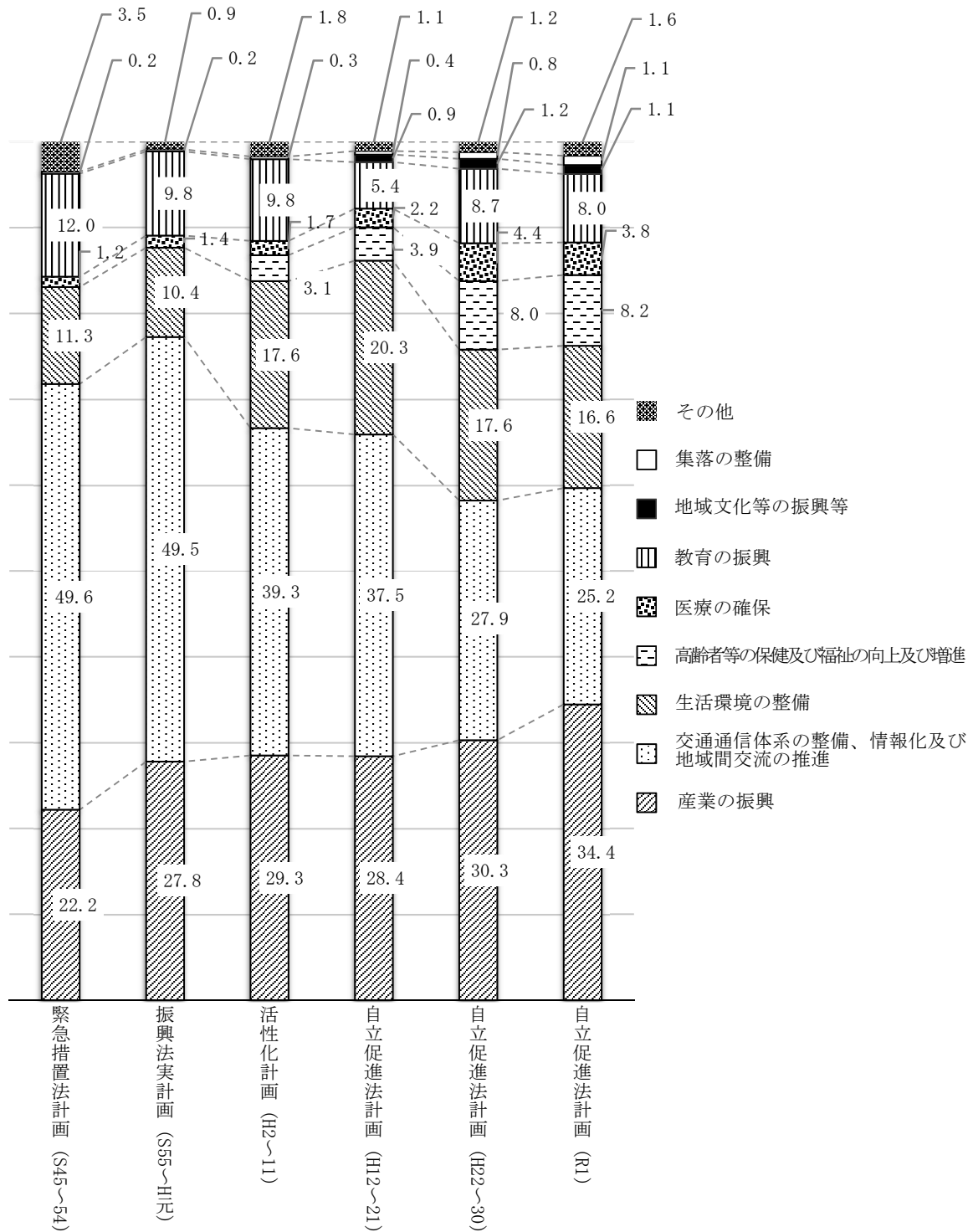
図表3-2-2 過疎対策事業における項目別事業費の実績額

（単位：億円、%）

区分	産業の振興	交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進	生活環境の整備	高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	医療の確保	教育の振興	地域文化の振興等	集落の整備	その他	合計	
緊急措置法 (S45～54)	17,524 (22.2)	39,197 (49.6)	8,945 (11.3)		953 (1.2)	9,470 (12.0)		190 (0.2)	2,739 (3.5)	79,018 (100.0)	
振興法 (S55～H元)	48,257 (27.8)	85,942 (49.5)	17,983 (10.4)		2,457 (1.4)	17,085 (9.8)		412 (0.2)	1,534 (0.9)	173,669 (100.0)	
活性化法 (H2～11)	106,604 (29.3)	142,673 (39.3)	64,057 (17.6)	11,308 (3.1)	6,211 (1.7)	24,865 (6.8)		1,186 (0.3)	6,384 (1.8)	363,286 (100.0)	
自立促進法	(H12～21)	69,629 (28.4)	91,919 (37.5)	49,657 (20.3)	9,521 (3.9)	5,330 (2.2)	13,298 (5.4)	2,142 (0.9)	1,003 (0.4)	2,629 (1.1)	245,128 (100.0)
	(H22～30)	72,191 (30.3)	66,557 (27.9)	41,921 (17.6)	19,037 (8.0)	10,506 (4.4)	20,690 (8.7)	2,776 (1.2)	1,840 (0.8)	2,863 (1.2)	238,381 (100.0)
	(R1)	9,752 (34.4)	7,135 (25.2)	4,692 (16.6)	2,335 (8.2)	1,077 (3.8)	2,255 (8.0)	298 (1.1)	306 (1.1)	459 (1.6)	28,308 (100.0)
自立促進法 計 (H12～R1)	151,572 (29.6)	165,611 (32.4)	96,270 (18.8)	30,893 (6.0)	16,913 (3.3)	36,243 (7.1)	5,216 (1.0)	3,149 (0.6)	5,951 (1.2)	511,818 (100.0)	
合計 (S45～R1)	323,957 (28.7)	433,423 (38.4)	187,255 (16.6)	42,201 (3.7)	26,534 (2.4)	87,663 (7.8)	5,216 (0.5)	4,937 (0.4)	16,608 (1.5)	1,127,794 (100.0)	

- (備考) 1 総務省調べ。
 2 ()は構成比である。
 3 過疎計画は分野ごとに、ハード事業・ソフト事業が計上されている。
 4 緊急措置法、振興法において合算されている「生活環境の整備」及び「高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進」の実績額は、合計欄では「生活環境の整備」として集計している。また、緊急措置法、振興法、活性化法において合算されている「教育の振興」及び「地域文化の振興等」の実績額は、合計欄では「教育の振興」として集計している。
 5 平成28年度は九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市を除く。
 6 平成29年度は西日本豪雨で被災した愛媛県宇和島市、大洲市を除く。
 7 令和元年度は令和2年7月豪雨で被災した熊本県球磨村を除く。

図表3-2-3 項目別事業費における実績額の推移 (%)



(2) 自立促進都道府県計画に係る事業費

自立促進法に基づく自立促進都道府県計画における事業費の実績額の合計は 23 兆 4,754 億円となっている。

実績額を項目別にみると、「交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進」が 10 兆 5,505 億円で全体事業費の 44.9%を占め、続いて「産業の振興」が 9 兆 4,609 億円で全体事業費の 40.3%を占めており、この 2 項目で全体の 85.2%という高いウエイトを占めているのが特徴的である（図表 3-2-4）。

項目別事業費における構成比についてこれまでの実績額と比較すると、「交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進」の比率が減少し、「産業の振興」の比率が高くなっており、さらには、「生活環境の整備」の比率が高くなってきている（図表 3-2-4、図表 3-2-5）。

図表 3-2-4 都道府県計画における項目別事業費の実績額

(単位：億円、%)

区分	産業の振興	交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進	生活環境の整備	高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	医療の確保	教育の振興	地域文化の振興等	集落の整備	その他	合計	
緊急措置法 (S45～54)	9,940 (28.2)	22,709 (64.4)	447 (1.3)		314 (0.9)	131 (0.4)	0 (0.0)	1,738 (4.9)	35,279 (100.0)		
振興法 (S55～H元)	26,196 (32.9)	50,623 (63.6)	810 (1.0)		1,027 (1.3)	822 (1.0)	10 (0.0)	112 (0.1)	79,600 (100.0)		
活性化法 (H2～11)	58,262 (33.7)	95,341 (55.2)	10,994 (6.4)	871 (0.5)	2,442 (1.4)	2,286 (1.3)	442 (0.3)	2,157 (1.2)	172,795 (100.0)		
自立促進法	(H12～21)	41,837 (35.8)	61,106 (52.3)	7,788 (6.7)	1,253 (1.1)	1,789 (1.5)	1,783 (1.5)	441 (0.4)	189 (0.2)	616 (0.5)	116,802 (100.0)
	(H22～30)	46,620 (44.4)	40,033 (38.2)	7,654 (7.3)	3,916 (3.7)	2,914 (2.8)	2,145 (2.0)	705 (0.7)	299 (0.3)	642 (0.6)	104,928 (100.0)
	(R1)	6,152 (47.2)	4,366 (33.5)	1,168 (9)	485 (3.7)	286 (2.2)	232 (1.8)	90 (0.7)	70 (0.5)	175 (1.3)	13,023 (100.0)
自立促進法 計 (H12～R1)	94,609 (40.3)	105,505 (44.9)	16,610 (7.1)	5,654 (2.4)	4,989 (2.1)	4,160 (1.8)	1,236 (0.5)	558 (0.2)	1,433 (0.6)	234,754 (100.0)	
実績合計 (S45～R1)	189,007 (36.2)	274,178 (52.5)	28,861 (5.5)	6,525 (1.2)	8,772 (1.7)	7,399 (1.4)	1,236 (0.2)	1,010 (0.2)	5,440 (1.0)	522,428 (100.0)	

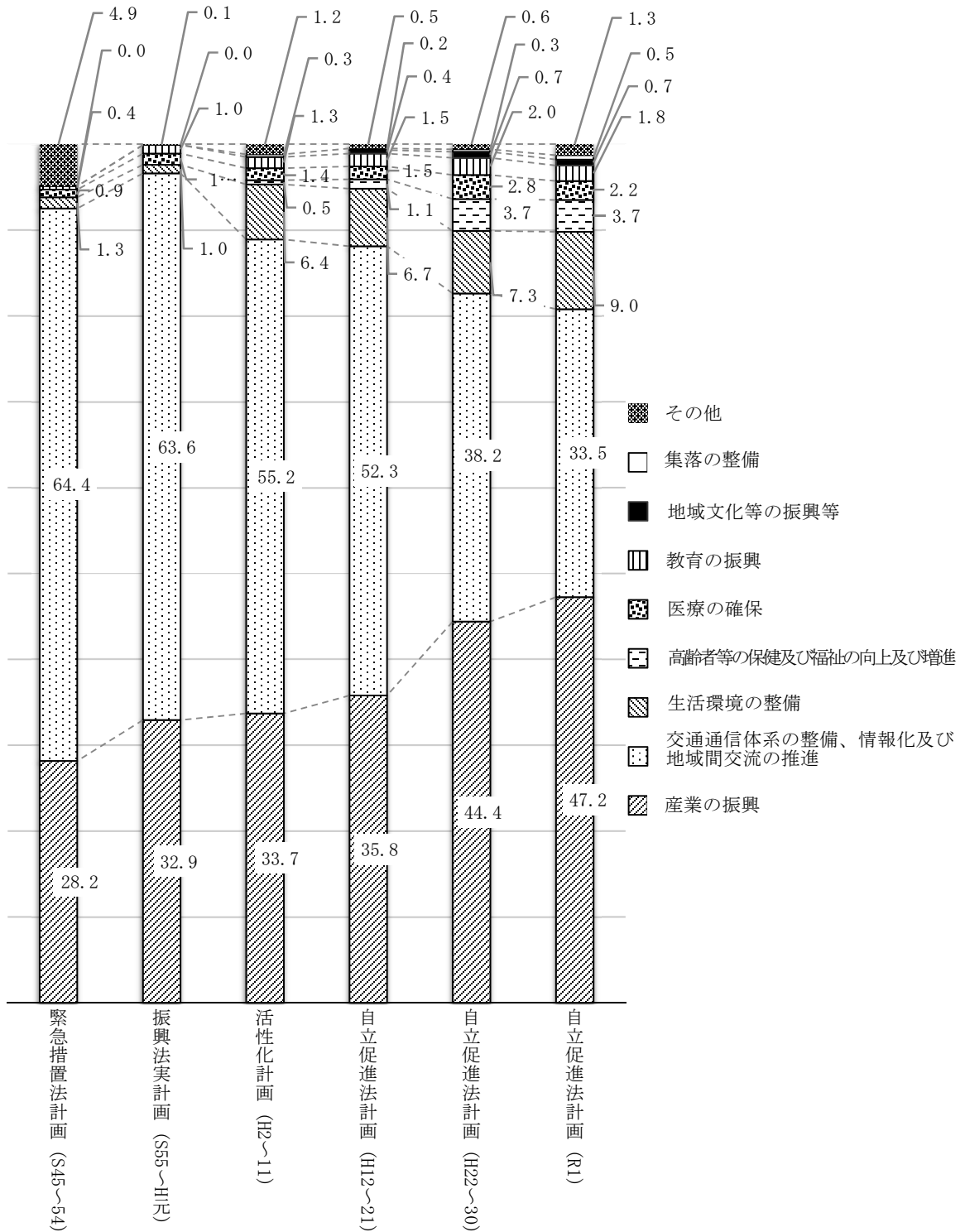
(備考) 1 総務省調べ。

2 () は構成比である。

3 過疎計画上の分野ごとに、いわゆるハード事業及びソフト事業が計上されている。

4 緊急措置法、振興法において合算されている「生活環境の整備」及び「高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進」の実績額は、合計欄では「生活環境の整備」として集計している。また、緊急措置法、振興法、活性化法において合算されている「教育の振興」及び「地域文化の振興等」の実績額は、合計欄では「教育の振興」として集計している。

図表3-2-5 都道府県計画の項目別事業費における実績額の推移 (%)



図表 3-2-6 都道府県事業実績（項目別内訳）

（単位：百万円、％）

区 分	項 目		平成 30 年度		令和元年度	
			事業費	構成比	事業費	構成比
1 産業の振興	(1) 農業の振興		309,093	24.0	325,910	25.0
	(2) 林業の振興		42,631	3.3	42,083	3.2
	(3) 水産業の振興		70,044	5.4	71,801	5.5
	(4) 地場産業の振興		87,191	6.8	74,171	5.7
	(5) 企業の誘致対策		41,361	3.2	40,200	3.1
	(6) 起業の促進		11,816	0.9	12,562	1.0
	(7) 商業の振興		10,730	0.8	9,796	0.8
	(8) 観光又はレクリエーション		16,625	1.3	23,546	1.8
	(9) その他		12,719	1.0	15,088	1.2
	計		602,210	46.7	615,157	47.2
2 交通通信系の整備、情報化並びに地域間交流の促進	I 基幹的な市町村道等の整備	4,038	0.3	0.3	2,854	0.2
		2,395	0.2	0.4	2,855	0.2
		12,253	1.0	0.9	14,801	1.1
		150	0.0	0.0	25	0.0
		18,836	1.5	1.6	20,535	1.6
	II 都道府県道等の整備	149,625	11.6	10.1	148,503	11.4
		201,561	15.6	14.7	190,879	14.7
		12,228	0.9	1.0	14,326	1.1
		9,311	0.7	0.8	10,436	0.8
		33	0.0	0.0	53	0.0
	372,758		28.9	26.5	364,197	28.0
	III 交通確保対策		36,884	2.9	40,037	3.1
	IV その他	3,798	0.3	0.4	2,342	0.2
		11,936	0.9	1.8	9,464	0.7
15,734		1.2	2.2	11,806	0.9	
計		444,212	34.5	436,575	33.5	
3 生活環境の整備	(1) 公共下水道事業		9,079	0.7	9,763	0.7
	(2) その他		114,913	8.9	107,036	8.2
	計		123,992	9.6	116,799	9.0
4 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	(1) 高齢者生活福祉センター		3,308	0.3	4,008	0.3
	(2) その他		43,023	3.3	44,443	3.4
	計		46,331	3.6	48,451	3.7
5 医療の確保	I 無医地区対策	(1) 病院、診療所の整備	1,959	0.2	2,161	0.2
		(2) 患者搬送車（艇）の整備	352	0.0	576	0.0
		(3) 巡回診療	277	0.0	298	0.0
		(4) 保健指導等	700	0.1	709	0.1
		(5) その他	9,007	0.7	8,158	0.6
	小計		12,295	1.0	11,902	0.9
	II その他		16,438	1.3	16,703	1.3
計		30,059	2.3	28,605	2.2	
6 教育の振興		23,155	1.8	23,224	1.8	
7 地域文化の振興等		8,624	0.7	8,974	0.7	
8 集落の整備		4,582	0.4	7,019	0.5	
9 その他地域の自立促進に関し必要な事項		6,433	0.5	17,502	1.3	
総 計		1,259,994	100.0	1,302,306	100.0	

（備考） 1 総務省調べ。

2 過疎計画上の分野ごとに、ハード事業及びソフト事業が計上されている。

(3) 自立促進市町村計画に係る事業費

自立促進法に基づく自立促進市町村計画における事業費の実績額の合計は 27 兆 7,064 億円となっている。

実績額を項目別にみると、「生活環境の整備」が 7 兆 9,660 億円（全体事業費の 28.8%）で最も多く、以下「交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進」6 兆 107 億円（21.7%）、「産業の振興」5 兆 6,963 億円（20.6%）、「教育の振興」3 兆 2,082 億円（11.6%）となっている（図表 3-2-7）。

項目別事業費における実績額をみると、令和元年度において「生活環境の整備」等の比率が減少し、「産業の振興」等の比率が増加している（図表 3-2-8）。

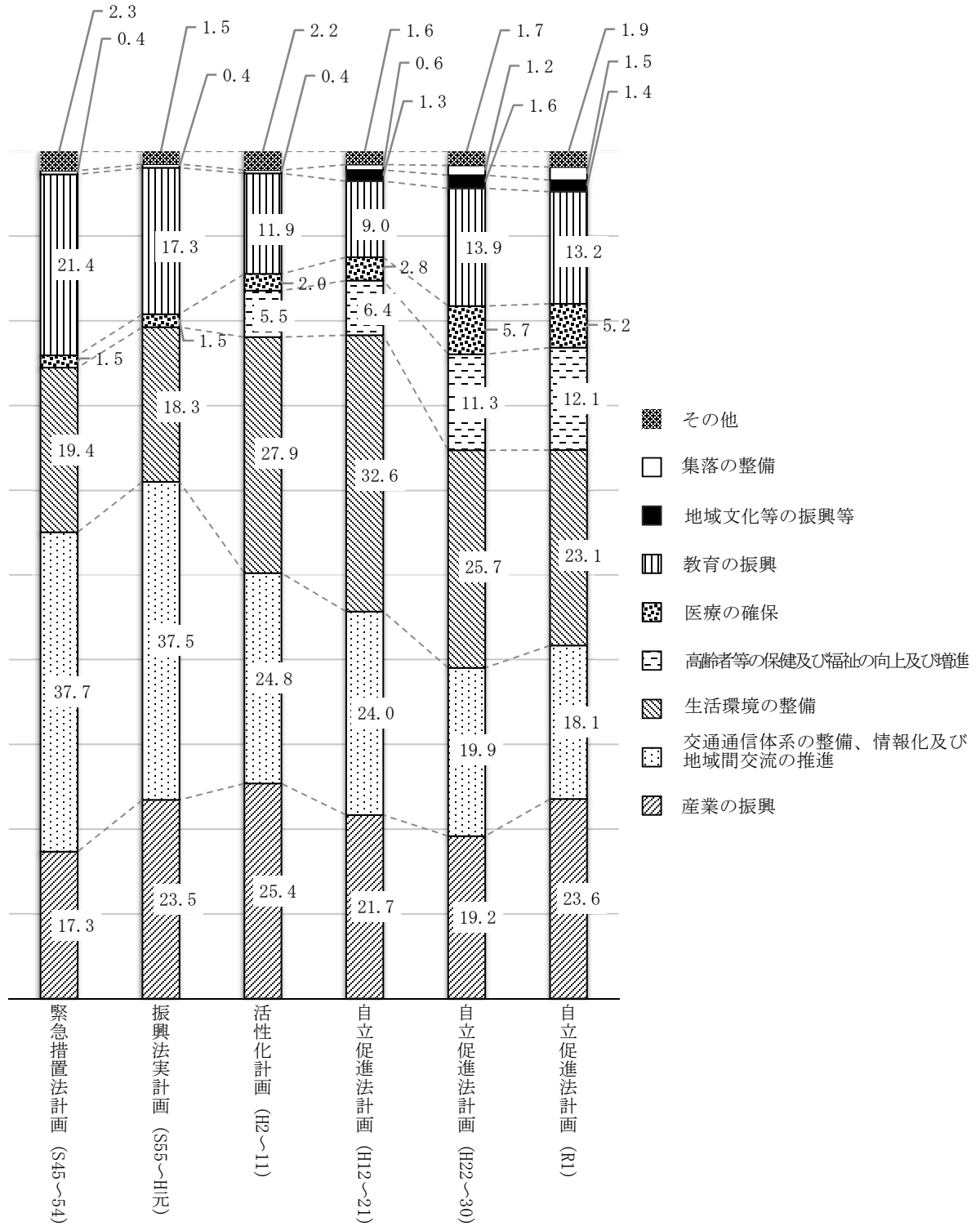
図表 3-2-7 市町村計画における項目別事業費の実績額

(単位：億円、%)

区分	産業の振興	交通通信体系の整備、 情報化及び地域間交流の促進	生活環境の整備	高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	医療の確保	教育の振興	地域文化の振興等	集落の整備	その他	合計	
緊急措置法 (S45～54)	7,584 (17.3)	16,488 (37.7)	8,498 (19.4)		639 (1.5)	9,339 (21.4)		190 (0.4)	1,001 (2.3)	43,739 (100.0)	
振興法 (S55～H元)	22,061 (23.5)	35,319 (37.5)	17,173 (18.3)		1,430 (1.5)	16,263 (17.3)		402 (0.4)	1,422 (1.5)	94,070 (100.0)	
活性化法 (H2～11)	48,341 (25.4)	47,332 (24.8)	53,063 (27.9)	10,437 (5.5)	3,769 (2.0)	22,579 (11.9)		744 (0.4)	4,227 (2.2)	190,492 (100.0)	
自立促進法	(H12～21)	27,792 (21.7)	30,813 (24.0)	41,869 (32.6)	8,268 (6.4)	3,541 (2.8)	11,515 (9.0)	1,701 (1.3)	814 (0.6)	2,013 (1.6)	128,326 (100.0)
	(H22～30)	25,571 (19.2)	26,524 (19.9)	34,267 (25.7)	15,121 (11.3)	7,592 (5.7)	18,545 (13.9)	2,071 (1.6)	1,541 (1.2)	2,221 (1.7)	133,453 (100.0)
	(R1)	3,600 (23.6)	2,770 (18.1)	3,524 (23.1)	1,850 (12.1)	791 (5.2)	2,022 (13.2)	208 (1.4)	236 (1.5)	284 (1.9)	15,285 (100.0)
自立促進法 計 (H12～R1)	56,963 (20.6)	60,107 (21.7)	79,660 (28.8)	25,239 (9.1)	11,924 (4.3)	32,082 (11.6)	3,980 (1.4)	2,591 (0.9)	4,518 (1.6)	277,064 (100.0)	
実績合計 (S45～R1)	134,949 (22.3)	159,246 (26.3)	158,394 (26.2)	35,676 (5.9)	17,762 (2.9)	80,263 (13.3)	3,980 (0.7)	3,927 (0.6)	11,168 (1.8)	605,365 (100.0)	

- (備考) 1 総務省調べ。
 2 () は構成比である。
 3 過疎計画上の分野ごとに、ハード事業及びソフト事業が計上されている。
 4 緊急措置法、振興法において合算されている「生活環境の整備」及び「高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進」の実績額は、合計欄では「生活環境の整備」として集計している。また、緊急措置法、振興法、活性化法において合算されている「教育の振興」及び「地域文化の振興等」の実績額は、合計欄では「教育の振興」として集計している。
 5 平成 28 年度は九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市を除く。
 6 平成 29 年度は西日本豪雨で被災した愛媛県宇和島市、大洲市を除く。
 7 令和元年度は令和 2 年 7 月豪雨で被災した熊本県球磨村を除く。

図表3-2-8 市町村計画の項目別事業費における実績額の推移 (%)



図表3-2-9 市町村事業実績（項目別内訳）

（単位：百万円、％）

区 分	項 目	平成30年度		令和元年度	
		事業費	構成比	事業費	構成比
1 産業の振興	(1) 基盤整備	83,356	5.7	69,117	4.5
	(2) 漁港施設	16,850	1.2	21,222	1.4
	(3) 経営近代化施設	51,087	3.5	17,090	1.1
	(4) 地場産業の振興	8,148	0.6	7,979	0.5
	(5) 企業誘致	3,793	0.3	4,630	0.3
	(6) 起業の促進	334	0.0	199	0.0
	(7) 商業	8,324	0.6	7,040	0.5
	(8) 観光又はレクリエーション	54,428	3.7	51,187	3.3
	(9) 過疎地域自立促進特別事業	63,715	4.4	135,001	8.8
	(10) その他	40,906	2.8	46,569	3.0
		計	330,943	22.7	360,033
	(1) 市町村道	153,697	10.5	154,996	10.1
	(2) 農道	3,794	0.3	3,701	0.2
	(3) 林道	12,115	0.8	10,612	0.7
	(4) 漁港関連道	56	0.0	100	0.0
	(5) 鉄道施設等	1,940	0.1	1,898	0.1
	(6) 電気通信施設等情報化のための施設	28,721	2.0	36,893	2.4
	(7) 自動車等	1,971	0.1	1,765	0.1
	(8) 渡船施設	1,979	0.1	3,195	0.2
	(9) 道路整備機械等	4,701	0.3	4,812	0.3
	(10) 地域間交流	2,603	0.2	1,068	0.1
	(11) 過疎地域自立促進特別事業	57,459	3.9	46,895	3.1
	(12) その他	10,464	0.7	11,041	0.7
		計	279,501	19.2	276,975
3 生活環境の整備	(1) 水道施設	60,611	4.2	59,541	3.9
	(2) 下水処理施設	76,856	5.3	83,909	5.5
	(3) 廃棄物処理施設	45,038	3.1	68,380	4.5
	(4) 火葬場	5,499	0.4	4,950	0.3
	(5) 消防施設	35,328	2.4	62,487	4.1
	(6) 公営住宅	29,491	2.0	26,281	1.7
	(7) 過疎地域自立促進特別事業	17,781	1.2	21,431	1.4
	(8) その他	26,038	1.8	25,376	1.7
	計	296,643	20.3	352,355	23.1
4 高齢者等の保健及び福祉の向上、増進	(1) 高齢者福祉施設	60,153	4.1	9,292	0.6
	(2) 介護老人保健施設	1,186	0.1	1,392	0.1
	(3) 児童福祉施設	23,319	1.6	24,506	1.6
	(4) 認定こども園	13,807	0.9	16,175	1.1
	(5) 障害者福祉施設	992	0.1	1,201	0.1
	(6) 母子福祉施設	91	0.0	83	0.0
	(7) 市町村保健センター及び母子健康包括支援センター	2,165	0.1	1,593	0.1
	(8) 過疎地域自立促進特別事業	69,225	4.7	82,928	5.4
	(9) その他	58,572	4.0	47,836	3.1
	計	229,511	15.7	185,008	12.1
5 医療の確保	(1) 診療施設	31,690	2.2	37,514	2.5
	(2) 特定診療科に係る診療施設	1,582	0.1	4,951	0.3
	(3) 過疎地域自立促進特別事業	24,419	1.7	25,513	1.7
	(4) その他	7,137	0.5	11,086	0.7
	計	64,829	4.4	79,064	5.2
6 教育の振興	(1) 学校教育関連施設	88,288	6.1	114,937	7.5
	(2) 幼稚園	999	0.1	1,748	0.1
	(3) 集会施設、体育施設	58,906	4.0	53,841	3.5
	(4) 過疎地域自立促進特別事業	26,545	1.8	25,703	1.7
	(5) その他	5,915	0.4	6,019	0.4
	計	180,652	12.4	202,248	13.2
7 地域文化の振興等	(1) 地域文化振興施設等	14,515	1.0	13,999	0.9
	(2) 過疎地域自立促進特別事業	3,780	0.3	4,927	0.3
	(3) その他	3,018	0.2	1,900	0.1
	計	21,312	1.5	20,826	1.4
8 集落の整備	(1) 過疎地域集落再整備	4,948	0.3	5,386	0.4
	(2) 過疎地域自立促進特別事業	11,886	0.8	12,172	0.8
	(3) その他	5,008	0.3	6,045	0.4
	計	21,842	1.5	23,603	1.5
9 その他地域の自立促進に關し必要な事項	(1) 自然エネルギーを利用するための施設	4,653	0.3	3,238	0.2
	(2) 過疎地域自立促進特別事業	9,935	0.7	9,168	0.6
	(3) その他	18,266	1.3	15,984	1.0
	計	32,854	2.3	28,390	1.9
	総 計	1,458,086	100.0	1,528,504	100.0

(備考) 1 総務省調べ。
2 過疎計画上の分野ごとに、ハード事業及びソフト事業が計上されている。
3 平成28年度は九州北部豪雨で被災した福岡県朝倉市を除く。
4 平成29年度は西日本豪雨で被災した愛媛県宇和島市、大洲市を除く。
5 令和元年度は令和2年7月豪雨で被災した熊本県球磨村を除く。

図表 3-2-10 平成 30 年度（市町村）施設等整備状況

施設名等	実績	施設名等	実績
(産業の振興)		(高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進)	
基盤整備		高齢者福祉施設	
農業	61,666,768 ㎡	高齢者生活福祉センター	30 か所
林業	83,928,478 ㎡	老人ホーム	35 か所
水産業	1,076,481 ㎡	老人福祉センター	41 か所
漁港施設	324 か所	介護老人保健施設	26 か所
経営近代化施設		児童福祉施設	
農業	277 か所	保育所	233 か所
林業	58 か所	児童館	31 か所
水産業	56 か所	障害児入所施設	2 か所
地場産業の振興		認定こども園	91 か所
技能習得施設	4 か所	障害者福祉施設	
試験研究施設	6 か所	障害者支援施設	11 か所
生産施設	79 か所	地域活動支援センター	8 か所
加工施設	31 か所	福祉ホーム	0 か所
流通販売施設	34 か所	その他	158,283 千円
企業誘致	1,298,932 千円	母子福祉施設	5 か所
起業の促進	94,805 千円	市町村保健センター及び母子健康包括支援センター	50 か所
商業		その他	14,346,796 千円
共同利用施設	3,245 か所		
その他	3,104,611 千円	(医療の確保)	
観光又はレクリエーション	31,520,446 千円	診療施設	
その他	16,549,255 千円	病院	115 か所
		診療所	190 か所
		巡回診療車(船)	3 台
		患者輸送車(艇)	14 台
		その他	3,107,406 千円
(交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進)		特定診療科に係る診療施設	
市町村道		病院	5 か所
道路	1,049,226 m	診療所	6 か所
橋りょう	287,575 m	巡回診療車(船)	0 台
その他	4,393,638 千円	その他	2,635 千円
農道	363,436 m		
林道	528,302 m	その他	7,734,791 千円
漁港関連道	1,538 m		
鉄道施設等		(教育の振興)	
鉄道施設	19 か所	学校教育関連施設	
鉄道車両	10 両	ア 統合関連施設	
軌道施設	21 か所	校舎	444 校
軌道車両	0 両	屋内運動場	41 校
その他	240,132 千円	屋外運動場	15 校
電気通信施設等情報化のための施設		水泳プール	20 校
通信用鉄塔施設	34 か所	へき地集会所	1 校
テレビ放送中継施設	5 か所	寄宿舎	2 か所
有線テレビジョン放送施設	46 か所	教職員住宅	104 戸
告知放送施設	880 か所	スクールバス・ポート	104 台
有線放送電話	1 か所	給食施設	75 か所
防災行政用無線施設	3,980 か所	その他	2,908,214 千円
テレビジョン放送等の	36		
難視聴解消のための施設	22 か所	イ その他の施設	
その他の情報化のための施設	365 か所	校舎	505 校
その他	4,469,459 千円	屋内運動場	48 校
自動車等		屋外運動場	24 校
自動車	143 台	水泳プール	31 校
雪上車	22 台	へき地集会所	1 校
渡船施設		寄宿舎	2 か所
渡船	2 台	教職員住宅	66 戸
保留施設	2 か所	スクールバス・ポート	70 台
道路整備機械等	3,583,236 千円	給食施設	73 か所
地域間交流	535,927 千円	その他	2,347,966 千円
その他	6,664,173 千円	幼稚園	38 か所
(生活環境)		集会施設、体育施設等	
水道施設		公民館	225 か所
上水道	20,328,796 千円	集会施設	250 か所
簡易水道	22,628,129 千円	体育施設	385,673 か所
その他	2,056,568 千円	図書館	55 か所
下水処理施設		その他	3,926,811 千円
公共下水道	53,556,428 千円		
農村集落排水施設	1,005,310 か所	(地域文化の振興等)	
地域し尿処理施設	28,212 か所	地域文化振興施設等	
その他	6,241,046 千円	地域文化振興施設	148 か所
廃棄物処理施設		その他	1,354,679 千円
ごみ処理施設	447,955 か所		1,566,819 千円
し尿処理施設	205,721 か所		
その他	1,492,391 千円	(集落の整備)	
火葬場	84 か所	過疎地域集落再編整備	3,527,035 千円
消防施設	25,422,778 千円	その他	2,443,703 千円
公営住宅	185,230 戸		
その他	11,223,042 千円	(その他地域の自立促進に関し必要な事項)	
		自然エネルギーを利用するための施設	40 か所
		その他	14,566,672 千円

(備考) 総務省調べ。

第3節 国の過疎対策

概要

自立促進法は、「総合的かつ計画的な対策を実施するために必要な特別措置を講ずることにより、過疎地域の自立促進を図り、もって、住民福祉の向上、雇用の増大、地域格差の是正及び美しく風格ある国土の形成に寄与すること（第1条）」を目的としており、その目的の達成のため、財政、行政、金融及び税制上の幅広い分野にわたり、特別措置が講じられている（図表3-3-1）。

具体的には、過疎地域自立促進市町村計画又は都道府県計画に基づいて行う事業に対し、地方債の充当、国庫補助率のかさ上げ、都道府県代行制度や低利融資、課税の特例等の措置とともに、優先的な事業採択、事業採択基準の引き下げ、各種手続きの簡素化等の配慮をすることとされている。また、本法に基づく様々な施策とともに、他の法令等に基づき、過疎地域を対象とする施策のほか、その他過疎地域に関連の深い施策等も、各省庁によって講じられている（図表3-3-2）。

本節では、これらの主要な施策について、過疎地域自立促進計画の分野ごとに、以下の3分類により整理する。

【過疎法による施策】

自立促進法による施策

【過疎地域を対象とする施策】

対象として「過疎地域」を法律・政令・要綱等において明示している施策（自立促進法による施策を除く。）

【過疎地域に関連する施策】

過疎地域が対象となる場合が多いと考えられる施策

図表 3-3-1 過疎法による施策

区 分	過疎法条文	種 類
財 政 上 の 特 別 措 置	第 10 条・第 11 条	○国の負担又は補助の割合の特例等 ・適正規模に統合する小中学校等の校舎・屋内運動場の新増 築、教職員住宅の建築 ・保育所 ・消防施設
	第 12 条	○過疎地域自立促進のための地方債（過疎対策事業債）
	第 13 条	○資金の確保等
行 政 上 の 特 別 措 置	第 14 条	○基幹的市町村道・農道・林道・漁港関連道の整備（都道府県代 行制度）
	第 15 条	○公共下水道の幹線管渠等の整備（都道府県代行制度）
	第 16 条・第 17 条	○医療の確保
	第 18 条・第 19 条	○高齢者の福祉の増進
	第 20 条	○交通の確保
	第 21 条	○情報の流通の円滑化及び通信体系の充実
	第 22 条	○教育の充実
	第 23 条	○地域文化の振興等
	第 24 条 第 25 条	○農地法等による処分についての配慮 ○国有林野の活用
金 融 上 の 特 別 措 置	第 26 条	○株式会社日本政策金融公庫等からの資金の貸付け
	第 27 条	○中小企業に対する資金の確保
	第 28 条	○沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け
税 制 上 の 特 別 措 置	第 29 条	○事業用資産の買換えの場合の課税の特例（所得税・法人税）
	第 30 条	○減価償却の特例（所得税・法人税）
	第 31 条	○地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置（減収補てん）

図表 3-3-2① 過疎対策の具体的施策

項目	過疎法による施策	過疎地域を対象とする施策	過疎地域に関連する施策
財政上の主要な施策	<ul style="list-style-type: none"> ⑨資金の確保等（法第13条） ⑨過疎地域自立促進のための地方債（法第12条） ⑨国の負担又は補助の割合の特例等（法第10、11条） 	<ul style="list-style-type: none"> ⑨農林水産関係事業の実施要件の緩和 	<ul style="list-style-type: none"> ⑨辺地対策事業債 ⑨地方交付税
産業の振興		<ul style="list-style-type: none"> ①農林漁業振興施策 ①石油製品の安定供給確保の施策 	<ul style="list-style-type: none"> ①農林漁業振興施策 ①地場産業の振興・企業誘致施策 ①観光又はレクリエーション施設の整備 ①森林・山村対策 ①農山漁村地域活性化対策
交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進		<ul style="list-style-type: none"> ②林道の整備に関する補助制度 ②バス運行対策（地域内フィーダースystem確保維持） ②携帯電話等エリア整備事業 ②高度無線環境整備推進事業 ②電気通信に関する施設の維持管理に係る支援 ②放送ネットワーク整備支援事業（地域ケーブルテレビネットワーク整備事業） ②ケーブルテレビ事業者の光ケーブル化に関する緊急対策事業 ②ケーブルテレビネットワーク光化による耐災害性強化事業 	<ul style="list-style-type: none"> ②地方公共団体の道路整備に関する事業 ②農道及び林道の整備に関する補助制度 ②漁港関連道の整備に関する補助制度 ②バス運行対策（地域間幹線system確保維持） ②離島航路等におけるインフラ整備に関する補助制度 ②離島航路対策 ②離島航空路対策 ②地方公共団体が設置管理者であって全国航空ネットワーク機能を補完する空港の整備 ②鉄道軌道安全輸送設備等整備事業 ②鉄道施設災害復旧事業
生活環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> ③消防施設に対する国の負担又は補助の割合の特例（法第10条） 	<ul style="list-style-type: none"> ③空き家再生等推進事業 ③小規模住宅地区改良事業 	<ul style="list-style-type: none"> ③污水処理施設関連の事業 ③簡易水道等施設整備事業 ③生活貯水池整備事業 ③雪対策砂防モデル事業 ③雪崩対策事業 ③風倒木及び地震による激甚災害地域における急傾斜地崩壊対策事業

図表 3-3-2② 過疎対策の具体的施策（続き）

項目	過疎法による施策	過疎地域を対象とする施策	過疎地域に関連する施策
高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進	④高齢者の福祉の増進（法第 18 条、19 条） ④保育所に対する国の負担又は補助の割合の特例（法第 10 条）	④離島等サービス確保対策事業	④へき地保育の推進 ④社会福祉施設等施設整備費補助金制度
医療の確保	⑤医療の確保（法第 16 条、17 条）		⑤へき地保健医療対策
教育の振興	⑥学校統合に伴う校舎及び屋内運動場の新增築に対する国の負担割合の特例（法第 10 条） ⑥学校統合に伴う教職員住宅の建築に対する国の交付金の算定割合の特例（第 11 条）	⑥公立学校施設整備事業	⑥へき地集会室等の整備 ⑥へき地児童生徒援助費等補助金 ⑥私立高等学校等経常費助成費補助金
集落の整備等		⑦過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業 ⑦過疎地域集落再編整備事業 ⑦「小さな拠点」を核とした「ふるさと集落生活圏」形成推進事業 ⑦過疎地域遊休施設再整備事業	⑦離島振興特別事業
その他		⑧過疎地域等自立活性化推進事業	⑧地域雇用開発対策 ⑧出稼労働者安定就労対策
行政上の特別措置（再掲を含む）	②基幹的市町村道・農道・林道・漁港関連道の整備（法第 14 条） ②交通の確保（法第 20 条） ②情報の流通の円滑化及び通信体系の充実（法第 21 条） ③下水道事業の都道府県代行制度（法第 15 条） ④高齢者の福祉の増進（法第 18 条・第 19 条） ⑤医療の確保（法第 16 条・第 17 条） ⑥教育の充実（法第 22 条） ⑥地域文化の振興等（法第 23 条） ⑩農地法等による処分についての配慮（法第 24 条） ⑩国有林野の活用（法第 25 条）	②自家用有償旅客運送	

図表 3-3-2③ 過疎対策の具体的施策（続き）

項目	過疎法による施策	過疎地域を対象とする施策	過疎地域に関連する施策
金融上の特別 措置	①資金の確保等（法第13条） ①株式会社日本政策金融公庫等からの資金の貸付け（法第26条） ①中小企業に対する資金の確保（法第27条） ⑦沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け（法第28条）	①農村地域への産業の導入等の施策 ⑤沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け	①林業就業促進資金の貸付 ①⑥沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け
税制上の特別 措置	①事業用資産の買換えの場合の課税の特例（法第29条） ①減価償却の特例（法第30条） ①地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置（法第31条）	①特別土地保有税の非課税措置（地方税法第586条） ①農村地域への産業の導入等の施策	
その他		過疎地域対策調査研究	

（備考）1 本節で取り上げた具体的な施策を一覧にしたものである。

2 各項目に付した数値は以下の分類による。

- ①産業の振興、②交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進、③生活環境の整備、④高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進、⑤医療の確保、⑥教育の振興、⑦集落の整備等、⑧その他、⑨財政上の主要な施策、⑩その他の行政措置

1 産業の振興

【過疎法による施策】

●資金の確保等（法第13条）〔金融措置〕

○地域総合整備資金貸付制度（総務省）

地方公共団体は、民間事業活動等を支援し、もって活力と魅力のある地域づくりを推進するために、地域総合整備財団の支援を得て、金融機関等の融資（有利子）と協調して地域振興に資する民間事業者等に無利子資金（「地域総合整備資金」という。）を貸し付けている。過疎地域（離島地域及び特別豪雪地帯を含む。）市町村については、他の市町村と比較して、融資比率及び融資限度額が引き上げられている。なお、地方公共団体は、地域総合整備資金の原資を地方債で調達し、この地方債の利子の75%（用地取得費に係る部分については50%）は地方交付税で補填される。また、平成27年度より低金利下における措置として、地方公共団体が民間事業者に連帯保証料の補助を行う場合、当該地方公共団体に対して補助額の75%を地方交付税で措置している（図表3-3-3）。

図表 3-3-3 地域総合整備資金貸付制度（総務省）

		内 容			
貸付対象事業	地方公共団体が策定した地域振興民間能力活用事業計画に位置づけられた事業で、以下の要件を満たすもの ① 新規雇用者が1人以上増加すること。 ② 用地取得費を除く設備投資総額が1,000万円以上であること。 ③ 用地取得等の契約後5年以内に事業供用を開始すること。 ④ 対象事業が、公益性、適度の事業収益性等の観点から実施されること。				
貸付対象者	第三セクターを含む民間事業者				
貸付額	通常の地域		過疎・みなし過疎（旧過疎地域に限る）、離島地域、特別豪雪地帯		東日本大震災被災地域、連携中枢都市圏、定住自立圏
	一般の地域	地域再生計画認定地域・沖縄県の区域	一般の地域	地域再生計画認定地域・沖縄県の区域	
通常の施設	10.5億円	13.1億円	13.5億円	16.8億円	16.8億円
複合施設	15.7億円	19.6億円	20.2億円	25.3億円	25.3億円
融資比率	35%		45%		45%

（備考）1 表は、政令指定都市以外の市町村から融資を受ける場合である。

2 「複合施設」とは、対象事業が年度を越えて実施され、複数の施設が一体的・複合的に整備されるもの。

3 融資上限額は、対象事業に係る借入総額に融資比率を乗じた額と、各々の融資限度額のいずれか小さい額となる。

○地域産業振興に対する特別融資制度（総務省、農林水産省、国土交通省）

過疎地域の雇用機会の創出と地域の経済力の強化のために、地域産業の振興を図り、地域の自立的発展に資するため、昭和58年度から地域産業振興特利制度（平成20年9月までで廃止）を、昭和62年度から中小企業者を対象とした地域産業振興特別貸付制度（現在は、企業活力強化貸付制度）を創設している。なお、平成2年度からは、地域の経済社会の広域化に対応して、広域的な産業振興による過疎地域の活性化を図るため、広域過疎事業に対する金融の支援措置を講じているが、平成12年度からは過疎地域に隣接する市町村も広域過疎地域に加えたところである（図表3-3-4）。

図表3-3-4 地域産業振興に対する特別融資制度

	地域産業振興・雇用開発融資制度 (平成20年9月までで廃止)	企業活力強化貸付制度(地域活性化・雇用促進資金)	
金融機関	日本政策投資銀行	日本政策金融公庫 (中小企業事業本部)	日本政策金融公庫 (国民生活事業本部) (平成23年度末で廃止)
対象地域	過疎地域、半島地域、離島地域、奄美群島、小笠原諸島、振興山村、特別豪雪地帯、広域過疎地域	過疎地域、半島地域、離島地域、奄美群島、小笠原諸島、振興山村、特別豪雪地帯、広域過疎地域	本制度としての限定はなし。
対象業種	鉱業、製造業、運輸業、卸売業・小売業、建設業、サービス業、文化・教養・スポーツ・レクリエーション事業	本制度としての限定はなし。	
雇用創出要件	8名以上。広域過疎事業については10名以上、うち過疎地域から4名以上。但し、製造業については、要件を1/2に緩和。	3名以上。	新たに2名以上（中小企業信用保険法（昭和25年法律第264号）第2条第4項第5号の特定業種に該当する場合、従業員20名以下の企業の場合又は女性、若年者（30歳未満）若しくは高齢者（60歳以上）を雇用する場合は1名以上）の雇用創出効果が見込まれる設備投資を行う者
投資規模要件	2億円以上。広域過疎事業については8億円以上	貸付限度額：7億2,000万円	貸付限度額：7,200万円
金利	政策金利Ⅰ。但し、平成20年9月までは政策金利Ⅱ。（平成18年度より、金利体系が整理された。）	基準利率。 但し、設備資金については、2億7,000万円を限度に特別利率②。（但し令和2年度までは特別利率③）、2億7,000万円を超えて5億4,000万円を限度に特別利率①。 広域過疎に係る設備資金については、2億7,000万円を限度に特別利率②、雇用創出5名以上（うち過疎地域から3名以上）の場合、2億7,000万円を超えて5億4,000万円を限度に特別利率①。	基準利率、特別利率①、特別利率②（特定の過疎地域等において一定の要件を満たす場合の設備資金に限る。）

- (備考) 1 広域過疎地域とは、過疎市町村を含む割合が30%以上の広域市町村圏に含まれる非過疎市町村（なお、過疎地域市町村数を30%以上含む広域過疎市町村が、合併により過疎地域を含む割合が30%未満となった場合は、合併前と同様広域過疎市町村として取り扱う。）及び過疎市町村に隣接する非過疎市町村をいう（ここでいう「広域市町村」とは、従来の広域行政圏施策に基づく地域を指す）。
- 2 日本政策投資銀行では、広域過疎地域のうち政令指定都市は対象外となっている。
- 3 平成18年度より日本政策投資銀行の政策金利体系が簡素化され、従来の政策金利Ⅰ～Ⅲは政策金利Ⅰ、Ⅱに変更されている。
- 4 日本政策投資銀行は、平成20年10月に民営化された。
- 5 過疎地域等とは、過疎地域、半島地域、離島地域、奄美群島、小笠原諸島、振興山村及び特別豪雪地帯をいう。
- 6 企業活力強化貸付制度(地域活性化・雇用促進資金)は、沖縄県においては沖縄振興開発金融公庫が取り扱っている。

図表 3-3-5 地域産業に対する特別融資制度の実績

(地域産業振興・雇用開発融資制度の実績)

(単位：件、百万円)

金融機関	日本政策投資銀行				北東公庫				合計	
	過疎地域		広域過疎		過疎地域		広域過疎			
年度	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
昭和 58	3	2,090			1	210			4	2,300
昭和 59	9	2,820			2	325			11	3,145
昭和 60	8	1,690			0	0			8	1,690
昭和 61	11	2,705			0	0			11	2,705
昭和 62	17	5,277			0	0			17	5,277
昭和 63	21	10,470			3	1,040			24	11,510
平成元	22	9,046			7	1,470			29	10,516
平成 2	22	8,004	17	7,050	5	670	6	2,380	50	18,104
平成 3	39	14,220	18	8,780	2	600	1	750	60	24,350
平成 4	36	15,250	13	12,350	3	300	4	1,150	56	29,050
平成 5	16	9,530	4	5,300	3	375	0	0	23	15,205
平成 6	11	4,970	3	2,500	1	1,000	3	1,220	18	9,690
平成 7	4	2,300	1	1,000	0	0	1	1,200	6	4,500
平成 8	6	5,700	1	120	1	100	2	3,100	10	9,020
平成 9	7	2,890	3	3,220	2	350	3	4,850	15	11,310
平成 10	6	5,130	3	4,200	1	300	1	500	11	10,130
平成11上期	3	1,010	1	750	1	1,800	0	0	5	3,560
平成11下期	3	2,200	0	0					3	2,200
平成 12	2	1,440	0	0					2	1,440
平成 13	3	960	0	0					3	960
平成 14	1	120	0	0					1	120
平成 15	2	1,820	0	0					2	1,820
平成 16	10	3,410	1	2,400					11	5,810
平成 17	7	2,205	3	2,900					10	5,105
平成 18	14	5,290	4	950					18	6,240
平成 19	12	6,690	0	0					12	6,690
平成 20	5	3,510	0	0					5	3,510
平成 21										

(備考) 平成 11 年度上期以前は、日本開発銀行による実績。なお、平成 7 年度以前は、地域産業振興融資制度の実績。

(企業活力強化貸付 地域活性化・雇用促進資金の実績)

(単位：件、百万円)

金融機関	日本政策金融公庫 (中小企業事業本部)				日本政策金融公庫 (国民生活事業本部)		合 計	
	過疎地域		広域過疎		件 数	金 額	件 数	金 額
地 域	件 数	金 額	件 数	金 額				
昭和 62	22	1,870			4	77	26	1,947
昭和 63	105	9,961			15	195	120	10,156
平成元	254	24,133			43	1,333	297	25,466
平成 2	331	27,622	39	4,572	227	5,575	597	37,769
平成 3	186	15,734	100	10,864	215	5,487	501	32,085
平成 4	138	14,710	108	12,299	116	3,226	362	30,235
平成 5	60	7,033	64	10,325	74	2,198	198	19,556
平成 6	24	2,864	37	5,652	35	1,217	96	9,733
平成 7	20	2,030	71	8,485	25	851	116	11,366
平成 8	33	4,012	106	13,888	19	647	158	18,547
平成 9	70	8,699	202	25,601	25	984	297	35,284
平成 10	12	1,210	35	3,803	11	386	58	5,399
平成 11	6	700	10	1,140	5	46	21	1,886
平成 12	8	650	16	2,290	7	161	31	3,101
平成 13	2	215	3	152	2	28	7	395
平成 14	2	220	1	150	7	78	10	448
平成 15	2	160	4	318	2	37	10	515
平成 16	36	4,158	34	8,508	0	0	70	12,666
平成 17	79	7,958	314	29,803	0	0	393	37,761
平成 18	206	16,026	742	64,225	1	30	949	80,281
平成 19	154	13,021	453	32,854	2	45	609	45,919
平成 20	148	11,280	405	33,330	1	15	554	44,625
平成 21	70	6,500	234	23,673	0	0	304	30,173
平成 22	116	8,750	309	24,940	0	0	425	33,690
平成 23	132	9,982	316	25,423	0	0	448	33,405
平成 24	121	9,951	444	39,675			565	49,626
平成 25	136	13,370	343	30,662			479	44,032
平成 26	116	12,650	289	29,267			405	41,917
平成 27	102	8,490	313	30,512			415	39,002
平成 28	162	15,262	369	35,463			531	50,725
平成 29	133	12,451	379	34,653			512	47,104
平成 30	169	18,318	425	44,374			594	62,692
令和元	149	13,630	483	49,658			632	63,288

(備考) 1 平成 15 年度までは、地域産業振興資金の実績。

2 国民生活事業本部は、平成 21 年度までは過疎地域及び広域過疎地域の外、半島地域、離島地域、奄美群島、小笠原諸島、振興山村、特別豪雪地帯を合わせた数値。平成 22 年度以降は「図表 3-3-4 地域産業振興に対する特別融資制度」の国民生活事業本部の特別利率②の適用を受けた数値。また、平成 10 年度以前は国民金融公庫の実績。

3 平成 20 年度より、地域雇用促進資金は地域活性化資金と統合され、地域活性化・雇用促進資金となった。

●株式会社日本政策金融公庫等からの資金の貸付け（法第 26 条）〔金融措置〕

日本政策金融公庫又は沖縄振興開発金融公庫は、「振興山村・過疎地域経営改善資金」の貸付けを行うこととしている。

1 目的

本資金は、山村振興法及び過疎地域自立促進特別措置法により指定された振興山村又は過疎地域の農林漁業者等が、その地域の自然的、経済的条件に適応した経営の改善や農林漁業の振興を図ることにより、所得の安定確保、地域の活性化等を実現するために必要な長期低利の資金を融資する。

2 貸付対象者

農林漁業者、農業協同組合、森林組合、水産業協同組合、農林漁業者の組織する法人等

3 資金使途

本資金の貸付けは、都道府県知事の認定を受けた「農林漁業経営改善計画」又は「農林漁業振興計画」に基づいて行う次の事業を対象とする。

(1) 農業関係

果樹、花木等の新植・改植、搾乳牛、繁殖用の肉用雌牛等の購入、農舎、畜舎、農産物処理加工施設、農機具等の改良、造成又は取得

(2) 林業関係

素材、樹苗又は特用林産物の生産、林産物の処理加工等に必要な機械その他の施設、林業生産環境施設（簡易給排水施設、集会施設等）等の改良、造成又は取得

(3) 漁業関係

漁船（20 トン未満）、養殖施設、漁業生産環境施設等の改良、造成又は取得

※（1）～（3）の施設にエネルギーを供給するための目的で設置する太陽光、バイオマス熱源とする熱その他の自然エネルギーを利用するための施設も含む。

(4) その他

①（1）～（3）の施設で農林漁業者の共同利用に供するものの改良、造成又は取得

② 農林地を保全する事業の開始に必要な事務管理用備品及び資材の取得

4 貸付条件（令和 2 年 3 月 31 日現在）

区分	補助事業	非補助事業
利率	0.25%（共同利用：1.25%）	0.10%
限度額	負担する額の 80%以内	負担する額の 80%以内又は次のいずれか低い額 ①個人：1,300 万円（2,600 万円） ②法人・団体：5,200 万円（6,000 万円、1 億円、3 億円、5 億円） （かっこ書きの金額は、一定の要件を満たす場合）
償還期限	25 年（うち据置期間 8 年）以内	

図表 3-3-6 振興山村・過疎地域経営改善資金貸付実績

(単位：千円)

法区分	年度	農 業		林 業		漁 業		合 計	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
振興法	昭55～平元	11,618	28,713,792	1,341	3,860,559	565	6,413,275	13,524	38,987,626
活性化法	平2	147	1,201,266	35	356,400	33	812,660	215	2,370,326
	平3	321	2,832,728	58	1,069,019	25	479,970	404	4,381,717
	平4	523	3,723,299	55	1,145,497	24	455,000	602	5,327,796
	平5	527	5,310,772	36	1,666,043	30	1,444,240	593	8,421,055
	平6	249	3,445,763	29	1,532,201	32	1,538,300	310	6,516,264
	平7	119	971,721	17	1,251,748	7	299,100	143	2,522,569
	平8	70	1,219,176	6	103,298	8	838,500	84	2,160,974
	平9	29	934,147	9	808,600	5	142,180	43	1,884,927
	平10	29	651,570	8	332,060	4	249,000	41	1,252,630
	平11	20	1,004,389	5	242,318	—	—	25	1,246,707
自立促進法	平12	9	673,580	3	517,200	1	270,000	13	1,460,780
	平13	6	107,000	3	397,970	1	20,000	10	524,970
	平14	3	275,950	1	18,000	—	—	4	293,950
	平15	5	664,800	—	—	—	—	5	664,800
	平16	2	188,000	—	—	2	555,700	4	743,700
	平17	3	131,200	1	86,400	1	278,000	5	495,600
	平18	—	—	3	94,000	1	400,000	4	494,000
	平19	1	25,000	1	22,000	—	—	2	47,000
	平20	—	—	—	—	4	263,000	4	263,000
	平21	—	—	—	—	4	371,000	4	371,000
	平22	—	—	—	—	—	—	—	—
	平23	—	—	—	—	2	500,000	2	500,000
	平24	—	—	—	—	1	120,000	1	120,000
	平25	—	—	—	—	—	—	—	—
	平26	2	13,800	—	—	1	4,000	3	17,800
	平27	—	—	—	—	—	—	—	—
	平28	—	—	—	—	—	—	—	—
平29	—	—	2	378,000	2	300,000	4	678,000	
平30	—	—	—	—	—	—	—	—	
令元	—	—	1	137,000	—	—	1	137,000	

(備考) 1 日本政策金融公庫調べ。
 2 山村振興法に基づく振興山村分も含む。

●中小企業に対する資金の確保（法第 27 条）〔金融措置〕

過疎地域における中小企業の育成を図るため、過疎地域において中小企業者が経営改善計画に定められた事業等の目的の達成に資する事業を行う場合に、国等が必要な資金の確保に努めるべき旨を規定している。

●事業用資産の買換えの場合の課税の特例（法第 29 条）〔税制措置〕

過疎地域内に企業を誘致育成し、所得水準の向上と雇用機会の拡大を図るため、個人又は法人が非過疎地域内にある土地、建物又は構築物等の事業用資産を譲渡して、過疎地域内にある事業の用に供する土地、建物又は構築物等の事業用資産を取得した場合に、租税特別措置法第 37 条（特定の事業用資産の買換えの場合の譲渡所得の課税の特例）及び第 65 条の 7（特定の資産の買換えの場合の課税の特例）等の規定により、税負担の軽減を図っている。

●減価償却の特例（法第 30 条）〔税制措置〕

前項と同じ趣旨で、過疎地域内において製造の事業、農林水産物等販売業又は旅館業（下宿営業を除く。）の用に供する設備を新設又は増設した個人又は法人に対して、当該新増設に係る機械及び装置（製造の事業又は農林水産物等販売業の用に供するものに限る。）並びに建物及びその附属設備について、租税特別措置法第 12 条及び第 45 条の定めるところにより特別償却を認め、所得税又は法人税の優遇措置を講じている。

なお、平成 29 年の自立促進法改正により、対象業種から情報通信技術利用事業（コールセンター）が除外され、農林水産物等販売業が追加されている。

●地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置（法第 31 条）〔税制措置〕

過疎地域内における産業の振興を図るため、製造の事業、農林水産物等販売業若しくは旅館業（下宿営業を除く。）の用に供する設備を新増設した者について、その事業に対する事業税、その事業に係る建物若しくはその敷地である土地の取得に対する不動産取得税若しくはその事業に係る機械及び装置若しくはその事業に係る建物若しくはその敷地である土地に対する固定資産税を地方公共団体が条例により、課税免除又は不均一課税した場合、若しくは畜産業又は水産業を行う個人に対する個人事業税を地方公共団体が条例により課税免除又は不均一課税した場合には、その減収額のうち総務省令で定めるところにより算定した額を基準財政収入額から控除することで普通交付税により補填することとしている（図表 3-3-7、減収補填額の実績については図表 3-3-8 参照）。

図表 3-3-7 地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置

事業税	<p>a. 製造の事業、農林水産物等販売業若しくは旅館業（下宿営業を除く。）の用に供する設備で租税特別措置法第12条第1項における表第1号の第3欄又は第45条第1項における表第1号の第3欄の規定の適用を受ける設備であって、取得価額の合計が2,700万円を超えるもの（以下「特別償却設備」という。）を新增設した者について、当該設備の所在する都道府県が、当該設備を事業の用に供した日の属する年又は事業年度以後の各年又は各事業年度の所得金額又は収入金額のうち当該設備に係るものとして計算した額に対して課する事業税について、課税免除又は不均一課税をすることとしている場合。減収補填の措置期間は3箇年度。</p> <p>b. 畜産業又は水産業を行う個人でその者又はその同居の親族の労力によってこれらの事業を行った日数の合計がこれらの事業の当該年における延べ労働日数の3分の1を超え、かつ、2分の1以下であるものについて、過疎地域として公示された日の属する年以後の各年のその者の所得金額に対して課する事業税について、課税免除又は不均一課税をすることとしている場合。減収補填の措置期間は5箇年度。</p>
不動産取得税	特別償却設備である家屋及びその敷地である土地の取得（過疎地域として公示された日以後の取得に限り、かつ、土地の取得の日の翌日から起算して1年以内に当該土地を敷地とする当該家屋の建設の着手があった場合における当該土地の取得に限る。）に対して課する不動産取得税について課税免除又は不均一課税をすることとしている場合。減収補填の措置は、当該年度のみ。
固定資産税	特別償却設備である家屋及び償却資産並びに当該家屋の敷地である土地（過疎地域として公示された日以後において取得したものに限り、かつ、土地についてはその取得の日の翌日から起算して1年以内に当該土地を敷地とする当該家屋の建設の着手があった場合における当該土地に限る。）に対して課する固定資産税について課税免除又は不均一課税をすることとしている場合。減収補填の措置期間は3箇年度。

図表 3-3-8 普通交付税で措置した減収補填額

(単位：千円)

年 度	事 業 税	不動産取得税	固定資産税	計
(緊急措置法) 昭 45～54	2,290,786	1,084,706	2,450,405	5,825,897
(振 興 法) 昭 55～平元	5,313,484	2,692,001	7,928,100	15,933,585
(活性化法) 平 2～11	9,089,165	15,890,410	26,466,369	51,445,944
(自立促進法) 平 12～令元	10,563,362	17,344,127	46,369,823	74,277,312
合 計	27,256,797	37,011,244	83,214,697	147,482,738

(備考) 総務省調べ。

【過疎地域を対象とする施策】

●特別土地保有税の非課税措置（地方税法第 586 条）〔税制措置〕

過疎地域内に企業を誘致育成し、所得水準の向上と雇用機会の拡大を図るため、過疎地域市町村で新設又は増設された一定の製造業の用に供する設備に係る工場用建物（一定の附帯施設を含む。）の用に供する土地並びに同期間内に新築又は増築された一定の宿泊施設、集会施設及びスポーツ施設の用に供する土地について、特別土地保有税を非課税としている。（ただし、特別土地保有税は平成 15 年度以降、当分の間、新たな課税は行われなことをとされている。）

●農林漁業振興施策（農林水産省）〔交付金〕

事業名	事業内容	国費率 (令和元年度予算額)
農山漁村振興交付金 (地域活性化対策) (農山漁村活性化整備対策)	地域の創意工夫による活動の計画づくりから農業者等を含む地域住民の就業の場の確保、農山漁村における所得の向上や雇用の増大に結びつける取組を総合的に支援する。	定額、1/2 等 (9,809,000 千円の内数)
中山間地域等直接支払交付金	中山間地域等における耕作放棄の発生を防止し多面的機能を確保する観点から、平地地域との生産条件の格差の範囲内で交付金を交付する。 また、高齢化や人口減少が著しい中、農業生産活動が継続できるよう、複数の集落が連携した取組を支援するための集落連携・機能維持加算、特に条件が厳しい超急傾斜地の保全管理を支援するための超急傾斜農地保全管理加算を措置している。令和元年度においては、担い手を支える地域の体制を強化するための試行的な加算措置を実施。	定額 (26,343,766 千円)

事業名	事業内容	国費率 (令和元年度予算額)
農山漁村地域整備交付金のうち (97,714,000千円の内数)		
農地防災事業（農村災害対策整備事業）	災害に対し脆弱な中山間地域等に対し、地域で発生する災害から農村住民の生命、財産及び生活を守るため、農業用施設や農村防災施設等のうち整備の優先度が高い施設の整備を実施する。	整備事業（過疎） 災害防除対策推進地域 内地・北海道・奄美55%、 離島60% 甚大な災害発生地域で実施するもの 内地・北海道55%、 離島60%、奄美70% (通常補助率) 1/2
沖縄振興公共投資交付金のうち (53,217,000千円の内数)		
農地防災事業（農村災害対策整備事業）	災害に対し脆弱な中山間地域等に対し、地域で発生する災害から農村住民の生命、財産及び生活を守るため、農業用施設や農村防災施設等のうち整備の優先度が高い施設の整備を実施する。	整備事業（過疎） 災害防除対策推進地域 沖縄80% 甚大な災害発生地域で実施するもの 沖縄75% (通常補助率) 2/3

●農村地域への産業の導入等の施策（農林水産省）

事業	事業内容
対象地域	過疎地域、振興山村、農業振興地域（大都市圏等を除く。）
税制上・金融上・予算上の優遇措置	税制上の措置として、農村地域への産業の導入の促進等に関する法律に基づく産業導入地区内の農用地等を、実施計画で定める施設用地に供するため、個人が譲渡した場合における譲渡所得についての所得税の軽減措置がある（農村地域への産業の導入の促進等に関する法律第7条）。 金融上の措置として、企業が行う設備投資等について、日本政策金融公庫から低利融資が受けられる。（農村地域への産業の導入の促進等に関する法律第8条）。 予算上の措置として、市町村等が雇用を創出する施設を整備する場合等について、国から支援が受けられる。
産業の立地に関する情報収集・提供、指導	支援措置の活用を促進するため、農林水産省及び各地方農政局に情報提供、相談等を行う窓口を設置している。 一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構及び一般財団法人日本立地センターにおいて、農村地域への産業の導入の促進のために、産業の立地情報の収集、広報、指導等の業務が行われている。

●石油製品の安定供給確保の施策（経済産業省）

事業	事業内容
SS過疎地対策	<p>平成27年3月に国、石油元売各社、業界団体等で組織するSS過疎地対策協議会を設置。平成29年5月に第4回を開催。地域の燃料アクセスを維持するためには、過疎地の自治体が率先して、地域の将来を見据え、地域で確保するSSの将来目標を設定し、地域の実態を踏まえた対策を、自治体のリーダーシップの元で早期に実施する必要がある。このため、平成29年度以降、各SS過疎自治体に対し、市町村カルテを共有しつつ、各自治体において①関係者による対話・協議の開始、②自主目標設定、③SS維持アクションプランの策定を行うに当たってのビジネスモデルの検討支援を実施。</p> <p>今後、地域の燃料供給拠点確保に向けて、過疎化・人手不足等の課題克服に係る先進的な過疎地のビジネスモデルの構築やコスト低減等に資する技術開発等に係る実証を進めていく。</p>
災害時に備えた地域におけるエネルギー供給拠点の整備事業費	<p>災害時の石油製品の安定供給を確保するため、SSの自家発電機導入、地下タンクの入換え・大型化、研修・訓練等に係る費用について支援を実施。</p> <p>※令和元年度予算額：12,030,000（千円）</p>
過疎地等における石油製品の流通体制整備事業費	<p>石油製品の安定供給を実現するため、SS過疎地等における、複数SSの統合・集約・移転を通じた生産性・設備稼働率等の向上、地域の実情の変化を踏まえた燃料供給システムに係る実証事業、地下タンクの漏えい防止対策に係る補強等の工事、漏洩検知検査経費等に係る費用について支援を実施。</p> <p>※令和元年度予算額：4,050,000（千円）の内数</p>

【過疎地域に関連する施策】

●農林漁業振興施策（農林水産省）〔交付金〕

事業名	事業内容	国費率（令和元年度予算額）
多面的機能支払交付金	農業・農村の有する多面的機能維持・発揮を図るため、地域共同で行う、多面的機能を支える活動や、地域資源（農地、水路、農道等）の質的向上を図る活動を支援する。	定額 (48,652,000千円)
農山漁村振興交付金 (山村活性化対策)	山村の所得・雇用の増大に向け、薪炭・山菜など地域資源の活用等を図るための取組を支援する。	定額 (9,809,000千円の内数)
農山漁村地域整備交付金のうち		(97,714,000千円の内数)
農村集落基盤再編・整備事業（中山間地域総合整備型）	自然的、経済的、社会的条件に恵まれず生産条件等が不利な中山間地域で、農業を中心とした地域の活性化に意欲のある地域を対象に、農業・農村の活性化を図るため、農業生産基盤と農村生活環境等の総合的な整備を実施する。	内地・北海道55%、 離島60%、奄美70%
農村集落基盤再編・整備事業（農地環境整備型）	耕作放棄地及びこれが介在する周辺農地を対象に保全管理区域と生産区域を計画的に区分し、耕作放棄に伴う悪影響の除去、耕作放棄地の利活用を通じた国土・環境の保全と、優良農地の生産性の向上を図るための整備を一体的に実施する。	内地・北海道55%、 離島60%、奄美70%
草地畜産基盤整備事業（草地林地総合整備型）	生産条件が不利な中山間地域等において、林地、野草地、草地等の農用地等を地域の実情に即した土地利用体系に再編又は総合的に整備することにより畜産的利用を図るための生産基盤の整備を支援する。	内地・北海道55%、 離島60%、奄美70%
沖縄振興公共投資交付金のうち		(53,217,000千円の内数)
農山漁村活性化対策整備に関する事業	農山漁村における定住や都市住民による二地域居住、地域間交流を促進することにより、農山漁村の活性化を図るため、農・林・水の縦割りなく、生産基盤や生活環境施設、地域間交流の拠点となる施設の整備等の各種取組を総合的かつ機動的に支援するとともに、地域のそれぞれの実情に応じた、地域の創意工夫による自主的な取組を支援する。	定額（8/10、2/3等）
農村集落基盤再編・整備事業（中山間地域総合整備型）	自然的、経済的、社会的条件に恵まれず生産条件等が不利な中山間地域で、農業を中心とした地域の活性化に意欲のある地域を対象に、農業・農村の活性化を図るため、農業生産基盤と農村生活環境等の総合的な整備を実施する。	沖縄75%
農村集落基盤再編・整備事業（農地環境整備型）	耕作放棄地及びこれが介在する周辺農地を対象に保全管理区域と生産区域を計画的に区分し、耕作放棄に伴う悪影響の除去、耕作放棄地の利活用を通じた国土・環境の保全と、優良農地の生産性の向上を図るための整備を一体的に実施する。	沖縄75%

草地畜産基盤整備事業（草地林地総合整備型）	生産条件が不利な中山間地域等において、林地、野草地、草地等の農用地等を地域の実情に即した土地利用体系に再編又は総合的に整備することにより畜産的利用を図るための生産基盤の整備を支援する。	沖縄75%
林業・木材産業成長産業化促進対策交付金	意欲と能力のある林業経営体の育成、これらの経営体に森林の経営・管理を集積・集約化することが見込まれる地域を中心に、路網の整備・高性能林業機械等の導入、主伐・再造林の一貫作業、木材関連事業者等が行う施設整備等、林業の成長産業化のため、川上から川下までの取組を総合的に推進する。	定額（1/2、4/10等） （林業・木材産業成長産業化促進対策 8,888,322千円の内数）
林業労働力の確保と林業経営体の育成対策	林業への新規就業者の確保、間伐等の森林施業を安全かつ効率的に行える現場技能者の育成及び林業経営体の育成等を図るため、「緑の雇用」新規就業者育成推進事業等を推進する。また、林業経営体の経営の合理化を促進し、森林施業を担う人材を確保・育成するため「林業労働力確保支援センター」を中核として、総合的な対策を推進する。	定額、定額（1/2以内） （「緑の雇用」新規就業者育成推進事業 当初予算額 4,334,179千円、補正予算額 199,997千円） （林業成長産業化総合対策 24,050,307千円の内数）
森林・山村多面的機能発揮対策交付金	森林の多面的機能の発揮を図るとともに山村地域のコミュニティを維持・活性化させるため、地域住民、森林所有者等地域の実情に応じた3名以上で構成する活動団体が実施する里山林の保全、森林資源の利活用等の取組を支援する。	定額、1/2、1/3以内 （1,412,938千円）

●林業就業促進基金の貸付（農林水産省）〔金融措置〕

事業名	事業内容
林業就業促進資金	新たに林業に就業しようとする者の研修等、就業準備に必要な資金を無利子で貸し付ける。

●沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け（内閣府）〔金融措置〕

○沖縄離島・北部過疎地域振興貸付

沖縄県内の離島及び北部過疎地域における産業の振興と経済の活性化を支援するため、当該地域において事業展開を図る中小企業者が必要とする資金の貸付けを行う。

区分	中小企業資金	生業資金
貸付対象者	沖縄県内の離島及び北部過疎地域において産業の振興及び経済の活性化に資する事業を行う者	
貸付利率（年率）	資金使途、償還期間及び担保有無等により異なる。	
償還期間	設備資金 20年（うち据置期間3年）以内 運転資金 7年（うち据置期間3年）以内	
貸付限度額	7億2,000万円 （うち長期運転資金は2億5,000万円）	7,200万円 （うち運転資金は4,800万円）

● 地場産業の振興・企業誘致施策（経済産業省）

事業	事業内容
JAPANブランド育成支援事業	中小企業の新たな海外販路の開拓につなげるため、複数の中小企業が連携し、自らの持つ素材や技術等の強みを踏まえた戦略の策定支援及びそれに基づいて行う商品の開発や海外展示会出展等の取組に対する支援を実施した。
地域産業資源活用事業	中小企業地域資源活用促進法に基づき、地域産業資源活用事業計画の認定を受けた中小企業者が、当該事業計画に沿って実施する、地域産業資源（農林水産物、鉱工業品、観光資源など）を活用した新商品・新サービスの開発等の取組に対し、市場調査、試作品開発、展示会出展等に要する経費の一部を補助した。
金融上の優遇措置	中小企業地域資源活用促進法に基づき、地域産業資源活用事業計画の認定を受けた中小企業者等に対して、日本政策金融公庫等による貸付を行う。また、信用保証協会の保証限度額を拡大した。
地域イノベーション基盤整備事業地	地域企業によるイノベーション創出・生産性向上が進むよう、公設試・大学等による企業支援体制構築に資する先端設備の初期導入・人材育成を支援する。
地域未来オープンイノベーション・プラットフォーム構築事業	地域経済を牽引する地域中核企業等によるイノベーションが創出されるエコシステムが形成されるよう、公設試・大学等によるイノベーション支援体制構築に資する施設・設備導入・人材育成等を支援する。
地域未来投資促進法に基づく課税の特例措置（法人税・所得税）	都道府県知事から地域経済牽引事業計画の承認を受け、かつ、地域の成長発展の基盤強化に特に資するものとして主務大臣が定める基準に適合することについて主務大臣の確認を受けた事業者が、同計画に基づいて、建物等を新設又は増設した場合について、租税特別措置法で定めるところにより、課税の特例の適用がある（法人税・所得税）。
地域未来投資促進法に基づく地方税の課税免除又は不均一課税に伴う減収補填	都道府県知事から地域経済牽引事業計画の承認を受け、かつ、地域の成長発展の基盤強化に特に資するものとして主務大臣が定める基準に適合することについて主務大臣の確認を受けた事業者が、同計画に基づいて、建物等を取得等した場合であって、地方公共団体が当該施設に係る不動産取得税又は固定資産税の課税免除又は不均一課税を行ったとき、その減収額の一部を普通交付税により補填する。
地域未来投資促進法に基づく金融上の優遇措置	地域未来投資促進法に基づく基本計画で定められた促進区域において、都道府県知事から承認を受けた地域経済牽引事業計画に従って事業を行う中小企業・小規模事業者に対して、日本政策金融公庫による貸付を行う。

●観光又はレクリエーション施設の整備（環境省、国土交通省、農林水産省）

〔国庫補助金及び交付金〕

事業名	事業内容	事業主体・補助率等
国立公園、 国定公園等 の整備	国立公園、国定公園、長距離自然歩道等において、安全で快適な利用等を推進するため、歩道、園地、休憩所、公衆便所等の施設整備を行う。 (環境省)	地方公共団体、 1/2～4.5/10
レクリエーション施設等	都市計画区域外の農山漁村地域における生活環境を改善するため、都市公園における地区公園相当規模の公園の整備を行う（国費率：用地費 1/3、施設費 1/2）。 また、河川事業及び砂防事業による地域の人々も散策等で利用できる河川管理用道路等の整備。 (国土交通省)	地方公共団体、 1/3・1/2
港湾の整備	人々の生活の安定及び地域の振興を図るため、日常生活物資や地場産品、農水産品等を効率的に輸送するための岸壁の整備等を促進する。また地域住民の足となるフェリーターミナルの整備を行う。 (国土交通省)	地方公共団体等、 9/10～1/3
海岸の整備	国土保全及び安全の確保を図るため海岸保全施設の整備を促進する。特に、安全で景観にも優れた、地域住民が海辺とふれあえる海岸空間を創出する。 (農林水産省・国土交通省)	地方公共団体等、 9/10～1/3

●森林・山村対策（総務省・農林水産省）

森林・山村対策については、森林の有する多面的な公益的機能を今後とも維持し、山村地域の活性化を図っていくため、新たな観点からの抜本的な対策が必要との認識に基づき、平成3年12月に国土庁、林野庁、自治省の間で「森林・山村検討会」を設置し、検討を進めた。その検討結果を踏まえ、平成5年1月に「森林・山村検討会の取りまとめに基づき平成5年度から講じる施策の概要」がとりまとめられ、これに基づいて平成5年度から森林・山村対策として地方交付税措置が講じられた。

令和元年度に講じられた森林・山村対策の概要は次のとおりである。

〔地方財政措置〕（総務省）

事 項	内 容
豊かな森林づくりの推進	<ul style="list-style-type: none"> ・ 公有林等における間伐等の促進 ・ 地方公共団体が協定等を締結して行う民有林の公的整備 ・ 民有林における長伐期化・複層林化の促進 ・ 林業公社が長伐期化・複層林化を行う場合の経営の安定化の推進 ・ 森林所有者等による森林の現況調査等の地域活動の促進
担い手の育成と山村の活性化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 森林作業員を育成するためのOJT研修等の実施 ・ 林業への新規就業者の定着のための福利厚生、技術講習、安全衛生等の条件整備等 ・ 活動組織が行う里山林等の森林の保安全管理や、森林資源の活用を目的とした伐採等の活動等山村の活性化に資する取組の促進
地域材の利用促進	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境物品（木材製品）の導入等による地域材利用促進のための普及啓発、生産流通対策、木質バイオマスエネルギー利用促進対策等の促進 ・ 木材乾燥施設の整備促進等 ・ 地域材を利用した住宅建設に対する利子補給等 ・ 地域材を利用した住宅建設に対する低利融資

●農山漁村地域活性化対策（総務省・農林水産省）

人口の著しい減少や高齢化が進展し、地域の活力の低下が懸念されている農山漁村地域の活性化を一層推進するため、「特定農山村地域における農林業等の活性化のための基盤整備の促進に関する法律」（平成5年法律第72号）が、平成5年9月に施行されたが、この法律に基づく農林業等の活性化の基盤整備にあわせて、地理的、自然的条件が不利な地域における後継者の育成・確保対策や若者の定住促進対策等を支援するため、農山漁村対策として、平成6年度から地方財政措置が講じられた。また、平成7年度以降、ウルグァイ・ラウンド農業合意に伴う影響への懸念等から農山漁村地域の活性化を図るため、農山漁村ふるさと事業として地方交付税措置が講じられてきたが、平成12年度をもってUR対策が終了したことに伴い、これを見直し、平成13年度からの新たな措置として「農山漁村地域活性化事業」が創設された。

令和元年度に講じられた農山漁村地域活性化対策の概要は次のとおりである。

[地方財政措置] (総務省)

事業名	事業内容
農山漁村地域活性化事業	<p>農山漁村地域の活性化を図るため、農林漁業の振興をはじめ、自主的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体的な地域づくりを推進するためのソフト事業に要する経費に対する財政措置 ・地域におけるニーズに応じた地域農畜産物の生産、消費拡大等への取組対策 ・都市と農山漁村の共生・対流、高付加価値の地域特産品の振興等による地域の活性化対策 ・農山漁村の多面的・公益的機能の発揮のための対策
環境保全型農業直接支払交付金	<p>地球温暖化防止や生物多様性保全に効果の高い営農活動を行う農業者の組織する団体等に対する支援に要する経費に対する財政措置</p>
多面的機能支払交付金	<p>農業・農村の有する多面的機能維持・発揮を図るため、地域共同で行う、多面的機能を支える活動や地域資源の質的向上を図る活動に対する支援に要する経費に対する財政措置</p>
中山間地域等直接支払交付金	<p>中山間地域等の農業生産条件が不利な地域において、荒廃農地の発生を防止し、多面的機能の維持を図るための直接支払の実施に必要な経費に対する財政措置</p>
離島漁業再生支援交付金	<p>販売・生産面で条件が不利な離島において、漁場再生活動を行う漁業集落に対する国の支援と連携して、地方公共団体が地域の実情に応じて支援を行う場合に要する経費に対する財政措置</p>
離島漁業新規就業者特別対策交付金	<p>販売・生産面で条件が不利な離島において、新規漁業就業者の漁船等のリースに対する国の支援と連携して、地方公共団体が地域の実情に応じて支援を行う場合に要する経費に対する財政措置</p>
特定有人国境離島漁村支援交付金	<p>特定有人国境離島地域において、雇用を創出するための取組に対する国の支援と連携して、地方公共団体が地域の実情に応じて支援を行う場合に要する経費に対する財政措置</p>
水産多面的機能発揮対策事業	<p>水産業及び漁村の多面的機能の発揮に資する活動を行う活動組織に対する国の支援と連携して、地方公共団体が地域の実情に応じて支援を行う場合に要する経費に対する財政措置</p>

2 交通通信体系の整備・情報化及び地域間交流の促進

(1) 交通

【過疎法による施策】

●基幹的市町村道・農道・林道・漁港関連道の整備（法第14条）〔行政措置〕

道路交通体系の整備は、過疎対策のうちで最も重要な施策の一つであるが、過疎地域市町村は、財政力が弱く、また技術的能力も十分でない場合が多い。このため、過疎法では、基幹的な市町村道、市町村が管理する基幹的な農道、林道及び漁港関連道（過疎地域とその他の地域を連絡する基幹的な市町村道並びに市町村が管理する基幹的な農道、林道及び漁港関連道を含む。）で、国土交通大臣又は農林水産大臣が指定したものについて、都道府県計画に基づき、都道府県が市町村に代わって事業を行うことができることとされている。

この代行事業に係る経費は、都道府県が負担するものとされ、国は、後進地域の開発に関する公共事業に係る国の負担割合の特例に関する法律の規定に基づき、補助率の嵩上げを行うこととしている。

都道府県代行制度の適用件数

(年度、件)

	平7	平8	平9	平10	平11	平12	平13	平14	平15	平16	平17	平18	平19	平20	平21	平22	平23	平24	平25	平26	平27	平28	平29	平30	令元
市町村道	266	251	239	226	215	202	191	187	176	153	135	119	99	81	62	50	46	45	41	39	38	34	36	37	36
農道	248	243	239	242	226	215	188	155	132	105	79	59	52	45	38	32	20	21	16	9	8	6	5	4	3
林道	269	273	266	260	251	234	233	217	203	193	200	188	176	163	158	148	148	123	122	120	124	117	111	119	113
漁港 関連道	2	2	2	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	785	769	746	729	693	652	613	560	512	451	414	366	327	289	258	230	214	189	179	168	170	157	152	160	152

(備考) 国庫補助金や交付金を充当している路線数。

なお、各基幹道路についての指定基準及び指定路線は、次のとおりである。

	指 定 基 準	指 定 路 線
市 町 村 道 (国土交通省)	過疎地域における市町村道（過疎地域とその他の地域を連絡する道路も含む）のうち、次の各号の一つに該当するものから、国土交通大臣が当該都道府県知事の意見を聞いた上で指定する。	a 都市計画決定された幹線街路 b 主要集落（戸数 50 戸以上）とこれと密接な関係にある主要集落とを連絡する道路 c 主要集落と主要交通流通施設、主要公益的施設又は主要な生産施設とを連絡する道路 d 主要交通流通施設、主要公益的施設、主要な生産施設又は主要な観光地相互において密接な関係を有するものとを連絡する道路 e 主要集落、主要交通流通施設、主要公益的施設又は主要な観光地と密接な関係にある一般国道、都道府県道又は幹線一級市町村道を連絡する道路 f 地方の振興開発又は整備のために必要な道路
農 道 (農林水産省)	土地改良法に基づき実施される農業用道路であり、次の各号の要件を満たし、地域の振興上重要なものについて、農林水産大臣が指定する。（過疎地域とその他の地域を連絡する市町村が管理する基幹的な農道を含む。）	a 受益面積 30ha 以上のものであること。 b 延長 800m以上、かつ、全幅員 4m以上のものであること。
林 道 (農林水産省)	森林法に基づく国庫補助事業により実施される林道であり、次の各号の要件に該当し、地域の活性化を図る上で重要なものについて農林水産大臣が指定する。（過疎地域とその他の地域を連絡する市町村が管理する基幹的な林道を含む。）	a 利用区域の森林面積が 50ha 以上であること b 地域森林計画において、指定林道として位置づけられ、かつ、次の要件のいずれかを満たすこと (a) 利用区域内に 10 戸以上の集落が存在すること (b) 国道、都道府県道又は基幹道路若しくはこれと同等の要件を持つ既設道路の間を相互に結ぶもの (c) 市町村森林整備計画において、「路網整備と併せて効率的な森林施業を推進する区域」内で計画されているものであること
漁港関連道 (農林水産省)	農山漁村地域整備交付金実施要領（沖縄県においては、沖縄振興公共投資交付金交付要綱）に規定する漁港関連道であり、次に該当するものについて農林水産大臣が指定する。（過疎地域とその他の地域を連絡する市町村が管理する基幹的な漁港関連道を含む。）	その路線が市町村の区域を超えるもの又は延長が 500m以上で、かつ全幅員が 4m以上のものであること。

●交通の確保（法第20条）〔行政措置〕

過疎地域の自立促進に当たっては、乗合バス、鉄道、離島航路、離島航空等のうち、地域における通勤、通学、通院、買物などの住民の日常生活に必要な交通について、その安定性の確保を図ることが重要である。

過疎法では、国及び地方公共団体が適切な役割分担と協調関係の下で、地域住民の生活に必要な旅客輸送の安定的な確保について適切な配慮をすることとしている。

【過疎地域を対象とする施策】

●自家用有償旅客運送（国土交通省）

過疎地域においては、過疎化の進行とそれに伴うバス路線の廃止等により、生活交通の確保が大きな課題となっている。

有償で旅客を輸送する場合は、輸送の安全確保及び利用者保護の観点から、本来、バス、タクシー等の事業許可を受けた者により運送が行われているが、山間部等ではバス・タクシー等の公共交通機関によっては十分な輸送サービスが提供されない場合がある。

そのような地域においては、バス・タクシー等の公共交通機関の補完的役割として、国土交通大臣の登録を受けるなど一定の要件を満たした市町村や特定非営利活動法人等が、自家用自動車を使用して有償旅客運送を行うことができることとしており（自家用有償旅客運送（市町村運営有償運送、公共交通空白地有償運送等））、地域住民の生活に必要な移動手段の確保を図っている。

●林道の整備に関する補助制度（農林水産省）

【林道】

事業名	事業内容	令和元年度予算額
森林環境保全整備事業のうち森林資源循環利用林道整備事業及び林業専用道整備事業	都道府県知事が立てる地域森林計画に記載された路線で、地方公共団体、森林組合等が施行する林道の開設、改良につきその費用の一部を助成する（図表3-3-9）。	4,088,000千円
地方創生道整備推進交付金のうち林道	都道府県知事が立てる地域森林計画に記載された路線で、地域再生計画に基づき地方公共団体が施行する林道の開設、拡張につきその費用の一部を助成する（図表3-3-9）。	39,741,000千円の内数
農山漁村地域整備交付金のうち森林整備事業 育成林整備事業、共生環境整備事業、林道改良事業、フォレスト・コミュニティ総合整備事業、山のみち地域づくり交付金事業	都道府県知事が立てる地域森林計画に記載された路線で、農山漁村地域整備計画に基づき地方公共団体、森林組合等が施行する林道の開設、改良につきその費用の一部を補助する（図表3-3-9）。	97,714,000千円の内数
沖縄振興公共投資交付金のうち森林整備事業 森林環境保全整備事業及び森林居住環境整備事業	都道府県知事が立てる地域森林計画に記載された路線で、森林整備事業計画に基づき地方公共団体、森林組合等が施行する林道の開設、改良につきその費用の一部を補助する（図表3-3-9）。	53,217,000千円の内数

図表 3-3-9 林道事業費補助金国費率一覧表

区分	開設								改良	
	森林基幹道		森林管理道		林業専用道		森林施業道		幹線林道	その他
林道の区分	基本	奥地広域※等	基本	過疎・振興山村・特定・準特定等	基本	過疎・振興山村等	基本	過疎・振興山村等		
利用区域面積	1,000ha以上	500ha以上	50ha以上	過疎・特定・準特定等では30ha以上	10ha以上		10ha以上		500ha以上(過疎・振興山村200ha以上)	50ha以上(過疎30ha以上)
国費率	50/100	50/100	45/100	50/100	45/100	50/100	45/100	50/100	50/100	30/100
北海道・離島	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100	/	
奄美	2/3	2/3	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100	50/100		
奄美過疎基幹	—	—	65/100	—	—	—	—	—		
沖縄	80/100	80/100	80/100	80/100	80/100	80/100	80/100	80/100		

※「奥地広域」とは、過疎地域・振興山村・半島振興対策実施地域に存し、かつ、当該利用区域の存する市町村が特定又は準特定市町村であること等の要件を満たす区域。

●バス運行対策（地域内フィーダー系統確保維持）（国土交通省）〔国庫補助金〕

地域特性や実情に応じた最適な生活交通ネットワークを確保・維持するため、幹線バス等の地域間交通ネットワークと密接な地域内のバス交通・デマンド交通について支援する（図表 3-3-11）。

○地域内フィーダー系統確保維持に係る補助

補助対象地域間幹線系統を補完する系統又は過疎地域等の交通不便地域の移動確保を目的とする系統の確保維持に係る補助

- ・国は乗合バス事業者等に対して補助(補助率：補助対象経費の1/2)

区分	補助対象事業者の要件	補助対象経費	備考
地域内フィーダー系統確保維持費補助	一般乗合旅客運	補助対象経常費用から経常収益を控除した額。ただし、補助対象系統が存する市町村の人口等を基準として算定する額を各市町村の限度額とする。	
車両減価償却費等補助	送事業者、自家所有有償旅客運送者及び地域公共交通活性化再生法に基づく協議会	協議会又は市町村等にて地域内フィーダー系統の確保・維持のために取得が必要と認められた購入車両減価償却費及び当該購入に係る金融費用の合計額（リース車両の場合は、これに相当する額）。ただし、車両費の額は下記を限度とする。 ○ノンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,500万円 ○ワンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,300万円 ○小型車両…1両当たりの補助限度額：1,200万円	・車両の種別 地上から車両の床面までの地上高が65cm以下、かつ定員11人以上の車両であって左記の車両 ※小型車両…ノンステップ型車両及びワンステップ型車両に属さない長さ7m以下かつ定員29人以下の車両
公有民営方式車両購入費補助	地方公共団体及び地域公共交通活性化再生法に基づく協議会	協議会又は市町村等にて地域内フィーダー系統の維持・確保のために取得が必要と認められた車両の購入に係る費用。ただし、車両費の額は下記を限度とする。 ○ノンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,500万円 ○ワンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,300万円 ○小型車両…1両当たりの補助限度額：1,200万円	・車両の種別 地上から車両の床面までの地上高が65cm以下、かつ定員11人以上の車両であって左記の車両 ※小型車両…ノンステップ型車両及びワンステップ型車両に属さない長さ7m以下かつ定員29人以下の車両

(備考) 1 「補助対象経常費用」とは、地域キロ当たり標準経常費用（又は、地域時間当たり標準経常費用）と乗合バス事業者等の実車走行キロ当たり経常費用（又は、時間当たり経常費用）とを比較し、いずれか少ない方の額に、補助対象系統の計画実車走行キロ数（又は、計画サービス提供時間数）を乗じて得た額をいう。

2 「車両費の額」とは、実購入予定費から備忘額として1円を控除した額をいう。

【過疎地域に関連する施策】

●地方公共団体の道路整備に関する事業（国土交通省）

〔社会資本整備総合交付金、防災・安全交付金〕

地域における活力創出等の政策目的を実現するため、地方公共団体が作成した社会資本総合整備計画に基づき、目標実現のための基幹的な社会資本整備のほか、関連する社会資本整備やソフト事業についても総合的・一体的に支援する「社会資本整備総合交付金」「防災・安全交付金」により、地方公共団体が実施する道路整備事業を支援している。

●農道及び林道の整備に関する補助制度（農林水産省）

【農道】

農山漁村地域整備交付金

内 容		元年度予算額	国費率
農地整備事業のうち通作条件整備（地域の農業にとって必要な通作のための農道を他の農業生産基盤と一体的に整備するものに限る）		97,714,000千円の内数	内地：50/100 北海道：55/100 離島：55/100 奄美：75/100
基幹農道整備	農業生産の近代化及び農業生産物の流通の合理化を図るため重要かつ農村環境の改善に資する農道網の基幹となる農道の整備		
一般農道整備	上記以外の農道の整備		
農道整備事業（H21以前に採択され着手済みの地区に限る）			
広域営農団地農道整備	広域的営農団地における農道網の基幹となる農道の整備		
基幹農道整備	農業生産の近代化及び農業生産物の流通の合理化を図るため重要かつ農村環境の改善に資する農道網の基幹となる農道の整備		
一般農道整備	上記以外の農道の整備		

沖縄振興公共投資交付金

内 容		元年度予算額	国費率
農地整備事業のうち通作条件整備（地域の農業にとって必要な通作のための農道を他の農業生産基盤と一体的に整備するものに限る）		53,217,000千円の内数	沖縄：85/100
基幹農道整備	農業生産の近代化及び農業生産物の流通の合理化を図るため重要かつ農村環境の改善に資する農道網の基幹となる農道の整備		
一般農道整備	上記以外の農道の整備		
農道整備事業（H21以前に採択され着手済みの地区に限る）			
広域営農団地農道整備	広域的営農団地における農道網の基幹となる農道の整備		
基幹農道整備	農業生産の近代化及び農業生産物の流通の合理化を図るため重要かつ農村環境の改善に資する農道網の基幹となる農道の整備		
一般農道整備	上記以外の農道の整備		

【林道】

美しい森林づくり基盤整備交付金

事業名	事業内容	元年度予算額
美しい森林づくり基盤整備交付金	「森林の間伐等の実施の促進に関する特別措置法」に基づき、市町村長が作成する特定間伐等促進計画において実施する作業路網その他の施設の設置を行う事業	863,000 千円 の内数

●漁港関連道の整備に関する補助制度（農林水産省）

農山漁村地域整備交付金

事業名	事業内容	元年度予算額
農山漁村地域整備交付金のうち漁港関連道整備事業	漁獲物の流通及び漁業用資材の運送の合理化によって漁港機能の充実と漁業生産の近代化を図り、併せて漁港環境の改善を図るために重要な、関連道の新設又は改良を行う事業	97,714,000 千円の内数

沖縄振興公共投資交付金

事業名	事業内容	元年度予算額
沖縄振興公共投資交付金のうち漁港関連道整備事業	漁獲物の流通及び漁業用資材の運送の合理化によって漁港機能の充実と漁業生産の近代化を図り、併せて漁港環境の改善を図るために重要な、関連道の新設又は改良を行う事業	53,217,000 千円の内数

漁港関連道整備事業費交付率一覧表

種 別	主要漁港関連道	主要漁港関連道 附帯関連道改良	一般漁港関連道
補 助 率	1/2	1/2	1/2
北海道及び離島の特例	5.5/10	/	/
沖縄県の特例	4/5		
奄美の特例	7/10		

●バス運行対策（地域間幹線系統確保維持）（国土交通省）〔国庫補助金〕

地域特性や実情に応じた最適な生活交通ネットワークを確保・維持するため、地域間交通ネットワークを形成する地域間幹線系統の運行について支援する（図表 3-3-11）。

○地域間幹線系統確保維持に係る補助

地域間幹線系統（複数市町村にまたがり、1日の輸送量が15人～150人、1日の運行回数が3回以上、広域行政圏の中心市町村等にアクセスする広域的・幹線的な路線）に係る補助

- ・地域間幹線系統は都道府県協議会等にて確保・維持が必要と認められたもの。
- ・国は乗合バス事業者等に対して補助(補助率：補助対象経費の1/2)

区分	補助対象事業者の要件	補助対象経費	備考
地域間幹線系統確保維持費補助	一般乗合旅客運送事業者及び地域公共交通活性化再生法に基づく協議会	予測費用（補助対象経常費用見込額）から予測収益（経常収益見込額）を控除した額。ただし、補助対象経常費用の見込額の9/20に相当する額を限度とする。	
車両減価償却費等補助	活性化再生法に基づく協議会	都道府県協議会等にて地域間幹線系統の確保・維持のために取得が必要と認められた購入車両減価償却費及び当該購入に係る金融費用の合計額（リース車両の場合は、これに相当する額）。ただし、下記を限度とする。 ①ノンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,500万円 ②ワンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,300万円 ③小型車両…1両当たりの補助限度額：1,200万円 ④都市間連絡用車両…1両当たりの補助限度額：1,500万円	・車両の種別 ①～③の車両 地上から車両の床面までの地上高が65cm以下、かつ定員11人以上の車両であって左の車両 ※小型車両…ノンステップ型車両及びワンステップ型車両に属さない長さ7m以下かつ定員29人以下の車両 ④の車両 運行区間の一部に高速道路等を含む補助対象系統の運行の用に供するものであって道路運送車両の保安基準（昭和26年運輸省令第67号）に適合した定員11人以上の車両
公有民営方式車両購入費補助	地方公共団体及び地域公共交通活性化再生法に基づく協議会	都道府県協議会等にて地域間幹線系統の確保・維持のために取得が必要と認められた車両の購入に係る費用。ただし、下記を限度とする。 ①ノンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,500万円 ②ワンステップ型車両（スロープ又はリフト付き） …1両当たりの補助限度額：1,300万円 ③小型車両…1両当たりの補助限度額：1,200万円 ④都市間連絡用車両…1両当たりの補助限度額：1,500万円	・車両の種別 ①～③の車両 地上から車両の床面までの地上高が65cm以下、かつ定員11人以上の車両であって左の車両 ※小型車両…ノンステップ型車両及びワンステップ型車両に属さない長さ7m以下かつ定員29人以下の車両 ④の車両 運行区間の一部に高速道路等を含む補助対象系統の運行の用に供するものであって道路運送車両の保安基準（昭和26年運輸省令第67号）に適合した定員11人以上の車両

(備考) 1 「補助対象経常費用見込額」とは、地域キロ当たり標準経常費用と乗合バス事業者キロ当たり経常費用とを比較し、いずれか少ない方の額に、補助対象系統の実車走行キロ数を乗じて得た額をいう。
2 「購入車両減価償却費及び当該購入に係る金融費用の合計額（リース車両の場合は、これに相当する額）」とは、実購入予定費から備忘価額として1円を控除した額をいう。

●離島航路等におけるインフラ整備に関する補助制度（国土交通省）〔国庫補助金・交付金〕

海等により本土から隔絶され、私的交通の利用可能性が乏しい離島における本土との生活交通については、港湾が地域の生活に不可欠な交通基盤であることから、離島航路の就航率の向上等、輸送の安全性を確保するために岸壁、防波堤、航路等の整備推進を図る（図表 3-3-10）。

図表 3-3-10 港湾整備事業（補助）の補助率一覧

所管	港湾の種類	水域・外郭施設	係留施設	臨港交通施設	港湾施設用地等	根拠法
港湾局	国際戦略港湾	5/10 4/10[*1]	5/10 4/10[*1]	5/10 4/10[*1]		港湾法
	国際拠点港湾	5/10 4/10[*1]	5/10 4/10[*1]	5/10 4/10[*1]		
	重要港湾	5/10 5.5/10[*2] 4/10[*1]	5/10 5.5/10[*2] 4/10[*1]	5/10 5.5/10[*2] 4/10[*1]		
	地方港湾	4/10	4/10	4/10		
	避難港	5/10				
北海道局	国際拠点港湾 重要港湾 地方港湾	7.5/10	6/10	6/10	6/10	北海道開発のためにする港湾工事に関する法律
国土政策局 （離島）	重要港湾 地方港湾	8/10	6/10	6/10 2/3[*3]		離島振興法 （北海道における離島振興法指定地域を含む）
国土政策局 （奄美）	重要港湾 地方港湾	9/10	7.5/10	7.5/10	6/10	奄美群島振興開発特別措置法
内閣府 沖縄振興局	重要港湾 地方港湾	9/10	9/10	9/10	9/10	沖縄振興特別措置法

（備考）

1. [*1] は小型船だまり等に係る小規模な施設。
2. [*2] は原子力発電施設等立地地域の振興に関する特別措置法に基づく施設整備に係るものである。
3. [*3] は本土と離島及び離島と離島を連絡する橋梁の建設又は改良に係るものである。
4. 上表のほか、港湾施設改良費補助・統合補助事業（内地、北海道、沖縄、離島（奄美）は補助率 1/3、離島（奄美を除く）は補助率 5/10）がある。

●離島航路対策（国土交通省）〔国庫補助金〕

離島航路のうち、唯一の生活航路であって、かつ、その経営によってやむを得ず欠損が見込まれる等一定の要件を備えた航路については、地域公共交通確保維持改善事業により、その補助対象経費の概ね 2分の1 に対し補助を行うこととしている（図表 3-3-11）。また、離島住民の運賃負担の軽減に資する取組みへの支援として、自治体、事業者等で構成される協議会において決定された運賃引き下げ額の 2分の1 を補助するなど、離島航路の確保維持に努めている。

さらに、増大する欠損を抑制し持続的な航路運営を図るため、離島航路構造改革補助により、公設民営による船舶建造への支援等を通じて、積極的に航路構造改革を行う離島航路事業者に対し支援を行っている（図表 3-3-11）。

●離島航空路対策（国土交通省）〔国庫補助金〕

離島航空路線対策として、離島住民の福祉の向上並びに離島における空港の効率的な利用及び整備に資する観点から、離島航空路線に就航する航空機及びその部品の購入に要する費用の一部を補助実施しており、併せて、衛星航法を促進し、離島空港における就航率の向上等を図る観点から離島航空路線に就航する航空機に係る衛星航法補強システム(MSAS)受信機及びその部品の購入に要する費用の一部も補助している。

また、離島航空路線において当該地域住民の日常生活に不可欠な路線のうち、一定の要件を備えた路線において、欠損が見込まれる場合には、地域公共交通確保維持改善事業により運航費の補助を実施している。更に、離島住民の運賃負担の軽減に資する取り組みへの支援として、自治体、事業者等で構成される地域の協議会において決定された運賃引き下げ額への補助も同事業において実施している(図表 3-3-11)。

●地方公共団体が設置管理者であって全国航空ネットワーク機能を補完する空港の整備

(国土交通省)〔国庫補助金〕

近年の国民の高速性志向の高まりにより高速交通機関の不足した地域等において、小型航空機等を地域的に活用しようとする動きが広がっている。これに対し、国土交通省では、過疎地域を含めて地方公共団体が設置管理者であって全国的航空ネットワーク機能を補完する空港の整備に対し、助成制度を設けている(補助率：国4割)(図表 3-3-11)。

●鉄道軌道安全輸送設備等整備事業（国土交通省）〔国庫補助金〕

○安全性の向上

安全な鉄道輸送を確保するため、地域鉄道事業者が行う安全性の向上に資する設備の整備等に必要な費用の1/3等を国から補助する(図表 3-3-11)。

●鉄道施設災害復旧事業（国土交通省）〔国庫補助金〕

洪水、地震その他の異常な天然現象により大規模な災害を受けた鉄道事業者に対して、「鉄道軌道整備法」に基づき、その災害復旧に要した費用の1/4等を国から補助することとし、地方公共団体は国に準ずる助成措置を講ずる(図表 3-3-11)。

図表 3-3-11 公共交通に関する補助金の実績

年度	地域間幹線系統確保維持費補助金 (～H22 バス運行対策費補助金)		地域内フィーダー系統確保維持費補助金		離島航路運営費等補助金 (S27～H22 離島航路補助金)		離島航路構造改革補助 (H6～H15 離島航路船舶近代化建造費補助) (H16～H20 バリアフリー化補助)		鉄道軌道整備費等補助金(運営費)		鉄道軌道安全輸送設備等整備補助金(安全性の向上) (S44～H19 近代化補助) (H20～H21 輸送高度化補助) (H22 輸送対策事業費補助)	
	事業者数	補助金額 (百万円)	事業者数	補助金額 (百万円)	航路数	補助金額 (百万円)	航路数	補助金額 (百万円)	事業者数	補助金額 (千円)	事業者数	補助金額 (千円)
平 3	156	9,127	—	—	128	3,804	—	—	22	886,243	25	647,179
平 4	159	9,250	—	—	125	3,997	—	—	20	928,709	34	759,848
平 5	163	9,038	—	—	123	4,184	—	—	18	905,617	43	1,186,744
平 6	163	9,268	—	—	108	4,146	2	75	8	604,019	51	1,824,324
平 7	161	8,924	—	—	107	4,141	4	117	5	377,803	57	2,247,691
平 8	164	8,747	—	—	103	4,085	5	128	2	83,009	59	2,571,356
平 9	163	8,838	—	—	109	4,085	5	138	3	109,337	56	1,967,816
平 10	162	8,006	—	—	107	4,083	3	128	1	10,645	57	2,219,562
平 11	166	7,292	—	—	109	4,073	3	126	2	76,269	59	2,279,802
平 12	164	7,090	—	—	107	4,479	3	114	2	183,901	55	2,357,931
平 13	201	6,962	—	—	106	4,276	1	68	2	190,588	50	2,074,832
平 14	204	7,318	—	—	103	3,929	3	80	2	158,670	53	2,381,185
平 15	212	7,301	—	—	107	3,846	1	11	2	130,929	51	2,448,863
平 16	227	7,264	—	—	109	3,825	3	76	2	93,744	51	2,695,294
平 17	225	7,202	—	—	107	3,838	4	42	1	33,864	56	2,677,403
平 18	223	7,431	—	—	107	4,692	0	0	1	29,594	50	2,602,795
平 19	215	7,682	—	—	111	5,569	1	1	1	39,270	50	2,395,116
平 20	208	8,003	—	—	118	7,080	1	1	1	2,428	50	2,363,185
平 21	202	7,908	—	—	106	5,496	74	1,805	—	—	49	2,157,995
平 22	202	6,453	—	—	102	4,575	25	196	—	—	51	1,931,306
平 23	216	7,605	111	197	104	5,279	16	248	—	—	84	4,868,019
平 24	224	7,777	445	1,549	119	5,823	19	884	—	—	93	4,727,285
平 25	226	8,887	534	2,773	120	5,962	17	495	—	—	93	4,451,842
平 26	229	8,936	614	3,081	119	6,310	27	765	—	—	89	4,460,527
平 27	224	9,290	665	3,407	120	6,230	19	376	—	—	162	7,519,237
平 28	226	9,643	697	3,227	119	6,267	18	453	—	—	182	5,854,331
平 29	226	9,420	721	3,042	120	6,280	16	609	—	—	133	4,769,536
平 30	227	9,528	724	2,996	120	6,327	20	918	—	—	174	5,544,373
合 元	221	9,500	760	4,126	123	6,273	18	768	—	—	145	4,220,526

年度	鉄道軌道近代化設備整備費等補助金 (地方鉄道新線開業)		鉄道施設災害復旧事業費補助		地方公共団体が設置管理者であって全国的航空ネットワーク機能を補完する空港の整備			航空機等購入費補助金 機体取得				MSAS 受信機		離島航空路運航費補助 (H11～H23 上半期航空機等購入費補助金(運航費))	
	事業者数	補助金額 (百万円)	事業者数	補助金額 (百万円)	箇所数	補助金額 (百万円)	備考	事業者数	補助金額 (千円)	事業者数	補助金額 (千円)	事業者数	補助金額 (千円)	事業者数	補助金額 (千円)
平 2	—	—	—	—	1	40	天草	—	—	—	—	—	—	—	—
平 3	1	85	2	714	1	280	〃	—	—	—	—	—	—	—	—
平 4	—	—	—	—	1	176	〃	—	—	—	—	—	—	—	—
平 5	—	—	2	1,679	1	360	〃	1	50,207	—	—	—	—	—	—
平 6	1	187	10	18,227	1	520	〃	1	46,575	—	—	—	—	—	—
平 7	1	187	5	1,198	1	520	〃	—	—	—	—	—	—	—	—
平 8	2	385	3	135	1	560	〃	2	1,590,840	—	—	—	—	—	—
平 9	3	841	—	—	1	244	〃	2	1,909,485	—	—	—	—	—	—
平 10	1	104	3	420	1	136	〃	—	—	—	—	—	—	—	—
平 11	1	104	1	29	—	—	—	2	1,614,591	—	—	—	—	7	478,797
平 12	1	48	1	8	—	—	—	3	1,621,865	—	—	—	—	7	385,738
平 13	1	379	1	16	—	—	—	3	894,551	—	—	—	—	6	384,198
平 14	—	—	1	16	—	—	—	2	1,403,763	—	—	—	—	6	416,779
平 15	—	—	3	278	—	—	—	1	1,040,143	—	—	—	—	7	436,584
平 16	—	—	6	580	—	—	—	1	1,100,852	—	—	—	—	7	360,571
平 17	—	—	1	3	1	96	名古屋	1	937,079	—	—	—	—	7	336,784
平 18	—	—	2	80	—	—	—	2	1,554,082	—	—	—	—	5	253,091
平 19	—	—	2	17	1	34	名古屋	—	—	2	64,246	6	241,075	6	241,075
平 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	97,887	7	317,477	7	317,477
平 21	—	—	—	—	1	123	名古屋	—	440,408	3	138,886	7	395,314	7	395,314

平 22	—	—	2	13	1	61	名古屋	—	—	1	90,409	7	385,875
平 23	—	—	11	2,588	1	7	名古屋	—	—	—	—	8	380,890
平 24	—	—	2	51	—	—	—	—	—	—	—	8	460,150
平 25	—	—	1	156	—	—	—	1	467,055	—	—	7	473,895
平 26	—	—	1	4	2	56	名古屋	1	1,475,014	—	—	7	462,706
平 27	—	—	1	42	1	52	名古屋	1	5,301,256	—	—	7	517,178
平 28	—	—	2	783	—	—	—	2	5,926,135	—	—	6	489,759
平 29	—	—	4	578	2	42	名古屋	2	4,719,230	—	—	7	482,808
平 30	—	—	9	1,905	2	55	名古屋	2	2,761,492	—	—	5	470,415
令 元	—	—	7	3,944	—	—	—	2	2,767,913	—	—	5	403,129

(2) 通信・情報化の推進

【過疎法による施策】

●情報の流通の円滑化及び通信体系の充実（法第21条）〔行政措置〕

国及び地方公共団体は、過疎地域における住民の生活の利便性の向上、産業の振興、地域間交流の促進等を図るため、情報の流通の円滑化及び通信体系の充実について適切な配慮をするものとしている。

【過疎地域を対象とする施策】

●携帯電話等エリア整備事業（総務省）〔国庫補助金〕

過疎地域内においても、豊かさを実感できる社会を実現するためには、情報化がバランスのとれた形で進展することが必要であり、公共投資で以下のものに対し、国が一定の補助を行うもの（図表3-3-12）。

（単位：千円）

事業名	事業内容	令和元年度 予算額	補助率 (貸付率)
携帯電話等エリア整備事業	過疎地等の地理的に条件不利な地域において、地方公共団体が携帯電話等の基地局施設（鉄塔、無線設備等）、伝送路施設（光ファイバ等）を設置する場合や無線通信事業者等が高度化施設（5Gの無線設備等）を設置するほか、基地局の開設に必要な伝送路施設整備する場合に、これらの費用を国が一部補助する。	3,164,559	1/3、1/2、 2/3、4/5

図表3-3-12① 携帯電話等エリア整備事業の実績

年度	無線システム普及支援事業		
	携帯電話等エリア整備事業		
	箇所	事業費 (千円)	国庫補助金 (千円)
平 18	115	6,632,743	3,597,307
平 19	182	8,363,211	5,227,215
平 20	149	7,424,279	4,884,933
平 21	339	5,898,820	3,837,703
平 22	785	21,063,251	13,905,694

平 23	205	5,256,665	3,488,871
平 24	159	3,823,085	2,514,505
平 25	76	2,005,880	1,336,058
平 26	61	1,389,992	923,247
平 27	73	1,967,566	1,305,229
平 28	66	1,675,824	1,075,585
平 29	69	3,886,961	1,774,089
平 30	79	1,284,256	844,664
令和元	34	10,389,077	2,822,756

●高度無線環境整備推進事業（総務省）〔国庫補助金〕

（単位：千円）

事業名	事業内容	令和元年度 予算額	補助率
高度無線環境整備推進事業	5G・IoT等の高度無線環境の実現に向けて、過疎地等の地理的に条件不利な地域において、電気通信事業者等が、高速・大容量無線局の前提となる光ファイバ等の整備を実施する場合、その事業費の一部を補助する。	5,246,778	1/3、1/2、2/3

図表 3-3-12② 高度無線環境整備推進事業の実績

年度	箇所	事業費（千円）	補助金額（千円）
令和元年度	29	7,000,243	2,539,918

●電気通信に関する施設の維持管理に係る支援（総務省）〔地方財政措置〕

過疎地域等において地方公共団体又は民間事業者等（地方公共団体から電気通信に関する施設を借り受けているものに限る。）が経営するインターネット接続サービスや有線テレビジョン放送等に係る電気通信に関する施設の維持管理に要する経費の一部について、特別交付税措置を講じている。

●放送ネットワーク整備支援事業（地域ケーブルテレビネットワーク整備事業）（総務省）

〔国庫補助金〕

(単位：千円)

事業名	事業内容	令和元年度 予算額	補助率
放送ネットワーク整備支援事業（地域ケーブルテレビネットワーク整備事業）	被災情報や避難情報など、国民の生命・財産の確保に不可欠な情報を確実に提供するため、ケーブルテレビ幹線の2ルート化等（条件不利地域は老朽化した既存幹線を同時に更改するときも補助対象）の整備に対し、その事業費の一部を支援する。	344,537 (当初予算)	1/2 (市町村) 1/3 (第3セクター)

●ケーブルテレビ事業者の光ケーブル化に関する緊急対策事業（総務省）〔国庫補助金〕

(単位：千円)

事業名	事業内容	令和元年度 予算額	補助率
ケーブルテレビ事業者の光ケーブル化に関する緊急対策事業	平成30年7月豪雨等を踏まえ、ケーブルテレビ事業者を対象に、局舎所在地の災害発生危険度、伝送路の方式及び局舎の停電対策の確認の緊急点検を行い、停電及び局所的豪雨災害等に弱いなど課題があるケーブルテレビ事業者が判明したため、ケーブルテレビネットワークの耐災害性強化（ケーブルテレビネットワーク光化）のための緊急対策を実施し、その事業費の一部を支援する。	4,309,483 (補正予算)	1/2 (市町村) 1/3 (第3セクター)

●ケーブルテレビネットワーク光化による耐災害性強化事業（総務省）〔国庫補助金〕

(単位：千円)

事業名	事業内容	令和元年度 予算額	補助率
ケーブルテレビネットワーク光化による耐災害性強化事業	災害時における停電に起因するケーブルテレビ事業者の停波について、被災情報や避難情報など、国民の生命・財産の確保に不可欠な情報の伝達手段を確保し国民の安全・安心を確保するため、ケーブルテレビネットワークのFTTH化の整備に対し、その事業費の一部を支援する。	1,084,000 (補正予算)	1/2 (市町村) 1/3 (第3セクター)

3 生活環境の整備

【過疎法による施策】

●消防施設に対する国の負担又は補助の割合の特例（法第10条）

（総務省消防庁）〔財政措置〕

過疎地域における生活環境施設の設備の一環として、防火水槽等の消防施設の整備に対する通常の補助率は1/3であるが、過疎地域市町村においては5.5/10（昭和59年度まで2/3、昭和60年度6/10、昭和61年度以降現行補助率）としている（図表3-3-13）。

図表 3-3-13 消防防災施設等整備費補助金の特別措置の状況（実績）

年 度	事 業 費	国庫補助金	特例により引き上げられた国庫補助金
	千円	千円	千円
〔緊急措置法〕 昭和45～54年度	26,068,983	17,379,321	8,689,659
〔振興法〕 昭和55～平成元年度	63,404,988	39,038,844	17,903,847
〔活性化法〕			
平成2年度	5,568,517	3,062,684	1,206,512
平成3年度	6,275,397	3,451,468	1,359,669
平成4年度	6,222,464	3,422,355	1,348,201
平成5年度	6,698,831	3,684,357	1,451,414
平成6年度	7,088,948	3,898,921	1,535,939
平成7年度	9,247,351	5,086,043	2,003,593
平成8年度	7,643,706	4,204,038	1,656,136
平成9年度	6,543,995	3,599,197	1,417,866
平成10年度	7,569,775	4,163,376	1,640,118
平成11年度	6,747,735	3,711,254	1,462,009
小 計	69,606,719	38,283,693	15,081,457
〔自立促進法〕			
平成12年度	6,262,475	3,444,361	1,356,869
平成13年度	6,246,046	3,432,191	1,350,176
平成14年度	4,299,684	2,363,647	930,419
平成15年度	4,785,787	2,628,553	1,033,291
平成16年度	1,807,833	975,476	243,210
平成17年度	1,062,641	584,452	74,059
平成18年度	103,206	56,763	22,361
平成19年度	57,199	31,459	12,393
平成20年度	70,217	38,619	15,214
平成21年度	78,847	43,366	17,084
平成22年度	52,102	28,656	11,289
平成23年度	10,035	5,517	2,172
平成24年度	24,431	13,437	5,294
平成25年度	46,364	25,500	10,046
平成26年度	39,895	21,942	8,644
平成27年度	47,233	25,978	10,234
平成28年度	54,273	29,850	11,759
平成29年度	25,895	14,242	5,611
平成30年度	36,922	20,307	8,000
令和元年度	20,095	11,052	4,354
小 計	25,131,180	13,795,368	5,132,479
合 計	184,211,870	108,497,226	46,807,442

（備考）消防庁調べ。

●下水道事業の都道府県代行制度（法第15条）〔行政措置〕

下水道は、生活関連社会資本の中で重要な位置を占めているが、大多数の過疎地域の市町村において整備が遅れており、普及率が低位にとどまっている。しかし、過疎地域市町村の中には、下水道事業を執行するのに十分な技術力がなく、また、過疎債、国の財政的支援の対象となる施設の範囲の拡大等の一般的な支援措置を講じてもおお十分な財政力がないため、下水道事業の整備が遅れている市町村がみられる。

一方、過疎地域の活性化を図るとともに、自然公園、水道水源等の広域的な整備の必要性の観点から下水道整備を促進することは、都道府県としても積極的に取り組むべき課題である。

このため財政力、技術力が不足するため自ら公共下水道に着手することが困難な団体に代わって、都道府県が公共下水道の幹線管渠等の設置を行うことができる制度が平成3年度に創設され、平成7年度及び平成9年度には、財政力や地域要件に関する要件が緩和された。また、代行制度の対象となる公共下水道を国土交通大臣が指定することとなっているが、当該指定は当該公共下水道を管理する市町村の申請に基づいて行われることとなっている。この申請には前もって当該市町村から都道府県へ協議することとされていたが、平成22年度に当該協議義務が廃止された。このため、今後は申請者である市町村と事業主体となる都道府県が、円滑な事業実施のため自発的に密に連携をとりながら進めていくこととなる。

過疎市町村が合併した場合の取扱いについては、合併市町村が、代行制度の人口要件等を合併市町村全体として満足する場合には、合併前の過疎市町村の区域を対象として代行制度を適用することが可能である。また、平成14年3月31日以降に合併を行った市町村については、合併が行われた日から10年を経過する日の属する年度末日までの間に限って、合併前の市町村区域の単位で対象要件を判断することができる経過措置がとられている（法第15条、第33条、法施行令第11条、都市・地域整備局長通達（平成22年4月1日付け国都下事第2号）を参照のこと）。

（対象団体）

代行制度の対象団体は、過疎市町村のうち、広域的見地から公共下水道を整備する必要がある地域を有する市町村で、かつ、技術力、財政力の不足から当該市町村のみでは設置することが困難な市町村である。具体的には次の(i)又は(ii)に掲げる要件に該当することが必要とされている。

(i) 次の(ア)から(ウ)までに掲げる要件に該当するものであること。

(ア) 財政力指数が各都道府県の過疎地域市町村の平均以下であること。

(イ) 行政人口が8,000人以下であること。

(ウ) 次の地域要件のいずれかに該当すること。

- ① 自然公園法に規定する自然公園が存在する市町村
- ② 湖沼水質保全特別措置法の規定により指定された指定地域が存在する市町村
- ③ 下水道法に基づく流域別下水道整備総合計画において、「直ちに着手すべきもの」とされた市町村
- ④ 下水道法に基づく流域別下水道整備総合計画において、「すみやかに着手すべきもの」とされており、かつ、当該水域が環境基本法の規定により定められた水質環境基準を達成していない地域に係る市町村
- ⑤ 総合保養地域整備法の規定により同意された基本構想に定められた特定地域が存在する市町村
- ⑥ 当該市町村の下流における都市用水等の取水量が日量 3,000 立方メートル以上である市町村
- ⑦ 水道原水水質保全事業の実施の促進に関する法律の規定による都道府県計画に定められた実施区域が存在する市町村
- ⑧ 特定水道利水障害の防止のための水道水源水域の水質の保全に関する特別措置法の規定による指定地域が存在する市町村

(ii) (i)の要件に該当しない市町村のうち、次の(ア)及び(イ)に掲げる要件に該当すること。

(ア) 行政人口が 8,000 人以下であること。

ただし、阪神・淡路大震災に対処するための特別の財政援助及び助成に関する法律に規定する特定被災地方公共団体を除く。

(イ) 次の地域要件のいずれかに該当すること。

- ① 自然公園法に規定する自然公園が存在する市町村
- ② 湖沼水質保全特別措置法の規定により指定された指定地域が存在する市町村
- ③ 総合保養地域整備法の規定により同意された基本構想に定められた特定地域が存在する市町村
- ④ 水道原水水質保全事業の実施の促進に関する法律の規定による都道府県計画に定められた実施区域が存在する市町村
- ⑤ 特定水道利水障害の防止のための水道水源水域の水質保全に関する特別措置法の規定による指定地域が存在する市町村

(対象範囲)

都道府県は、(i)又は(ii)に掲げる要件をもって国土交通大臣に指定された市町村の公共下水道の幹線管渠、終末処理場及びポンプ施設の設置を行うことができる。一方、事業計画の策定、根幹的施設以外の施設の設置、供用開始後の増設、改築、維持管理等は市町村が行うこととなる。なお、平成 15 年度には、代行制度により整備を実施した箇所に関し、増設についても代行制度で整備できることとなった。

(財政措置)

(ア) 代行事業に係る都道府県と市町村との負担割合

市町村の負担割合を、上記(i)の要件に該当するものにあつては、代行事業費の2分の1以上の額で、上記(ii)の要件に該当するものにあつては、代行事業費の3分の2以上の額で、都道府県と市町村との協議により定めることとしている。

(イ) 市町村に係る財源措置

① 代行事業に係る市町村から都道府県への負担金については、市町村が単独で下水道を行う場合と同様に、通常充当率（補助100%、単独100%）により下水道事業債及び過疎債（起債対象額の1/2を限度とする。）を充当する。

② 市町村が発行する下水道事業債、過疎債の元利償還金のそれぞれ21~49%（処理区域内人口密度別に事業費補正16~44%と単位費用5%との和）、70%について交付税の基準財政需要額に算入する。

(ウ) 都道府県の代行事業に対する財源措置

① 都道府県の負担については、通常の下水道事業債の充当率（補助100%、単独100%）により下水道事業債を充当する。

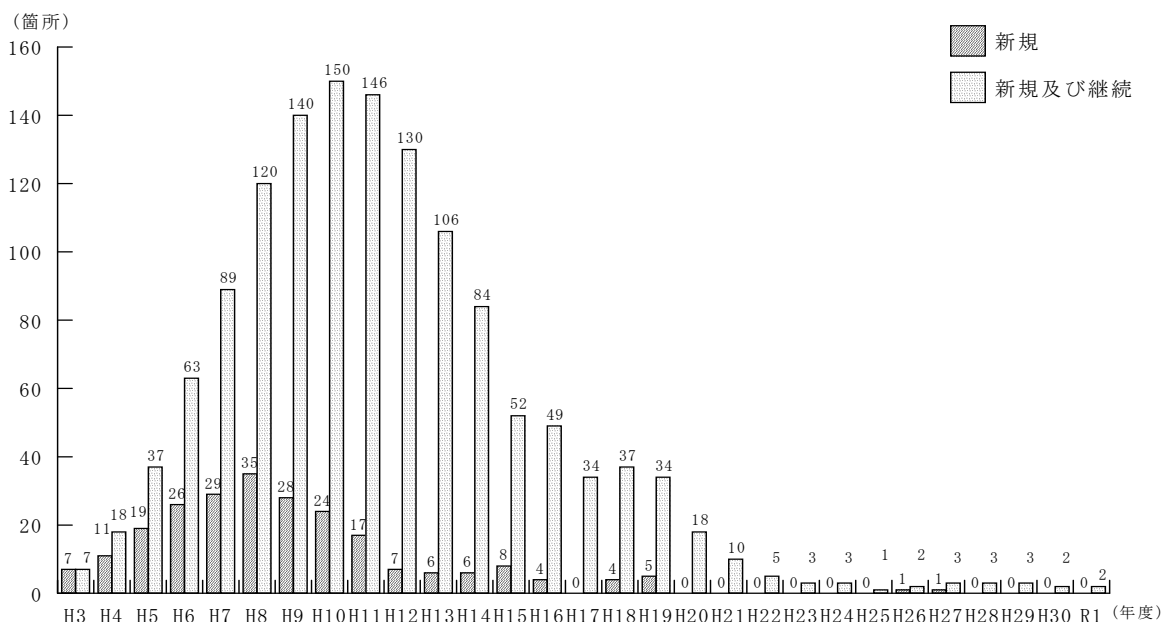
② 都道府県が発行する下水道事業債の元利償還金の49%（事業費補正44%と単位費用5%との和）について交付税の基準財政需要額に算入する。

これらの財政措置により、市町村が自ら下水道事業を実施する場合と均衡のとれた財政措置が講じられている。

(エ) 国の財政的支援

都道府県が行う代行事業については、後進地域の開発に関する公共事業に係る国の負担割合の特例に関する法律（昭和36年法律第112号）の規定と同様の国費率の嵩上げが行われることとなっている。

都道府県代行制度実施箇所数の推移



(備考) 国土交通省調べ。

【過疎地域を対象とする施策】

●空家再生等推進事業（国土交通省）〔国庫補助金〕

社会資本整備総合交付金の基幹事業である空家再生等推進事業により、空家住宅等の活用・除却を行う地方公共団体の取組を支援し、居住環境の整備改善や地域の活性化に資する。

<p>採 択 基 準</p>	<p>【不良住宅、空家住宅又は空き建築物の除却を行う事業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空家等対策計画※₁に定められた空家等に関する対策の対象地区 ・空家住宅等の集積が居住環境を阻害し、又は地域活性化を阻害しているため、空家住宅等の計画的な除却を推進すべき区域として地域住宅計画※₂または都市再生計画※₃に定められた区域 ・立地適正化計画※₄の居住誘導区域※₅を定めた場合はその区域外で不良住宅、空家住宅又は空き建築物の集積が居住環境を阻害し、又は地域活性化を阻害している区域 <p>【空家住宅又は空き建築物の活用を行う事業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空家等対策計画※₁に定められた空家等に関する対策の対象地区 ・空家住宅等の集積が居住環境を阻害し、又は地域活性化を阻害している一因となっている産炭等地域又は過疎地域 ・空家住宅等の集積が居住環境を阻害し、又は地域活性化を阻害しているため、空家住宅等の計画的な活用を推進すべき区域として地域住宅計画※₂又は都市再生整備計画※₃に定められた区域（立地適正化計画※₄の居住誘導区域※₅を定めた場合はその区域内に限る。） <p>※1 空家等対策の推進に関する特別措置法に規定する空家等対策計画</p> <p>※2 地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法に規定する地域住宅計画</p> <p>※3 都市再生特別措置法に規定する都市再生整備計画</p> <p>※4 都市再生特別措置法第81条第1項に規定する立地適正化計画</p> <p>※5 都市再生特別措置法第81条第2項第二号に規定する居住誘導区域</p>
<p>補助対象 (国費率)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・不良住宅、空家住宅又は空き建築物の除却費 (2/5) ・除却を行う者に対し除却に要する経費について補助する費用 (2/5) ・空家住宅又は空き建築物の活用費 (1/2) ・活用を行う者に対し活用に要する経費について補助する費用※₆ (1/3) ※6 ただし、地域コミュニティの維持・再生の用途に10年以上活用されるもの ・所有者の特定に要する費用 (1/2) ・空家等対策計画の策定等に必要な空家住宅等の実態把握に要する費用 (1/2)

●小規模住宅地区改良事業（国土交通省）〔国庫補助金〕

不良住宅が集合すること等により生活環境の整備が遅れている地区において、住環境の整備改善又は災害の防止のために、住宅の集団的建設、建築物の敷地の整備等を実施する。

地区要件	(1) 不良住宅戸数 15戸以上 (2) 不良住宅率 50%以上 ※ただし、過疎地域における激甚災害に係る居住の安定のための事業、または過去3年間に災害救助法の適用を受けた地域の場合は、 (1) 不良住宅戸数 5戸以上 (2) 不良住宅率 50%以上 ※「不良住宅」：不良度 100以上の住宅
補助対象 (国費率)	(1) 不良住宅の買収除却費 [1/2 (跡地非公共は1/3)] (2) 公共施設、地区施設の整備に要する費用 [1/2] (3) 改良住宅(賃貸)整備費 [2/3] (4) 改良住宅用地取得造成費 [1/2] (5) 一時収容施設設置費 [1/3] (6) 改良住宅(分譲)の調査設計計画費※ ₁ [1/3] (7) 改良住宅(分譲)・借上改良住宅の共同施設整備費※ ₁ [1/3] (8) 定期借地権付き改良住宅(分譲)の敷地整備費※ ₂ [1/2] (9) 津波避難施設及び防災関連施設の整備 [1/2] ※ ₁ ：住民と共同して分譲改良住宅の整備計画を作成する民間事業者等を含む。 ※ ₂ ：民間事業者等も含む。

【過疎地域に関連する施策】

●汚水処理施設関連の事業（国土交通省、農林水産省、環境省）〔国庫補助金〕

○下水道（国土交通省）

公共用水域の水質を保全し、良好な生活環境を確保するために、次に掲げる下水道整備事業の経費に対して支援を行う。

事業種別		国費率
公共下水道	管渠等	1/2
	処理場	5.5/10
流域下水道	管渠等	1/2
	処理場	2/3
特定公共下水道事業	—	事業負担金控除後の1/3 ※
特定環境保全公共下水道	管渠等	1/2
	処理場	5.5/10
都市下水路	—	4/10

(備考) ※は公害防止計画区域外の場合。

○集落排水施設（農林水産省）

農業集落及び漁業集落の排水施設整備のために、次に掲げる事業の経費に対して補助する。

事業種別		国費率
排水施設	農山漁村地域整備交付金のうち	
	（農業集落排水事業）	1/2（奄美3/5）
	沖縄振興公共投資交付金のうち	
	（農業集落排水事業）	3/4
排水施設	農山漁村地域整備交付金のうち	
	（漁業集落環境整備事業）	1/2
	（漁村再生交付金事業）	1/2（北海道6/10、奄美7.5/10、離島6/10）
	沖縄公共投資交付金のうち	
	（漁業集落環境整備事業）	5.5/10
	（漁村再生交付金事業）	7.5/10

○浄化槽（環境省）

生活排水を適正に処理し、健全な水環境を確保するため、市町村等が実施する浄化槽整備事業を支援。

事業種別	補助率
浄化槽設置整備事業	1/3（環境配慮・防災まちづくり浄化槽整備推進事業、沖縄、離島1/2）
浄化槽市町村整備推進事業	1/3（環境配慮・防災まちづくり浄化槽整備推進事業、沖縄、離島1/2）

●一般廃棄物処理施設整備事業（環境省）

市町村等が、廃棄物の3Rを総合的に推進するため、市町村の自主性と創意工夫をいかしながら、広域的かつ総合的に廃棄物処理・リサイクル施設の整備を計画した循環型社会形成推進地域計画に位置づけられた一般廃棄物処理施設整備に要する経費を補助する。人口5万人以上又は面積400km²以上の地域計画又は一般廃棄物処理計画対象地域を構成する市町村等を交付対象とするが、過疎地域等については、人口又は面積を条件としない。

事業種別	事業内容	補助率
循環型社会形成推進交付金（廃棄物処理施設分）	一般廃棄物処理施設の整備や施設の改良による長寿命化事業等に要する経費	1/3（先進的モデル施設は1/2）

廃棄物処理施設整備交付金	大規模災害発生時における災害対応拠点になり得る一般廃棄物処理施設の整備事業等に要する経費	1/3（先進的モデル施設は1/2）
二酸化炭素排出抑制対策事業費交付金	一般廃棄物処理施設への高効率廃棄物発電等の導入に必要な改良事業等に要する経費	1/3（先進的モデル施設は1/2）

●簡易水道等施設整備事業（厚生労働省、国土交通省、内閣府）〔簡易水道等施設整備費補助金・生活基盤施設耐震化等交付金〕

過疎地域等における飲料水の確保を図るために、一定の基準に従って簡易水道、飲料水供給施設等の整備に要する経費を補助する。

施設名	補助率
簡易水道施設	4/10, 1/3, 1/4, 沖縄 2/3
飲料水供給施設	4/10, 沖縄 2/3

●生活貯水池整備事業（国土交通省※）〔国庫補助金〕

山間部や半島部、島しょ部等の地域における局地的な水需要は、日量数百m³程度のものが数多くあり、これらの水源として井戸水や溪流に依存した場合には、渇水時の取水の安定性や水質に問題を生じることがある。また、これらの地域は治水安全度が低く、早急な対策が必要となっている。このような地域に密着した小河川における局地的な治水・利水対策を目的とした生活貯水池の整備に要する経費について補助を行う。

※河川総合開発事業費補助及び治水ダム建設事業費補助の中で実施する。

補助率	9/10～1/2
令和元年度事業実施箇所数	4箇所

●雪対策砂防モデル事業（国土交通省）〔直轄事業、社会資本整備総合交付金及び防災・安全交付金〕※平成21年度までは国庫補助金

豪雪地帯においては、融雪時の出水や雪崩に伴う土砂流出対策は、地域住民にとって重要な克雪対策の一環である。これらの豪雪地域において、防災上、住民利便上の観点から雪崩等による土砂流出防止の砂防堰堤及び流雪機能を発揮できる低水路等の整備を総合的・包括的に実施する際に要する経費について補助を行う。

事業対象	除排雪機能を有する低水路、流雪用水確保に寄与する砂防えん堤、土石流かつ雪崩の発生危険箇所を流域にもつ砂防堰堤の設置
負担率	2/3
国費率	1/2, 5.5/10

●雪崩対策事業（国土交通省）〔社会資本整備総合交付金及び防災・安全交付金〕

※平成21年度までは国庫補助金

豪雪地帯対策特別措置法第2条の規定により指定された豪雪地帯において、雪崩による災害から集落（人命）を守るために、雪崩予防柵等の雪崩防止施設の設置を行う。

採 択 基 準	豪雪地帯において、都道府県が施行する雪崩対策事業のうち、下記の各項に該当する場合で事業費7,000万円以上のもの ①移転適地がないこと ②人家おおむね5戸（公共的建物を含む）以上又は公共建物のうち重要なものに倒壊等著しい被害を及ぼすおそれのあるもの
国 費 率	1/2

●風倒木及び地震による激甚災害地域における急傾斜地崩壊対策事業（国土交通省）〔社会資本整備総合交付金及び防災・安全交付金〕※平成21年度までは国庫補助金

風倒木の発生が著しい地域や大規模地震により地盤が緩んだ地域において、急傾斜地の崩壊による災害から国民の生命を保護するために、急傾斜地崩壊防止施設を設置する。

採 択 基 準	風倒木の発生の著しい地域（「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」（昭和37年法律第150号）第2条第1項の規定により激甚災害として指定され、かつ、同法第11条の2に基づく森林災害復旧事業を行う地域で、災害発生の翌年から起算して概ね5年以内の地域における公共施設に関連する急傾斜地及び大規模地震により著しい被害が生じた地域（「激甚災害に対処するための特別の財政援助等に関する法律」（昭和37年法律第150号）第2条第1項の規定により激甚災害として指定され、かつ、同法第3条の1に基づく公共土木施設災害復旧事業を行う地域で、災害発生の翌年から起算して概ね5年以内の地域に限る。）における急傾斜地で、「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」（昭和44年法律第57号）第12条に基づき、都道府県が施行する急傾斜地崩壊防止工事（ただし、急傾斜地崩壊防止施設の改造工事を除く）のうち、その事業費が7,000万円以上のもので、かつ、原則として、当該急傾斜地崩壊防止工事によって被害が軽減される地域内において、土砂災害危険箇所の公表等の警戒避難体制に関する措置がなされているもので次の各号に該当するもの ①急傾斜地の高さが10m以上であること ②移転適地がないこと ③「土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律」（平成12年法律第57号）第7条に基づき土砂災害警戒区域に指定すること
---------	--

	<p>ができる区域内の家屋等を保全するための事業については、当該事業の保全する区域が土砂災害警戒区域に指定されていること。ただし、2019年度中に着手される事業については、2019年度中に当該事業の保全する区域における土砂災害警戒区域の指定が概ね完了する見込みである場合に限り、当該事業の保全する区域が土砂災害警戒区域に指定されていることを条件としない。</p> <p>また、同法第9条に基づき土砂災害特別警戒区域に指定することができる区域内の家屋等を保全するための事業については、当該事業の保全する区域が土砂災害特別警戒区域に指定されていること。ただし、2019年度中に着手される事業については、2019年度中に当該事業の保全する区域における土砂災害特別警戒区域の指定が概ね完了する見込みである場合に限り、当該事業の保全する区域が土砂災害特別警戒区域に指定されていることを条件としない。</p> <p>④人家おおむね5戸（公共的建物を含む）以上に倒壊等著しい被害を及ぼすおそれのあるもの</p>
<p>国 費 率</p>	<p>1/2</p>

4 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進

(1) 高齢者の保健及び福祉に関する施策

【過疎法による施策】

●高齢者の福祉の増進（法第 18 条、第 19 条）〔国庫補助金〕

○生活支援ハウス（高齢者生活福祉センター）の整備（厚生労働省）

特に人口の高齢化が著しい過疎地域においては、高齢者に対する福祉サービスの充実が急務である。一方で、これらの地域においては、高齢者世帯が点在し、市町村の在宅福祉対策の推進にも困難を伴うことが多い。

このような状況の下では、特に、地域に残った高齢者が虚弱化してもできるかぎり住み慣れた地域で生活を続けられるための施策を充実させることが極めて重要である。そのためには、在宅生活に不安の増してきた虚弱な高齢者が、地域で安心して生活できる居住機能と食事や入浴等のサービス等の介護支援機能を併せもった施設を整備する必要がある。

過疎法では、このような趣旨に適合した施設を市町村が建設しようとする場合に、国が経費の一部を補助することができることとしており、過疎地域自立促進特別措置法（平成 12 年法律第 15 号）等に基づく「生活支援ハウス」の整備に対する補助（定額）を行っている（医療介護提供体制改革推進交付金）。

【過疎地域を対象とする施策】

●離島等サービス確保対策事業（厚生労働省）〔国庫補助金〕

離島等地域の実情を踏まえた介護サービス確保等のため、離島等におけるホームヘルパー養成など、人材確保対策に重点をおき、具体的な方策・事業の検討や試行的事業等を実施する（補助率 1/2）。

(2) 保育所

【過疎法による施策】

●保育所に対する国の負担又は補助の割合の特例（法第10条）（厚生労働省）〔財政措置〕

過疎地域における生活環境施設の整備の一環として児童福祉施設のうち保育所の設備の新設、修理、改造又は整備に対して、通常の本国の負担割合は1/2であるが、過疎地域市町村については、5.5/10までとしている（安心こども基金）（図表3-3-14）。

図表3-3-14 保育所の特別措置の状況（実績）

年 度	箇 所 数	事 業 費	国庫補助金	特例により引き上げられた国庫補助金
		千円	千円	千円
(緊急措置法) 昭和45～54年度	898	24,980,553	16,648,678	4,027,685
(振興法) 昭和55～平成元年度	551	26,842,922	16,884,231	3,462,784
(活性化法)				
平成2年度	46	2,290,202	1,259,611	114,510
平成3年度	55	2,791,916	1,535,554	139,596
平成4年度	49	2,161,449	1,188,797	108,072
平成5年度	66	3,185,424	1,786,664	193,952
平成6年度	52	2,872,327	1,591,218	155,054
平成7年度	93	4,644,996	2,554,748	232,250
平成8年度	49	2,671,798	1,530,944	195,045
平成9年度	50	3,426,438	2,003,854	290,635
平成10年度	147	5,846,195	3,215,407	292,310
平成11年度	97	4,525,876	2,489,232	226,294
小 計	704	34,416,621	19,156,029	1,947,718
(自立促進法)				
平成12年度	99	5,406,153	2,973,384	270,308
平成13年度	201	7,445,615	4,095,088	372,281
平成14年度	179	7,855,033	4,320,268	392,752
平成15年度	103	4,319,243	2,573,054	227,451
平成16年度	58	4,998,806	2,806,144	253,339
平成17年度	30	3,858,608	1,074,688	95,257
平成18年度	12	733,458	278,070	21,635
平成19年度	13	1,871,844	532,001	47,108
平成20年度	12	1,923,115	555,993	45,771
平成21年度	1	193,621	85,747	8,782
小 計	708	38,605,496	19,294,437	1,734,684
合 計	2,861	124,845,592	71,983,375	11,172,871

（備考）厚生労働省調べ。

※保育所整備について、平成22年度以降は、都道府県に造成された「安心こども基金」を活用している。

【過疎地域に関連する施策】

●へき地保育の推進（子どものための教育・保育給付費）（内閣府）〔国庫負担金〕

認可保育所の設置など特定教育・保育及び特定地域型保育の確保が著しく困難である離島その他の地域において、教育・保育を必要とする就学前子どもを対象に、へき地保育所での特例保育の実施に要する費用を給付する（補助率：1/2）。

(3) その他

【過疎地域に関連する施策】

●社会福祉施設等施設整備費補助金制度（厚生労働省）〔国庫補助金〕

障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく障害福祉サービスを行うにあたり、離島その他の地域であって厚生労働大臣が定めるもののうち、将来的にも利用者の確保の見込みがないとして都道府県知事が認めるものにおいては、定員要件を緩和し、より小規模な施設での事業実施が可能となっており、社会福祉法人等が障害者関係施設等の整備を行う場合、上記補助金によりその経費の一部を国が補助している。

事業名	内 容	補助率
社会福祉施設等施設整備費補助金	社会福祉法人等が施設（障害者施設、保護施設等）を整備しようとする場合、原則としてその整備費の2分の1を補助する。	1/2

5 医療の確保

【過疎法による施策】

●医療の確保（法第16条、第17条）〔行政措置〕〔財政措置〕

過疎地域における医療確保のため、過疎法は都道府県知事に対し、過疎地域における無医地区に関し、都道府県計画に基づき、診療所の設置、患者輸送車（艇）の整備、定期的な巡回診療、保健師による保健指導等の活動、公的医療機関の協力体制の整備及びその他無医地区の医療の確保に必要な事業を行う責務を課しており、その費用に対し国は、政令で定めるところにより、その2分の1を補助するものとしている。

特に医師、歯科医師の確保等については、国及び都道府県の努力を強調する規定を設けている。

なお、無医地区とは、「医療機関のない地域で、当該地区の中心的な場所を起点として、おおむね半径4kmの区域内に50人以上が居住している地域であって、かつ容易に医療機関を利用することができない地区」をいう。

【過疎地域を対象とする施策】

●沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け〔金融措置〕

○離島・過疎地域特例

沖縄県内の離島・過疎地域での医療施設の整備を進めるため、病院等の新築や増改築に必要な資金について、貸付限度額の特例を設ける。

貸付対象者	沖縄振興特別措置法第3条第3号及び過疎地域自立促進特別措置法第2条第1項に定める地域において、病院等の新築や増改築を行う者
貸付利率（年率）	償還期間及び保証人有無等により異なる。
償還期間	30年（うち据置期間3年）以内
貸付限度額	7億2,000万円（診療所は5億円）の範囲内で所要資金の金額

【過疎地域に関連する施策】

●へき地保健医療対策（厚生労働省）〔国庫補助金〕

へき地保健医療対策については、従来からへき地医療拠点病院、へき地診療所及び患者輸送車等の整備、へき地巡回診療の実施等各種の施策を総合的に推進している。

事業名	内容	補助率
へき地医療支援機構運営費補助金制度	へき地医療対策の各種事業を円滑・効率的に実施するため、都道府県単位で「へき地医療支援機構」を構築し、へき地診療所等からの代診医の派遣要請等のへき地医療支援に係る広域的な調整等を行う。このため、運営費、へき地勤務医師等の確保経費等を補助する。	1/2
へき地医療拠点病院整備費等補助金制度	へき地医療支援機構の調整・指導のもとにへき地医療に関する各種事業を行うへき地医療拠点病院について、建物整備、医療機器の購入費及びへき地医療活動等の運営費に対して補助する。	1/2

事業名	内 容	補助率
へき地保健指導所整備費等補助金制度	無医地区のうち人口規模 200 人以上で、かつ、最寄りの医療機関まで通常の交通機関を利用して 30 分以上を要する地域に保健指導所を設け、そこに専任の保健師を配置し、無医地区住民の保健指導活動を行う。このため、へき地保健指導所の建物整備、巡回保健指導等に必要な自動車の購入費並びに運営費に対して補助する。	1/2, 1/3
へき地診療所整備費等補助金制度	無医地区のうち人口が原則として 1,000 人以上で、かつ、最寄りの医療機関まで、通常の交通機関を利用して（交通機関がない場合は徒歩で）30 分以上を要する地域にへき地診療所を設け地域住民の医療を確保する。このへき地診療所として必要な診療部門、当該診療所に勤務する医師・看護師の住宅の建物整備及び医療機器の購入費並びに運営費に対して補助する。	1/2, 2/3
へき地患者輸送車（艇）整備費補助金制度	人口が 50 人以上で、最寄りの医療機関まで通常の交通機関を利用して 15 分以上を要する無医地区について、都道府県又は市町村等が患者を最寄りの医療機関まで輸送する目的をもって設置するへき地患者輸送車（艇）の整備に要する費用を補助する。	1/2
へき地巡回診療車（船）整備費等補助金制度	無医地区又は無歯科医地区に対する巡回診療を実施するために必要な巡回診療車（船）の整備に要する経費及び運営費について補助する。	1/2
へき地診療支援システム等の導入	離島等の診療所の医師の診療活動を支援するためへき地医療拠点病院とへき地診療所との間に静止画像伝送装置等を導入し、その運営費を補助する。	1/2, 2/3
離島歯科診療班派遣費補助金制度	歯科診療を受ける機会に恵まれない離島に歯科診療班を派遣し、地域住民の歯科医療を確保するため、都道府県が実施する離島歯科診療班派遣に要する歯科医療機器整備費及び運営費を補助する。	1/2
過疎地域等特定診療所整備費補助金制度	過疎地域等における眼科、耳鼻いんこう科又は歯科の特定診療科の医療について、当該市町村内に眼科、耳鼻いんこう科又歯科の診療機能を有する医療機関がない場合は、当該診療科の医療の確保を図るために必要な診療所の整備に要する経費を補助する。	1/2

6 教育・文化の振興**【過疎法による施策】****●教育の充実（法第22条）〔行政措置〕**

国及び地方公共団体は、過疎地域において、その教育の特殊事情にかんがみ、学校教育及び社会教育の充実に努めるとともに地域社会の特性に応じた生涯学習の振興に資するための施策の充実について適切な配慮をするものとしている。

●地域文化の振興等（法第23条）〔行政措置〕

国及び地方公共団体は、過疎地域において伝承されてきた文化的所産の保存及び活用並びに地域における文化の振興について適切な配慮をするものとしている。

●学校統合に伴う校舎及び屋内運動場の新增築に対する国の負担割合の特例（法第10条）

（文部科学省）〔財政措置〕

過疎地域市町村において公立小中学校等を適正な規模にするために統合しようとする（又はした）ことに伴い必要となる校舎及び屋内運動場の新增築に要する経費について、通常の国の負担割合は1/2であるが、5.5/10を負担することとしている（図表3-3-15、図表3-3-16①）。

●学校統合に伴う教職員住宅の建築に対する国の交付金の算定割合の特例（法第11条）

（文部科学省）〔財政措置〕

市町村計画に基づいて行う、公立小中学校等の統合に伴い必要となった教職員住宅の建築事業に要する経費について、通常の交付金の算定割合は1/2であるが、当該事業に要する経費の5.5/10を下回らない額の交付金が充当されるように算定することとしている（図表3-3-15、図表3-3-16②）。

図表 3-3-15 小中学校等統合による校舎・屋内運動場及び教職員住宅の整備実績（戸数・面積）

校舎・屋内運動場の整備実績

年 度	校 数	面 積
(緊急措置法)	校	m ²
昭和 45～54 年度	1,049	1,442,100
(振 興 法)		
昭和 55～平成元年度	383	724,483
(活性化法)		
平成 2 年度	13	25,556
平成 3 年度	18	42,074
平成 4 年度	13	27,644
平成 5 年度	19	30,611
平成 6 年度	32	74,532
平成 7 年度	25	55,905
平成 8 年度	8	17,287
平成 9 年度	10	29,914
平成 10 年度	19	37,789
平成 11 年度	16	45,784
小 計	173	387,096
(自立促進法)		
平成 12 年度	15	26,673
平成 13 年度	20	42,346
平成 14 年度	35	71,758
平成 15 年度	28	63,591
平成 16 年度	37	80,111
平成 17 年度	21	29,598
平成 18 年度	21	29,932
平成 19 年度	24	71,525
平成 20 年度	20	51,170
平成 21 年度	18	35,255
平成 22 年度	19	46,255
平成 23 年度	39	95,383
平成 24 年度	40	76,385
平成 25 年度	47	72,441
平成 26 年度	49	45,066
平成 27 年度	42	53,990
平成 28 年度	16	55,061
平成 29 年度	16	32,520
平成 30 年度	10	33,132
令和 元年度	13	31,218
小 計	530	1,043,410
合 計	2,135	3,597,089

教職員住宅の整備実績

年 度	戸 数	面 積
(緊急措置法)	戸	m ²
昭和 45～54 年度	1,529	76,203
(振 興 法)		
昭和 55～平成元年度	581	30,911
(活性化法)		
平成 2 年度	2	80
平成 3 年度	20	1,045
平成 4 年度	0	0
平成 5 年度	30	1,406
平成 6 年度	3	300
平成 7 年度	1	56
平成 8 年度	3	150
平成 9 年度	3	174
平成 10 年度	1	60
平成 11 年度	0	0
小 計	63	3,271
(自立促進法)		
平成 12 年度	0	0
平成 13 年度	0	0
平成 14 年度	3	236
平成 15 年度	0	0
平成 16 年度	0	0
平成 17 年度	0	0
平成 18 年度	13	1,381
平成 19 年度	12	1,872
平成 20 年度	13	1,633
平成 21 年度	4	320
平成 22 年度	19	2,790
平成 23 年度	10	1,571
平成 24 年度	21	2,908
平成 25 年度	6	600
平成 26 年度	4	570
平成 27 年度	10	1,117
平成 28 年度	32	4,164
平成 29 年度	4	700
平成 30 年度	1	80
令和 元年度	18	2,776
小 計	170	22,718
合 計	2,343	133,103

(備考) 文部科学省調べ。

図表 3-3-16① 小中学校等統合による校舎及び屋内運動場の整備事業実績

年 度	箇 所 数 箇所	事 業 費 千円	国庫補助金 千円	特例により引き上げら れた国庫補助金 千円
平成 2 年度	13	3,505,089	1,927,792	175,251
平成 3 年度	18	6,379,016	3,508,451	318,947
平成 4 年度	13	5,185,761	2,852,162	259,285
平成 5 年度	19	6,673,867	3,670,618	333,689
平成 6 年度	32	6,995,446	3,847,487	349,768
平成 7 年度	25	14,112,764	7,762,009	705,636
平成 8 年度	8	4,040,397	2,222,217	202,020
平成 9 年度	10	5,106,367	2,808,499	255,317
平成 10 年度	19	8,385,329	4,611,917	419,260
平成 11 年度	16	10,556,213	5,805,907	527,808
平成 12 年度	15	5,856,213	3,220,907	292,806
平成 13 年度	20	9,034,061	4,968,723	451,699
平成 14 年度	35	14,752,969	8,114,112	737,636
平成 15 年度	28	12,909,021	7,099,945	645,443
平成 16 年度	37	13,617,706	7,489,713	680,846
平成 17 年度	21	5,391,103	2,965,098	269,543
平成 18 年度	21	5,236,597	2,880,117	261,825
平成 19 年度	24	12,978,443	7,138,126	648,921
平成 20 年度	20	8,781,698	4,829,917	439,084
平成 21 年度	18	6,743,949	3,709,161	337,197
平成 22 年度	19	7,013,343	3,857,325	350,662
平成 23 年度	39	19,254,308	10,589,842	962,703
平成 24 年度	40	18,472,680	10,159,949	923,609
平成 25 年度	47	17,701,481	9,625,969	775,229
平成 26 年度	49	9,225,686	4,964,412	351,585
平成 27 年度	42	12,548,695	6,854,525	580,190
平成 28 年度	16	11,391,997	6,265,586	569,588
平成 29 年度	16	8,035,572	4,419,552	401,766
平成 30 年度	10	7,088,757	3,898,808	354,433
令和 元年度	13	6,514,089	3,582,741	325,696
合 計	703	283,488,617	155,651,587	13,907,442

(備考) 実績には、補正予算分を含む。

図表 3-3-16② 小中学校等統合による教職員住宅整備事業実績

年 度	簡 所 数 箇所	事 業 費 千円	国庫補助金 千円	特例により引き上げら れた国庫補助金 千円
平成 2 年度	2	10,689	5,878	534
平成 3 年度	20	598,353	329,089	29,917
平成 4 年度	0	0	0	0
平成 5 年度	30	184,894	101,687	9,242
平成 6 年度	3	50,719	27,894	2,535
平成 7 年度	1	8,937	4,915	447
平成 8 年度	3	28,236	15,529	1,411
平成 9 年度	3	39,429	21,685	1,971
平成 10 年度	1	11,532	6,342	576
平成 11 年度	0	0	0	0
平成 12 年度	0	0	0	0
平成 13 年度	0	0	0	0
平成 14 年度	3	44,415	24,427	2,220
平成 15 年度	0	0	0	0
平成 16 年度	0	0	0	0
平成 17 年度	0	0	0	0
平成 18 年度	13	—	—	—
平成 19 年度	12	—	—	—
平成 20 年度	13	—	—	—
平成 21 年度	4	—	—	—
平成 22 年度	19	—	—	—
平成 23 年度	10	—	—	—
平成 24 年度	21	—	—	—
平成 25 年度	6	—	—	—
平成 26 年度	4	—	—	—
平成 27 年度	10	—	—	—
平成 28 年度	32	—	—	—
平成 29 年度	4	—	—	—
平成 30 年度	1	—	—	—
令和 元年度	18	—	—	—
合 計	233	977,204	537,446	48,853

(備考) 実績には、補正予算分を含む。

※平成 18 年度からの安全・安心な学校づくり交付金（平成 23 年度からは学校施設環境改善交付金。以下同じ。）化に伴い、個別事業ごとの額の算出はできない。

【過疎地域を対象とする施策】

●公立学校施設整備事業（文部科学省）〔国庫補助金〕

事 業 名	内 容	補助率
公立小中学校等（中等教育学校の前期課程を含む）の危険建物及び不適格建物の改築	公立小中学校等の建物で、構造上危険な状態にある建物（危険建物）及び教育を行うのに著しく不適当な建物で特別な事情のあるもの（不適格建物）の改築について、国庫補助率の嵩上げを行っている。	5.5/10 （※通常 1/3）
公立小中学校等の統合に伴う寄宿舎の整備	公立小中学校等を適正な規模に統合することに伴って必要となる寄宿舎の新築又は増築について、国庫補助率の嵩上げを行っている。	5.5/10 （※通常 1/2）

事業名	内 容	補助率
公立小中学校等の統合に伴う改修	公立小中学校等を適正な規模に統合することに伴って必要となる既存の校舎又は屋内運動場の改修について、国庫補助率の嵩上げを行っている。	5.5/10 (※通常 1/2)

【過疎地域に関連する施策】

●へき地集会室等の整備（公立学校施設整備費補助制度）（文部科学省）〔国庫補助金〕

地方公共団体がへき地集会室等の新築又は増築を行う場合に、その経費の一部を国が補助している（補助率1/2）。

●へき地児童生徒援助費等補助金（文部科学省）〔国庫補助金〕

へき地教育振興法の趣旨により、へき地学校等の教育条件の改善等のため、次の補助を行っている。

事業名	内 容	補助率
スクールバス・ボート等購入費補助	へき地学校等の遠距離通学児童生徒の通学条件の緩和を図るため必要なスクールバス・ボート等の購入に要する経費を補助する。	1/2
寄宿舍居住費補助	へき地学校等の児童生徒の保護者が負担する寄宿舍居住費（食費・日用品費・寝具費）について、都道府県及び市町村が徴収を免除する場合、これに要する経費を補助する。	1/2
遠距離通学費補助	学校統合に係る遠距離通学児童生徒の通学費について、市町村が負担する場合、これに要する経費を補助する。	1/2
高度へき地修学旅行費補助	へき地度の高い小・中学校の児童・生徒の修学旅行費について市町村が負担する場合、これに要する経費を補助する。	財政力指数に応じ1/2、2/3
保健管理費補助	へき地学校における児童生徒の健康管理の適正な実施並びに学校環境衛生の維持改善を図るため医師、歯科医師及び薬剤師の派遣に要する経費及び心電図検診を実施するために要する経費を補助する。	1/2 (ただし、心臓検診事業 1/3)

●私立高等学校等経常費助成費補助金（過疎高等学校特別経費）（文部科学省）

〔国庫補助金〕

都道府県が、過疎地域に所在する私立高等学校の教育条件の維持向上を図るため、当該私立高等学校の経常的経費に助成を行う場合、国が都道府県に対してその助成額の一部（3分の1以内）を補助。

●**沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け〔金融措置〕**

○教育離島利率特例制度

教育資金貸付の金利引き下げを行うことにより、教育にかかる費用の負担感が強い沖縄県内の離島住民の本貸付の利用を促し、沖縄離島地域における本土との教育格差を是正するとともに、地域づくりの担い手となる次世代の人材育成を支援する。

貸付対象者	教育一般資金貸付のうち沖縄県内の離島に住所を有する者
貸付利率（年率）	150万円を限度として教育資金貸付利率－0.9%（母子・父子家庭、世帯年収200万円以下世帯、多子500万円以下世帯又は所得が一定以下の者の場合、150万円を限度として教育資金貸付利率－1.3%）
償還期間	15年以内（交通遺児家庭、母子・父子家庭、世帯年収200万円以下世帯又は多子500万円以下世帯については18年以内）
貸付限度額	（1学生・生徒あたり350万円（海外留学資金を利用する場合は450万円）のうち、教育離島利率特例制度を適用することができる貸付限度） 1学生・生徒あたり150万円

7 集落の整備等

(1) 集落の整備

【過疎法による施策】

●**沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け（法第28条）〔金融措置〕**

市町村計画に基づき、集落整備のため過疎地域の住民が移転し住宅を建設する場合、その移転が円滑に行われるよう、沖縄振興開発金融公庫は個人住宅に対する一般住宅貸付け枠の中で、当該移転に係る住宅の建設、土地の取得に対して次のような特別貸付けを行っている。

貸付対象事業	個人住宅の新築及びこれに必要な土地（借地権を含む。）の取得	
貸付対象となる住宅の規模	床面積 80㎡～175㎡以下	
貸付の相手方	過疎法に基づく集落整備による移転者	
貸付利率（年率）	0.60%（令和2年3月31日現在）	
償還期間	過疎法に基づく集落移転者等に対する特別貸付	その他の貸付
	35年以内（3年以内の償還期間延長及び据置期間を設けることが可能）	35年以内
貸付限度額	建築費 一般貸付と同額	
	土地費 300万円以内（B地域、180㎡以上215㎡未満の場合）	

【過疎地域を対象とする施策】

●過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業（総務省）〔交付金〕

集落の維持・活性化を図るため、基幹集落を中心に周辺の複数集落をひとつのまとまりとする「集落ネットワーク圏」（「小さな拠点」）において、住民の「暮らし」を支える生活サポートシステムの構築や「なりわい」を継承・創出する活動の育成を支援する。

対象地域	過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業実施要綱第4に定める地域(過疎地域を含む条件不利地域)
対象事業	過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業実施要綱第5に定める事業実施計画に基づき実施するもの。
交付対象経費	次に掲げるものに要する経費 ただし、食糧費及び建設地方債が充当可能な経費を除く。 ア 産業振興（特産品の開発・販売促進PR事業等） イ 生活の安全・安心確保対策（有償運送の仕組み構築、日用品・食料品等の買物支援等） ウ 都市と地域の交流・移住促進対策 エ 地域文化伝承対策 オ その他適当と認められるもの
限度額・交付率	2,000万円・定額
令和元年度 予算額	400,000千円

●過疎地域集落再編整備事業（総務省）〔交付金〕

人口の著しい減少、高齢化の進展等により、その基礎的条件が著しく低下した集落及び基礎的な公共サービスの確保が困難な地域に孤立散在する住居を基幹集落等に移転すること並びに地域における定住を促進するための住宅団地を造成すること及び漸進的な集落移転を誘導するための季節居住団地を造成することによって集落の再編整備を図る過疎地域集落再編整備事業に要する経費について補助を行う。

採 択 基 準	集落等移転事業	<p>●集落移転タイプ</p> <p>(ア) 次のいずれかの条件を充たす集落であること。</p> <p>a 交通条件が悪く、医療、教育等基礎的な公共サービスの確保が困難であること。</p> <p>b 交通条件が悪く、人口が著しく減少していること。</p> <p>c 交通条件が悪く、高齢化が著しいこと。</p> <p>(イ) 全体として移転戸数が概ね5戸以上であること。</p> <p>(ウ) 各移転対象集落等にある相当の戸数が移転すること。</p> <p>(エ) 移転戸数のうち、相当の戸数が移転先地において団地を形成すること。</p> <p>●へき地点在住居移転タイプ</p> <p>(ア) 交通条件が悪く、医療、教育等基礎的な公共サービスの確保が困難な地域に存する住居であること。</p> <p>(イ) 全体として移転戸数が3戸以上であり、移転先地において団地を形成すること。</p>
	定住促進団地整備事業	<p>(ア) 地域における定住を促進するための住宅団地を整備するものであること。</p> <p>(イ) 5戸以上が団地を形成すること。</p>

	定住促進空き家活用事業	(ア) 地域における定住を促進するため基幹的集落に点在する空き家を有効活用し、住宅を整備すること。 (イ) 空き家を整備する戸数が3戸以上であること。 (ウ) 公営住宅法（昭和26年法律第193号）第2条第2号に規定する公営住宅（以下単に「公営住宅」という。）、特定優良賃貸住宅の供給の促進に関する法律（平成5年法律第52号）第18条第2項の規定による国の補助を受けて整備した住宅、その他この事業を実施する市町村が住宅の用に供している住宅は、対象から除外する。
	季節居住団地整備事業	(ア) 交通条件が悪く、医療、教育等基礎的な公共サービスの確保が困難な地域に存する住居であること。 (イ) 移転先において漸進的な集落移転を誘導するため、冬期間など季節的に居住等するための団地を形成すること。 (ウ) 全体として、季節的居住等の戸数が3戸以上であること。
実施期間	原則として1箇年度内	
交付対象	集落等移転事業： 移転の円滑化に要する経費、団地造成費、移転先住宅建設等助成費、生活関連施設整備費、産業基盤施設整備費 定住促進団地整備事業及び季節居住団地整備事業： ①貸分は、団地造成費、生活関連施設整備費、産業基盤施設整備費 ②分譲分は、生活関連施設整備費、産業基盤施設整備費 定住促進空き家活用事業： 空き家の改修に必要な経費（譲渡を予定しているものを除く。）	
交付率	1/2 以内	
交付対象経費	集落等移転事業	1戸当たり 6,144 千円を限度
	定住促進団地整備事業	1戸当たり 3,877 千円を限度
	定住促進空き家活用事業	1戸当たり 4,000 千円を限度
	季節居住団地整備事業	1戸当たり 4,738 千円を限度（ただし、生活関連施設整備費として高齢者コミュニティセンターの建設を伴わない場合は、3,877 千円）
令和元年度 予算額	89,652 千円	

●「小さな拠点」を核とした「ふるさと集落生活圏」形成推進事業（国土交通省）〔補助金〕

人口減少・高齢化が進む中山間地域等において、地域住民への様々な公益サービス機能を維持確保するため、遊休施設を活用し、ワンストップサービスの実現やサービスコストの低減を図る事業であって、「小さな拠点」の形成推進に資する以下のいずれかに該当する事業の実施に必要な施設の整備（既存公共施設を活用するものに限り、設計、付帯設備等を含む。）及び当該施設整備と一体的に行われ、かつ、当該施設整備の前提となる調査等を対象とする。

補 助 対 象	① 既存公共施設の再編・集約を図る事業 ② ①の既存公共施設の再編・集約を図る事業と併せて、「小さな拠点」を含む生活圏において消失し又は消失の可能性のある機能のうち当該生活圏の維持・再生に必要な機能（以下「生活圏必須機能」という。）を有する施設の整備を図る事業。 ③ ①の既存公共施設の再編・集約を図る事業を伴わず、複数の生活圏必須機能を有する施設の整備を図る事業（当該生活圏において再編・集約を図る既存公共施設が存在しない場合に限る。） ④ ①の既存公共施設の再編・集約により廃止となる施設の除却、跡地活用のための整地を行う事業
補 助 率	1/2 以内（市町村）・1/3 以内（NPO 等）
令 和 元 年 度 予 算 額	62,000 千円

(2) 都市部等との交流促進

【過疎地域を対象とする施策】

●過疎地域遊休施設再整備事業（総務省）〔交付金〕※平成23年度から

過疎地域における廃校舎や老朽化して使用されていない家屋等の遊休施設を有効活用し、地域振興や都市住民との地域間交流を促進するため、生産加工施設、資料展示施設、教育文化施設、地域芸能・文化体験施設等の整備に要する経費に対して補助を行う。

事業名	遊休施設再整備事業
採 択 基 準	① 現在使用されていない家屋、廃校舎、その他本来の用途を廃止した施設等遊休施設を有効活用するものであること。 ② 都市部等との人・文化・情報等による地域間交流を図るものであり、交流を図る上で、都市部等との連携が図られているもの。又は、地域の振興に資するものであること。 ③ 一体的なコンセプトによって地域に所在する既存の施設との調和が図られ、またそのような施設と連携して交流事業等を推進するものであること。 ④ 自然環境や街並み景観に配慮したものであること。 ⑤ 文化、歴史等の地域の特性・魅力をいかしたものであること。
交 付 事 業 者	・過疎地域市町村 ・構成市町村の2分の1以上が過疎地域市町村である広域市町村圏の一部事務組合等
実 施 期 間	・原則として1箇年度以内
交 付 対 象	①主要施設改修費 遊休施設の改修に必要な経費。ただし、庁舎等公用に供する部分を除く。 ②機能拡張にかかる付帯施設・設備 主要施設の機能拡張を図るため、次に掲げるもの（庁舎等公用に供する部分を除く）

	く。) (1) 施設費 ア 農林漁業等体験施設等 イ テナント店舗 (物販施設等) ウ 景観整備施設 (景観の維持・向上に資する案内板、誘導路、照明等) エ その他必要と認められる施設 (ただし、施設の整備が本体の施設の機能を拡張するために必要不可欠と認められるものを対象とする。) (2) 設備費 ア 情報通信設備 (パソコン・タッチパネル等通信端末を含む) (ただし、専用のシステム構築を伴うもので、システムと一体として活用とされることを目的とし、単体での使用が不可能な端末を対象とする。)
交付率	1/3 以内
交付対象経費	一事業当たり 60,000 千円
令和元年度 予算額	60,000 千円
令和元年度 実績	2 団体

【過疎地域に関連する施策】

●離島振興

○離島活性化交付金 (国土交通省) [国庫補助金]

離島における地域活性化を推進し、定住の促進を図るため、海上輸送費の軽減等戦略産業の育成による雇用拡大等の定住促進、観光の推進等による交流の拡大促進、安全・安心な定住条件の整備強化等の取組に対する支援を行っている。

補助率	都道府県、市町村、一部事務組合・・・1/2 民間団体・・・1/3 (ただし、国の負担額は、地方公共団体の負担額と同額までとする。) ※ 流通効率化関連施設整備等事業は、民間団体であっても1/2以内 ※ 特定有人国境離島地域に係る輸送費支援は、6/10以内 (国の負担額は、地方公共団体の負担額の3倍を超えないものとする。)
令和元年度予算額	2,028,704 千円
令和元年度実績	249 件

(参考)

○離島体験滞在交流促進事業 (国土交通省) [国庫補助金] (平成 24 年度まで)

離島の創意工夫を生かした自立的発展を支援するための事業に対して国として補助を行い、離島での滞在や体験を通じた交流人口拡大による離島地域の活性化を図っている。

事業内容	①施設整備 ②活用プログラム作成等 ③交流事業 ④離島振興施設の耐震化、バリアフリー化
補助率	1/2 以内
平成 24 年度予算額	178,028 千円

事業実績額	平成16年度	5箇所	212,527千円
	平成17年度	6箇所	201,901千円
	平成18年度	10箇所	191,806千円
	平成19年度	6箇所	182,215千円
	平成20年度	7箇所	183,127千円
	平成21年度	25箇所	1,674,029千円
	平成22年度	6箇所	184,029千円
	平成23年度	5箇所	187,918千円
	平成24年度	5箇所	174,503千円

○コミュニティ・アイランド推進事業（国土交通省）〔国庫補助金〕（平成14年度まで）

離島において、離島の活性化や都市等との交流の場づくり等を推進し、今後の離島の活力ある地域社会の形成に資するため、市町村が実施するコミュニティ・アイランド推進事業に対し補助を行っている。

1 箇所当たり基準事業費	(施設整備) aタイプ……126,000千円 bタイプ……252,000千円		
	(施設活用促進) 4,200千円		
補助率	1/2 (昭和61～平成4年度においては4.5/10)		
平成14年度予算額	201,750千円 (3箇所)		
コミュニティ・アイランド推進事業実績	年度	箇所数	国費
	平成2年度	11	294,088
	平成3年度	11	290,654
	平成4年度	11	322,279
	平成5年度	11	436,879
	平成6年度	11	349,679
	平成7年度	11	349,679
	平成8年度	11	349,679
	平成9年度	10	337,305
	平成10年度	10	431,065
	平成11年度	10	410,639
	平成12年度	8	263,525
	平成13年度	5	224,573
	平成14年度	3	201,750

○離島交流推進事業（国土交通省）〔国庫補助金〕（平成14年度まで）

自然や文化、芸能など島の特性を生かした経済的・文化的交流活動等を補助し、他地域との交流による島民の意識の高揚を図るとともに、当該事業を契機とした恒常的な交流を形成する。

1 箇所当たり基準事業費	21,000千円		
補助率	定額 (1/2 相当) (昭和61～平成4年度においては4.5/10)		
平成14年度予算額	23,597千円 (4箇所)		
離島交流推進事業実績	年度	箇所数	国費
	平成2年度	4	13,905
	平成3年度	3	13,905
	平成4年度	4	13,905
	平成5年度	3	13,905
	平成6年度	3	13,905

	平成 7 年度	3	13,905
	平成 8 年度	4	30,900
	平成 9 年度	4	30,060
	平成 10 年度	2	21,000
	平成 11 年度	6	31,500
	平成 12 年度	3	21,000
	平成 13 年度	6	31,500
	平成 14 年度	4	23,597

8 その他

【過疎地域を対象とする施策】

●過疎地域等自立活性化推進事業（総務省）〔交付金〕

過疎地域等が、過疎地域における喫緊の諸課題に対応するために取り組むソフト事業に要する経費について補助を行う。

対象事業	<p>原則として過疎地域自立促進特別措置法第6条に定める過疎地域自立促進市町村計画において当該年度において実施するものとして定められた事業であり、次に掲げるもの。</p> <p>(1) 産業振興 (2) 生活の安心・安全確保対策 (3) 集落の維持・活性化対策 (4) 移住・交流・若者の定住促進対策、田園回帰の促進 (5) 地域文化伝承対策 (6) 環境貢献施策の推進</p>
交付対象経費	<p>(1) 調査費 過疎地域における喫緊の諸課題の対策に資すると認められる調査研究事業に要する経費</p> <p>(2) 自立活性化推進費 自立活性化のための対策に資すると認められる事業で次に掲げるものに要する経費</p> <p>ア 産業振興（特産品の開発・販売促進PR事業等） イ 生活の安全・安心確保対策（コミュニティバス・デマンド交通システムの整備、医師確保、巡回医療等） ウ 集落の維持・活性化対策（集落の見守り活動、住民との話し合い等） エ 移住・交流・若者の定住促進対策（空き家バンクの創設費用、交流イベント移住者の働く場の環境整備、子育て環境の整備、医療・福祉に係る環境整備、移住コーディネーターの設置を含む受け入れ態勢の整備等） オ 地域文化伝承対策 カ 環境貢献施策の推進 キ その他適当と認められるもの</p> <p>(3) 市町村等事務費 調査研究事業又は自立活性化推進事業の実施に要する職員旅費、庁費（消耗品費、印刷製本費、通信運搬費、借料及び損料等）その他の事務的経費</p>
限度額・交付率	1,000万円・定額
令和元年度 予算額	141,000千円

【過疎地域に関連する施策】

●地域雇用開発対策（厚生労働省）

能力開発事業	民間機関を活用した委託訓練などにより、対象地域内の求職者に必要な職業能力を付与し、再就職の支援を図る。
地域雇用開発助成金	地域雇用開発促進法に基づく同意雇用開発促進地域又は雇用保険法施行規則に基づく過疎等雇用改善地域（若壮年層の流出の著しい過疎地域等）等において、事業所の設置・整備を行うとともに地域に居住する求職者等を雇い入れた事業主に対して、雇入れ規模及び設置・整備費用等に応じた助成を行うことにより、地域の雇用構造の改善を図る。
地域雇用活性化推進事業	地域雇用開発促進法に基づく同意自発雇用創造地域又は雇用保険法施行規則に基づく過疎等雇用創造地域に設置された地域雇用創造協議会による、地域の特性を生かした「魅力ある雇用」や「それを担う人材」の維持・確保を図るための創意工夫ある取組を支援する。

●出稼労働者安定就労対策（厚生労働省）

地元における就労機会の確保を推進するとともに、やむを得ず出稼就労する者に対する適格紹介の実施に加え、募集の適正化、また労働条件等の改善指導の実施により、出稼労働者の安全・安定就労を図る。

9 財政上の主要な施策

自立促進法第 13 条においては、国は、市町村計画又は都道府県計画に基づいて行う事業の実施に関し、必要な資金の確保その他の援助に努めなければならないとされており、地方債の充当、地方交付税の配分、国庫支出金の交付、各種金融機関による融資等において、特別の配慮を加えることとされている。また、資金確保のほか、行政上、技術上の助言指導、優先的な事業採択、事業採択基準の引き下げ等の配慮を行うこととされている。

(1) 地方債

【過疎法による施策】

●資金の確保等（法第 13 条）〔財政措置〕

国は、市町村計画又は都道府県計画に基づいて行う事業の実施に関し、必要な資金の確保に努めるとともに、補助事業採択基準の引下げ、補助事業の優先的な採択、融資制度の特例等を行うこととしている。なお、これらについては、旧過疎活性化法において認められていたものを継続するとともに、融資制度の特例の一部が拡充されている。

●過疎地域自立促進のための地方債（法第 12 条）〔財政措置〕

過疎地域の市町村は、財政がぜい弱であることに加えて、自立促進のための事業を特に行う必要があるため、特別の地方債が認められている。すなわち、過疎地域市町村が自立促進法に基づき策定した過疎地域自立促進市町村計画に基づいて行う同法第 12 条第 1 項に掲げる出資及び施設の整備につき必要とする経費については、地方財政法第 5 条各号に規定する経費に該当しない経費についても、地方債（過疎対策事業債）をもってその財源とすることができる。また、法改正により、平成 22 年度からは第 12 条第 2 項に定める地域医療の確保、住民の日常的な移動のための交通手段の確保、集落の維持及び活性化その他の住民が将来にわたり安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図るため特別に地方債を財源として行うことが必要と認められる事業として過疎地域の市町村が過疎地域自立促進市町村計画に定めるもの（当該事業の実施のために地方自治法第 241 条の規定により設けられる基金の積立てを含む。）の実施につき当該市町村が必要とする経費についても、地方財政法第 5 条各号に規定する経費に該当しない経費について、過疎対策事業債をもってその財源とすることができることとなった。

さらに、将来の財政負担を軽減するため、当該地方債のうち総務大臣が指定したものに係る元利償還に要する経費については、当該元利償還金の 70%を地方交付税の基準財政需要額に算入することとしている。

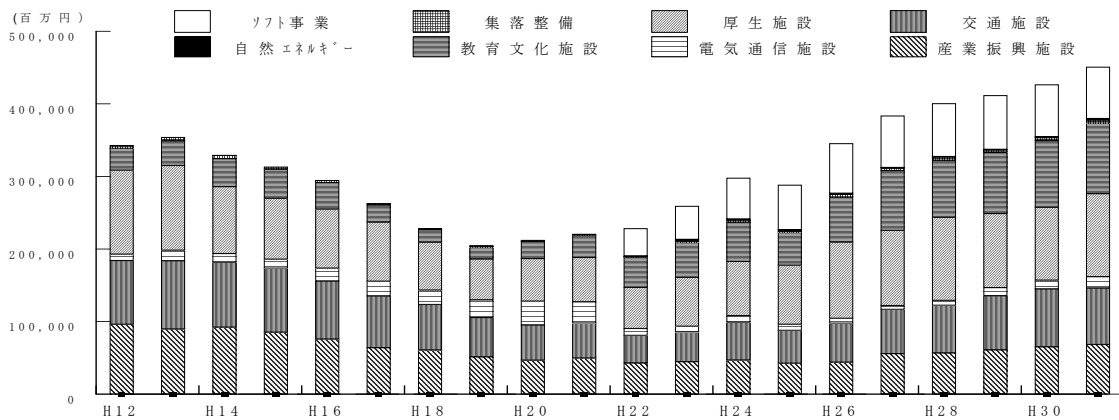
地方債計画における過疎対策事業債の計画額及び充当額（平成 18 年度以降については発行（予定）額）は、図表 3-3-17 のとおりである。

また、平成 30、令和元年度の過疎対策事業債の施設等別発行（予定）額は、図表 3-3-18、19 のとおりである。

図表 3-3-17 過疎対策事業債の状況

年度区分	地方債計画額	充 当 額	うちソフト分発行(予定)額	限度額	活用率
(緊急措置法) 昭和45年度～54年度	百万円 655,800	百万円 665,687	百万円 —	百万円 —	—
(振興法) 昭和55年度～平成元年度	1,632,000	1,642,999	—	—	—
(活性化法) 平成2年度～平成11年度	3,146,900	3,151,897	—	—	—
(自立促進法) 平成12年度	370,000	342,649	—	—	—
平成13年度	354,000	353,800	—	—	—
平成14年度	329,000	328,970	—	—	—
平成15年度	313,000	313,000	—	—	—
平成16年度	294,500	294,404	—	—	—
平成17年度	290,000	262,694	—	—	—
平成18年度	285,200	227,815	—	—	—
平成19年度	280,400	204,472	—	—	—
平成20年度	272,000	211,813	—	—	—
平成21年度	275,700	220,320	—	—	—
小 計	3,063,800	2,759,937	—	—	—
(改正自立促進法) 平成22年度	270,000	228,111	37,905	66,207	57.3%
平成23年度	290,000	258,859	45,782	70,207	65.2%
平成24年度	311,500	297,540	56,559	72,688	77.8%
平成25年度	313,900	287,987	61,587	74,542	82.6%
平成26年度	372,800	345,179	68,621	76,874	89.3%
平成27年度	424,000	383,242	70,923	76,900	92.2%
平成28年度	440,900	400,266	72,888	76,358	95.5%
平成29年度	456,100	411,457	74,181	76,429	97.1%
平成30年度	462,600	426,365	71,995	74,448	96.7%
令和元年度	471,400	450,614	70,925	73,066	97.1%

過疎対策事業債施設別充当額



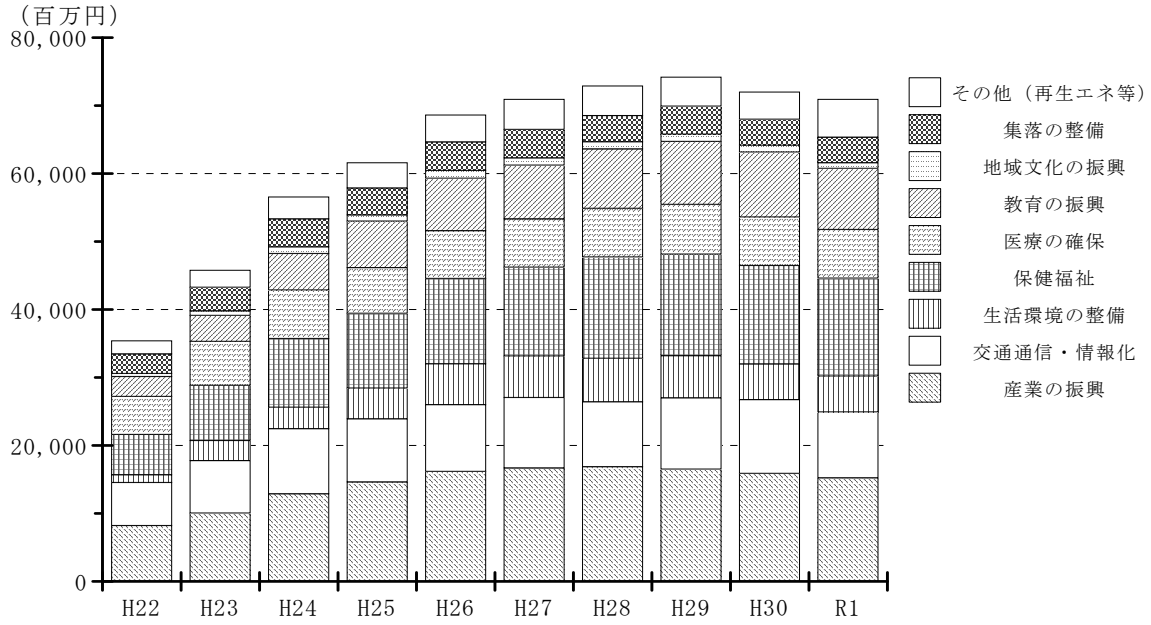
平成12年度を100とした場合の充当額の推移

年度	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
産業振興施設	100.0	93.1	95.8	88.6	78.7	66.3	63.0	53.3	48.5	51.5	44.6	46.3	48.9	44.3	45.7	57.9	59.0	63.3	67.7	71.0
交通施設	100.0	107.5	101.7	100.6	91.5	81.5	71.6	61.7	55.5	55.0	43.2	46.6	59.1	51.4	61.1	59.9	74.7	85.2	91.0	89.0
電気通信施設	100.0	162.3	137.1	140.2	198.8	227.4	223.7	277.7	370.3	333.1	107.9	90.8	105.0	97.3	77.2	69.6	76.3	125.3	135.4	174.7
厚生施設	100.0	100.9	79.8	72.4	70.2	70.5	57.1	48.7	50.7	52.7	48.9	58.1	64.4	70.1	90.8	89.5	98.9	88.2	86.7	98.9
教育文化施設	100.0	113.0	127.4	131.9	121.1	78.9	57.2	54.6	78.0	101.3	137.7	162.2	179.9	152.4	205.9	273.6	261.4	278.5	304.7	322.4
集落整備	100.0	118.6	117.9	88.9	77.3	48.8	32.0	44.9	41.6	38.8	26.8	56.6	71.4	49.2	89.6	91.7	110.0	93.9	106.7	109.5
自然エネルギー施設・設備	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	100.0	186.3	199.7	162.4	232.7	98.4	107.1	125.0	160.8	317.0
過疎地域自立促進特別事業(ソフト分)	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	100.0	120.8	149.2	162.5	181.0	187.1	192.3	195.7	189.9	187.1
合 計	100.0	103.3	95.9	91.3	85.9	76.7	66.5	59.7	61.8	64.3	66.6	75.5	86.8	84.0	100.7	111.8	116.8	120.1	124.4	131.5

※自然エネルギー施設・設備及び過疎地域自立促進特別事業(ソフト分)については、平成22年度から対象となっているため同年度を100.0とした。

過疎地域自立促進特別事業（ソフト分）の内訳

事業分野別充当額



事業分野別充当額構成比率

(単位：%)

年度 \ 分野	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1
産業の振興	21.9	22.8	23.7	23.6	23.5	23.2	22.3	22.1	21.5
交通通信・情報化	16.9	16.9	15.1	14.3	14.6	13.1	14.1	15.1	13.7
生活環境の整備	6.4	5.6	7.3	8.8	8.6	8.8	8.4	7.3	7.4
保健福祉	17.8	17.9	17.9	18.3	18.4	20.4	20.1	20.1	20.3
医療の確保	14.1	12.6	10.9	10.2	10.0	9.8	9.9	9.9	10.1
教育の振興	8.3	9.5	11.1	11.3	11.1	12.0	12.5	13.3	12.7
地域文化の振興	1.5	1.7	1.5	1.7	1.5	1.5	1.4	1.4	1.2
集落の整備	7.6	7.3	6.4	6.1	5.9	5.3	5.5	5.3	5.3
その他（再生エネ等）	5.5	5.7	6.0	5.8	6.3	6.0	5.8	5.6	7.9
小計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

図表 3-3-18 平成30年度過疎対策事業債施設別発行（予定）額

全市町村分		(単位：百万円、%)		
施設名		対象事業費	発行（予定）額	構成比
産業振興施設	1 法人に対する出資	293.1	264.6	0.1
	2 市町村道・橋りょう	3,918.1	2,550.6	0.6
	3 農道・林道	4,897.0	3,015.4	0.7
	4 漁港関連道	843.3	375.1	0.1
	5 漁港施設	10,338.7	5,059.0	1.2
	6 港湾施設	6,039.8	4,209.3	1.0
	7 地場産業振興施設	7,058.1	4,310.1	1.0
	8 貸工場・貸事務所	1,192.1	1,025.9	0.2
	9 観光・レクリエーション施設	40,989.6	32,284.7	7.6
	10 市町村管理都道府県道・橋りょう	5.6	2.8	0.0
	11 林業用作業路	680.9	347.7	0.1
	12 農林漁業経営近代化施設	18,803.4	11,551.2	2.7
	13 商店街振興施設	438.3	257.8	0.1
小計		95,498.0	65,254.2	15.3
交通通信施設	14 市町村道・橋りょう	110,976.1	69,834.5	16.4
	15 農道・林道	6,979.8	4,157.1	1.0
	16 地域鉄道	1,535.9	1,222.7	0.3
	17 電気通信施設	14,864.6	11,949.2	2.8
	18 市町村管理都道府県道・橋りょう	586.1	429.7	0.1
	19 自動車・雪上車	1,030.9	913.3	0.2
	20 渡船施設	1,059.7	796.9	0.2
	21 除雪機械	4,737.0	2,442.0	0.6
小計		141,770.1	91,745.4	21.5
厚生施設	22 下水処理施設	55,167.0	15,400.7	3.6
	23 一般廃棄物処理施設	24,950.8	20,259.2	4.8
	24 火葬場	4,502.2	3,340.3	0.8
	25 消防施設	16,120.3	13,831.3	3.2
	26 高齢者保健福祉施設	7,951.3	6,857.9	1.6
	27 保育所・児童館	13,999.0	9,834.2	2.3
	28 認定こども園	9,226.3	6,584.1	1.5
	29 障害者（児）施設	1,319.2	1,084.7	0.3
	30 診療施設	22,583.2	12,834.9	3.0
	31 市町村保健センター及び母子保健センター	1,336.8	1,309.1	0.3
	32 簡易水道施設	21,339.9	9,000.4	2.1
小計		178,496.0	100,336.8	23.5
教育文化施設	33 公民館	8,497.9	7,475.4	1.8
	34 その他の集会施設	24,280.9	20,438.8	4.8
	35 市町村立幼稚園	606.8	452.3	0.1
	36 小・中学校校舎・屋体・寄宿舎	53,559.7	41,108.1	9.6
	37 小・中学校屋外運動場・プール	2,695.7	2,421.4	0.6
	38 小・中学校教職員住宅	885.9	675.0	0.2
	39 小・中学校スクールバス・ポート	1,376.5	1,006.5	0.2
	40 義務教育学校校舎・屋体・寄宿舎	4,286.2	3,649.2	0.9
	41 義務教育学校屋外運動場・プール	0.0	0.0	0.0
	42 義務教育学校教職員住宅	11.5	11.4	0.0
	43 義務教育学校スクールバス・ポート	67.5	52.7	0.0
	44 市町村立高等学校校舎・屋体・寄宿舎	748.3	683.8	0.2
	45 市町村立高等学校屋外運動場・プール	107.5	107.5	0.0
	46 市町村立高等学校教職員住宅	9.7	9.7	0.0
	47 市町村立高等学校スクールバス・ポート	27.2	27.1	0.0
	48 市町村立中等教育学校校舎・屋体・寄宿舎	0.0	0.0	0.0

施 設 名		対 象 事 業 費	発 行 (予 定) 額	構 成 比
	49 市町村立中等教育学校屋外運動場・プール	0.0	0.0	0.0
	50 市町村立中等教育学校教職員住宅	0.0	0.0	0.0
	51 市町村立中等教育学校スクールバス・ポート	0.0	0.0	0.0
	52 市町村立特別支援学校校舎・屋体・寄宿舎	0.0	0.0	0.0
	53 市町村立特別支援学校屋外運動場・プール	0.0	0.0	0.0
	54 市町村立特別支援学校教職員住宅	0.0	0.0	0.0
	55 市町村立特別支援学校スクールバス・ポート	0.0	0.0	0.0
	56 市町村立専修学校	452.9	436.3	0.1
	57 市町村立各種学校	0.0	0.0	0.0
	58 図書館	2,915.6	2,360.3	0.6
	59 地域文化振興施設	6,234.2	4,434.1	1.0
	60 学校給食施設	7,036.5	6,576.8	1.5
	小 計	113,800.5	91,926.4	21.6
集 落 整 備	61 移転跡地	98.3	86.0	0.0
	62 移転先地	95.4	66.8	0.0
	63 定住促進団地	5,531.3	3,965.4	0.9
	小 計	5,725.0	4,118.2	1.0
64	自然エネルギーを利用するための施設・設備	1,751.6	988.7	0.2
	ハード分 小計	537,041.2	354,369.7	83.1
過疎地域	自立促進特別事業(うち分)	100,249.8	71,995.3	16.9
	うち基金積立分	7,618.0	7,617.7	1.8
	合 計	637,291.0	426,365.0	100
	普通会計債補助事業分	256,029.4	140,852.5	
	普通会計債単独事業分	291,085.9	254,069.4	
	公営企業債補助・単独分	90,175.7	31,443.1	

図表 3-3-19 令和元年度過疎対策事業債施設別発行（予定）額

全市町村分

(単位：百万円、%)

	施設名	対象事業費	発行（予定）額	構成比
産業振興施設	1 法人に対する出資	828.9	828.7	0.2
	2 市町村道・橋りょう	3,006.7	1,631.1	0.4
	3 農道・林道	5,742.5	3,482.1	0.8
	4 漁港関連道	1,019.6	612.3	0.1
	5 漁港施設	11,406.7	5,239.2	1.2
	6 港湾施設	7,290.3	4,932.5	1.1
	7 地場産業振興施設	7,569.0	5,608.8	1.2
	8 貸工場・貸事務所	1,953.5	1,845.8	0.4
	9 観光・レクリエーション施設	41,461.3	30,548.5	6.8
	10 市町村管理都道府県道・橋りょう	44.5	23.6	0.0
	11 林業用作業路	516.0	250.8	0.1
	12 農林漁業経営近代化施設	38,291.4	13,160.0	2.9
	13 商店街振興施設	290.3	221.6	0.0
	小計	119,420.7	68,385.0	15.2
交通通信施設	14 市町村道・橋りょう	108,796.0	6,775.9	15.0
	15 農道・林道	7,958.8	4,843.8	1.1
	16 地域鉄道	765.9	751.8	0.2
	17 電気通信施設	20,199.0	15,419.5	3.4
	18 市町村管理都道府県道・橋りょう	1,317.6	866.7	0.2
	19 自動車・雪上車	956.2	777.5	0.2
	20 渡船施設	1,941.2	605.7	0.1
	21 除雪機械	4,220.1	2,420.7	0.5
	小計	146,154.8	93,437.6	20.7
厚生施設	22 下水処理施設	55,512.7	16,389.2	3.6
	23 一般廃棄物処理施設	39,171.1	31,320.8	7.0
	24 火葬場	4,209.5	3,254.7	0.7
	25 消防施設	11,661.4	10,135.8	2.2
	26 高齢者保健福祉施設	7,787.8	6,191.3	1.4
	27 保育所・児童館	15,975.9	10,823.0	2.4
	28 認定こども園	11,551.6	7,405.3	1.6
	29 障害者（児）施設	941.9	838.4	0.2
	30 診療施設	34,564.3	19,210.1	4.3
	31 市町村保健センター及び母子保健センター	507.9	487.3	0.1
	32 簡易水道施設	20,473.5	8,367.6	1.9
		小計	202,357.6	114,422.7
教育文化施設	33 公民館	7,928.7	6,122.8	1.4
	34 その他の集会施設	27,285.6	23,343.3	5.2
	35 市町村立幼稚園	1,640.8	1,537.4	0.3
	36 小・中学校校舎・屋体・寄宿舎	42,364.8	32,849.8	7.3
	37 小・中学校屋外運動場・プール	3,632.8	3,132.1	0.7
	38 小・中学校教職員住宅	617.8	421.8	0.1
	39 小・中学校スクールバス・ポート	1,206.6	891.5	0.2
	40 義務教育学校校舎・屋体・寄宿舎	13,031.6	9,542.2	2.1
	41 義務教育学校屋外運動場・プール	271.6	256.6	0.1
	42 義務教育学校教職員住宅	173.9	101.4	0.0
	43 義務教育学校スクールバス・ポート	70.2	49.6	0.0
	44 市町村立高等学校校舎・屋体・寄宿舎	413.3	385.6	0.1
	45 市町村立高等学校屋外運動場・プール	0	0	0.0
	46 市町村立高等学校教職員住宅	0	0	0.0
	47 市町村立高等学校スクールバス・ポート	12.8	10.4	0.0
	48 市町村立中等教育学校校舎・屋体・寄宿舎	614.0	147.3	0.0

施 設 名		対 象 事 業 費	発 行 (予 定) 額	構 成 比
	49 市町村立中等教育学校屋外運動場・プール	0.0	0.0	0.0
	50 市町村立中等教育学校教職員住宅	0.0	0.0	0.0
	51 市町村立中等教育学校スクールバス・ポート	0.0	0.0	0.0
	52 市町村立特別支援学校校舎・屋体・寄宿舎	0.0	0.0	0.0
	53 市町村立特別支援学校屋外運動場・プール	0.0	0.0	0.0
	54 市町村立特別支援学校教職員住宅	0.0	0.0	0.0
	55 市町村立特別支援学校スクールバス・ポート	0.0	0.0	0.0
	56 市町村立専修学校	590.5	587.2	0.1
	57 市町村立各種学校	0.0	0.0	0.0
	58 図書館	4,263.8	3,168.8	0.7
	59 地域文化振興施設	10,975.5	6,931.6	1.5
	60 学校給食施設	8,873.1	7,786.8	1.7
	小 計	123,967.4	97,266.2	21.6
集 落 整 備	61 移転跡地	305.0	276.3	0.1
	62 移転先地	437.7	344.6	0.1
	63 定住促進団地	5,499.3	3,606.2	0.8
	小 計	6,242.0	4,227.1	0.9
64 自然エネルギーを利用するための施設・設備	4,631.0	1,949.7	0.4	
	ハード分 小計	602,773.5	379,688.3	84.3
	過疎地域自立促進特別事業(ソフト分)	98,505.8	70,925.3	15.7
	うち基金積立分	7,662.2	7,640.0	1.7
	合 計	701,279.3	450,613.6	100
	普通会計債補助事業分	291,249.0	161,575.2	
	普通会計債単独事業分	308,617.0	252,726.3	
	公営企業債補助・単独分	101,413.3	36,312.1	

(備考) 集計の関係上、不明な箇所については空白としている。

【過疎地域に関連する施策】

● 辺地対策事業債（総務省）

辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律により辺地（交通条件及び自然的、経済的、文化的諸条件に恵まれず、他の地域に比較して住民の生活文化水準が著しく低い山間地、離島その他のへんびな地域で、住民の数その他について政令で定める要件に該当する地域をいう。）を包括する市町村が、辺地とその他の地域との間における住民の生活文化水準の著しい格差の是正を図るため、議会の議決を経て当該辺地に係る公共的施設の総合的な整備に関する財政上の計画（以下、「総合整備計画」という。）を定め、この総合整備計画に基づいて実施する公共的施設の整備に要する経費については、地方財政法第5条各号に規定する経費に該当しない経費についても、地方債（辺地対策事業債）をもってその財源とすることができ、さらに、将来の財政負担を軽減するため、当該地方債のうち総務大臣が指定したものに係る元利償還に要する経費については、当該元利償還金の80%を地方交付税の基準財政需要額に算入することとしている。

地方債計画における辺地対策事業債の計画額及び充当額（平成18年度以降については発行（予定）額）は、図表3-3-20のとおりである。

図表3-3-20 辺地対策事業債の状況

年度区分	地方債計画額	充当額
平成2年度～11年度	782,100 百万円	782,037 百万円
平成12年度	79,000	78,907
平成13年度	74,000	73,903
平成14年度	65,000	64,998
平成15年度	62,000	61,966
平成16年度	58,000	57,123
平成17年度	55,600	47,077
平成18年度	53,800	44,229
平成19年度	50,800	41,621
平成20年度	49,300	40,500
平成21年度	49,900	40,708
平成22年度	43,300	36,700
平成23年度	41,200	36,873
平成24年度	42,700	40,082
平成25年度	42,800	39,851
平成26年度	42,500	39,978
平成27年度	48,100	43,117
平成28年度	49,100	44,840
平成29年度	48,100	45,074
平成30年度	48,800	46,708
令和元年度	51,100	46,960

(2) 国庫補助金等

【過疎法による施策】

●国の負担又は補助の割合の特例（法第 10 条）

現行法においては、過疎地域自立促進市町村計画に基づいて行う以下の事業に要する経費に対する国の負担又は補助の割合を過疎地域について引き上げるものとしている（事業の詳細は各々既出）（※）。

（※）政令で定める交付金（次世代育成交付金）を交付する場合には、国が負担し、又は補助することとなる割合を参酌して、当該交付金の額を算定するものとしている（国の補助金等の整理及び合理化等に伴う国民健康保険法等の一部を改正する法律（平成 17 年法律第 25 号）による改正後の自立促進法第 10 条第 2 項）。

補助率の嵩上げ措置

事業の区分	一般の補助率等	過疎法による補助率等
公立の小中学校等を適正な規模にするため統合しようとする（又はした）ことに伴い必要となる公立の小中学校等の校舎又は屋内運動場の新築又は増築（買収その他これに準ずる方法による取得を含む。）	2 分の 1	10 分の 5.5
保育所の設備の新設、修理、改造又は整備	2 分の 1	10 分の 5.5
消防の用に供する機械器具及び設備の購入又は設置	3 分の 1	10 分の 5.5

●学校統合に伴う教職員住宅の整備に対する国の負担割合の特例（法第 11 条）

市町村計画に基づいて行う、公立の小・中学校等の統合に伴い必要となった教職員住宅の建築事業に要する経費について、国が交付する交付金の通常の算定割合は 1/2 であるが、当該事業に要する経費は 5.5/10 を下回らない額の交付金が充当されるように算定することとしている（事業の詳細は既出）。

※三位一体の改革に伴う過疎地域補助金の取扱いについて

平成 14 年度から平成 18 年度にかけて行われた、いわゆる三位一体の改革（国庫補助負担金改革、税源移譲、地方交付税の見直し）に伴い、過疎地域において嵩上げ措置のある補助金等が交付金化された場合には、従前の補助率を参酌して当該交付金の額を算定する措置がとられている。また、廃止された場合には、特別な地方債（施設整備事業（一般財源化分））で対応することとされた。以上のことを整理すると次ページの表のとおりである。

なお、施設整備事業（一般財源化分）において、従来の補助金等相当部分（補助率嵩上げ部分を含む。）に地方債を充当した場合、元利償還金については、後年度に一定割合が普通交付税の基準財政需要額に算入される（算入率は当初 100%であったが、平成 23 年度同意・許可債からは 70%（一部は平成 24 年度同意・許可債から）となっている。次ページの図を参照）。また、施設整備事業（一般財源分）のうち、公立学校施設整備補助金（不適格建築改築事業）に係るものについては、平成 23 年度から学校教育施設等整備事業の対象とされている。

○過疎法10条（【法】）及び予算補助（【予】）

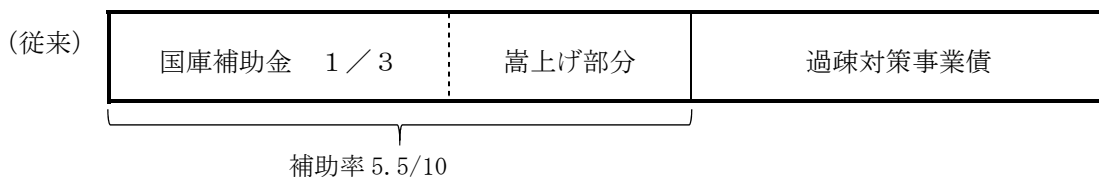
事業名		補助率※ 一般→過疎	対応状況
公立の小・中学校等の統合に伴う校舎等の 新增築【法】		1/2→5.5/10	従来どおり（公立学校施設整備費負担金）
保育所の新設等 【法】	公立	1/2→5.5/10 まで	廃止→施設整備事業（一般財源化分）で対応【平成18年度から】
	その他	1/2→5.5/10 まで	従来どおり（次世代育成支援対策施設整備交付金）【平成17年度から】 →安心子ども基金【平成20年度から】 →保育所等整備交付金【平成26年度補正から】
消防設備の整備【法】	常備消防分	1/3→5.5/10	廃止→施設整備事業（一般財源化分）【平成18年度から】
消防設備の整備【予】	消防団分	1/2→5.5/10	
公立小・中学校等の施設の整備【予】	不適合建物改築（下記部分を除く）	1/3→5.5/10	廃止→施設整備事業（一般財源化分）【平成18年度から】→学校教育施設等整備事業【平成23年度から】
	不適合建物改築のうち、耐震力不足等に関する部分	1/3→5.5/10	
	危険建物改築	1/3→5.5/10	
公立へき地小・中学校等の統合に伴う寄宿舎の新增築【予】		1/2（へき地） →5.5/10	

※三位一体の改革以前の補助率

○過疎法11条

事業名	算定割合	対応状況
公立小・中学校等の統合に伴い必要となった教職員住宅の建築	5.5/10	交付金化（安全・安心な学校づくり交付金）【平成18年度から】→学校施設環境改善交付金【平成23年度から】

[施設整備事業（一般財源化分）の仕組み]



(三位一体の改革に伴う措置)

特別の地方債（施設整備事業（一般財源化分）） 交付税措置（H22まで100%、H23以降70%※）	過疎対策事業債
--	---------

※施設整備（一般財源化分）のうち、一部事業については平成24年度から70%となる。

【過疎地域を対象とする施策】

現行法に基づくもののほかにも、過疎地域を対象として補助率の嵩上げが行われている（例：危険校舎の改築事業、林道開設事業等）。

なお、特に農林水産省関係の事業については、過疎地域で実施する場合に、実施要件の緩和を行っている（図表 3-3-21）。

●農林水産関係事業の実施要件の緩和

図表 3-3-21 実施要件の緩和

事業名	緩和事項	一般基準	緩和基準	緩和区域
1 農道等に係る土地改良事業等				
(1) 農山漁村地域整備交付金のうち農地整備事業 (通作条件整備)				
[基幹農道整備]	{ 受益面積 幅員(車道)	50ha 以上 4m 以上	30ha 以上 3m 以上	{ 過疎(受益のみ)、山村、半島 、離島(幅員のみ)、棚田、 鹿児島県奄美市及び大島郡 (幅員のみ)
[一般農道整備]	{ 受益面積 幅員	50ha 以上 4.5m 以上	30ha 以上 4m 以上	{ 過疎、山村、半島、急傾斜(幅員 のみ)、特豪(幅員のみ)、棚田
(2) 農山漁村地域整備交付金のうち農地防災事業 (ため池等整備事業)				
[大規模]	受益面積	100ha 以上	70ha 以上	{ 過疎、山村、半島
[小規模]	受益面積	10ha 以上	5ha 以上	{ 過疎、山村、離島、半島、
(地域ため池総合整備事業)	受益面積	10ha 以上	(合計)10ha 以上	特定農山村、棚田
(3) 沖縄振興公共投資交付金のうち農地整備事業 (通作条件整備)				
[基幹農道整備]	{ 受益面積 幅員(車道)	50ha 以上 4m 以上	30ha 以上 3m 以上	{ 過疎
[一般農道整備]	{ 受益面積 幅員	50ha 以上 4.5m 以上	30ha 以上 4m 以上	{ 過疎、急傾斜(幅員のみ)
(4) 沖縄振興公共投資交付金のうち農地防災事業 (ため池等整備事業)				
[大規模]	受益面積	60ha 以上	20ha 以上	{ 過疎、特定農山村、沖縄、棚田
[小規模]	受益面積	10ha 以上	5ha 以上	
(地域ため池総合整備事業)	受益面積	10ha 以上	(合計)10ha 以上	

事業名	緩和事項	一般基準	緩和基準	緩和区域
(5) 農村地域防災減災事業				
(用排水施設等整備事業のうち用排水施設整備事業)				
[大規模]	受益面積	400ha以上	200ha以上	過疎、山村、離島、半島、 特定農山村、沖縄、特豪、棚田
[小規模]	受益面積	20ha以上	10ha以上	
2 草地等に係る土地改良事業等				
(1) 農業競争力強化基盤整備事業のうち草地畜産基盤整備事業				
(道営草地整備事業)	受益面積	500ha以上	250ha以上	過疎、山村、離島、半島、 特定農山村
(公共牧場整備事業)	受益面積	200ha以上	100ha以上	
うち北海道		300ha以上	150ha以上	
(再編整備事業)	受益面積	200ha以上	100ha以上	
(2) 農山漁村地域整備交付金のうち草地畜産基盤整備事業				
(道営草地整備事業)	受益面積	500ha以上	250ha以上	過疎、山村、離島、 半島、特定農山村
(公共牧場整備事業)	受益面積	60ha以上	30ha以上	
うち北海道		300ha以上	150ha以上	
(再編整備事業)	受益面積	30ha以上	15ha以上	
(水田地帯等担い手育成整備事業)	受益面積	30ha以上	15ha以上	
3 森林整備事業(林道)				
(1) 農山漁村地域整備交付金のうち森林整備事業				
(森林管理道開設)	利用区域の森林面積	50ha以上	30ha以上	過疎等※
(幹線林道の改良)	利用区域の森林面積	500ha以上	200ha以上	過疎、山村
(その他の林道の改良)	利用区域の森林面積	50ha以上	30ha以上	過疎
(幹線林道の舗装)	利用区域の森林面積	500ha以上	200ha以上	過疎、山村
(2) 沖縄振興公共投資交付金のうち森林整備事業				
(幹線林道の改良)	利用区域の森林面積	500ha以上	200ha以上	過疎、山村
(その他林道の改良)	利用区域の森林面積	50ha以上	30ha以上	過疎
(幹線林道の舗装)	利用区域の森林面積	500ha以上	200ha以上	過疎、山村
				(※特定又は準特定市町村であること等の要件を満たす場合に限る)

(3) 地方交付税（総務省）

【過疎地域に関連する施策】

過疎地域に対する地方交付税の措置の主な事項は、次のとおりである。

ア 過疎対策事業債、辺地対策事業債の元利償還費（市町村分）

イ 人口急減補正（市町村分）

ウ 過疎代行事業費（都道府県分）

エ 集落対策に要する経費（都道府県分、市町村分）

その他 スクールバス・ボートに要する経費（市町村分）、診療所・患者輸送車等の運営に係るへき地医療対策（都道府県分、市町村分）、簡易水道の建設改良費（市町村分）等

10 その他の行政措置

【過疎法による施策】

●農地法等による処分についての配慮（法第 24 条）〔行政措置〕

過疎対策事業として集落整備、産業振興の観点から農地の転用又は権利移転等を必要とする場合があるので、農地を市町村計画に定める用途に供する場合には、計画の策定及び実施に際して都道府県知事等と調整を図り、農地の転用又は権利移転等が円滑に行われるよう配慮することとしている。

●国有林野の活用（法第 25 条）〔行政措置〕

国有林野の所在する地域における農林業の構造改善その他産業の振興又は住民福祉の向上のための国有林野の活用については、国有林野の活用に関する法律の他、国有林野の管理経営に関する法律の関係法令に基づき処理されているが、過疎地域についても、市町村計画の実施が促進されるよう、当該市町村及び住民に対する国有林野の売払い、貸付け・使用等について適切な配慮をすることとしている。

資 料

過疎対策について

I 過疎対策の経緯

○昭和45年以来、四次にわたり議員立法として過疎法が制定(全て全会一致により成立)。

- ・過疎地域対策緊急措置法(昭和45年4月24日施行)
- ・過疎地域振興特別措置法(昭和55年4月1日施行)
- ・過疎地域活性化特別措置法(平成2年4月1日施行)
- ・過疎地域自立促進特別措置法(平成12年4月1日施行。平成22年、平成24年、平成26年、平成29年に法改正。)

○現在の過疎地域自立促進特別措置法は、令和2年度末に期限が到来。

II 過疎地域の要件

市町村毎に、「人口減少要件」
及び「財政力要件」より判定。

※人口減少団体の平均人口減少率より人口が減少しており、財政力の弱い市町村を指定

III 過疎地域の現況等

	(過疎関係市町村)	(全国)	(過疎地域の割合)
関係市町村数(令和2.4.1)	817	1,718	47.6%
人口(平成27国調:万人)	1,088	12,709	8.6%
面積(平成27国調:km ²)	225,468	377,971	59.7%

※「みなし過疎」と「一部過疎地域」を含む。

IV 各種施策

(1) 過疎法に基づく施策

- ①過疎対策事業債による支援(令和2年度計画額4,700億円(充当率100%、元利償還の70%を交付税措置))
 - ・平成22年の改正過疎法により、従来のハード事業に加えて新たに「ソフト事業」(地域医療の確保、交通手段の確保、集落の維持・活性化等、住民が将来にわたり安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図るための事業(基金積立も含む))も過疎債の対象とした。
- ②国庫補助金の補助率かさ上げ(統合に伴う公立小中学校校舎の整備等)
- ③税制特例措置・地方税の課税免除等に伴う減収補てん措置等

(2) その他

○過疎地域等自立活性化推進交付金(令和2年度予算額:6.9億円)

過疎地域自立促進特別措置法と過去の過疎3法の概要

法律名	過疎地域対策緊急措置法 (昭和45年4月24日法律第31号)	過疎地域振興特別措置法 (昭和55年3月31日法律第19号)	過疎地域活性化特別措置法 (平成2年3月31日法律第15号)	過疎地域自立促進特別措置法 (平成12年3月31日法律第15号)
制定経緯	議員立法(全会一致)	議員立法(全会一致)	議員立法(全会一致)	議員立法(全会一致)
期間	昭和45年度～昭和54年度	昭和55年度～平成元年度	平成2年度～平成11年度	平成12年度～平成32年度(※法制定当初の期限(～平成21年度)から11年間延長)
目的	○ 人口の過度の減少防止 ○ 地域社会の基盤を強化 ○ 住民福祉の向上 ○ 地域格差の是正	○ 過疎地域の振興 ○ 住民福祉の向上 ○ 雇用の増大 ○ 地域格差の是正	○ 過疎地域の活性化 ○ 住民福祉の向上 ○ 雇用の増大 ○ 地域格差の是正	○ 過疎地域の自立促進 ○ 住民福祉の向上 ○ 雇用の増大 ○ 地域格差の是正 ○ 美しく風格ある国土の形成
法制定(改正)時の過疎地域の要件	人口要件 昭和35年～昭和40年(5年間) 人口減少率 10%以上	人口要件 昭和35年～昭和50年(15年間) 人口減少率 20%以上	人口要件(以下のいずれか) ①昭和35年～昭和60年(25年間) 人口減少率 25%以上 ②昭和35年～昭和60年(25年間) 人口減少率 20%以上かつ昭和60年の高齢者(65歳以上)比率 16%以上 ③昭和35年～昭和60年(25年間) 人口減少率 20%以上かつ昭和60年基準(15歳以上30歳未満)比率 16%以下	人口要件(以下のいずれか) <H12.4.1～> ①昭和35年～平成7年(35年間) 人口減少率 30%以上 ②昭和35年～平成7年(35年間) 人口減少率 25%以上かつ平成7年高齢者比率 24%以上 ③昭和35年～平成7年(35年間) 人口減少率 25%以上かつ平成7年若年者比率 15%以下 ④昭和45年～平成7年(25年間) 人口減少率 19%以上 (①～③)は、昭和45年から25年間で人口が10%以上増加している団体は除く。)
人口要件かつ財政力要件	財政力要件 ●S41-S43 財政力指数 0.4未満	財政力要件 ●S51-S53 財政力指数 0.37以下 ●公営競技収益 10億円以下	財政力要件 ●H8-H10 財政力指数 0.42以下 ●公営競技収益 13億円以下 (①～③)は、昭和55年から25年間で人口が10%以上増加している団体は除く。)	財政力要件 ●H26.4.1～>(※新たに追加) ①昭和45年～平成27年(45年間) 人口減少率 32%以上 ②昭和45年～平成27年(45年間) 人口減少率 27%以上かつ平成27年高齢者比率 36%以上 ③昭和45年～平成27年(45年間) 人口減少率 27%以上かつ平成27年若年者比率 11%以下 ④平成27年～平成27年(25年間) 人口減少率 21%以上 (①～③)は、平成27年から25年間で人口が10%以上増加している団体は除く。)
公示 市町村数 (過疎市町村 /全市町村)	当初(S45.5.1) 776/3, 280 最終 1, 093/3, 255	当初(S55.4.1) 1, 119/3, 255 最終 1, 157/3, 245	当初(H12.4.1) 1, 171/3, 229 追加(H14.4.1) 1, 210/3, 218 法延長当初(H22.4.1) 776/1, 727 (H25.4.1現在) 775/1, 719	当初(H24.1) 1, 143/3, 245 最終 1, 230/3, 229 法改正当初(H26.4.1) 797/1, 719 817/1, 718

都道府県別過疎関係市町村数（令和2年4月1日時点）（県庁所在地・政令市・中核市の該当団体の注釈入り）

都道府県名	市町村数計	過疎関係市町村数計			備考
		過疎市町村(2条1項)	みなし過疎市町村(33条1項)	一部過疎を有する市町村(33条2項)	
北海道	179	149	0	5	函館市[中核](過疎)
青森	40	29	1	5	
岩手	33	24	1	3	
宮城	35	10	0	3	
秋田	25	23	18	4	秋田市[中核](一部過疎)
山形	35	21	18	2	
福島	59	31	27	3	
茨城	44	5	2	3	
栃木	25	4	3	1	
群馬	35	14	9	0	高崎市[中核](一部過疎)
埼玉	63	4	2	2	
千葉	54	7	6	1	
東京	39	6	6	0	
神奈川	33	1	1	0	
新潟	30	14	9	1	
富山	15	4	3	0	富山市[中核](一部過疎)
石川	19	10	6	4	
福井	17	6	3	3	福井市[県庁](一部過疎)
山梨	27	15	7	0	甲府市[県庁](一部過疎)
長野	77	37	29	0	長野市[中核](一部過疎)
岐阜	42	14	7	1	
静岡	35	9	5	0	浜松市[政令](一部過疎)
愛知	54	5	3	0	豊田市[中核](一部過疎)
三重	29	9	7	0	津市[県庁](一部過疎)
滋賀	19	2	0	2	
京都	26	10	7	2	京都市[政令](一部過疎)
大阪	43	1	1	0	
兵庫	41	10	7	0	
奈良	39	18	18	0	
和歌山	30	18	15	2	
鳥取	19	12	8	0	鳥取市[県庁](一部過疎)
島根	19	19	15	2	松江市[県庁](一部過疎)
岡山	27	20	13	1	岡山市[政令](一部過疎)
広島	23	16	10	0	呉市[中核](一部過疎) 福山市[中核](一部過疎)
山口	19	12	6	0	山口市[県庁](一部過疎) 下関市[中核](一部過疎)
徳島	24	13	11	0	
香川	17	8	6	0	高松市[中核](一部過疎)
愛媛	20	17	11	1	松山市[中核](一部過疎)
高知	34	28	24	0	高知市[中核](一部過疎)
福岡	60	21	16	2	
佐賀	20	9	5	0	佐賀市[県庁](一部過疎)
長崎	21	13	10	1	長崎市[中核](一部過疎) 佐世保市[中核](一部過疎)
熊本	45	27	22	2	
大分	18	16	12	1	大分市[中核](一部過疎)
宮崎	26	17	13	0	
鹿児島	43	41	35	0	鹿児島市[中核](一部過疎)
沖縄	41	18	17	1	
全国	1,718	817	647	25	145

(備考) 1 市町村数は令和2年4月1日現在

2 過疎関係市町村数計は、本則適用(第2条第1項)、みなし過疎(第33条第1項)、一部過疎(第33条第2項)のすべてを合算。

3 備考欄に記載した市町村は、過疎関係の政令市、中核市、県庁所在地であり、「政令」「中核」「県庁」と区分を表記している。

4 東京都特別区は市町村数に含まない。

内訳

市町村別 団体数	市	町	村
	279	410	128

過疎対策事業債の概要

- 過疎対策事業債は、過疎市町村が市町村計画に基づいて行う事業の財源として特別に発行が認められた地方債
- 充当率は100%であり、その元利償還金の70%は普通交付税の基準財政需要額に算入
- 令和2年度地方債計画額は4,700億円（ハード分3,967億円、ソフト分733億円）
- 対象事業は次のとおり（ハード分）

<p>産業振興施設等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 地場産業、観光、レクリエーションに関する事業を行う法人に対する出資 ○ 産業の振興を図るために必要な市町村道、農道、林道、漁港関連道路 ○ 漁港、港湾施設 ○ 地場産業の振興に資する施設 ○ 中小企業の育成又は企業の導入若しくは起業の促進のために市町村が個人又は法人その他の団体に使用させるための工場、事務所 ○ 観光、レクリエーションに関する施設 ○ 産業の振興を図るために必要な市町村が管理する都道府県道 ○ 林業用作業路 ○ 農林漁業の経営の近代化のための施設 ○ 商店街振興のために必要な共同利用施設 	<p>厚生施設等</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 下水処理のための施設 ○ 一般廃棄物処理のための施設 ○ 火葬場 ○ 消防施設 ○ 高齢者の保健又は福祉の向上又は増進を図るための施設 ○ 保育所及び児童館 ○ 認定こども園 ○ 障害者又は障害児の福祉の増進を図るための施設 ○ 診療施設 ○ 簡易水道施設 ○ 市町村保健センター、母子健康包括支援センター
<p>交通通信施設</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 交通の確保を図るために必要な市町村道、農道、林道、漁港関連道路 ○ 住民の交通手段の確保又は地域間交流のための鉄道施設及び鉄道車両並びに軌道施設及び軌道車両 ○ 電気通信に関する施設(※) ○ 交通の確保を図るために必要な市町村が管理する都道府県道 ○ 住民の交通の便に供するための自動車、渡船施設 ○ 除雪機械 	<p>教育文化施設</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 公民館その他の集会施設 ○ 公立の小学校、中学校及び義務教育学校並びに市町村立の幼稚園、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校 ○ 市町村立の専修学校、各種学校 ○ 図書館 ○ 地域文化の振興等を図るための施設 ○ 公立の小学校、中学校若しくは義務教育学校又は市町村立の中等教育学校の前期課程若しくは特別支援学校の学校給食施設・設備 ○ 公立の小学校、中学校若しくは義務教育学校又は市町村立の高等学校、中等教育学校若しくは特別支援学校の教職員住宅
<p>○ 集落再編整備 ○ 自然エネルギーを利用するための施設</p>	

※ 光ファイバ等の整備状況の地域間格差を是正するため、GIGAスクール構想や今年度第2次補正予算における「国庫補助の増額（約500億円）を踏まえ、可能な限り今年度中にその全国的な整備が進むよう「電気通信に関する施設」のうち光ファイバ等の整備に関する事業を「光ファイバ等整備特別分」と位置付け、他の事業に優先して同意等予定額を確保

（ソフト分）

地域医療の確保、住民の日常的な移動のための交通手段の確保、集落の維持及び活性化その他の住民が将来にわたり安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図るため特別に地方債を財源として行うことが必要と認められる事業（基金の積立てを含む）

過疎地域等自立活性化推進交付金

令和2年度予算額 6.9億円

○ 過疎地域等における喫緊の諸課題に対応するための事業を支援することにより、過疎地域等の自立活性化を推進。

① 過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業 (まち・ひと・しごと創生総合戦略:「小さな拠点」の形成関連事業)

- 基幹集落を中心に周辺の複数集落をひとつのまとまりとする「集落ネットワーク圏」(小さな拠点)において、「くらしを支える多様な主体の連携による生活支援の取組や「なりわい」を創出する活動を支援
※ Society5.0時代の技術を活用して、過疎地域等の集落の維持・活性化に資する取組を重点的に支援
- 令和2年度予算額 4.0億円 (令和元年度予算額4.0億円)
<1事業当たり2,000万円以内>

② 過疎地域等自立活性化推進事業

- 過疎地域における喫緊の諸課題に対応するための先進的で波及性のあるソフト事業を幅広く支援
 - ・生活の安心・安全確保対策(子育て支援を含む)
 - ・田園回帰の促進
 - ・地域文化伝承対策 等
- ※ Society5.0時代の技術を活用した先進的で波及性のあるソフト事業を重点的に支援
- 令和2年度予算額 1.4億円 (令和元年度予算額1.4億円)
<1事業当たり1,000万円以内>

③ 過疎地域集落再編整備事業

- 過疎地域の集落再編を図るために行う次の事業に対して補助
 - ・定住促進団地整備事業
 - ・定住促進空き家活用事業
 - ・集落等移転事業
 - ・季節居住団地整備事業
- 令和2年度予算額 0.9億円 (令和元年度予算額0.9億円)
<交付率1/2以内>

④ 過疎地域遊休施設再整備事業

- 過疎地域にある遊休施設を再活用して地域間交流及び地域振興を図るための施設の整備に対して補助
 - ・生産加工施設
 - ・農林漁業等体験施設
 - ・地域芸能・文化体験施設 等
- 令和2年度予算額 0.6億円 (令和元年度予算額0.6億円)
<交付率1/3以内>

地域おこし協力隊について

地域おこし協力隊とは

○ **制度概要**：都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱。隊員は、一定期間、地域に居住して、地域ブランドや地場産品の開発・販売・P R等の地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。

○ **実施主体**：地方公共団体

○ **活動期間**：概ね1年以上3年以下

○ **地方財政措置**：

◎ 地域おこし協力隊取組自治体に対し、概ね次に掲げる経費について、**特別交付税措置**

① 地域おこし協力隊員の活動に要する経費：隊員1人あたり440万円上限

(報償費等240万円〔※〕、その他の経費(活動旅費、作業道具等の消耗品費、関係者間の調整などに要する事務的な経費、定住に向けた研修等の経費など)200万円)
 ※ 隊員のスキルや地理的条件等を考慮した上で、最大290万円まで支給可能とするよう弾力化している(隊員1人当たり440万円の上限は変更しない。)

② 地域おこし協力隊員等の起業・事業承継に要する経費：最終年次又は任期終了翌年の起業する者又は事業を引き継ぐ者1人あたり100万円上限

③-1 地域おこし協力隊員の募集等に要する経費：1団体あたり200万円上限

③-2 「おためし地域おこし協力隊」に要する経費：1団体あたり100万円上限

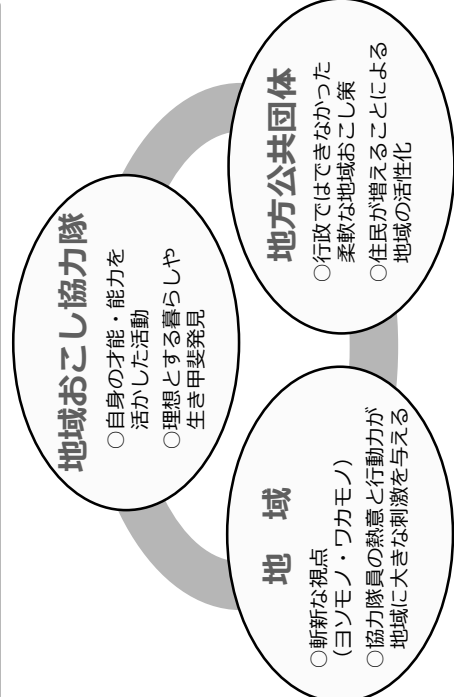
◎ 都道府県が実施する地域おこし協力隊等を対象とする研修等に関する経費について、普通交付税措置(平成28年度から)

◎ 都道府県が実施する地域おこし協力隊員OB・OGを活用した現役隊員向けのサポート体制の整備に要する経費について、普通交付税措置(令和2年度から)



地域おこし協力隊導入の効果

～地域おこし協力隊・地域・地方公共団体の「三方よし」の取組～



隊員数、取組団体数の推移

年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
隊員数	89人	257人	413人	617人	978人	1,629人 (1,511人)	2,799人 (2,625人)	4,090人 (3,978人)	4,976人 (4,830人)	5,530人 (5,359人)	5,503人 (5,349人)
団体数	31団体	90団体	147団体	207団体	318団体	444団体	673団体	886団体	997団体	1,061団体	1,071団体

※総務省の「地域おこし協力隊推進要綱」に基づく隊員数

※平成26年度以降の隊員数は、名称を統一した「田舎で働き隊(農林水産省)」の隊員数(26年度：118人、27年度：174人、28年度：112人、29年度：146人、30年度：171人、令和元年度：154人)と合わせたもの。カッコ内は、特別交付税算定ベース。

隊員の約4割は
女性

隊員の約7割が
20歳代と30歳代

任期終了後、約6割が
同じ地域に定住
※H31.3末調査時点

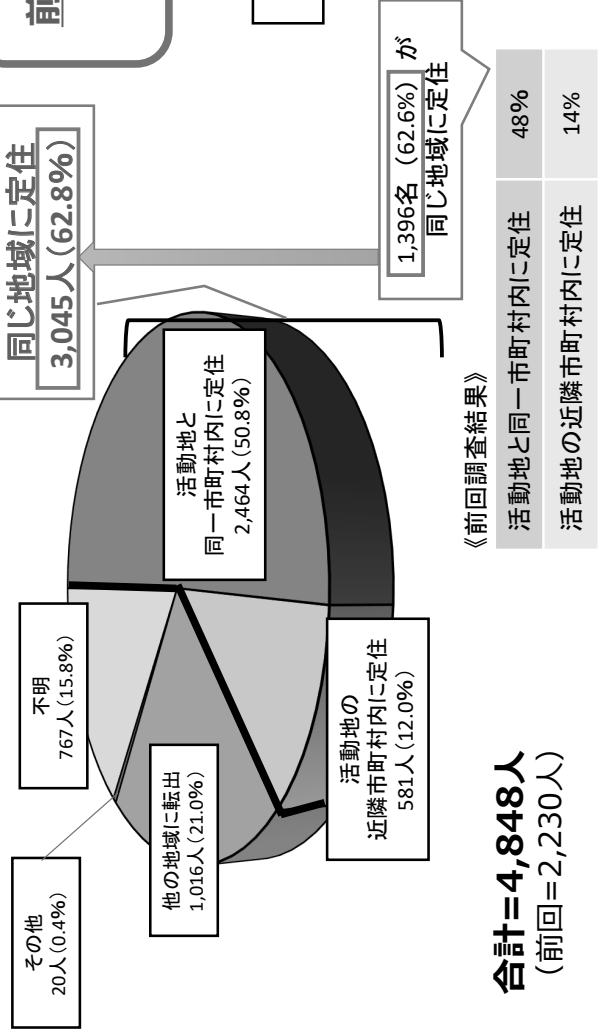
地域おこし協力隊の定住状況等に係る調査結果概要 (令和2年1月公表)

○平成31年3月31日までに任期終了した地域おこし協力隊員の定住状況等について調査を実施。
(前回調査：平成29年3月31日までに任期終了した隊員)

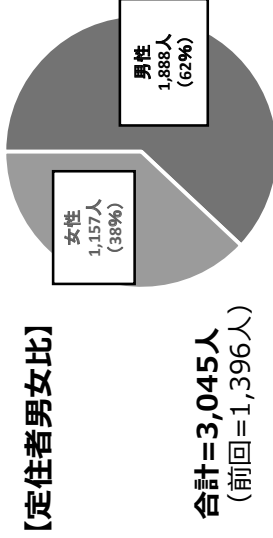
任期終了した隊員は累計で4,848人
前回調査 (2,230人) 比で約2.2倍に増加

- ・ 男性 3,037人 (63%)、女性 1,811人 (37%)
- ・ 20代 1,538人 (32%)、30代 1,958人 (40%)

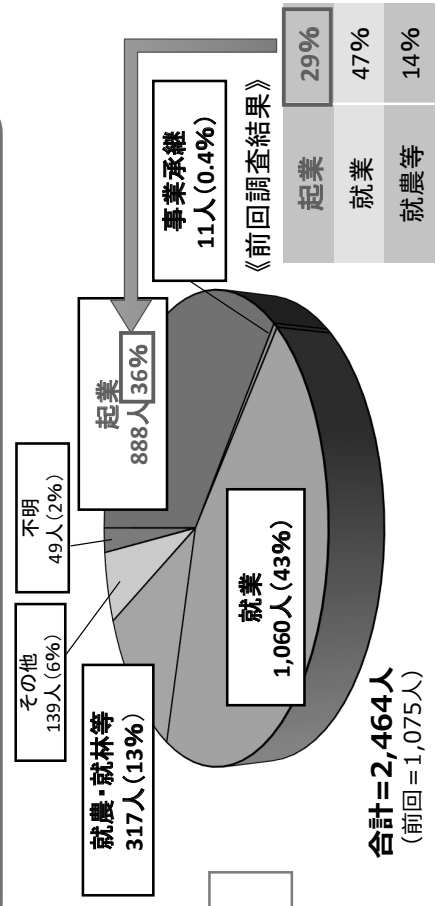
任期終了後、約6割の隊員が同じ地域に定住



定住者は計3,045人
前回調査 (1,396人) 比で約2.2倍に増加



同一市町村内に定住した者は2,464人
前回調査 (1,075人) 比で約2.3倍に増加
うち、3人に1人以上 (36%) が起業
前回調査時(29%)から増加



地域おこし協力隊～取組事例～①

北海道標茶町

(平成30年度:3名)

～趣味の乗馬がきっかけで隊員に。町で初の官民連携事業を企画～

【活動内容】

・標茶町には軍馬生産から続く乗用馬文化が根付いていることを活かし、「馬を核とした地域づくり」を目指す「道東ホースタウンプロジェクト」を立ち上げ。乗馬のみならず、馬の世話まで含めた地場体験ツアーを企画し、リピーターを作ることに取り組んでいる。

・都市圏の乗馬愛好者対象のマーケティング調査や、ホーストレッキングツアーの開催、ホーストレッキングコースの開発も行う。

【ポイント】

・道内旅行で体験した乗馬が趣味となり、以来道東の牧場施設等を訪れていたことが縁で隊員となった。
・本プロジェクトは町で初の官民連携事業。



宮城県丸森町

(平成30年度:23名)

【概要】

・衣類製品(赤パンツ)の企画・開発・販売事業

【活動内容】

・「消滅可能性都市・丸森町」で世界中の顧客に愛されるブランドを作ること目的に、商品を企画・開発・販売。

【ポイント】

・赤パンツ専門店「zamila(ザミラ)」を立ち上げ、活動が様々なメディアに取り上げられること等をとおして、自身と町の知名度を向上させた。
・以前は、衣類販売やマーケティングに関する仕事に就いており、その経験を活かして活動を展開している。



福島県西会津町

(平成30年度:9名)

【概要】

・伝統工芸の継承(出ヶ原和紙)

【活動内容】

・体験ワークショップの実施
・商品制作(委嘱状・感謝状・オーダー建具等)
・展示(喜多方プラザ・西会津国際芸術村)
・原料作り
・工房整備(アーティストインレジデンス)

【ポイント】

・アーティストインレジデンスはリトアニア美術学校の副校長を務めるアーティストも滞在し、和紙づくりを体験した。今後も国際的な交流・PRが期待できる。



茨城県高萩市

(平成30年度:6名)

【概要】

・食用ほおずきのブランド化を目的とした活動

【活動内容】

・栽培、収穫、加工、販売、PR活動を行うほか、農業を通じた地域活性化の取り組みを行っている。

【ポイント】

・食用ほおずきを主とした、農業的ライフスタイルを確立する事で、交流人口の拡大を図るなど、ほおずき産地化に向けて活動している。
・前職を退社後、就農を志し受講した国内外の研修で習得した知識や経験を活かして食用ほおずきのブランド化の牽引役として活躍している。



地域おこし協力隊～取組事例～②

埼玉県秩父市

(平成30年度:9名)

【概要】
 ・国の伝統工芸品にも指定されている
 絹織物「秩父銘仙」のPR活動

- 【活動内容】
- ・ちちぶ銘仙館での案内業務
 - ・小学校での銘仙に関する出前講座
 - ・銘仙卒業式(卒業生に銘仙着用)
 - ・新銘仙デザインコンテスト
 - ・秩父銘仙レンタル事業
 - ・秩父夜祭での絹市復活

【ポイント】
 ・秩父銘仙だけでなく、秩父地域全体の
 魅力を発信するために活動している。



新潟県上越市

(平成30年度:5名)

【概要】
 ・農業支援、地域振興支援、生活支援

- 【活動内容】
- ・就農に向けた農作業と米販売の補助
 - ・特産品の採取や栽培、加工、販売等の補助
 - ・地区出身者や都市住民との交流や地域おこし
 イベント等の開催支援
 - ・高齢者世帯への雪掘りなどの作業補助支援
 - ・集落の共同作業(草刈りなど)の手伝い

【ポイント】

- ・スペインのグラナダ出身。愛知県名古屋で3年間
 暮らした後、地域おこし協力隊へ応募し、家族で
 柿崎区に移住。退任後の就農を目指す。



愛知県東栄町

(平成30年度:3名)

【概要】
 ・地域資源を活用した誘客事業

- 【活動内容】
- ・美をテーマとした観光振興
 - ・協力隊の卒業生が立ち上げた手作りコスメティック体験事業「naori」の講師
 - ・地域素材を活用した手作り石鹸の商品化に向けた取り組み
 - ・ワラワーワークショップやエコイベントの開催

【ポイント】
 ・「美」を町の共通テーマとして発信し、集客する
 ことで地域が稼ぐ「ビューティーリズム」
 事業。

その主軸となる「naori」講師を務めることで、
 自立への第一歩とする。



滋賀県甲賀市

(平成30年度:4名)

【概要】
 ・信楽焼産地における住民の集いの場づくり

- 【活動内容】
- ・信楽地域の有志とともに、信楽まちなか芸術祭の
 コンセプト作成、企画立案に取り組む。
 - ・信楽のまちなかで、地元若者が集えるカフェ
 スペースを整備する。
 - ・上記スペースを利用した地域の日常を多様なもの
 にするイベントの企画立案に取り組む。

【ポイント】

- ・県内初の外国籍地域おこし協力隊員(中国出身)
- ・日本語・中国語・英語の3ヶ国語が堪能なトリリン
 ガル。



地域おこし協力隊～「任期終了後」の活躍事例～

島根県雲南市

40代女性 起業

【定住状況】

・任期終了した4名の隊員のうち3名が定住。(平成29年7月1日時点)

【活動内容】

・隊員期間中は小学校が閉校した地域に入り、地域づくりに携わっていた。
 ・任期終了後、農地付き空家を購入し、農村民泊やカフェをしている。また、専門性を活かして、小中学校でのダンス授業や、幅広い世代への体づくりのワークショップや施術を行なうほか、ラジオで地域情報番組のパーソナリティをする等している。

【ポイント】

・元々の専門である体づくりの仕事と、協力隊の経験を活かした仕事を組み合わせた「多業」。



新潟県十日町市

30代男性 就業

【定住状況】

・任期終了した40名の隊員のうち27名が定住。(平成29年8月1日時点)

【活動内容】

・任期活動中は、地場農産物の地産地消活動、出張販売、春夏秋冬体験アクティビティの開発、支援世帯の病院送迎、除雪などに取り組んでいた。

・任期終了後は、里山体験に特化した法人を立ち上げ、自身もガイドとして、様々な里山体験ツアーなどを開催している。

【ポイント】

・任期中の隊員活動の実績を元にした、活動地での起業と就業。



岡山県美作市

20代男性 就農

【定住状況】

・任期終了した17名の隊員のうち12名が定住。(平成29年6月1日時点)

【活動内容】

・任期期間中は、棚田の再生が活動の軸となり、再生した棚田で農業や、周辺の森林資源を活かした林業を行う。また古民家を利用したコミュニティスペースづくりやイベントへの参加・協力・企画などの活動に取り組んでいた。

・任期終了後は、再生した棚田での米作りやにんにくなど農作物の生産を行いながら広葉樹施肥、シイタケの原木栽培なども行っている。

【ポイント】

・過疎化で衰退してしまった棚田での米作りを再生した。



鳥取県八頭町

20代女性 就業

【定住状況】

・任期終了した6名の隊員のうち4名が定住。(平成29年7月1日時点)

【活動内容】

・任期活動中は、志子部集落で特産品の開発や交流体験事業の企画提案を行っていた。また地域の特産品を売る販路づくりなどを通して、地域のPR活動を行っていた。

・任期終了後はこの研究機関にコーディネーターとして就業。広報や企画の仕事を通じてキノコの美味しさや魅力を発信している。

【ポイント】

・地元の人から信頼を得て、活動を行っていた地で就業。



集落支援員について

集落支援員

地域の実情に詳しく、集落対策の推進に関してノウハウ・知見を有した人材が、地方自治体からの委嘱を受け、市町村職員と連携し、集落への「目配り」として集落の巡回、状況把握等を実施

※令和元年度 専任の「集落支援員」の設置数 1,741人 ※自治会長などとの兼務の集落支援員の設置数 3,320人

<専任の「集落支援員」の属性> 約4割が60代、約5割が元会社員・元公務員・元教員、約9割がそれまで暮らしていた地方自治体で活動

・地方自治体⇒集落支援員を設置し、集落支援員と協力して集落対策を推進(下記フロー図のとおり)

・総務省 ⇒地方自治体に対して、財政措置(特別交付税措置)、情報提供等を実施

<特別交付税措置>

○措置額 … 集落支援員1人あたりの上限額 ・専任※ 395万円 ・兼任 40万円

※兼任の場合であって、集落支援員としての活動に従事する時間が週当たり15時間30分以上である旨を設置要綱等に規定して委嘱する場合を含む。

- 対象経費…
- ①集落支援員の設置に要する経費、②集落点検の実施に要する経費
 - ③集落における話し合いの実施に要する経費
 - ④地域の実情に応じた集落の維持・活性化対策に要する経費

地方自治体の取組のフロー

■集落支援員の設置

- ・地方自治体の委嘱により「**集落支援員**」を設置。
- ・集落支援員は、市町村職員とも連携し、集落への「目配り」として、集落の巡回、状況把握等を行う。

集落支援員による支援

■集落点検の実施

- ・集落支援員は、市町村職員と協力し、住民とともに、**集落点検**を実施

■集落のあり方についての話し合い

- ・住民と住民、住民と市町村との間で集落の現状、課題、あるべき姿等についての**話し合い**を促進(「集落点検」の結果を活用)

《集落点検や話し合いを通じ必要と認められる施策》

- ①デマンド交通システムなど地域交通の確保、②都市から地方への移住・交流の推進、③特産品を生かした地域おこし、④農山漁村教育交流、⑤高齢者見守りサービスの実施、⑥伝統文化継承、⑦集落の自主的活動への支援 等

総務省

支援

集落支援員～取組事例～①

青森県中泊町

なか泊まち

平成30年度：2名(うち専任2名)

【概要】

2人でチームを組み、地域自治組織とともに活動しており、地域住民との相談や話し合いにより地域の魅力や課題を見つけ、空き家・空き地の解消や高齢者の見守り等に取り組んでいる。

【活動内容】

空き家や人口・世帯調査のほか、地域の課題を把握するためのアンケート調査、高齢者の見守り、空き家・空き地情報のデータベース化を実施。さらに地区懇談会を1か月に1度のペースで開催している。

【ポイント】

2名とも地元出身者で地域住民の信頼も厚いことが、集落点検等を円滑に実施できる要因となっている。



(地区懇談会)

山形県金山町

かねやまち

平成30年度：2名(うち専任2名)

【概要】

5地区からなる西郷地域に2名を配置し、高齢者の見守り活動や、地域のにぎわい創出等に取り組んでいる。

【活動内容】

独居高齢者や高齢者世帯を訪問し、近況や生活上の課題の聞き取りを実施。また、地域新聞を隔月で発行し、全戸配布しているほか、廃校を活用して、子どもの遊び場や地域の話し合いの場を創出している。

【ポイント】

地域住民が集まる場に積極的に参加することで、より多くの意見や要望を聞き取り、地域のニーズを分析し、共有している。



(西郷地域のワークショップ)

宮城県気仙沼市

けせんぬまし

平成30年度：5名(うち専任4名)

【概要】

市内5か所のまちづくり協議会に1名ずつを配置。まちづくりに係る課題の調査のほか、課題解決へ向けた取組等を支援している。

【活動内容】

地域点検や、住民同士の話し合いに向けた環境整備、被災者との交流行事、まち歩き、地域のお祭り、子供の体験学習といったまちづくり活動の企画等を行っている。

【ポイント】

まちづくり協議会を活動拠点とし、若者を含む地域住民を上手に巻き込むことで、持続的な活動につなげている。



(漁業体験学習)

福井県福井市

ふくいし

平成30年度：2名(うち専任2名)

【概要】

人口減少や高齢化が進む中山間地域に2名を配置。地域の状況を把握し、課題の解決や活性化に向けた取組を展開している。

【活動内容】

高齢者世帯の訪問・声かけ、住民や自治会からの相談対応、市や住民が行う行事等の運営支援、農作物の栽培及び販売サポート等を実施している。

【ポイント】

地域の実情に詳しい集落支援員が、集落点検にとどまらず、地域住民による組織や県内外の大学等と連携しながら、地域の活性化に向けた諸活動に携わっている。



(大学生が地域行事に参画)

※人数は各市町村における集落支援員の総数(特交ベース)であり、上記の取組以外の活動を行っている集落支援員も含まれる。

集落支援員～取組事例～②

京都府京丹後市

平成30年度：15名(うち専任14名)

【概要】

旧町単位で「地域づくり支援員」を配置し、持続可能な地域づくりに向けた取組の支援を行っている。

【活動内容】

小規模集落の見回り、空き家調査のほか、地域の観光資源や歴史・文化を生かしたイベントの開催支援、コミュニティビジネス(配食サービス等)の起業支援等を実施している。

【ポイント】

持続可能な地域づくりに向けて、地域にぎわいを創出する取組の支援や、地域の課題解決のための自治会との協議等に取組んでいる。



(ガイドブック改定のワークショップ)

広島県三次市

平成30年度：11名(うち専任4名)

【概要】

住民自治組織からの推薦を受けた集落支援員が、当該組織が所在する区域を範囲として活動している。

【活動内容】

集落点検、集落のあり方についての話し合いのほか、空き家の点検や空き家バンク登録の推進に向けた活動、地域まちづくりビジョンの策定等に参画している。

【ポイント】

集落支援員が収集した地域の情報をまちづくりに活用している。特に人口減少や少子高齢化が進む地域では、定住に向けた情報発信や移住者へのフォローも実施している。



(定住希望者への物件案内)

奈良県宇陀市

平成30年度：5名(うち専任5名)

【概要】

集落支援員を旧町村単位に配置し、地域自治組織であるまちづくり協議会と連携しながら、高齢者の見守りや防犯・防災への対策等を行っている。

【活動内容】

集落の巡回・点検、聞き取り調査のほか、今後の集落のあり方についての話し合いや地域おこし活動等を実施している。

【ポイント】

集落支援員を「地域づくりアドバイザー」と呼び、「地域の元気づくりは人づくりから」をモットーに地域住民の活動を支援している。



(まちづくり協議会懇談会)

宮崎県串間市

平成30年度：1名(うち専任1名)

【概要】

地域住民自らが地域の課題を解決するための仕組みづくり(地域連携組織の設立支援)に向けた活動を行っている。

【活動内容】

地域の課題を把握するための調査や、小学生を対象とした意見交換会を実施。また、住民同士の話し合いを推進するため集落支援員が講師となり、地域運営組織の必要性等の講演を行っている。

【ポイント】

地域の課題解決の基礎となる「話し合い」の演習をはじめ、集落支援員が自ら講演を行うことで、地域住民の「気づき」の機会を創出することに寄与している。



(講演の様子)

※人数は各市町村における集落支援員の総数(特交ベース)であり、上記の取組以外の活動を行っている集落支援員も含まれる。

集落支援員の活躍先

○支援員数 専任1,741名、兼任3,320名 352自治体(4府県348市町村) (令和元年度特交ベース)

※表は専任のみ (A)

都道府県名	市町村名	支援員数	都道府県名	市町村名	支援員数	都道府県名	市町村名	支援員数	都道府県名	市町村名	支援員数		
北海道 (50)	深川市	1	長野県 (40)	上北山村	4	山口県 (38)	宇都市	5	佐賀県 (13)	唐津市	7		
	乙部町	1		麻績村	1		山口市	1		多久市	1	多久市	1
	蘭越町	1		南佐治町	3		岩手町	5		泰山町	3	泰山町	3
	二七三町	6		白馬村	5		長門市	17		上峰町	2	上峰町	2
	龍丹町	2		小谷村	8		高野町	2		佐世保市	1	佐世保市	1
	北条町	3		高山村	10		那智大島町	5		平戸市	8	平戸市	8
	愛別町	1		飯綱町	2		那智勝浦町	3		対馬市	1	対馬市	1
	南富良野町	12		木島平村	3		鳥取市	3		高島市	12	高島市	12
	東川町	2		中津川市	7		倉吉市	5		美馬市	7	美馬市	7
	南富良野町	3		瑞浪市	12		岩美町	1		三好市	18	高森町	1
茨城県 (28)	占冠村	2	瑞浪市	8	智頭町	9	上峰町	1	高森町	1			
	和歌町	1	恵那市	7	八頭町	17	神山村	3	高森町	1			
	下川町	1	飛騨市	1	三朝町	6	那賀町	1	山都町	1			
	美濃町	1	飛騨市	1	飛騨市	6	那賀町	1	山都町	1			
	音盛子府村	1	白川町	5	琴浦町	3	春岐町	3	日田市	12			
	渡辺町	1	静岡市	8	大井町	5	まんのう町	3	日田市	12			
	磯延町	1	浜松市	4	南郷町	18	愛媛県★	1	佐伯市	11			
	白老町	5	小笠原市	4	相富町	3	高知県	2	臼杵市	12			
	厚真町	3	十戸町	12	日南町	7	久万高原町	1	津久高市	1			
	中泊町	2	尾附市	11	久万高原町	2	室戸市	1	津久高市	1			
青森県 (4)	大船渡市	4	尾附市	4	江府町	1	室戸市	1	豊後高田市	3			
	久慈市	3	尾附市	1	出雲市	3	安芸市	2	豊後高田市	3			
	花巻市	1	尾附市	25	森田市	24	須崎市	1	宮崎市	4			
	八戸市	5	いなべ市	136	大田市	1	須崎市	1	宮崎市	4			
	三好市	1	木曾町	1	安来市	2	土佐清水市	1	串間市	1			
	白糠町	6	南伊勢町	1	奥出雲町	6	四万十市	1	串間市	1			
	むつ市	2	紀北町	6	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	中泊町	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	大船渡市	4	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
岩手県 (36)	花巻市	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	花巻市	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	花巻市	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	花巻市	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	花巻市	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	久慈市	3	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
宮城県 (28)	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	仙台市	21	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
秋田県 (10)	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	秋田県★	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
山形県 (24)	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	山形県	2	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
福島県 (55)	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	福島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
宮城県 (17)	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	宮城県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
鹿児島県 (117)	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	鹿児島県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
沖縄県 (16)	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
	沖縄県	1	南伊勢町	1	紀北町	6	香南市	1	えびの市	5			
合計	1,741												

【参考】 表中の★は、県が実施

平成30年度 専任1,391名、兼任3,497名(3府県328市町村) 平成26年度 専任858名、兼任3,850名(5府県216市町村) 平成22年度 専任500名、兼任約3,600名(13府県134市町村)

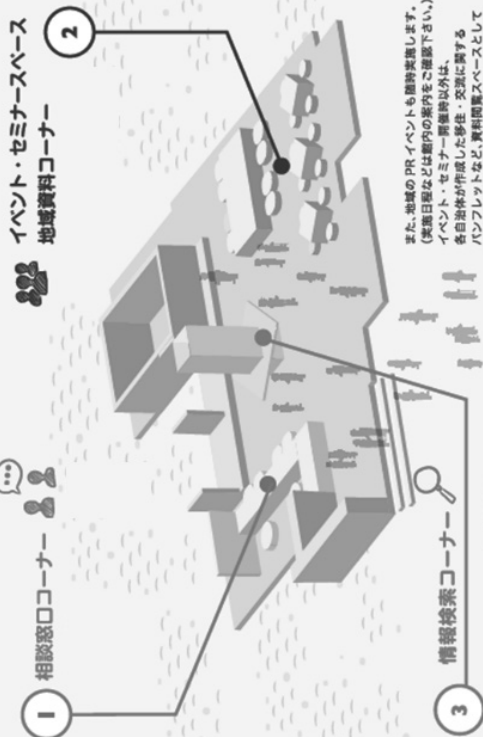
平成29年度 専任1,195名、兼任3,320名(3府県300市町村) 平成25年度 専任741名、兼任3,764名(7府県189市町村) 平成21年度 専任449名、兼任約3,500名(9府県113市町村)

平成28年度 専任1,158名、兼任3,276名(4府県277市町村) 平成24年度 専任694名、兼任3,505名(6府県186市町村) 平成20年度 専任199名、兼任約2,000名(11府県66市町村)

平成27年度 専任994名、兼任3,096名(3府県238市町村) 平成23年度 専任597名、兼任約3,700名(9府県149市町村)

移住・交流情報ガーデン

- 居住・就労・生活支援等に係る情報提供や相談についてワンストップで対応する窓口「移住・交流情報ガーデン」を開設。
- 地方自治体や関係省庁とも連携し、総合的な情報提供を実施。
- 地方自治体等による移住相談会、地域おこし協力隊の募集説明会、関係人口創出イベント等の場として利用可能。



【①相談窓口コーナー(移住、就農、しごと)】

- ・ 地方への移住・交流に係る一般的な相談、問合せに相談員が対応。
- ・ しごと情報や就農支援情報などは、専門の相談員が対応。

※国の各府省とも連携

- ・ 厚生労働省(しごと情報) ・ 農林水産省(就農支援情報)

【②イベント・セミナースペース、地域資料コーナー】

- ・ 各地方自治体が作成した移住・交流に関するパンフレットを配架。
- ・ 地方自治体等による移住相談会、フェア等の場として利用可能。

【③情報検索コーナー】

- ・ 情報サイトを利用して、自由に地方への移住・交流に関する情報を検索できるように、専用パソコンを設置。



(移住フェアの様様)



【開館時間】(平日)11:00-21:00

(土日祝)11:00-18:00

【休館日】月曜(月曜が祝日の場合は翌営業日)、年末年始

【所在地】東京都中央区京橋1-1-6 越前屋ビル

【アクセス】JR/東京駅(八重洲中央口)より徒歩4分

地下鉄/東京メトロ銀座線 京橋駅より徒歩5分

東京メトロ銀座線・東西線 都営浅草線 日本橋駅より徒歩5分

特定地域づくり事業協同組合制度の概要

根拠法：地域人口の急減に対処するための特定地域づくり事業の推進に関する法律（令和2年6月4日施行）

人口急減地域の課題

- ・事業者単位で見ると年間を通じた仕事がない
 - ・安定的な雇用環境、一定の給与水準を確保できない
- ⇒人口流出の要因、UIJターンの障害

特定地域づくり事業協同組合制度

- ・地域の仕事を組み合わせて年間を通じた仕事を創出
 - ・組合で職員を雇用し事業者に派遣
(安定的な雇用環境、一定の給与水準を確保)
- ⇒地域の担い手を確保

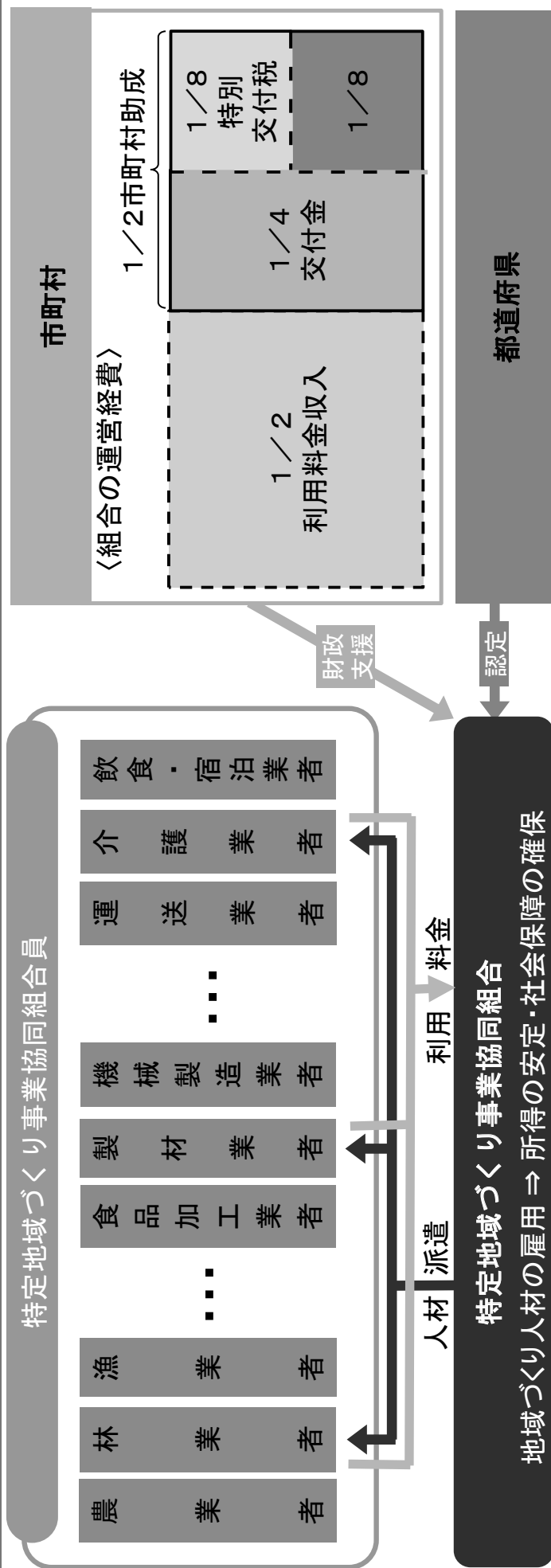
人口急減法の概要

対象：人口規模・人口密度・人口密度・事業所数等に照らし、人材確保に特に支援が必要な地区として知事が判断

※過疎地域に限らない

認定手続：事業協同組合の申請に基づき、都道府県知事が認定（10年更新制）

特例措置：労働者派遣法に基づき労働者派遣事業（無期雇用職員に限る）を届出で実施可能



新たな過疎対策に向けて～過疎地域の持続的な発展の実現～（要旨）

（令和2年4月17日 過疎問題懇談会（座長：宮口侗迪早稻田大学名誉教授）提言）

1 検討の経緯

- 現行の過疎法の期限（令和3年3月末）を踏まえ、平成29年度から、19回の会合と8回の現地視察を実施。
- 新たな過疎対策の理念、目標、施策の視点、対象地域のあり方、支援制度のあり方等について提言。

2 過疎対策の成果と課題（例示）

- これまでの過疎対策は、産業の振興、交通・情報通信等の施設整備、地域医療・教育の機会の確保等に一定の成果。
 - 一方、人口減少の加速、公共交通手段の確保、医療・福祉分野の担い手の確保、集落の維持・活性化等が課題。
- < 現在の過疎地域 > 817市町村（全市町村の48%）、人口は全国比9%、面積は全国比60%

3 過疎地域を取り巻き巻く環境の変化

(1) 厳しい環境の見直し

- ① 人口減少社会の到来、東京一極集中と過疎地域の人口減少の加速
- ② 担い手不足の深刻化
- ③ 公共施設等の老朽化・統廃合等
- ④ 農地、森林、住まい等の管理

(2) 過疎地域の課題の克服に向けた新たな潮流

① 過疎対策の理念や過疎地域の価値・役割の背景となる新たな動き

- ・SDGsの理念の広がり（SDGsの持続可能性、多様性、包摂性等の考え方は、過疎対策の理論的基礎に）
- ・農地・森林に関する新たな法律の制定（農業の有する多面的機能の発揮の促進に関する法律等）

② 過疎地域の課題を解決するための新たな取組

- ・過疎地域の特性を生かした学校教育の展開（小規模校での取組、高等学校の魅力化 等）
- ・新しい人の流れと人と地域のつながりの創出（田園回帰の潮流、関係人口の創出 等）
- ・しごとづくりの新たな展開（サテライトオフィス、農林漁業と観光業などの多業化 等）
- ・集落づくりのための新しい組織とネットワーク（地域運営組織や集落ネットワーク圏の形成）
- ・Society5.0の可能性（過疎地域の条件不利性の改善への期待）

③ 過疎対策を推進するための新たな手法

- ・目標設定とフォローアップ（人口目標や地域の戦略の設定を通じ、社会増を実現した市町村の存在）
- ・市町村間の広域連携と都道府県による補完（これらの取組を進める地域の存在）
- ・規制の見直し（貨客混載制度の創設など、過疎地域の実情を踏まえた規制の見直し）

4 今後の過疎対策のあり方・方向性

(1) 過疎地域の価値・役割と過疎対策の必要性

- 食料・水・エネルギーの供給、心のふるさと、多様な生態系保全などのほか、
・「先進的な少数社会(多自然型低密度居住地域)」として国土の価値を発揮
- ・食、生活、芸能、文化などの多様な価値を発展させていく
- ・都市部の被災の低下、災害リスクへの備えの役割
などの価値・役割が存在。

→ 現行過疎法の期限(令和3年3月末)以降も、引き続き過疎対策を講じていくための制度が必要。

(2) 新たな過疎対策の理念・目標・施策の視点

① 理念

人口減少社会を迎える中、持続可能な地域社会を形成していくことが重要。

過疎地域の持続的発展

SDGs(持続可能な開発目標)の考え方は、過疎地域の価値・役割と親和性が極めて高い。過疎対策としては「発展」の言葉がふさわしい。

② 目標

地域資源を生かした内発的発展

条件不利性の改善

住民の安心な暮らしの確保

豊かな個性の伸長

③ 施策の視点

地域、住民、学校の連携による人材の育成
(地域リーダー育成、地域住民の意識改革、高校魅力化等)

人の流れと人と地域のつながりの創出
(移住・定住支援、地域おこし協力隊、関係人口等)

働く場の創出
(地域資源を活用したスタートビジネス、情報サービス育成、仕事と地域の資源、人材を結んだ新たな価値の創出等)

革新的な技術の活用
(スマート農林水産業、サテライトオフィス、遠隔医療、遠隔教育等)

地域運営組織と集落ネットワーク圏(小さな拠点)の推進
(地域運営組織、集落ネットワーク圏、サポート人材配置等)

市町村間の広域連携と都道府県による補完
(定住自立圏等、都道府県による職員支援・代行整備等)

再生可能エネルギーの活用
(地域内のエネルギーや経済の循環(エネルギーの地産地消)等)

目標設定とフォローアップ
(市町村よりも小さな単位での目標設定、フォローアップ等)

4 今後の過疎対策のあり方・方向性(つづき)

(3) 過疎対策の対象地域のあり方

- ・これまでの過疎対策の担い手や過疎地域の単位から、新たな過疎対策において、過疎地域は、市町村を単位とすることが適当。
(過疎対策を実施する上では、平成の合併前の旧市町村や小学校区など市町村よりも小さな単位で施策を展開することも有効)
- ・過疎地域の要件は、現行過疎法と同様に、人口要件及び財政力要件を設けることが適当。
(人口減少率の判定期間の起算点を見直す必要性、人口密度を用いることの賛否、要件に該当しなくなる市町村による経過的な過疎対策の実施の必要性についての意見あり)
- ・平成の合併による合併市町村について、財政力に留意しつつ、人口減少が著しい旧市町村単位での取組を支援する仕組みも検討する必要。

(4) 支援制度のあり方

① 市町村計画

- ・将来人口の推計、目標の設定、フォローアップなど市町村計画の内容を充実・強化し、実質性を向上させることが重要。
- ・市町村より小さな単位での目標設定等も有効。

② 国庫補助等

- ・施策の視点(4(2)③)に沿って、以下の各分野の施策を推進することが重要。施策の推進に当たっては、関係者間の連携や優良事例の情報共有を促す取組も重要。
- ・地域、住民、学校の連携による人材の育成(地域づくり担い手育成、高校魅力化、遠隔教育等)
- ・人の流れと人と地域のつながりの創出(地域おこし協力隊制度や特定地域づくり事業協同組合制度の活用、関係人口創出・拡大等)
- ・集落の維持・活性化(集落支援員、集落ネットワーク形成等)
- ・情報通信基盤の整備(5G基地局や光ファイバ等の整備)
- ・産業振興(地域資源を生かした仕事づくり、革新的技術の活用等)
- ・医療の確保(医療人材の確保、遠隔医療等)
- ・公共交通の確保(モニタリングやデマンドバス運行支援等)

③ 過疎対策事業債

- ・ハード・ソフト両面に活用できる過疎対策の中心的な支援制度。
- ・市町村計画の目標達成に資することを明確化することが重要。
- ・ハード事業は、公共施設総合管理計画等に基づき、適切なストックマネジメントの下に推進していく必要。
- ・ソフト事業は、医療・交通等の体制構築や人材育成など中長期的な地域の資産・財産となり得る事業への充実が望ましい。

④ 規制の見直し

- ・過疎地域の実態に即した見直しを促していくことが重要。

⑤ 税制措置

- ・若者の働く場の確保、地域産業の振興といった視点を踏まえ、税制措置を充実することが重要。

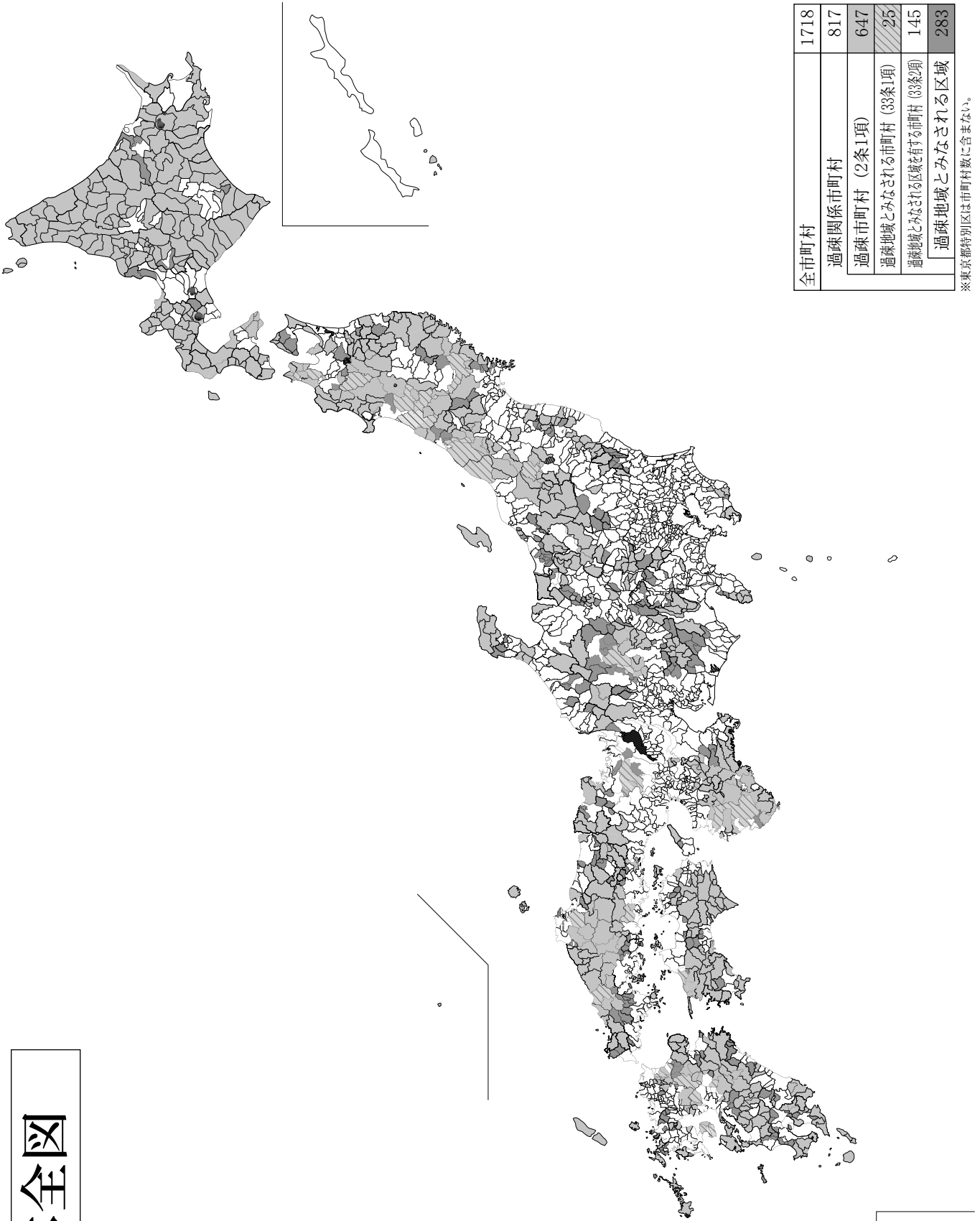
⑥ 金融措置

- ・日本政策金融公庫等による低利融資を充実することが重要。

⑦ 市町村間の広域連携と都道府県による補完

- ・定住自立圏等の市町村間の広域連携と、代行制度等の都道府県による補完を、地域の実情に応じて対応することが重要。
(地方制度調査会の議論を踏まえて検討)

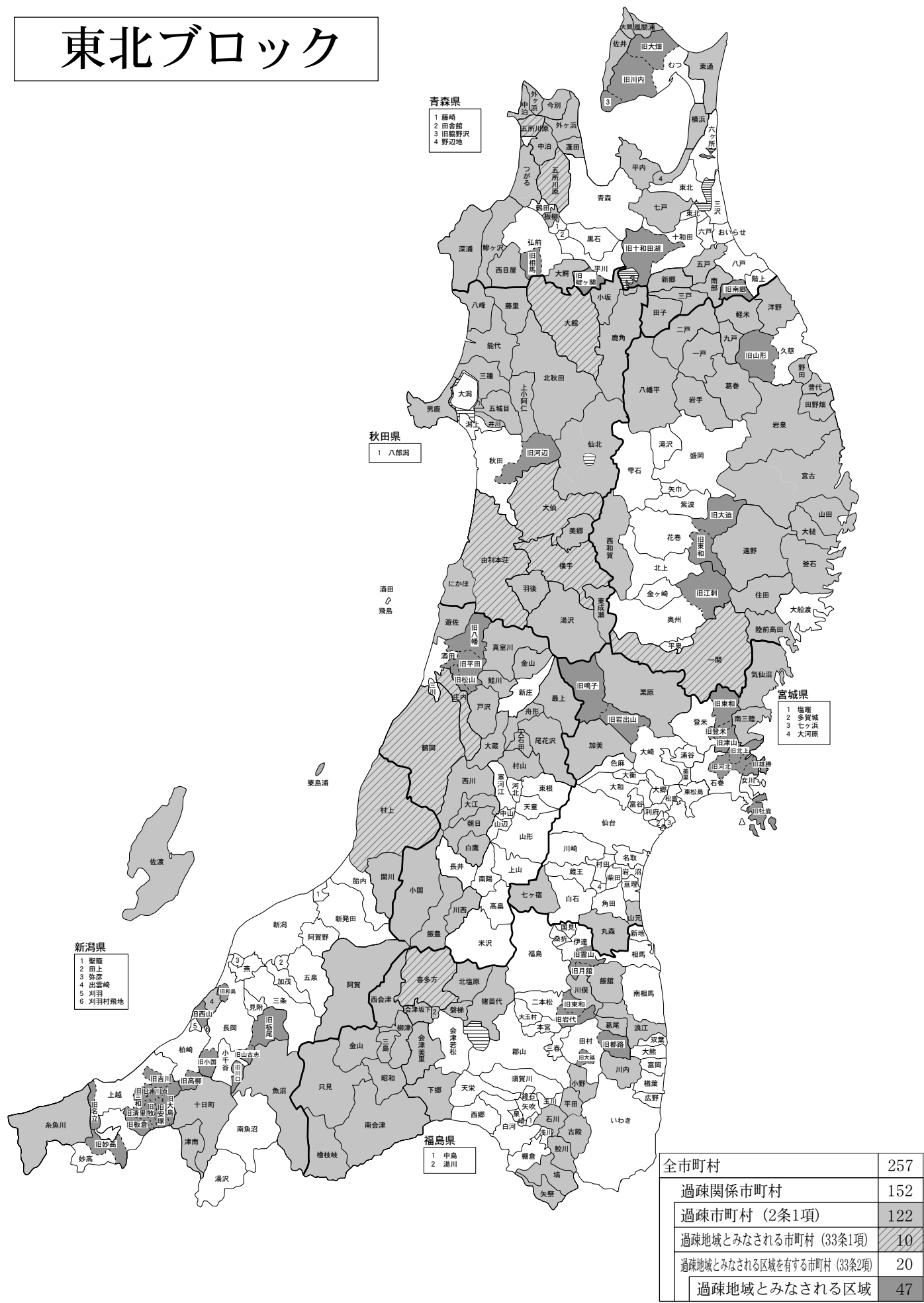
日本全国



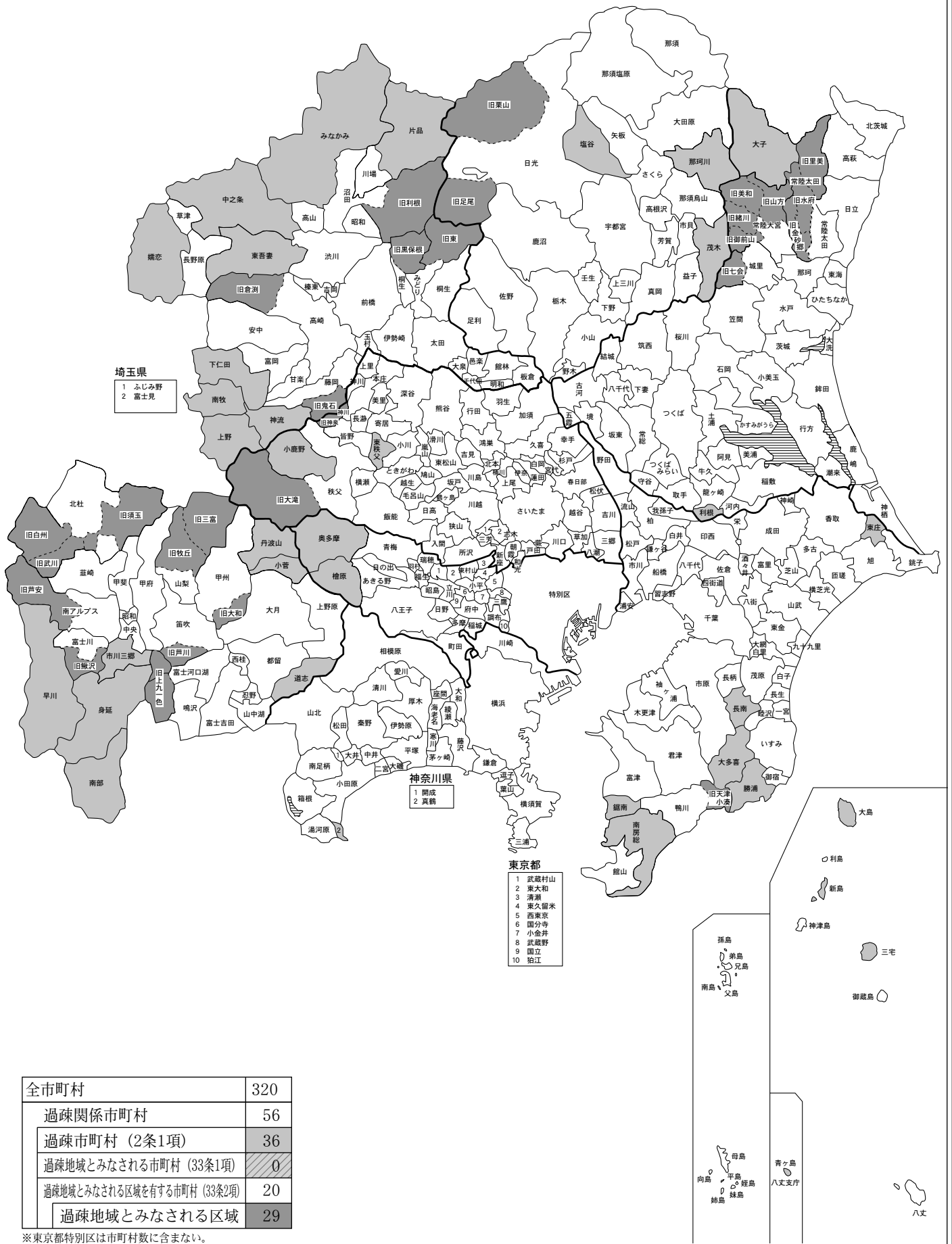
全市町村	1718
過疎関係市町村	817
過疎市町村 (2条1項)	647
過疎地域とみなされる市町村 (33条1項)	25
過疎地域とみなされる区域を有する市町村 (33条2項)	145
過疎地域とみなされる区域	283

※東京都特別区は市町村数に含まない。

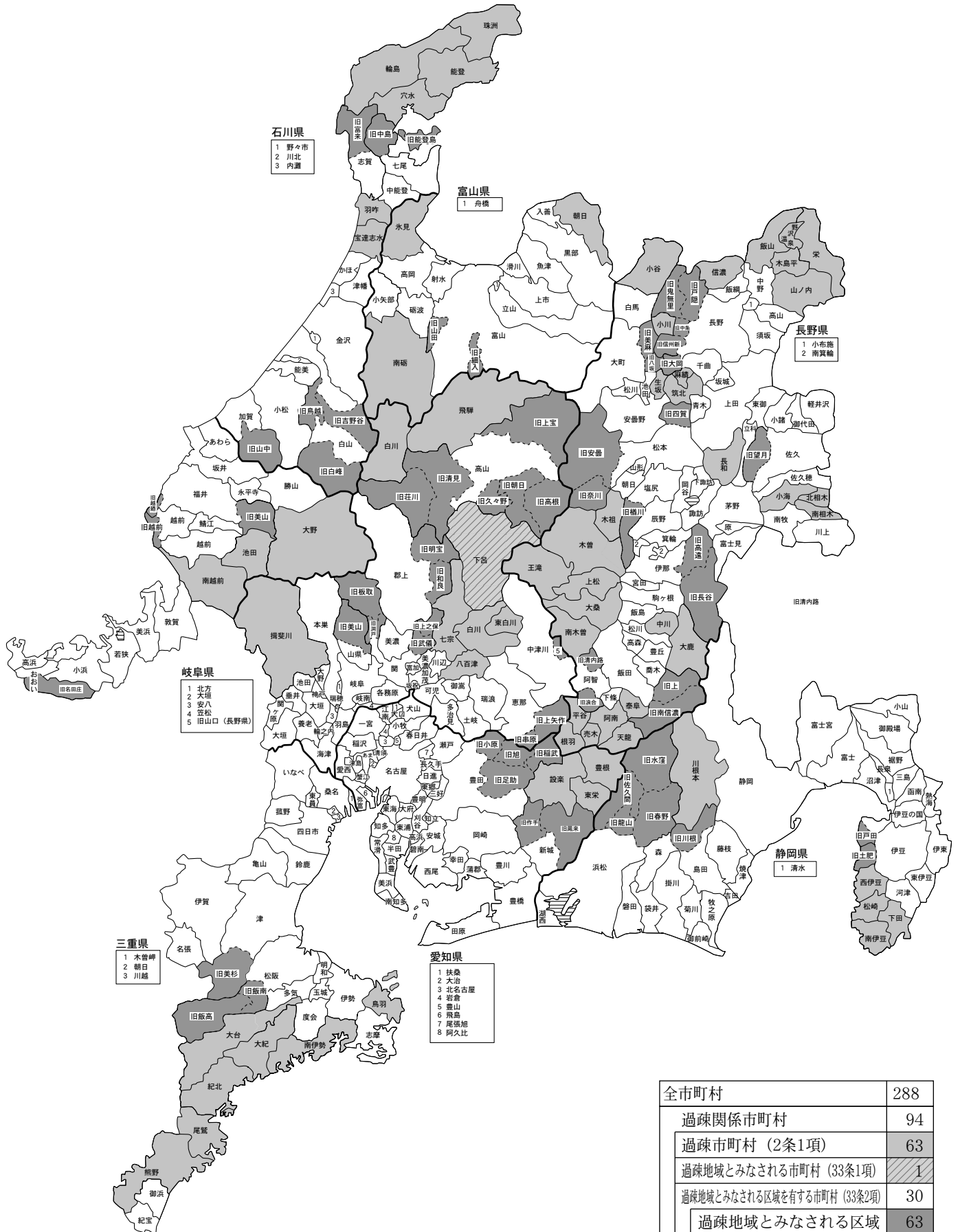
東北ブロック



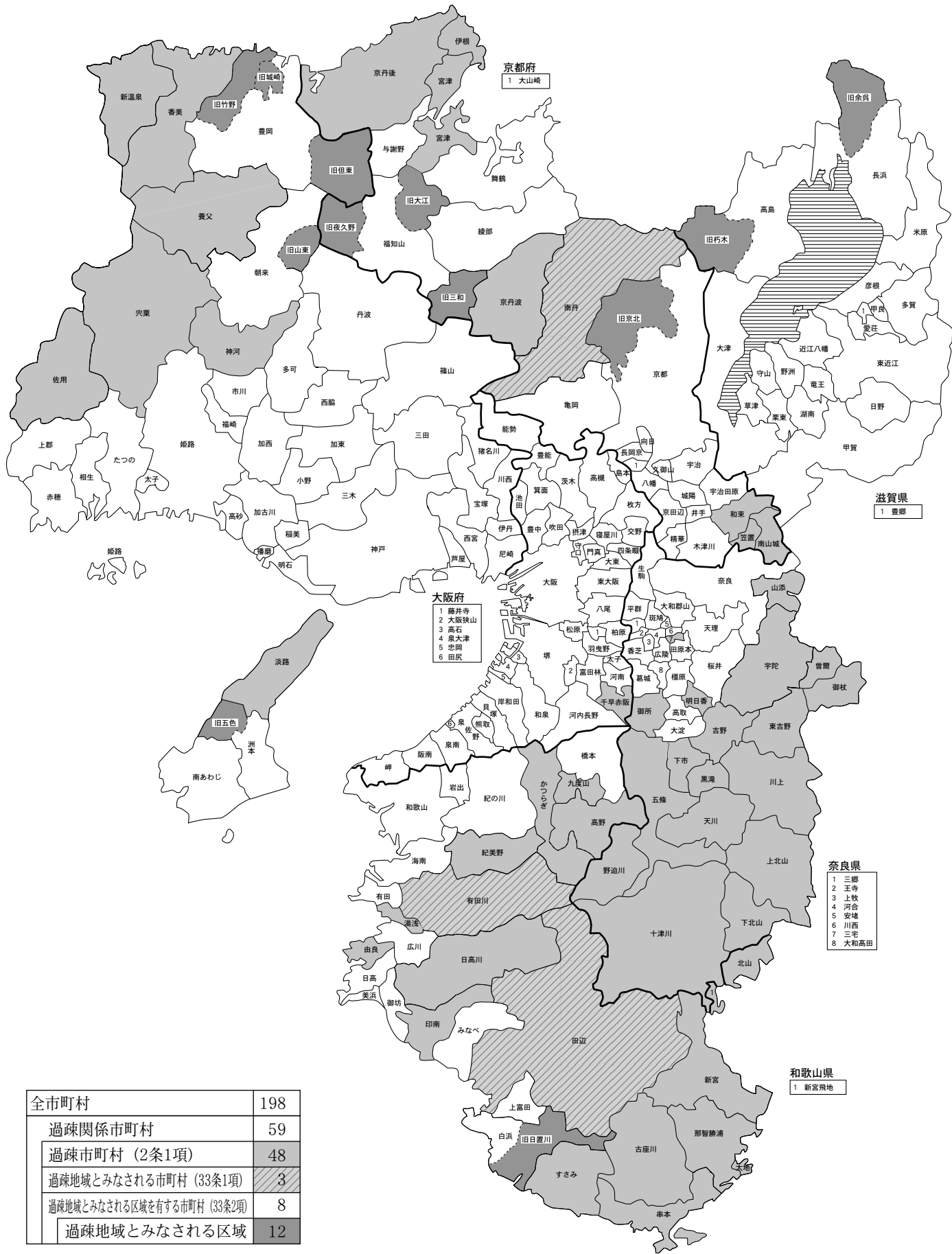
関東ブロック



東海・北陸ブロック



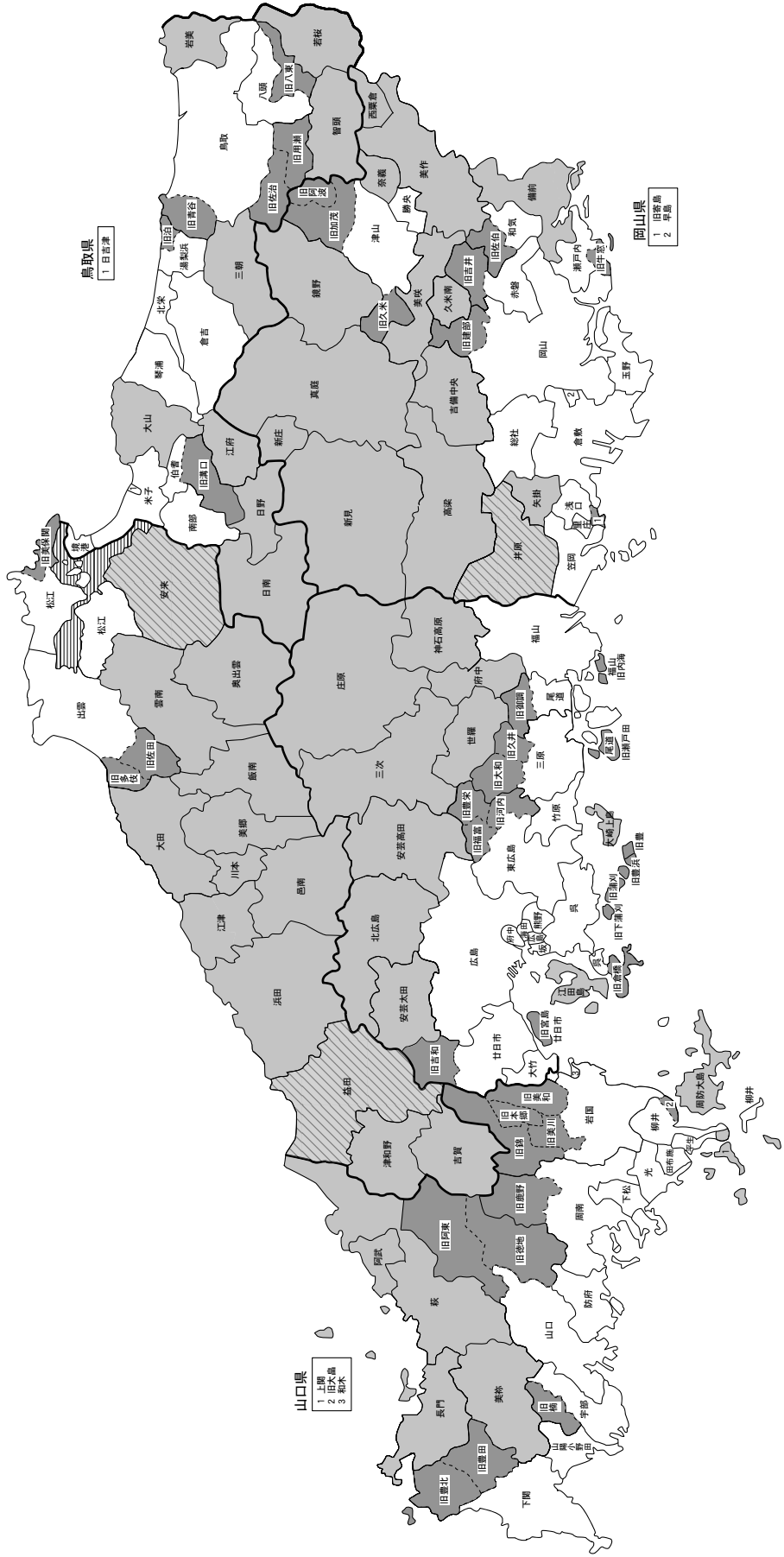
近畿ブロック



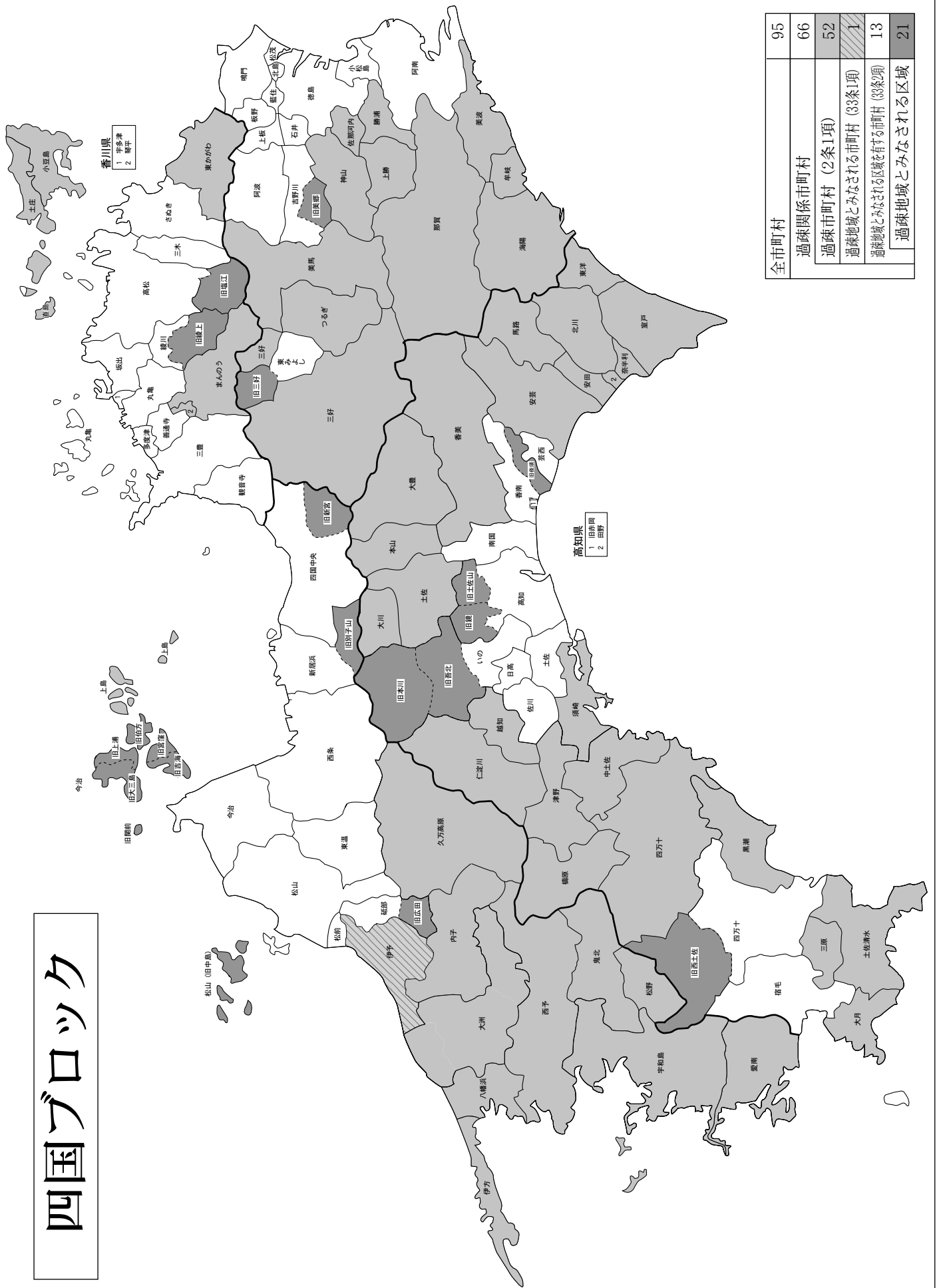
全市町村	198
過疎関係市町村	59
過疎市町村 (2条1項)	48
過疎地域とみなされる市町村 (33条1項)	3
過疎地域とみなされる区域を有する市町村 (33条2項)	8
過疎地域とみなされる区域	12

中国ブロック

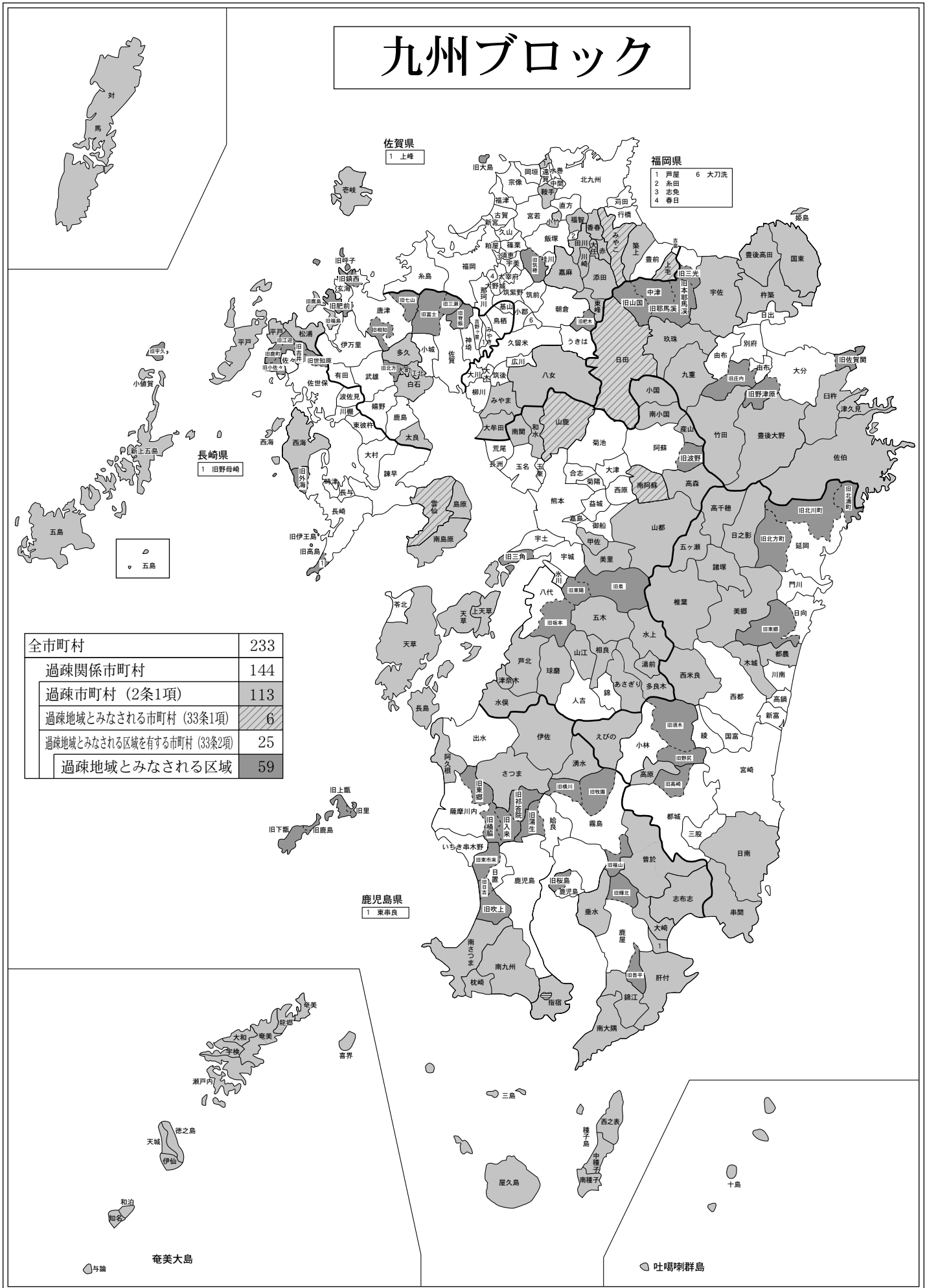
全市町村	107
過疎関係市町村	79
過疎市町村 (2条1項)	52
過疎地域とみなされる市町村 (33条1項)	3
過疎地域とみなされる区域を有する市町村 (33条2項)	24
過疎地域とみなされる区域	43



四国ブロック



九州ブロック



佐賀県
1 上峰

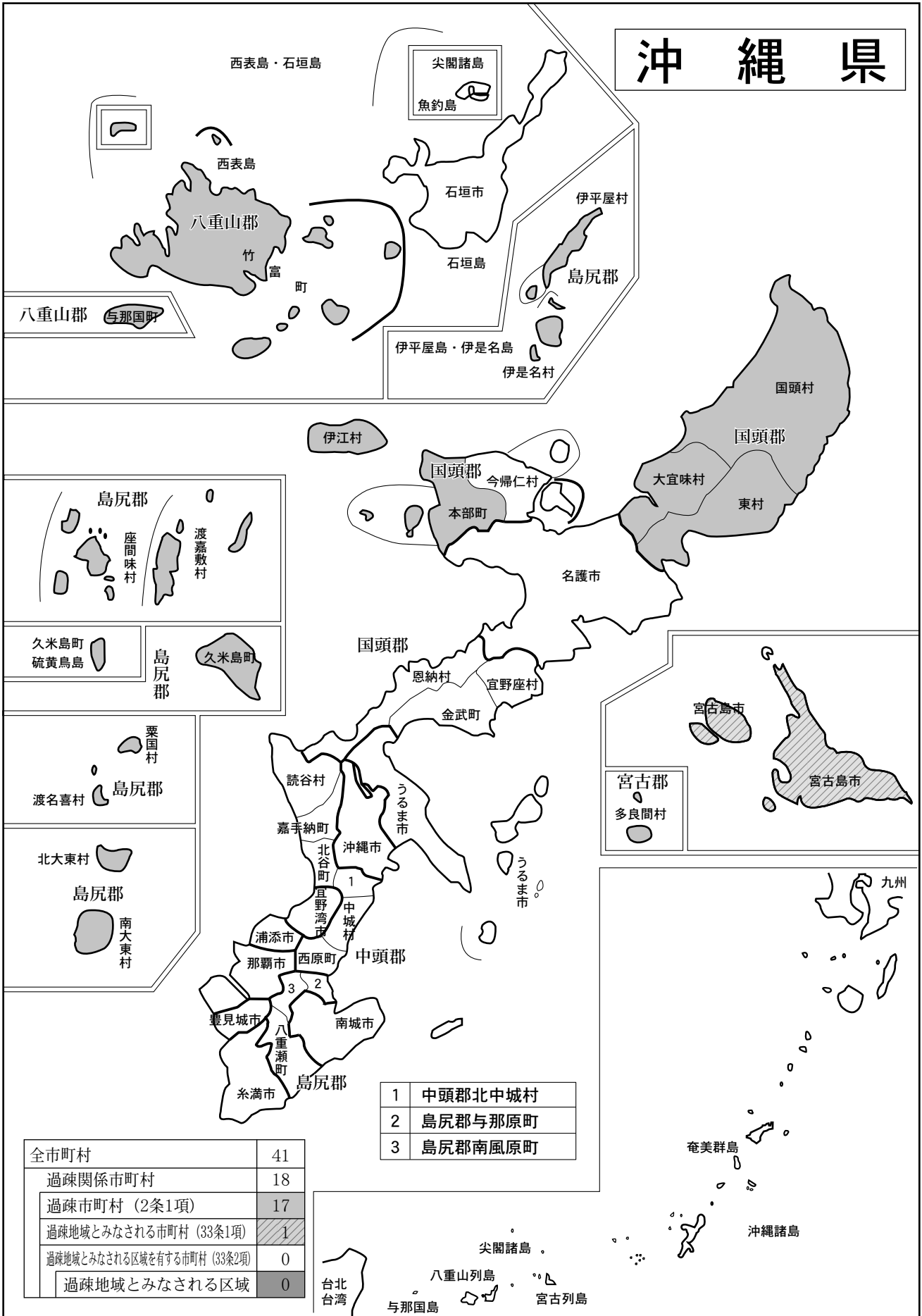
福岡県
1 芦屋 6 大刀洗
2 糸田
3 志免
4 春日

長崎県
1 旧野母崎

鹿児島県
1 東串良

全市町村	233
過疎関係市町村	144
過疎市町村 (2条1項)	113
過疎地域とみなされる市町村 (33条1項)	6
過疎地域とみなされる区域を有する市町村 (33条2項)	25
過疎地域とみなされる区域	59

沖 縄 県



過疎地域自立促進特別措置法

過疎地域自立促進特別措置法（平成十二年法律第十五号）

目次

第一章 総則（第一条—第四条）

第二章 過疎地域自立促進計画（第五条—第九条）

第三章 過疎地域自立促進のための財政上の特別措置（第十条—第十三条）

第四章 過疎地域自立促進のためのその他の特別措置（第十四条—第三十一条）

第五章 雑則（第三十二条—第三十四条）

附則

第一章 総則

（目的）

第一条 この法律は、人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域について、総合的かつ計画的な対策を実施するために必要な特別措置を講ずることにより、これらの地域の自立促進を図り、もって住民福祉の向上、雇用の増大、地域格差の是正及び美しく風格ある国土の形成に寄与することを目的とする。

（過疎地域）

第二条 この法律において「過疎地域」とは、次の各号のいずれかに該当する市町村（地方税の収入以外の政令で定める収入の額が政令で定める金額を超える市町村を除く。）の区域をいう。

一 次のいずれかに該当し、かつ、地方交付税法（昭和二十五年法律第二百十一号）第十四条の規定により算定した市町村の基準財政収入額を同法第十一条の規定により算定した当該市町村の基準財政需要額で除して得た数値（以下この項において「財政力指数」という。）で平成八年度から平成十年度までの各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値が〇・四二以下であること。ただし、イ、ロ又はハに該当する場合においては、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成七年の人口から当該市町村人口に係る昭和四十五年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一未満であること。

イ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和三十五年の人口から当該市町村人口に係る平成七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和三十五年の人口で除して得た数値（以下「三十五年間人口減少率」という。）が〇・三以上であること。

ロ 三十五年間人口減少率が〇・二五以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成七年の人口のうち六十五歳以上の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・二四以上であること。

ハ 三十五年間人口減少率が〇・二五以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成七年の人口のうち十五歳以上三十歳未満の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一五以下であること。

ニ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和四十五年の人口から当該市町村人口に係る平成七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和四十五年の人口で除して得た数値が〇・一九以上であること。

二 次のいずれかに該当し、かつ、財政力指数で平成十八年度から平成二十年度までの各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値が〇・五六以下であること。ただし、イ、ロ又はハに該当する場合においては、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成十七年の人口から当該市町村人口に係る昭和五十五年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一未満であること。

イ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和三十五年の人口から当該市町村人口に係る平成十七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和三十五年の人口で除して得た数値（以下この号において「四十五年間人口減少率」という。）が〇・三三以上であること。

ロ 四十五年間人口減少率が〇・二八以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成十七年の人口のうち六十五歳以上の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・二九以上であること。

ハ 四十五年間人口減少率が〇・二八以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成十七年の人口のうち十五歳以上三十歳未満の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一四以下であること。

ニ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和五十五年の人口から当該市町村人口に係る平成十七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和五十五年の人口で除して得た数値が〇・一七以上であること。

三 次のいずれかに該当し、かつ、財政力指数で平成二十二年度から平成二十四年度までの各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値が〇・四九以下であること。ただし、イ、ロ又はハに該当する場合においては、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十二年の人口から当該市町村人口に係る昭和六十年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一未満であること。

イ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和四十年の人口から当該市町村人口に係る平成二十二年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和四十年の人口で除して得た数値（以下この号において「四十五年間人口減少率」という。）が〇・三三以上であること。

ロ 四十五年間人口減少率が〇・二八以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十二年の人口のうち六十五歳以上の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・三二以上であること。

ハ 四十五年間人口減少率が〇・二八以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十二年の人口のうち十五歳以上三十歳未満の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一二以下であること。

ニ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和六十年の人口から当該市町村人口に係る平成二十二年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和六十年の人口で除して得た数値が〇・一九以上であること。

四 次のいずれかに該当し、かつ、財政力指数で平成二十五年度から平成二十七年度までの各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値が〇・五以下であること。ただし、イ、ロ又はハに該当する場合においては、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十七年の人口から当該市町村人口に係る平成二年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一未満であること。

イ 国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和四十五年の人口から当該市町村人口に係る平成二十七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る昭和四十五年の人口で除して得た数値（以下この号において「四十五年間人口減少率」という。）が〇・三二以上であること。

ロ 四十五年間人口減少率が〇・二七以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十七年の人口のうち六十五歳以上の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・三六以上であること。

ハ 四十五年間人口減少率が〇・二七以上であって、国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二十七年の人口のうち十五歳以上三十歳未満の人口を当該市町村人口に係る同年の人口で除して得た数値が〇・一一以下であること。

ニ 国勢調査の結果による市町村人口に係る平成二年の人口から当該市町村人口に係る平成二十七年の人口を控除して得た人口を当該市町村人口に係る平成二年の人口で除して得た数値が〇・二一以上であること。

2 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、過疎地域をその区域とする市町村（以下「過疎地域の市町村」という。）を公示するものとする。

（過疎地域自立促進のための対策の目標）

第三条 過疎地域の自立促進のための対策は、第一条の目的を達成するため、地域における創意工夫を尊重し、次に掲げる目標に従って推進されなければならない。

一 産業基盤の整備、農林漁業経営の近代化、中小企業の育成、企業の導入及び起業の促進、観光の開発等を図ることにより、産業を振興し、あわせて安定的な雇用を増大すること。

二 道路その他の交通施設、通信施設等の整備を図ること等により、過疎地域とその他の地域及び過疎地域内の交通通信連絡を確保するとともに、過疎地域における情報化を図り、及び地域間交流を促進すること。

三 生活環境の整備、高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進、医療の確保並びに教育の振興を図ることにより、住民の生活の安定と福祉の向上を図ること。

四 美しい景観の整備、地域文化の振興等を図ることにより、個性豊かな地域社会を形成すること。

五 基幹集落の整備及び適正規模集落の育成を図ることにより、地域社会の再編成を促進すること。

(国の責務)

第四条 国は、第一条の目的を達成するため、前条各号に掲げる事項につき、その政策全般にわたり、必要な施策を総合的に講ずるものとする。

第二章 過疎地域自立促進計画

(過疎地域自立促進方針)

第五条 都道府県は、当該都道府県における過疎地域の自立促進を図るため、過疎地域自立促進方針（以下「自立促進方針」という。）を定めることができる。

2 自立促進方針は、おおむね次に掲げる事項について定めるものとする。

一 過疎地域の自立促進に関する基本的な事項

二 過疎地域における農林水産業、商工業その他の産業の振興及び観光の開発に関する事項

三 過疎地域とその他の地域及び過疎地域内を連絡する交通通信体系の整備、過疎地域における情報化並びに地域間交流の促進に関する事項

四 過疎地域における生活環境の整備に関する事項

五 過疎地域における高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進に関する事項

六 過疎地域における医療の確保に関する事項

七 過疎地域における教育の振興に関する事項

八 過疎地域における地域文化の振興等に関する事項

九 過疎地域における集落の整備に関する事項

3 都道府県は、自立促進方針を作成するに当たっては、過疎地域を広域的な経済社会生活圏の整備の体系に組み入れるよう配慮しなければならない。

4 都道府県は、自立促進方針を定めようとするときは、あらかじめ、総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣に協議し、その同意を得なければならない。この場合において、総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、同意をしようとするときは、関係行政機関の長に協議するものとする。

5 過疎地域の市町村は、自立促進方針が定められていない場合には、都道府県に対し、自立促進方針を定めるよう要請することができる。

6 前項の規定による要請があったときは、都道府県は、速やかに、自立促進方針を定めるものとする。

(過疎地域自立促進市町村計画)

第六条 過疎地域の市町村は、自立促進方針に基づき、当該市町村の議会の議決を経て過疎地域自立促進市町村計画（以下「市町村計画」という。）を定めることができる。

2 市町村計画は、おおむね次に掲げる事項について定めるものとする。

一 地域の自立促進の基本的方針に関する事項

二 農林水産業、商工業その他の産業の振興及び観光の開発に関する事項

三 交通通信体系の整備、地域における情報化及び地域間交流の促進に関する事項

四 生活環境の整備に関する事項

五 高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進に関する事項

六 医療の確保に関する事項

七 教育の振興に関する事項

八 地域文化の振興等に関する事項

九 集落の整備に関する事項

十 前各号に掲げるもののほか、地域の自立促進に関し市町村が必要と認める事項

3 市町村計画は、他の法令の規定による地域振興に関する計画と調和が保たれるとともに、広域的な経済社会生活圏の整備の計画に適合するよう定めなければならない。

4 過疎地域の市町村は、市町村計画を定めようとするときは、当該市町村計画に定める事項のうち第二項第二号から第九号までの事項については、あらかじめ都道府県に協議しなければならない。

5 過疎地域の市町村は、市町村計画を定めたときは、直ちに、総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣にこれを提出しなければならない。

6 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、前項の規定により市町村計画の提出があった場合においては、直ちに、その内容を関係行政機関の長に通知しなければならない。この場合において、関係行政機関の長は、当該市町村計画についてその意見を総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣に申し出ることができる。

7 第一項及び前三項の規定は、市町村計画の変更について準用する。
(過疎地域自立促進都道府県計画)

第七条 都道府県は、自立促進方針に基づき、過疎地域の自立促進を図るため、過疎地域自立促進都道府県計画（以下「都道府県計画」という。）を定めることができる。

2 都道府県計画は、おおむね前条第二項各号に掲げる事項について当該都道府県が過疎地域の市町村に協力して講じようとする措置の計画とする。

3 都道府県は、都道府県計画を作成するに当たっては、一の過疎地域の市町村の区域を超える広域の見地に配慮するものとする。

4 都道府県は、都道府県計画を定めたときは、これを総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣に提出するものとする。

5 前条第六項の規定は都道府県計画の提出があった場合について、前項及び同条第六項の規定は都道府県計画の変更について、それぞれ準用する。
(関係行政機関の長の協力)

第八条 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、市町村計画又は都道府県計画の実施に関し必要がある場合においては、関係行政機関の長に対し、関係地方公共団体に対する助言その他の協力を求めることができる。

(調査)

第九条 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、過疎地域の自立促進を図るために必要があると認める場合においては、関係地方公共団体について調査を行うことができる。

第三章 過疎地域自立促進のための財政上の特別措置

(国の負担又は補助の割合の特例等)

第十条 市町村計画に基づいて行う事業のうち、別表に掲げるものに要する経費に対する国の負担又は補助の割合（以下「国の負担割合」という。）は、当該事業に関する法令の規定にかかわらず、同表のとおりとする。ただし、他の法令の規定により同表に掲げる割合を超える国の負担割合が定められている場合は、この限りでない。

2 国は、市町村計画に基づいて行う事業のうち、別表に掲げるものに要する経費に充てるため政令で定める交付金を交付する場合においては、政令で定めるところにより、当該経費について前項の規定を適用したとするならば国が負担し、又は補助することとなる割合を参酌して、当該交付金の額を算定するものとする。

(国の補助等)

第十一条 国は、過疎地域の自立促進を図るため特に必要があると認めるときは、政令で定めるところにより、予算の範囲内において、市町村計画又は都道府県計画に基づいて行う事業に要する経費の一部を補助することができる。

2 国は、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律（昭和三十三年法律第八十一号）

第十二条第一項の規定により地方公共団体に対して交付金を交付する場合において、当該地方公共団体が同条第二項の規定により作成した施設整備計画に記載された改築等事業（同法第十一条第一項に規定する「改築等事業」をいう。）として、市町村計画に基づいて行う公立の小学校、中学校又は義務教育学校を適正な規模にするための統合に伴い必要となった公立の小学校、中学校又は義務教育学校に勤務する教員又は職員のための住宅の建築（買収その他これに準ずる方法による取得を含む。）に係る事業がある場合においては、当該事業に要する経費の十分の五・五を下回らない額の交付金が充たされるように算定するものとする。

(過疎地域自立促進のための地方債)

第十二条 過疎地域の市町村が市町村計画に基づいて行う地場産業に係る事業又は観光若しくはレクリエーションに関する事業を行う者で政令で定めるものに対する出資及び次に掲げる施設の整備につき当該市町村が必要とする経費については、地方財政法（昭和二十三年法律第九十九号）第五条各号に規定する経費に該当しないものについても、地方債をもってその財源とすることができる。

一 交通の確保又は産業の振興を図るために必要な政令で定める市町村道（融雪施設その他の道路の附属物を含む。）、農道、林道及び漁港関連道

二 漁港及び港湾

- 三 地場産業の振興に資する施設で政令で定めるもの
 - 四 中小企業の育成又は企業の導入若しくは起業の促進のために市町村が個人又は法人その他の団体に使用させるための工場及び事務所
 - 五 観光又はレクリエーションに関する施設
 - 六 住民の交通手段の確保又は地域間交流の促進のための鉄道施設及び鉄道車両並びに軌道施設及び軌道車両のうち総務省令で定める事業者の事業の用に供するもの
 - 七 電気通信に関する施設
 - 八 下水処理のための施設
 - 九 一般廃棄物処理のための施設
 - 十 火葬場
 - 十一 公民館その他の集会施設
 - 十二 消防施設
 - 十三 高齢者の保健又は福祉の向上又は増進を図るための施設
 - 十四 保育所及び児童館
 - 十五 認定こども園（就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（平成十八年法律第七十七号）第三条第一項又は第三項の規定による認定を受けた施設及び幼保連携型認定こども園（同法第二条第七項に規定する幼保連携型認定こども園をいう。別表児童福祉施設の項において同じ。）をいう。）
 - 十六 障害者又は障害児の福祉の増進を図るための施設
 - 十七 診療施設（巡回診療車及び巡回診療船並びに患者輸送車及び患者輸送艇を含む。）
 - 十八 公立の小学校、中学校及び義務教育学校並びに市町村立の幼稚園、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校
 - 十九 市町村立の専修学校及び各種学校
 - 二十 図書館
 - 二十一 地域文化の振興等を図るための施設
 - 二十二 集落の整備のための政令で定める用地及び住宅
 - 二十三 太陽光、バイオマスを熱源とする熱その他の自然エネルギーを利用するための施設で政令で定めるもの
 - 二十四 前各号に掲げるもののほか、政令で定める施設
- 2 前項に規定するもののほか、地域医療の確保、住民の日常的な移動のための交通手段の確保、集落の維持及び活性化その他の住民が将来にわたり安全に安心して暮らすことのできる地域社会の実現を図るため特別に地方債を財源として行うことが必要と認められる事業として過疎地域の市町村が市町村計画に定めるもの（当該事業の実施のために地方自治法（昭和二十二年法律第六十七号）第二百四十一条の規定により設けられる基金の積立てを含む。次項において「過疎地域自立促進特別事業」という。）の実施につき当該市町村が必要とする経費（出資及び施設の整備につき必要とする経費を除く。）については、地方財政法第五条各号に規定する経費に該当しないものについても、人口、面積、財政状況その他の条件を考慮して総務省令で定めるところにより算定した額の範囲内に限り、地方債をもってその財源とすることができる。
- 3 市町村計画に基づいて行う第一項に規定する出資若しくは施設の整備又は過疎地域自立促進特別事業の実施につき過疎地域の市町村が必要とする経費の財源に充てるため起こした地方債（当該地方債を財源として設置した施設に関する事業の経営に伴う収入を当該地方債の元利償還に充てることのできるものを除く。）で、総務大臣が指定したものに係る元利償還に要する経費は、地方交付税法の定めるところにより、当該市町村に交付すべき地方交付税の額の算定に用いる基準財政需要額に算入するものとする。

（資金の確保等）

第十三条 国は、市町村計画又は都道府県計画に基づいて行う事業の実施に関し、必要な資金の確保その他の援助に努めなければならない。

第四章 過疎地域自立促進のためのその他の特別措置 （基幹道路の整備）

第十四条 過疎地域における基幹的な市町村道並びに市町村が管理する基幹的な農道、林道及び漁港関連道（過疎地域とその他の地域を連絡する基幹的な市町村道並びに市町村が管理する基幹的な農道、林道及び漁港関連道を含む。）で政令で定める関係行政機関の長が指定するもの（以下「基幹道路」という。）の新設及び改築については、他の法令の規定にかかわらず、都道府県計画に基づいて、都道府県が行うことができる。

- 2 都道府県は、前項の規定により市町村道の新設又は改築を行う場合においては、政令で定めるところにより、当該市町村道の道路管理者（道路法（昭和二十七年法律第八十号）第十八条第一項に規定する道路管理者をいう。）に代わってその権限を行うものとする。
- 3 第一項の規定により都道府県が行う基幹道路の新設及び改築に係る事業（以下「基幹道路整備事業」という。）に要する経費については、当該都道府県が負担する。
- 4 基幹道路整備事業に要する経費に係る国の負担又は補助については、基幹道路を都道府県道又は都道府県が管理する農道、林道若しくは漁港関連道とみなす。
- 5 第三項の規定により基幹道路整備事業に要する経費を負担する都道府県が後進地域の開発に関する公共事業に係る国の負担割合の特例に関する法律（昭和三十六年法律百十二号。以下「負担特例法」という。）第二条第一項に規定する適用団体である場合においては、基幹道路整備事業（北海道及び奄美群島の区域における基幹道路整備事業で当該事業に係る経費に対する国の負担割合がこれらの区域以外の区域における当該事業に相当する事業に係る経費に対する通常の国の負担割合と異なるものを除く。）を同条第二項に規定する開発指定事業とみなして、負担特例法の規定を適用する。
- 6 北海道及び奄美群島の区域における基幹道路整備事業で当該事業に係る経費に対する国の負担割合がこれらの区域以外の区域における当該事業に相当する事業に係る経費に対する通常の国の負担割合と異なるものについては、第三項の規定により当該基幹道路整備事業に要する経費を負担する都道府県が負担特例法第二条第一項に規定する適用団体である場合においては、国は、第一号に掲げる国の負担割合が第二号に掲げる国の負担割合を超えるものにあつては、第一号に掲げる国の負担割合により算定した額に相当する額を、第一号に掲げる国の負担割合が第二号に掲げる国の負担割合を超えないものにあつては、第二号に掲げる国の負担割合により算定した額に相当する額を負担し、又は補助するものとする。
 - 一 北海道及び奄美群島の区域以外の区域における当該基幹道路整備事業に相当する事業に係る経費に対する通常の国の負担割合をこれらの区域における当該基幹道路整備事業に係る経費に対する国の負担割合として負担特例法第三条第一項及び第二項の規定により算定した国の負担割合
 - 二 北海道及び奄美群島の区域における当該基幹道路整備事業に係る経費に対する国の負担割合

（公共下水道の幹線管渠等の整備）

- 第十五条 過疎地域における市町村が管理する公共下水道のうち、広域の見地から設置する必要があるものであって、過疎地域の市町村のみでは設置することが困難なものとして国土交通大臣が指定するものの幹線管渠、終末処理場及びポンプ施設（以下「幹線管渠等」という。）の設置については、下水道法（昭和三十三年法律第七十九号）第三条第一項の規定にかかわらず、都道府県計画に基づいて、都道府県が行うことができる。
- 2 前項の指定は、当該公共下水道の公共下水道管理者（下水道法第四条第一項に規定する公共下水道管理者をいう。以下同じ。）である市町村の申請に基づいて行うものとする。
 - 3 都道府県は、第一項の規定により公共下水道の幹線管渠等の設置を行う場合においては、政令で定めるところにより、当該公共下水道の公共下水道管理者に代わってその権限を行うものとする。
 - 4 第一項の規定により都道府県が公共下水道の幹線管渠等の設置を行う場合においては、下水道法第二十二条第一項の規定の適用については、当該都道府県を公共下水道管理者とみなす。
 - 5 第一項の規定により都道府県が行う公共下水道の幹線管渠等の設置に係る事業（以下「公共下水道幹線管渠等整備事業」という。）に要する経費については、当該都道府県が負担する。
 - 6 前項の規定にかかわらず、公共下水道幹線管渠等整備事業を行う都道府県は、当該公共下水道の公共下水道管理者である市町村に対し、当該事業に要する経費の全部又は一部を負担させることができる。
 - 7 前項の経費について市町村が負担すべき額は、当該市町村の意見を聴いた上、当該都道府県の議会の議決を経て定めなければならない。
 - 8 公共下水道幹線管渠等整備事業に要する経費に係る国の補助及び資金の融通については、当該事業に係る公共下水道を都道府県が設置する公共下水道とみなす。
 - 9 負担特例法第二条第一項の規定の例によって算定した同項に規定する財政力指数が〇・四六に満たない都道府県（以下「特定都道府県」という。）が行う公共下水道幹線管渠等整備事業に係る経費に対する国の補助の割合については、負担特例法第三条及び第四条の規定の例による。ただし、負担特例法第三条中「適用団体」とあるのは、「特定都道府県」とする。

(医療の確保)

第十六条 都道府県は、過疎地域における医療を確保するため、都道府県計画に基づいて、無医地区に関し次に掲げる事業を実施しなければならない。

- 一 診療所の設置
- 二 患者輸送車（患者輸送艇を含む。）の整備
- 三 定期的な巡回診療
- 四 保健師による保健指導等の活動
- 五 医療機関の協力体制の整備
- 六 その他無医地区の医療の確保に必要な事業

2 都道府県は、前項に規定する事業を実施する場合において特に必要があると認めるときは、病院又は診療所の開設者又は管理者に対し、次に掲げる事業につき、協力を要請することができる。

- 一 医師又は歯科医師の派遣
- 二 巡回診療車（巡回診療船を含む。）による巡回診療

3 国及び都道府県は、過疎地域内の無医地区における診療に従事する医師若しくは歯科医師又はこれを補助する看護師の確保その他当該無医地区における医療の確保（当該診療に従事する医師又は歯科医師を派遣する病院に対する助成を含む。）に努めなければならない。

4 都道府県は、第一項及び第二項に規定する事業の実施に要する費用を負担する。

5 国は、前項の費用のうち第一項第一号から第三号までに掲げる事業及び第二項に規定する事業に係るものについて、政令で定めるところにより、その二分の一を補助するものとする。ただし、他の法令の規定により二分の一を超える国の負担割合が定められている場合は、この限りでない。

第十七条 国及び都道府県は、過疎地域における医療を確保するため、過疎地域の市町村が市町村計画に基づいて前条第一項各号に掲げる事業を実施しようとするときは、当該事業が円滑に実施されるよう適切な配慮をするものとする。

(高齢者の福祉の増進)

第十八条 都道府県は、過疎地域における高齢者の福祉の増進を図るため、市町村計画に基づいて行う事業のうち、老人福祉法（昭和三十八年法律第百三十三号）第五条の二第三項に規定する便宜を供与し、あわせて高齢者の居住の用に供するための施設の整備に要する費用の一部を補助することができる。

2 国は、予算の範囲内において、都道府県が前項の規定により補助する費用の一部を補助することができる。

3 国は、過疎地域における高齢者の福祉の増進を図るため、都道府県が都道府県計画に基づいて第一項に規定する施設の整備をしようとするときは、予算の範囲内において、当該整備に要する費用の一部を補助することができる。

第十九条 国は、過疎地域における高齢者の福祉の増進を図るため、過疎地域の市町村が市町村計画に基づいて高齢者の自主的活動の助長と福祉の増進を図るための集会施設の建設をしようとするときは、予算の範囲内において、当該建設に要する費用の一部を補助することができる。

(交通の確保)

第二十条 国及び地方公共団体は、過疎地域における住民の生活の利便性の向上等を図るため、地域住民の生活に必要な旅客輸送の安定的な確保について適切な配慮をするものとする。

(情報の流通の円滑化及び通信体系の充実)

第二十一条 国及び地方公共団体は、過疎地域における住民の生活の利便性の向上、産業の振興、地域間交流の促進等を図るため、情報の流通の円滑化及び通信体系の充実について適切な配慮をするものとする。

(教育の充実)

第二十二条 国及び地方公共団体は、過疎地域において、その教育の特殊事情にかんがみ、学校教育及び社会教育の充実に努めるとともに、地域社会の特性に応じた生涯学習の振興に資するための施策の充実について適切な配慮をするものとする。

(地域文化の振興等)

第二十三条 国及び地方公共団体は、過疎地域において伝承されてきた文化的所産の保存及び活用について適切な措置が講ぜられるよう努めるとともに、地域における文化の振興について適切な配慮をするものとする。

(農地法等による処分についての配慮)

第二十四条 国の行政機関の長又は都道府県は、過疎地域内の土地を市町村計画に定める用途に供するため農地法（昭和二十七年法律第二百二十九号）その他の法律の規定による許可その他の処分を求められたときは、当該地域の自立促進が図られるよう適切な配慮をするものとする。
（国有林野の活用）

第二十五条 国は、市町村計画の実施を促進するため、国有林野の活用について適切な配慮をするものとする。

（株式会社日本政策金融公庫等からの資金の貸付け）

第二十六条 株式会社日本政策金融公庫又は沖縄振興開発金融公庫は、過疎地域において農業（畜産業を含む。）、林業若しくは漁業を営む者又はこれらの者の組織する法人に対し、その者又はその法人が農林水産省令で定めるところにより作成した農林漁業の経営改善又は振興のための計画であって農林水産省令で定める基準に適合する旨の都道府県の認定を受けたものを実施するために必要な資金の貸付けを行うものとする。

（中小企業に対する資金の確保）

第二十七条 国は、過疎地域において事業を行う中小企業者が経済産業省令で定めるところにより作成した経営改善のための計画であって経済産業省令で定める基準に適合する旨の都道府県の認定を受けたものに基づく事業の実施に関し、当該事業者が必要とする資金の確保に努めなければならない。

2 国及び都道府県は、前項に定めるもののほか、過疎地域において中小企業者が行う事業であって第一条の目的の達成に資すると認められるものの実施に関し、当該事業者が必要とする資金の確保に努めなければならない。

（沖縄振興開発金融公庫からの資金の貸付け）

第二十八条 沖縄振興開発金融公庫は、市町村計画のうち集落の整備に関する事項に係る計画にのっとり過疎地域の市町村の住民が行う住宅の建設若しくは購入又は住宅の建設若しくは購入に付随する土地若しくは借地権の取得が円滑に行われるよう必要な資金の貸付けについて適切な配慮をするものとする。

（事業用資産の買換えの場合の課税の特例）

第二十九条 過疎地域以外の地域にある事業用資産を譲渡して過疎地域内にある事業用資産を取得した場合においては、租税特別措置法（昭和三十二年法律第二十六号）の定めるところにより、特定の事業用資産の買換えの場合の課税の特例の適用があるものとする。

（減価償却の特例）

第三十条 過疎地域内において製造の事業、農林水産物等販売業（過疎地域内において生産された農林水産物又は当該農林水産物を原料若しくは材料として製造、加工若しくは調理をしたものを店舗において主に他の地域の者に販売することを目的とする事業をいう。以下同じ。）又は旅館業（下宿営業を除く。以下同じ。）の用に供する設備を新設し、又は増設した者がある場合において、当該新設又は増設により、当該過疎地域内における雇用の増大に寄与すると認められるときは、当該新設又は増設に伴い新たに取得し、又は製作し、若しくは建設した機械及び装置（製造の事業又は農林水産物等販売業の用に供するものに限る。以下同じ。）並びに建物及びその附属設備については、租税特別措置法の定めるところにより、特別償却を行うことができる。

（地方税の課税免除又は不均一課税に伴う措置）

第三十一条 地方税法（昭和三十五年法律第二百二十六号）第六条の規定により、地方公共団体が、過疎地域内において製造の事業、農林水産物等販売業若しくは旅館業の用に供する設備を新設し、若しくは増設した者について、その事業に対する事業税、その事業に係る建物若しくはその敷地である土地の取得に対する不動産取得税若しくはその事業に係る機械及び装置若しくはその事業に係る建物若しくはその敷地である土地に対する固定資産税を課さなかった場合若しくは過疎地域内において畜産業若しくは水産業を行う個人について、その事業に対する事業税を課さなかった場合又はこれらの者について、これらの地方税に係る不均一の課税をした場合において、これらの措置が総務省令で定める場合に該当するものと認められるときは、地方交付税法第十四条の規定による当該地方公共団体の各年度における基準財政収入額は、同条の規定にかかわらず、当該地方公共団体の当該各年度分の減収額（事業税又は固定資産税に關するこれらの措置による減収額にあっては、これらの措置がされた最初の年度以降三箇年度（個人の行う畜産業及び水産業に対するものにあつては、総務省令で定める期間に係る年度）におけるものに限る。）のうち総務省令で定めるところにより算定した額を同条の規定による当該地方公共団体の当該各年度（これらの措置が総務省令で定める日以後において行われたと

きは、当該減収額について当該各年度の翌年度)における基準財政収入額となるべき額から控除した額とする。

第五章 雑則

(過疎地域の市町村以外の市町村の区域に対する適用)

第三十二条 この法律の規定は、平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された場合においては、第二条第一項第一号中「平成八年度から平成十年度まで」とあるのは「第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度前三箇年度内」と、「平成七年の人口から」とあるのは「第三十二条に規定する国勢調査が行われた年(以下「基準年」という。)の人口から」と、「昭和四十五年」とあるのは「基準年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年」と、「〇・一」とあるのは「〇・一を二十五で除して得た数値に基準年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の翌年から基準年までの年数を乗じて得た数値」と、「昭和三十五年」とあるのは「基準年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年」と、「平成七年の人口を」とあるのは「基準年の人口を」と、「〇・三」とあるのは「〇・三を三十五で除して得た数値に基準年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の翌年から基準年までの年数を乗じて得た数値」と、「〇・二五」とあるのは「〇・二五を三十五で除して得た数値に基準年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の翌年から基準年までの年数を乗じて得た数値」と、「平成七年の人口のうち」とあるのは「基準年の人口のうち」と、「同年の人口で除して得た数値が〇・二四」とあるのは「基準年の人口で除して得た数値が〇・二四」と、「同年の人口で除して得た数値が〇・一五」とあるのは「基準年の人口で除して得た数値が〇・一五」と、「〇・一九」とあるのは「〇・一九を二十五で除して得た数値に基準年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の翌年から基準年までの年数を乗じて得た数値」とそれぞれ読み替えて、過疎地域の市町村以外の市町村の区域についても適用する。

(市町村の廃置分合等があった場合の特例)

第三十三条 過疎地域の市町村の廃置分合又は境界変更があった場合には、当該廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村の区域で総務省令・農林水産省令・国土交通省令で定める基準に該当するものは、過疎地域とみなして、この法律の規定を適用する。

- 2 合併市町村(市町村の合併(二以上の市町村の区域の全部若しくは一部をもって市町村を置き、又は市町村の区域の全部若しくは一部を他の市町村に編入することで市町村の数の減少を伴うものをいう。以下同じ。))により設置され、又は他の市町村の区域の全部若しくは一部を編入した市町村をいい、過疎地域の市町村を除く。以下同じ。)のうち合併関係市町村(市町村の合併によりその区域の全部又は一部が合併市町村の区域の一部となった市町村をいう。以下同じ。)に過疎地域の市町村(当該市町村の合併が行われた日の前日においてこの項の規定の適用を受けていた市町村を含む。)が含まれるものについては、当該合併市町村の区域のうち当該市町村の合併が行われた日の前日において過疎地域であった区域を過疎地域とみなして、この法律の規定を適用する。この場合において必要な事項は、政令で定める。

(政令への委任)

第三十四条 第二条第一項各号に規定する数値の算定、市町村の廃置分合又は境界変更があった場合についてこの法律の規定を適用するために必要な事項、第三十二条の場合におけるこの法律の規定の適用に関し必要な事項、沖縄県の市町村について第二条(第三十二条の規定により読み替えて適用される第二条を含む。)の規定を適用する場合において必要な事項その他この法律の施行に関し必要な事項は、政令で定める。

附 則 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、平成十二年四月一日から施行する。

(国の負担等に関する規定の適用)

第二条 第十条(別表を含む。以下同じ。)、第十一条、第十四条第四項から第六項まで、第十五条第九項及び第十項、第十六条第五項、第十八条第二項及び第三項並びに第十九条の規定は、平成十二年度の予算に係る国の負担又は補助(平成十一年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十二年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担又は補助を除く。)から適用し、平成十一年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十二年度以降の年度に支出す

べきものとされた国の負担又は補助及び平成十一年度以前の年度の歳出予算に係る国の負担又は補助で平成十二年度以降の年度に繰り越されたものについては、なお従前の例による。

(この法律の失効)

第三条 この法律は、平成三十三年三月三十一日限り、その効力を失う。

(過疎地域活性化特別措置法の失効に伴う経過措置)

第四条 旧過疎地域活性化特別措置法（平成二年法律第十五号。以下「旧過疎活性化法」という。）第六条に規定する市町村計画又は旧過疎活性化法第七条に規定する都道府県計画に基づく事業に係る国の負担又は補助のうち、平成十一年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十二年度以降の年度に支出すべきものとされたもの及び平成十一年度以前の年度の歳出予算に係るもので平成十二年度以降の年度に繰り越されたものについては、旧過疎活性化法第十条（別表を含む。）、第十一条、第十五条第五項、第十七条第二項及び第三項並びに第十八条の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

2 平成十二年三月三十一日において旧過疎活性化法の規定に基づく過疎地域をその区域とする市町村（以下「旧過疎活性化地域の市町村」という。）の区域内における旧過疎活性化法第十四条第一項に規定する基幹道路の新設及び改築に係る事業並びに旧過疎活性化法第十四条の二第一項に規定する公共下水道の幹線管渠等の設置に係る事業で、同日においてその工事を完了していないものについては、旧過疎活性化法第十四条及び第十四条の二の規定は、平成十七年三月三十一日までの間に限り、なおその効力を有する。

3 地方公共団体が、旧過疎活性化地域の市町村の区域内において製造の事業若しくは旅館業の用に供する設備を平成十二年三月三十一日以前に新設し、若しくは増設した者に係る事業税、不動産取得税若しくは固定資産税について課税免除若しくは不均一課税をした場合又は旧過疎活性化地域の市町村の区域内において畜産業、水産業若しくは薪炭製造業を行う個人に係る事業税について同日以前に課税免除若しくは不均一課税をした場合における地方交付税法第十四条の規定による当該地方公共団体の基準財政収入額の算定については、旧過疎活性化法第二十八条の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

4 昭和五十五年三月三十一日までに農林漁業金融公庫法（昭和二十七年法律第三百五十五号）の規定により農林漁業金融公庫が締結した貸付契約に係る貸付金であって旧過疎地域対策緊急措置法（昭和四十五年法律第三十一号。以下「旧過疎対策法」という。）第十九条に規定する資金に係るものについては、旧過疎活性化法附則第十項の規定によりなおその効力を有するものとされた旧過疎地域振興特別措置法（昭和五十五年法律第十九号。以下「旧過疎振興法」という。）附則第十三項の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

5 昭和五十五年四月一日以降平成二年三月三十一日までに農林漁業金融公庫法の規定により農林漁業金融公庫が締結した貸付契約に係る貸付金であって旧過疎振興法第二十二条に規定する資金に係るものについては、旧過疎活性化法附則第十九項の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

6 昭和五十五年三月三十一日までに住宅金融公庫法（昭和二十五年法律第五十六号）の規定により旧過疎対策法に基づく市町村過疎地域振興計画のうち集落の整備に関する事項に係る計画にのっとり住宅を建設するため必要な資金の貸付けを受けた者の当該貸付けについては、旧過疎活性化法附則第十一項の規定によりなおその効力を有するものとされた旧過疎振興法附則第十五項の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

7 昭和五十五年四月一日以降平成二年三月三十一日までに住宅金融公庫法の規定により旧過疎振興法に基づく市町村過疎地域振興計画のうち集落の整備に関する事項に係る計画にのっとり住宅を建設し、又は購入するため必要な資金の貸付けを受けた者の当該貸付けについては、旧過疎活性化法附則第十四項の規定は、旧過疎活性化法の失効後も、なおその効力を有する。

(特定市町村等に対するこの法律の準用)

第五条 旧過疎活性化地域の市町村のうち過疎地域の市町村以外のもの（以下「特定市町村」という。）については、平成十二年度から平成十六年度までの間に限り、政令で定めるところにより、第十条、第十一条、第十四条及び第十五条の規定を準用する。この場合において、第十条及び第十一条の規定の準用に関し平成十七年度以降必要となる経過措置は、政令で定める。

2 特定市町村のうち政令で定めるものについては、平成十二年度から平成十六年度までの間に限り、政令で定めるところにより、第十二条の規定を準用する。

第六条 この法律の施行の日（以下「施行日」という。）の前日において附則第十七条の規定による改正前の市町村の合併の特例に関する法律（昭和四十年法律第六号）第十二条の規定の適用を受けていた市町村のうち過疎地域の市町村以外のものについては、当該市町村の区域のう

ち同条に規定する市町村の合併が行われた日の前日において旧過疎活性化法の規定に基づく過疎地域であった区域を特定市町村の区域とみなして、前条の規定を適用する。この場合において必要な事項は、政令で定める。

第七条 合併市町村のうち合併関係市町村に特定市町村（当該市町村の合併が行われた日の前日において前条又はこの条の規定の適用を受けていた市町村を含む。）が含まれるものについては、当該合併市町村の区域のうち当該市町村の合併が行われた日の前日において特定市町村の区域であった区域を特定市町村の区域とみなして、附則第五条の規定を適用する。この場合において必要な事項は、政令で定める。

附 則 （平成一一年一二月二二日法律第一六〇号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律（第二条及び第三条を除く。）は、平成十三年一月六日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第九百九十五条（核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律の一部を改正する法律附則の改正規定に係る部分に限る。）、第千三百五条、第千三百六条、第千三百二十四条第二項、第千三百二十六条第二項及び第千三百四十四条の規定 公布の日

附 則 （平成一三年一二月一二日法律第一五三号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

（処分、手続等に関する経過措置）

第四十二条 この法律の施行前に改正前のそれぞれの法律（これに基づく命令を含む。以下この条において同じ。）の規定によってした処分、手続その他の行為であって、改正後のそれぞれの法律の規定に相当の規定があるものは、この附則に別段の定めがあるものを除き、改正後のそれぞれの法律の相当の規定によってしたものとみなす。

（経過措置の政令への委任）

第四十四条 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附 則 （平成一四年二月八日法律第一号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 （平成一七年四月一日法律第二五号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律は、平成十七年四月一日から施行する。

附 則 （平成一七年七月六日法律第八二号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律は、平成十九年四月一日から施行する。

附 則 （平成一七年一一月七日法律第一二三号） 抄
（施行期日）

第一条 この法律は、平成十八年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 第五条第一項（居宅介護、行動援護、児童デイサービス、短期入所及び共同生活援助に係る部分を除く。）、第三項、第五項、第六項、第九項から第十五項まで、第十七項及び第十九項から第二十二項まで、第二章第一節（サービス利用計画作成費、特定障害者特別給付費、特例特定障害者特別給付費、療養介護医療費、基準該当療養介護医療費及び補装具費の支給に係る部分に限る。）、第二十八条第一項（第二号、第四号、第五号及び第八号から第十号までに係る部分に限る。）及び第二項（第一号から第三号までに係る部分に限る。）、第三十二条、第三十四条、第三十五条、第三十六条第四項（第三十七条第二項において準用する場合を含む。）、第三十八条から第四十条まで、第四十一条（指定障害者支援施設及び指定相談支援事業者の指定に係る部分に限る。）、第四十二条（指定障害者支援施設等の設置者及び指定相談支援事業者に係る部分に限る。）、第四十四条、第四十五条、第四十六条第一項（指定相談支援事業者に係る部分に限る。）及び第二項、第四十七条、第四十八条第三項及び第四項、第四十九条第二項及び第三項並びに同条第四項から第七項まで（指定障害者支援施設等の設置者及び指定相談支援事業者に係る部分に限る。）、第五十条第三項及び第四項、第五十一条（指定

障害者支援施設及び指定相談支援事業者に係る部分に限る。)、第七十条から第七十二条まで、第七十三条、第七十四条第二項及び第七十五条(療養介護医療及び基準該当療養介護医療に係る部分に限る。)、第二章第四節、第三章、第四章(障害福祉サービス事業に係る部分を除く。)、第五章、第九十二条第一号(サービス利用計画作成費、特定障害者特別給付費及び特例特定障害者特別給付費の支給に係る部分に限る。)、第二号(療養介護医療費及び基準該当療養介護医療費の支給に係る部分に限る。)、第三号及び第四号、第九十三条第二号、第九十四条第一項第二号(第九十二条第三号に係る部分に限る。))及び第二項、第九十五条第一項第二号(第九十二条第二号に係る部分を除く。))及び第二項第二号、第九十六条、第一百条(サービス利用計画作成費、特定障害者特別給付費、特例特定障害者特別給付費、療養介護医療費、基準該当療養介護医療費及び補装具費の支給に係る部分に限る。)、第一百一十一条及び第一百二十二条(第四十八条第一項の規定を同条第三項及び第四項において準用する場合に係る部分に限る。))並びに第一百四十四条並びに第一百五十五条第一項及び第二項(サービス利用計画作成費、特定障害者特別給付費、特例特定障害者特別給付費、療養介護医療費、基準該当療養介護医療費及び補装具費の支給に係る部分に限る。))並びに附則第十八条から第二十三条まで、第二十六条、第三十条から第三十三条まで、第三十五条、第三十九条から第四十三条まで、第四十六条、第四十八条から第五十条まで、第五十二条、第五十六条から第六十条まで、第六十二条、第六十五条、第六十八条から第七十条まで、第七十二条から第七十七条まで、第七十九条、第八十一条、第八十三条、第八十五条から第九十条まで、第九十二条、第九十三条、第九十五条、第九十六条、第九十八条から第一百条まで、第一百五十五条、第一百八条、第一百条、第一百二十二条、第一百三十三条及び第一百五十五条の規定 平成十八年十月一日

附 則 (平成一八年三月三十一日法律第一八号) 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、平成十八年四月一日から施行する。

(義務教育諸学校施設費国庫負担法等の一部改正等に伴う経過措置)

第三条 第三条から第十四条まで及び附則第五条から第七条までの規定による改正後の次に掲げる法律の規定は、平成十八年度以降の年度の予算に係る国の負担若しくは補助(平成十七年度以前の年度における事務又は事業の実施により平成十八年度以降の年度に支出される国の負担又は補助(第十五条第一号の規定による廃止前の公立養護学校整備特別措置法第二条第一項及び第三条第一項並びに附則第四項並びに第十五条第二号の規定による廃止前の公立高等学校危険建物改築促進臨時措置法第三条第一項の規定に基づく国の負担又は補助を含む。以下この条において同じ。))及び平成十七年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十八年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担又は補助を除く。))又は交付金の交付について適用し、平成十七年度以前の年度における事務又は事業の実施により平成十八年度以降の年度に支出される国の負担又は補助、平成十七年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十八年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担又は補助及び平成十七年度以前の年度の歳出予算に係る国の負担又は補助で平成十八年度以降の年度に繰り越されたものについては、なお従前の例による。

一～八 略

九 過疎地域自立促進特別措置法

附 則 (平成一九年五月二五日法律第五八号) 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、平成二十年十月一日から施行する。

(政令への委任)

第九条 附則第二条から前条までに定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附 則 (平成二二年三月一七日法律第三号) 抄

(施行期日)

第一条 この法律は、平成二十二年四月一日から施行する。ただし、附則第三条の改正規定及び附則第七条から第九条までの規定は、公布の日から施行する。

(経過措置等)

第二条 この法律による改正後の過疎地域自立促進特別措置法(以下「新法」という。)第二条第一項第一号及び第三十二条の規定は、この法律の施行の日以後に行われた廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村については、適用しない。

第三条 この法律の施行により新たに新法第二条第一項の過疎地域をその区域とすることとなる市町村については、新法第十条（別表を含む。）、第十一条、第十四条第四項から第六項まで、第十五条第八項及び第九項、第十六条第五項、第十八条第二項及び第三項並びに第十九条の規定は、平成二十二年度の予算に係る国の負担若しくは補助又は交付金の交付（以下「負担等」という。）（平成二十一年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成二十二年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担等を除く。）から適用し、平成二十一年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成二十二年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担等及び平成二十一年度以前の年度の歳出予算に係る国の負担等で平成二十二年度以降の年度に繰り越されたものについては、なお従前の例による。

（政令への委任）

第四条 この附則に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

附 則 （平成二三年五月二日法律第三五号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附 則 （平成二三年五月二日法律第三七号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略

二 第六条、第十一条、第十三条、第十五条、第十六条、第十八条から第二十条まで、第二十六条、第二十九条、第三十二条、第三十三条（道路法第三十条及び第四十五条の改正規定に限る。）、第三十五条及び第三十六条の規定並びに附則第四条、第五条、第六条第二項、第七条、第十二条、第十四条、第十五条、第十七条、第十八条、第二十八条、第三十条から第三十二条まで、第三十四条、第三十五条、第三十六条第二項、第三十七条、第三十八条（構造改革特別区域法（平成十四年法律第百八十九号）第三十条第一項及び第二項の改正規定に限る。）、第三十九条、第四十条、第四十五条の二及び第四十六条の規定 平成二十四年四月一日

附 則 （平成二三年一二月一四日法律第一二二号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、公布の日から起算して二月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第六条、第八条、第九条及び第十三条の規定 公布の日

附 則 （平成二四年六月二七日法律第三九号） 抄

（施行期日）

1 この法律は、公布の日から施行する。

附 則 （平成二四年八月二二日法律第六七号） 抄

この法律は、子ども・子育て支援法の施行の日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第二十五条及び第七十三条の規定 公布の日

附 則 （平成二六年三月三十一日法律第八号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、平成二十六年四月一日から施行する。

（経過措置等）

第二条 この法律による改正後の過疎地域自立促進特別措置法（以下「新法」という。）第二条第一項第二号の規定は、この法律の施行の日以後に行われた廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村については、適用しない。

第三条 この法律の施行の日以後に新法第二条の規定により新たに過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村につき新法第十条（別表を含む。）、第十一条、第十四条第四項から第六項まで、第十五条第八項及び第九項、第十六条第五項、第十八条第二項及び第三項並びに第十九条の規定を適用する場合には、これらの規定は、新法第二条第二項の規定による公示の日の属する年度（以下「公示の年度」という。）の予算に係る国の負担若しくは補助又は交付金の交付（以下「負担等」という。）（公示の年度の前年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき公示の年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担等を除く。）から適用し、公示の年度の前年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき公示の年度以降の年度に支出すべ

きものとされた国の負担等及び公示の年度の前年度以前の年度の歳出予算に係る国の負担等で公示の年度以降の年度に繰り越されたものについては、なお従前の例による。

附 則 （平成二七年六月二四日法律第四六号） 抄

（施行期日）

第一条 この法律は、平成二十八年四月一日から施行する。

附 則 （平成二九年三月三十一日法律第一一号）

（施行期日）

第一条 この法律は、平成二十九年四月一日から施行する。

（経過措置等）

第二条 この法律による改正後の過疎地域自立促進特別措置法（以下「新法」という。）第二条第一項第三号の規定は、この法律の施行の日以後に行われた廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村については、適用しない。

第三条 この法律の施行の日以後に新法第二条の規定により新たに過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村につき新法第十条（別表を含む。）、第十一条、第十四条第四項から第六項まで、第十五条第八項及び第九項、第十六条第五項、第十八条第二項及び第三項並びに第十九条の規定を適用する場合には、これらの規定は、新法第二条第二項の規定による公示の日の属する年度（以下「公示の年度」という。）の予算に係る国の負担若しくは補助又は交付金の交付（以下「負担等」という。）（公示の年度の前年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき公示の年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担等を除く。）から適用し、公示の年度の前年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき公示の年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担等及び公示の年度の前年度以前の年度の歳出予算に係る国の負担等で公示の年度以降の年度に繰り越されたものについては、なお従前の例による。

（政令への委任）

第四条 この附則に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。
別表（第十条関係）

事業の区分		国の負担割合
教育施設	義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律第二条に規定する義務教育諸学校のうち公立の小学校、中学校又は義務教育学校を適正な規模にするための統合に伴い必要となり、又は必要となった公立の小学校、中学校又は義務教育学校の校舎又は屋内運動場の新築又は増築（買収その他これに準ずる方法による取得を含む。）	十分の五・五
児童福祉施設	児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）第七条第一項に規定する児童福祉施設のうち保育所又は幼保連携型認定こども園の設備の新設、修理、改造、拡張又は整備	二分の一から十分の五・五（国又は地方公共団体以外の者が設置する保育所又は幼保連携型認定こども園に係るものにあつては、三分の二）まで
消防施設	消防施設強化促進法（昭和二十八年法律第八十七号）第三条に規定する消防の用に供する機械器具及び設備の購入又は設置	十分の五・五

過疎地域自立促進特別措置法施行令（平成十二年政令第百七十五号）

（過疎地域の市町村から除かれる市町村の基準）

第一条 過疎地域自立促進特別措置法（以下「法」という。）第二条第一項の政令で定める収入は、地方財政法施行令（昭和二十三年政令第百六十七号）附則第二条第一項各号に掲げる売得金及び売上金に係る収益として得られる収入とする。この場合において、当該収益の額は、同条第四項第一号に規定する金額とする。

- 2 法第二条第一項の政令で定める金額は、次に定めるところによる。
 - 一 法第二条第一項第一号（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。次項第一号において同じ。）に該当する市町村にあつては、十三億円
 - 二 法第二条第一項第二号に該当する市町村にあつては、二十億円
 - 三 法第二条第一項第三号又は第四号に該当する市町村にあつては、四十億円
- 3 第一項の収入についての法第二条第一項の規定の適用については、同項に規定する収入の額は、次に定めるところによる。
 - 一 法第二条第一項第一号に該当する市町村にあつては、平成十年度（法第三十二条の規定により同号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度の前年度）の公営競技に係る収入の額
 - 二 法第二条第一項第二号に該当する市町村にあつては、平成二十年度の公営競技に係る収入の額
 - 三 法第二条第一項第三号に該当する市町村にあつては、平成二十四年度の公営競技に係る収入の額
 - 四 法第二条第一項第四号に該当する市町村にあつては、平成二十七年度の公営競技に係る収入の額

（沖縄県の市町村に関する特例）

第二条 沖縄県の市町村に対する法第二条第一項第一号（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。以下この条において同じ。）及び第二号から第四号までの規定の適用については、沖縄の統計法（千九百五十四年立法第四十三号）第五条の規定により行われた国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和三十五年の人口、昭和四十年の人口及び昭和四十五年の人口は、それぞれ、同項各号に規定する国勢調査の結果による市町村人口に係る昭和三十五年の人口、昭和四十年の人口及び昭和四十五年の人口とみなす。

（財政力指数等の算定方法）

第三条 法第二条第一項第一号本文（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。次条第一項において同じ。）に規定する数値を算定する場合には、次の各号に掲げる数値の区分に応じ、当該各号に定める方法により算定するものとする。

- 一 地方交付税法（昭和二十五年法律第二百十一号）第十四条の規定により算定した市町村の基準財政収入額を同法第十一条の規定により算定した当該市町村の基準財政需要額で除して得た数値 小数点以下五位未満の数値を四捨五入して得た数値とする。
 - 二 前号に規定する数値で平成八年度から平成十年度まで（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度前三箇年度内。次条第一項において同じ。）の各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値 小数点以下二位未満の数値を切り捨てて得た数値とする。
- 2 法第二条第一項第一号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）に規定する数値を算定する場合には、次の各号に掲げる数値の区分に応じ、当該各号に定める方法により算定するものとする。
 - 一 法第二条第一項第一号イ及びニに規定する数値 小数点以下四位までの数値を算出し、当該数値について小数点以下二位未満を順次四捨五入して得た数値とする。
 - 二 法第二条第一項第一号ロ及びハに規定する数値 小数点以下三位未満の数値を四捨五入して得た数値とする。

- 3 前二項の規定は、法第二条第一項第二号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「第二条第一項第一号本文（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。次条第一項において同じ。）」とあるのは「第二条第一項第二号本文」と、同項第二号中「平成八年度から平成十年度まで（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度前三箇年度内。次条第一項において同じ。）」とあるのは「平成十八年度から平成二十年度まで」と、前項中「第二条第一項第一号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第二号イからニまで」と、同項第一号中「第二条第一項第一号イ及びニ」とあるのは「第二条第一項第二号イ及びニ」と、同項第二号中「第二条第一項第一号ロ及びハ」とあるのは「第二条第一項第二号ロ及びハ」と読み替えるものとする。
- 4 第一項及び第二項の規定は、法第二条第一項第三号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「第二条第一項第一号本文（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。次条第一項において同じ。）」とあるのは「第二条第一項第三号本文」と、同項第二号中「平成八年度から平成十年度まで（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度前三箇年度内。次条第一項において同じ。）」とあるのは「平成二十二年度から平成二十四年度まで」と、第二項中「第二条第一項第一号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第三号イからニまで」と、同項第一号中「第二条第一項第一号イ及びニ」とあるのは「第二条第一項第三号イ及びニ」と、同項第二号中「第二条第一項第一号ロ及びハ」とあるのは「第二条第一項第三号ロ及びハ」と読み替えるものとする。
- 5 第一項及び第二項の規定は、法第二条第一項第四号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「第二条第一項第一号本文（法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。次条第一項において同じ。）」とあるのは「第二条第一項第四号本文」と、同項第二号中「平成八年度から平成十年度まで（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日の属する年度前三箇年度内。次条第一項において同じ。）」とあるのは「平成二十五年度から平成二十七年まで」と、第二項中「第二条第一項第一号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第四号イからニまで」と、同項第一号中「第二条第一項第一号イ及びニ」とあるのは「第二条第一項第四号イ及びニ」と、同項第二号中「第二条第一項第一号ロ及びハ」とあるのは「第二条第一項第四号ロ及びハ」と読み替えるものとする。

（市町村の廃置分合等があった場合における財政力指数等の算定方法）

第四条 平成九年四月一日以降における市町村の廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村について、法第二条第一項第一号本文に規定する数値を算定する場合には、平成八年度から平成十年度までの各年度のうち当該算定の基礎となる当該市町村の廃置分合又は境界変更の日の属する年度前の各年度（以下この項において「廃置分合等年度前の各年度」という。）の基準財政収入額又は基準財政需要額の算定方法は、次に定めるところによる。

一 廃置分合によって二以上の市町村の区域をそのまま市町村の区域とした市町村については、当該廃置分合前の各市町村の廃置分合等年度前の各年度に係る地方交付税法第十四条の規定により算定した基準財政収入額又は同法第十一条の規定により算定した基準財政需要額を各年度ごとにそれぞれ合算するものとする。

二 廃置分合によって一の市町村の区域を分割した市町村については、当該廃置分合後の市町村が廃置分合等年度前の各年度の四月一日に存在したものと仮定して地方交付税法第九条第二号の例によりそれぞれ計算するものとする。

三 境界変更によって区域を増した市町村については、当該市町村の廃置分合等年度前の各年度における地方交付税法第十四条の規定により算定した基準財政収入額又は同法第十一条

の規定により算定した基準財政需要額に当該境界変更に係る区域をその区域とする市町村が廃置分合等年度前の各年度の四月一日に存在したものと仮定して同法第九条第二号の例により計算した基準財政収入額又は基準財政需要額を各年度ごとにそれぞれ合算するものとする。

四 境界変更によって区域を減じた市町村については、当該境界変更後の市町村が廃置分合等年度前の各年度の四月一日に存在したものと仮定して地方交付税法第九条第二号の例により計算するものとする。

- 2 昭和三十五年十月二日以降における市町村の廃置分合又は境界変更により新たに設置され、又は境界が変更された市町村について、法第二条第一項第一号ただし書及び同号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）に規定する数値を算定する場合には、当該算定の基礎となる当該市町村の昭和三十五年の人口、昭和四十五年の人口又は平成七年の人口（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する基準年又は当該年から起算して二十五年若しくは三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の人口）の算定方法は、次に定めるところによる。

一 廃置分合によって二以上の市町村の区域をそのまま市町村の区域とした市町村については、当該廃置分合前の各市町村の国勢調査の結果による人口をそれぞれ合算するものとする。

二 廃置分合によって一の市町村の区域を分割した市町村については、当該市町村の区域以外の区域に係る国勢調査の結果による人口を当該廃置分合前の市町村の国勢調査の結果による人口からそれぞれ控除するものとする。

三 境界変更によって区域を増した市町村については、当該境界変更により当該市町村の区域となった区域に係る国勢調査の結果による人口を当該境界変更前の市町村の区域に係る国勢調査の結果による人口にそれぞれ合算するものとする。

四 境界変更によって区域を減じた市町村については、当該境界変更により他の市町村の区域となった区域に係る国勢調査の結果による人口を当該境界変更前の市町村の区域に係る国勢調査の結果による人口からそれぞれ控除するものとする。

- 3 前二項の規定は、法第二条第一項第二号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「平成九年四月一日」とあるのは「平成十九年四月一日」と、「第二条第一項第一号本文」とあるのは「第二条第一項第二号本文」と、「平成八年度から平成十年度まで」とあるのは「平成十八年度から平成二十年度まで」と、前項中「第二条第一項第一号ただし書及び同号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第二号ただし書及び同号イからニまで」と、「昭和四十五年」とあるのは「昭和五十五年」と、「平成七年の人口（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する基準年又は当該年から起算して二十五年若しくは三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の人口）」とあるのは「平成十七年の人口」と読み替えるものとする。

- 4 第一項及び第二項の規定は、法第二条第一項第三号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「平成九年四月一日」とあるのは「平成二十三年四月一日」と、「第二条第一項第一号本文」とあるのは「第二条第一項第三号本文」と、「平成八年度から平成十年度まで」とあるのは「平成二十二年度から平成二十四年度まで」と、第二項中「昭和三十五年十月二日」とあるのは「昭和四十年十月二日」と、「第二条第一項第一号ただし書及び同号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第三号ただし書及び同号イからニまで」と、「昭和三十五年の」とあるのは「昭和四十年の」と、「昭和四十五年」とあるのは「昭和六十年」と、「平成七年の人口（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する基準年又は当該年から起算して二十五年若しくは三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の人口）」とあるのは「平成二十二年の人口」と読み替えるものとする。

- 5 第一項及び第二項の規定は、法第二条第一項第四号に規定する数値を算定する場合について準用する。この場合において、第一項中「平成九年四月一日」とあるのは「平成二十六年

四月一日」と、「第二条第一項第一号本文」とあるのは「第二条第一項第四号本文」と、「平成八年度から平成十年度まで」とあるのは「平成二十五年度から平成二十七年度まで」と、第二項中「昭和三十五年十月二日」とあるのは「昭和四十五年十月二日」と、「第二条第一項第一号ただし書及び同号イからニまで（これらの規定を法第三十二条の規定により読み替えて適用する場合を含む。）」とあるのは「第二条第一項第四号ただし書及び同号イからニまで」と、「昭和三十五年の」とあるのは「昭和四十五年の」と、「昭和四十五年」とあるのは「平成二年」と、「平成七年の人口（法第三十二条の規定により法第二条第一項第一号の規定を読み替えて適用する場合には、法第三十二条に規定する基準年又は当該年から起算して二十五年若しくは三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年の人口）」とあるのは「平成二十七年の人口」と読み替えるものとする。

（国の負担又は補助の割合の特例に係る交付金等）

第五条 法第十条第二項に規定する政令で定める交付金は、児童福祉法（昭和二十二年法律第百六十四号）第五十六条の四の三第二項に規定する交付金とする。

2 法第十条第二項の規定により算定する交付金の額は、同項の事業に要する経費に対する通常の国の交付金の額に、当該経費について同条第一項の規定を適用したとするならば国が負担し、又は補助することとなる割合を参酌して総務省令・農林水産省令・国土交通省令で定めるところにより算定した額を加算する方法により算定するものとする。

（地方債の対象となる施設等で政令で定めるもの）

第六条 法第十二条第一項の地場産業に係る事業又は観光若しくはレクリエーションに関する事業を行う者で政令で定めるものは、次に掲げるものとする。

一 出資金額の過半を市町村が出資することとなる法人

二 出資金額の四分の三以上を市町村及び農業協同組合、漁業協同組合その他の営利を目的としない法人が出資することとなる法人

2 法第十二条第一項第一号の政令で定める市町村道（融雪施設その他の道路の附属物を含む。）、農道、林道及び漁港関連道は、次に掲げるものとする。

一 集落と集落又は公共施設とを結ぶ市町村道（融雪施設その他の道路の附属物を含む。次号において同じ。）、農道、林道及び漁港関連道

二 産業の振興に資する施設と集落又は公共施設とを結ぶ市町村道

三 おおむね十ヘクタール以上の地積にわたる土地を受益地とする農道

四 当該林道に係る森林の利用区域面積がおおむね三十ヘクタール以上の林道

3 法第十二条第一項第三号の地場産業の振興に資する施設で政令で定めるものは、技能修得施設、試験研究施設、生産施設、加工施設及び流通販売施設とする。

4 法第十二条第一項第二十二号の集落の整備のための政令で定める用地及び住宅は、法第六条第一項に規定する市町村計画（以下「市町村計画」という。）に基づき、市町村が集落の整備の用に供する農地、宅地（移転跡地を含む。）及び公共用地並びに住宅（附帯設備を含む。）とする。

5 法第十二条第一項第二十三号の政令で定める施設は、次に掲げるもののうち公用又は公共用に供するもの（地方財政法施行令第四十六条第四号及び第五号に掲げる事業を行う公営企業に係るものを除く。）とする。

一 太陽光を電気に変換するための施設又は設備

二 風力を発電に利用するための施設又は設備

三 水力を発電に利用するための施設又は設備

四 地熱を給湯、暖房、冷房その他の用途に利用するための施設又は設備

五 太陽熱を給湯、暖房、冷房その他の用途に利用するための施設又は設備

六 大気中の熱その他の自然界に存する熱（前二号に掲げるものを除く。）を給湯、暖房、冷房その他の用途に利用するための施設又は設備

七 バイオマス（エネルギー供給事業者による非化石エネルギー源の利用及び化石エネルギー原料の有効な利用の促進に関する法律施行令（平成二十一年政令第二百二十二号）第四条第七号に規定するバイオマスをいう。以下この項において同じ。）又はバイオマスを原材料とする燃料を熱源とする熱を給湯、暖房、冷房その他の用途に利用するための施設又は設備

八 バイオマスを原材料とする燃料を製造するための施設又は設備

6 法第十二条第一項第二十四号の政令で定める施設は、次に掲げるものとする。

- 一 集落と集落又は公共施設とを結ぶ市町村が管理する都道府県道（融雪施設その他の道路の附属物を含む。次号において同じ。）
- 二 産業の振興に資する施設と集落又は公共施設とを結ぶ市町村が管理する都道府県道
- 三 林業用として継続的な使用に供される作業路
- 四 農業（畜産業を含む。）、林業又は漁業の経営の近代化のための施設
- 五 商店街振興のために必要な共同利用施設
- 六 住民の交通の便に供するための自動車（雪上車を含む。）及び渡船施設
- 七 除雪機械
- 八 簡易水道施設
- 九 市町村保健センター及び母子健康包括支援センター
- 十 公立の小学校、中学校若しくは義務教育学校又は市町村立の中等教育学校の前期課程若しくは特別支援学校の学校給食の実施に必要な施設及び設備（法第十二条第一項第十八号に掲げる施設に該当するものを除く。）
- 十一 公立の小学校、中学校若しくは義務教育学校又は市町村立の高等学校、中等教育学校若しくは特別支援学校の教員又は職員のための住宅（基幹道路の指定等）

第七条 法第十四条第一項に規定する政令で定める関係行政機関の長は、基幹的な市町村道については国土交通大臣、市町村が管理する基幹的な農道、林道及び漁港関連道については農林水産大臣とする。

- 2 都道府県は、法第十四条第一項の規定により市町村道の新設又は改築に関する工事を行おうとするときは、あらかじめ、当該市町村道の路線名、工事区間、工事の種類及び工事の開始の日を告示しなければならない。工事の全部又は一部を完了し、又は廃止しようとするときも、工事の開始の場合に準じてその旨を告示するものとする。
- 3 法第十四条第二項の規定により都道府県が市町村道の道路管理者に代わって行う権限は、道路法施行令（昭和二十七年政令第四百七十九号）第四条第一項各号（第二号を除く。）に掲げるものとする。
- 4 前項に規定する都道府県の権限は、第二項の規定により告示する工事の開始の日から工事の完了又は廃止の日までの間に限り行うことができるものとする。ただし、道路法施行令第四条第一項第三十号及び第三十一号に掲げるものについては、工事の完了又は廃止の日後においても行うことができる。
- 5 都道府県は、法第十四条第二項の規定により市町村道の道路管理者に代わって道路法施行令第四条第一項第二十三号又は第二十四号（いずれも協定の締結に係る部分に限る。次項において同じ。）に掲げる権限を行おうとするときは、あらかじめ、当該市町村道の道路管理者の意見を聴かなければならない。
- 6 都道府県は、法第十四条第二項の規定により市町村道の道路管理者に代わって道路法施行令第四条第一項第一号、第六号、第八号、第十一号（道路法（昭和二十七年法律第百八十八号）第三十九条の二第一項（同法第九十一条第二項において準用する場合を含む。）の規定による入札占用指針の策定に係る部分に限る。）、第二十三号、第二十四号、第二十五号（道路法第三十二条第一項又は第三項の規定による許可があったものとみなされる協議に係る部分に限る。）又は第三十二号に掲げる権限を行ったときは、遅滞なく、その旨を当該市町村道の道路管理者に通知しなければならない。

（公共下水道管理者の権限の代行）

きよ

第八条 都道府県は、法第十五条第一項の規定により公共下水道の幹線管渠等（同項に規定する幹線管渠等をいう。）の設置に関する工事を行おうとするときは、あらかじめ、当該公共下水道の名称、工事の区域又は区間、工事の内容及び工事の開始の日を告示しなければならない。工事の全部又は一部を完了し、又は廃止しようとするときも、工事の開始の場合に準じてその旨を告示するものとする。

- 2 法第十五条第三項の規定により都道府県が公共下水道管理者に代わって行う権限は、次に掲げるものとする。
 - 一 下水道法（昭和三十三年法律第七十九号）第十五条の規定により施設に関する工事の施行について協議し、及び当該工事を施行させること。

二 下水道法第十六条の規定により施設に関する工事を行うことを承認し、及び同法第三十三條の規定により当該承認に必要な条件を付すること。

三 下水道法第十七条の規定により施設に関する工事の施行に要する費用の負担について協議すること。

四 下水道法第二十四条第一項の規定による許可を与え、及び同条第三項第二号の規定により同号に規定する者と協議し、並びに同法第三十三條の規定により当該許可に必要な条件を付すること。

五 下水道法第三十二條の規定により他人の土地に立ち入り、若しくは特別の用途のない他人の土地を一時使用し、又はその命じた者若しくは委任を受けた者にこれらの行為をさせ、並びにこれらの行為による損失の補償について損失を受けた者と協議し、及び損失を補償すること。

六 下水道法第三十八條第一項若しくは第二項に規定する処分をし、若しくは措置を命じ、又は同条第三項前段の規定により必要な措置を自ら行い、若しくはその命じた者若しくは委任した者に行わせること。ただし、同条第二項第二号又は第三号に該当する場合においては、同項に規定する処分をし、若しくは措置を命じ、又は同条第三項前段の規定により必要な措置を自ら行い、若しくはその命じた者若しくは委任した者に行わせることはできない。

七 下水道法第三十八條第四項及び第五項の規定により損失の補償について損失を受けた者と協議し、及び損失を補償すること。

八 下水道法第四十一條の規定により協議すること。

3 前項に規定する都道府県の権限は、第一項の規定により告示する工事の開始の日から工事の完了又は廃止の日までの間に限り行うことができるものとする。ただし、前項第五号に掲げる権限（損失の補償に係るものに限る。）及び同項第七号に掲げる権限については、工事の完了又は廃止の日後においても行うことができる。

4 都道府県は、法第十五條第三項の規定により公共下水道管理者に代わって第二項第四号、第六号又は第八号の権限を行ったときは、遅滞なく、その旨を当該公共下水道管理者に通知しなければならない。

（診療所の設置等に係る費用の範囲）

第九条 法第十六条第五項の規定による補助は、同項に規定する事業につき都道府県が支弁する費用の額から当該事業の実施に伴う収入の額を控除した額を基準として、厚生労働大臣が定めるところにより算定した額について行うものとする。

（新たに過疎地域の市町村となった場合の国の負担等に関する規定の適用）

第十条 法第三十二條の規定により読み替えて適用する法第二条の規定により新たに過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村につき法第十条（別表を含む。）、第十一条、第十四條第四項から第六項まで、第十五條第八項及び第九項、第十六条第五項、第十八條第二項及び第三項並びに第十九條の規定を適用する場合には、これらの規定は、法第二条第二項の規定による公示の日の属する年度（以下この条において「公示の年度」という。）の予算に係る国の負担又は補助（公示の年度の前年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき公示の年度以降の年度に支出すべきものとされた国の負担又は補助を除く。）から適用する。

（市町村の合併があった場合の特例）

第十一条 法第三十三條第二項前段の規定により同項前段に規定する過疎地域であった区域を過疎地域とみなして法の規定を適用する場合には、法第二条第二項中「過疎地域をその区域とする市町村（以下「過疎地域の市町村」という。）」とあるのは「過疎地域とみなされる区域」と、法第六条第一項、第四項及び第五項、第七条第二項及び第三項、第十二條、第十五條第一項、第十七條並びに第十九條中「過疎地域の市町村」とあるのは「過疎地域とみなされる区域を含む市町村」と、法第六条第一項中「過疎地域自立促進市町村計画」とあるのは「過疎地域とみなされる区域に係る過疎地域自立促進市町村計画」と、法第二十八條中「過疎地域の市町村」とあるのは「過疎地域とみなされる区域」とする。

附 則

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十二年四月一日から施行する。

（過疎地域活性化特別措置法施行令の失効に伴う経過措置）

第二条 法附則第四条第一項から第三項までの規定によりなおその効力を有することとされる旧過疎地域活性化特別措置法（平成二年法律第十五号）第十一条、第十四条第一項及び第二項、第十四条の二第四項並びに第十五条第五項の規定（以下この項において「旧過疎活性化法関係規定」という。）に基づく旧過疎地域活性化特別措置法施行令（平成二年政令第九十一号）の規定は、この政令の施行の日以後も、旧過疎活性化法関係規定が効力を有する限りにおいて、なおその効力を有する。

（法の規定が準用される特定市町村等）

第三条 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、法附則第五条第一項前段に規定する特定市町村（以下単に「特定市町村」という。）を公示するものとする。

- 2 前項の規定により公示された特定市町村は、法第六条の規定の例により、市町村計画を定めなければならない。この場合において、当該都道府県は、法第五条第一項の自立促進方針及び法第七条第一項の都道府県計画（次項において単に「都道府県計画」という。）に、特定市町村の区域に関する事項についても定めるものとする。
- 3 特定市町村が作成した市町村計画又は特定市町村の区域に係る都道府県計画に基づく事業に係る国の負担又は補助のうち、平成十六年度以前の年度の国庫債務負担行為に基づき平成十七年度以降の年度に支出すべきものとされたもの及び平成十六年度以前の年度の歳出予算に係るもので平成十七年度以降の年度に繰り越されたものについては、平成十七年度以降も、法第十条（別表を含む。）及び第十一条の規定を準用する。
- 4 法附則第五条第二項に規定する特定市町村のうち政令で定めるものは、第三条第二項及び第四条第二項の規定により算定した法第二条第一項第二号に規定する三分の一の数値が一未満である市町村とする。
- 5 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、前項に規定する市町村を公示するものとする。

第四条 総務大臣、農林水産大臣及び国土交通大臣は、法附則第六条前段又は第七条前段に規定する特定市町村の区域とみなされる区域を公示するものとする。

- 2 前項の規定により公示された区域を含む市町村については、当該市町村を特定市町村と、当該区域を特定市町村の区域とみなして前条第二項から第五項までの規定を適用する。この場合において、同条第二項中「市町村計画」とあるのは、「特定市町村の区域とみなされる区域に係る市町村計画」とする。
- 3 法附則第六条前段又は第七条前段の規定により法附則第六条前段に規定する過疎地域であった区域又は法附則第七条前段に規定する特定市町村の区域であった区域を特定市町村の区域とみなして法附則第五条の規定を適用して法第十条から第十二条まで、第十四条及び第十五条の規定を準用する場合においては、法第十条から第十二条までの規定中「市町村計画」とあるのは、「特定市町村の区域とみなされる区域に係る市町村計画」と読み替えるものとする。

附 則 （平成一二年六月七日政令第三一二号） 抄
（施行期日）

- 1 この政令は、内閣法の一部を改正する法律（平成十一年法律第八十八号）の施行の日（平成十三年一月六日）から施行する。

附 則 （平成一四年二月八日政令第二七号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、公布の日から施行する。

附 則 （平成一七年四月一日政令第一二四号）

この政令は、公布の日から施行する。

附 則 （平成一八年二月三日政令第一九号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、平成十八年四月一日から施行する。

附 則 （平成一八年三月三十一日政令第一五一号） 抄
（施行期日）

- 1 この政令は、平成十八年四月一日から施行する。

附 則 （平成一九年九月二五日政令第三〇四号） 抄
（施行期日）

1 この政令は、都市再生特別措置法等の一部を改正する法律の施行の日（平成十九年九月二十八日）から施行する。

附 則 （平成二二年三月三十一日政令第四七号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、平成二十二年四月一日から施行する。
（経過措置）

第二条 地方公共団体が、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律による改正前の過疎地域自立促進特別措置法（以下この条において「旧過疎自立促進法」という。）の規定に基づく過疎地域をその区域とする市町村の区域内においてソフトウェア業の用に供する設備を平成二十二年三月三十一日以前に新設し、又は増設した者に係る事業税、不動産取得税又は固定資産税について課税免除又は不均一課税をした場合における地方交付税法（昭和三十五年法律第二百十一号）第十四条の規定による当該地方公共団体の基準財政収入額の算定については、旧過疎自立促進法第三十一条の規定は、なおその効力を有する。

附 則 （平成二四年一月二七日政令第一九号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律附則第一条第六号に掲げる規定の施行の日（平成二十四年二月一日）から施行する。

附 則 （平成二六年三月三十一日政令第一三五号）

この政令は、平成二十六年四月一日から施行する。

附 則 （平成二六年一二月二四日政令第四一二号） 抄
（施行期日）

1 この政令は、子ども・子育て支援法の施行の日から施行する。

附 則 （平成二七年一月二三日政令第二一号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、道路法等の一部を改正する法律附則第一条ただし書に規定する規定の施行の日（平成二十七年四月一日）から施行する。

附 則 （平成二七年七月一七日政令第二七三号）

この政令は、水防法等の一部を改正する法律の施行の日（平成二十七年七月十九日）から施行する。

附 則 （平成二七年一二月一六日政令第四二一号）

この政令は、平成二十八年四月一日から施行する。

附 則 （平成二八年三月三十一日政令第一八二号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、平成二十八年四月一日から施行する。

附 則 （平成二九年三月二九日政令第六三号） 抄
（施行期日）

第一条 この政令は、平成二十九年四月一日から施行する。
（経過措置）

第二条 この政令の施行の日前に設置された第六条第一号の規定による改正前の辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律施行令第二条第九号に掲げる母子健康センター（以下この条において「母子健康センター」という。）及び同日前に辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律（昭和三十七年法律第八十八号）第三条第二項の規定により同条第一項に規定する総合整備計画に定められた母子健康センターであって同日以後に設置されるものについては、第六条第一号の規定による改正後の辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律施行令第二条第九号に掲げる母子健康包括支援センターとみなす。

第三条 この政令の施行の日前に設置された第六条第三号の規定による改正前の過疎地域自立促進特別措置法施行令第六条第六項第九号に掲げる母子健康センター（以下この条において「母子健康センター」という。）及び同日前に過疎地域自立促進特別措置法（平成十二年法律第十五号）第六条第二項の規定により同条第一項に規定する市町村計画に定められた母子健康センターであって同日以後に設置されるものについては、第六条第三号の規定による改

正後の過疎地域自立促進特別措置法施行令第六条第六項第九号に掲げる母子健康包括支援センターとみなす。

第四条 この政令の施行の日前に地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法（平成十七年法律第七十九号）第六条第六項の規定により同条第一項に規定する地域住宅計画に記載された公営住宅建替事業であって、当該公営住宅建替事業が施行される土地の区域において新たに第六条第五号の規定による改正前の地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法施行令第二条第五号に掲げる母子健康センターを整備するものについては、同日において当該地域住宅計画に記載された公営住宅建替事業であって、当該公営住宅建替事業が施行される土地の区域において新たに第六条第五号の規定による改正後の地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等に関する特別措置法施行令第二条第五号に掲げる母子健康包括支援センターを整備するものとみなす。

第五条 第九条の規定による改正後の子ども・子育て支援法施行令第四条第一項第四号及び第二項第八号並びに第十四条の規定は、この政令の施行の日以後に行われる子ども・子育て支援法（平成二十四年法律第六十五号）第二十七条第一項に規定する特定教育・保育、同法第二十八条第一項第二号に規定する特別利用保育、同項第三号に規定する特別利用教育、同法第二十九条第一項に規定する特定地域型保育、同法第三十条第一項第二号に規定する特別利用地域型保育、同項第三号に規定する特定利用地域型保育及び同項第四号に規定する特例保育（以下この条において「特定教育・保育等」という。）について適用し、同日前に行われた特定教育・保育等については、なお従前の例による。

附 則（平成二九年三月三十一日政令第一二六号）

（施行期日）

1 この政令は、平成二十九年四月一日から施行する。

（経過措置）

2 地方公共団体が、過疎地域自立促進特別措置法の一部を改正する法律（平成二十九年法律第十一号）による改正前の過疎地域自立促進特別措置法（以下この項において「旧過疎自立促進法」という。）の規定に基づく過疎地域をその区域とする市町村の区域内において旧過疎自立促進法第三十条に規定する情報通信技術利用事業の用に供する設備を平成二十九年三月三十一日以前に新設し、又は増設した者に係る事業税、不動産取得税又は固定資産税について課税免除又は不均一課税をした場合における地方交付税法（昭和二十五年法律第二百一十一号）第十四条の規定による当該地方公共団体の基準財政収入額の算定については、旧過疎自立促進法第三十一条の規定は、なおその効力を有する。

附 則（平成三〇年九月二八日政令第二八〇号） 抄

（施行期日）

第一条 この政令は、道路法等の一部を改正する法律の施行の日（平成三十年九月三十日）から施行する。

過疎地域自立促進特別措置法施行規則（平成十二年総理府令第五十二号）

（通常の国の交付金の額に加算する額の算定）

第一条 過疎地域自立促進特別措置法施行令（平成十二年政令第百七十五号。以下「令」という。）第五条第二項の規定により加算する額は、過疎地域自立促進特別措置法（平成十二年法律第十五号。以下「法」という。）第十条第二項の事業に要する経費に対する通常の国の交付金の額に、当該事業につき法別表に掲げる割合を当該事業に要する経費に対する通常の国の負担又は補助の割合に相当するもので除して得た数から一を控除して得た数を乗じて算定するものとする。

（過疎地域とみなす基準）

第二条 法第三十三条第一項に規定する総務省令・農林水産省令・国土交通省令で定める基準は、次の各号に掲げるとおりとする。

一 法第二条第二項の規定により過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村の廃置分合又は境界変更（以下「廃置分合等」という。）があった場合における当該廃置分合等により新たに設置され、又は境界が変更された市町村（以下「廃置分合等市町村」という。）について令第四条第一項の規定の例により算定した基準財政収入額を同項の規定の例により算定した基準財政需要額で除して得た数値（小数点以下五位未満の数値を四捨五入して得た数値とする。）で廃置分合等市町村となった日の属する年度前三箇年度内の各年度に係るものを合算したものの三分の一の数値（小数点以下二位未満の数値を切り捨てて得た数値とする。）が〇・四二（廃置分合等市町村となった日の属する年度から五箇年度については〇・七一）以下であること。

二 廃置分合等市町村について令第四条第二項の規定の例により算定した平成七年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年。以下同じ。）の人口が、同項の規定の例により算定した昭和三十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）の人口より減少しており、かつ、昭和四十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）の人口より減少していること。

三 廃置分合等市町村の区域に係る交通通信、生活環境、高齢者等の保健及び福祉、医療、教育並びに地域文化等に関する施設等の整備が十分行われていないため、当該廃置分合等市町村における住民福祉の向上が阻害されていること。

四 廃置分合等市町村が次のいずれかに該当すること。

イ 廃置分合等市町村について令第四条第二項の規定の例により算定した平成七年の人口を廃置分合等前に法第二条第二項の規定により過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村であった区域の平成七年の国勢調査の結果による人口又は令第四条第二項の規定の例により算定した平成七年の人口で除して得た数値が三以下であること。

ロ 廃置分合等市町村の区域の面積を廃置分合等前に法第二条第二項の規定により過疎地域をその区域とする市町村として公示された市町村であった区域の面積で除して得た数値が二以下であること。

2 平成二十二年四月一日以降に廃置分合等があった場合における前項の規定の適用については、同項第一号中「第四条第一項」とあるのは「第四条第三項の規定により準用する同条第一項」と、「〇・四二」とあるのは「〇・五六」と、「〇・七一」とあるのは「〇・七〇」と、同項第二号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第三項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年。以下同じ。）」とあるのは「平成十七年」と、「昭和三十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）」とあるのは「昭和三十五年」と、「昭和四十五年（廃置分合等が平成

八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年」とあるのは「昭和五十五年」と、同項第四号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第三項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年」とあるのは「平成十七年」とする。

- 3 前項の規定にかかわらず、平成二十六年四月一日以降に廃置分合等があった場合における第一項の規定の適用については、同項第一号中「第四条第一項」とあるのは「第四条第四項の規定により準用する同条第一項」と、「〇・四二」とあるのは「〇・四九」と、「〇・七一」とあるのは「〇・六二」と、同項第二号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第四項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年。以下同じ。））」とあるのは「平成二十二年」と、「昭和三十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）」とあるのは「昭和四十年」と、「昭和四十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）」とあるのは「昭和六十年」と、同項第四号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第四項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年」とあるのは「平成二十二年」とする。
- 4 前二項の規定にかかわらず、平成二十九年四月一日以降に廃置分合等があった場合における第一項の規定の適用については、同項第一号中「第四条第一項」とあるのは「第四条第五項の規定により準用する同条第一項」と、「〇・四二（廃置分合等市町村となった日の属する年度から五箇年度については〇・七一）」とあるのは「〇・六三」と、同項第二号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第五項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年。以下同じ。））」とあるのは「平成二十七年」と、「昭和三十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して三十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）」とあるのは「昭和四十五年」と、「昭和四十五年（廃置分合等が平成八年以降において最初に行われる国勢調査の結果による人口の年齢別構成が公表された日以降にあった場合には、当該国勢調査が行われた年から起算して二十五年以前において最近に国勢調査が行われた年）」とあるのは「平成二年」と、同項第四号中「第四条第二項」とあるのは「第四条第五項の規定により準用する同条第二項」と、「平成七年」とあるのは「平成二十七年」とする。

附 則

この府令は、公布の日から施行する。

附 則 （平成一二年八月一四日総府府令第一〇三号）

この府令は、内閣法の一部を改正する法律（平成十一年法律第八十八号）の施行の日（平成十三年一月六日）から施行する。

附 則 （平成一七年四月一日／総務省／農林水産省／国土交通省／令第二号）

この省令は、公布の日から施行する。

附 則 （平成二二年三月三十一日／総務省／農林水産省／国土交通省／令第一号）

この省令は、平成二十二年四月一日から施行する。

附 則 （平成二六年三月三十一日／総務省／農林水産省／国土交通省／令第一号）

この省令は、平成二十六年四月一日から施行する。

附 則 （平成二九年三月三十一日／総務省／農林水産省／国土交通省／令第一号）

この省令は、平成二十九年四月一日から施行する。